なし、因て左右の者に謂ふて曰く、此れ我が心の様なものなり、少しにでもゆがみ曲れるとあれば、人が皆なこれに目を付けるぞと、

平蜀之後。嘗擇其兵百餘。爲川班殿直。郊禮行賞。以御馬直扈從。特增給。川班擊登聞鼓。援例陳乞。上怒曰。朕之所與。卽爲恩澤。豈有例邪。斬其妄訴者四十餘人。餘悉配隷諸軍。遂廢其直。◎〔解釋〕川班殿直（川は西川東川にて、蜀兵の弓馬にたけたる者を、殿中の宿衛とせる稱呼、）扈從（扈は衞なり、從は隨行すること、）增給（てあてをます、）擊登聞鼓（隋の制、天子に直ちに奏聞訴訟する人民は、鼓を鳴らしてその事を通ず、有司その願ひすぢをかきしるして之れを上つる、鼓聲天子の耳に登り聞ゆるを以て名づく、）援例陳乞（御馬直、增給の例を引き、その事をのべ、增給を乞ふ、）恩澤（不時に下し賜ふなり、）配隷（くばりつける、）◎〔講義〕蜀の孟昶を平らげて後ち、嘗て其の孟昶の兵百餘人を擇び、川班殿直となす、天を南郊に祭るの禮式畢りて後ち、賞譽を行ふに、御馬直の扈從するを以てす、別段に給祿を增されたり、川班が登聞鼓を擊ちて、以前給祿を增す例を援て陳べ乞ふ、太祖が怒りて曰く、朕が與へたる所は、即ち恩澤を以て與ふるなり、豈に例なる者あらんや、其のみだりに訴へつける者、四十餘人を斬り、餘は悉く諸軍にくばりつけて、つひに川班殿直をやめたり、

內臣有逮事後唐者。上問莊宗英武。定天下。享國不久。何也。其人言其故。上撫髀嘆曰。二十年夾河戰爭。取得天下。不能用軍法約束。誠爲兒戲。朕今撫養士卒。不吝爵賞。苟犯吾法。惟有劍耳。五代以來。藩鎭強盛。上以漸削之。罷諸節鎭。專用儒臣。分理郡國。以革節鎭之橫。又置諸州通判。以分刺史之權。自是諸侯勢輕。禍難不作。專務愛養民力。罷郤貢献。禁進羨餘。常衣澣濯之衣。寢殿青布緣葦簾。晚節好讀書。嘗歎曰。堯舜之世。四凶之罪。止於投竄。何近代法網之密邪。◎〔解釋〕內臣（官者李承進(リシヨウシン)、）言其故（田畋樂曲(デンデンガクキヨク)を好み、姑息をつとめ、威令行はれず、賞罰度なきを陳ぶ、）撫髀（もゝをたゝき、その事を歎息す、）夾河戰爭（黃河をへだて、梁とたゝかふ、）約束（とりしまる、）罷却（やめしりぞける、）羨餘（一歲費用のあまり、）澣濯之衣（せんたくぎもの、）青布緣葦簾（あをき布地の緣を、よしすだれに用う、）四凶（共工(キヨウコウ)驩兜(クワントウ)三苗(サンベウ)鯀(コン)）投竄（流罪なり、）法網之密（刑律のこまかになり、罪に陷ゐる者多きをいふ、）◎〔講義〕官者の後唐の莊宗に事へ居りたる李承進なる者あり、太祖が問ふに、莊宗は英雄武烈にして天下を定む、國を享け守るを、久しからざるは何故ぞやと、承進が莊宗の天下を平らげて後ち、驕り、又た自から紛墨(フンボグ)を傅(ツ)けて、俳優(ハイユウ)と戯むるなどの事を委數語りたれば、太祖は、はたと手にて自分の膝(ヒザ)をうち、歎息して曰く、二十年の間だ河を夾みて梁の國と戰爭し、天下を取り得て、軍法を用ゐ、約束するを能はず、誠に小兒の戯れも同じことなり、われ今まさ士卒を撫で養ふて、爵位を拜し、又たは褒賞を與へるを吝まず、苟も吾が法則を犯しなば、たゞ劍を以て之れを殺すとあるのみ、五代（後梁、後唐、後晉、後漢、後周をさす）より此のかた藩鎭諸侯、強く盛んなり、太祖は次第々々に之れを削り弱め、諸の節鎭をやめて、專ら儒の臣を用ゐ、郡や國を分ち理め、以て藩鎭のほしひまゝなるをあらため、又た諸州の通判と云ふ役を置き、文献通考に、通判は郡政にて倅貳するを掌る長吏と均禮す、凡そ兵民の錢穀、月日の賦役、獄訟聽斷の事、可否裁決、守臣と通簽して施行す、所部の官、善否及び職事修廢するあれば、刺擧して以聞するを得たり、以て刺史の威權を分たしむ、案ずるに此の刺史は太守を謂ふなり、刺史は本と漢の官の名、武帝之を置く、詔を奉じ州を察するものなり、後世に至て遂に太守の稱となす、文献通考に唐の武德元年に郡を改て州となす、太守を改て刺史となす、天寶元年、州を改て郡となす、刺史を太守となす、是れより州郡の史守更が名を相さす、其實は一なり、五代の時刺史の號による、又云ふ、宋の太祖甚だ明き、五季の患をあらため、節鎭を召して京師に會せしめ、第を賜ひて以て之を留め、朝臣に分命して出て列郡を守しめ、權知軍州事と號す（軍は兵をいふ、州は民政をいふ）、其後文武官に參て知州軍事となす、二品以上中書樞密院宣徽使の職事を帶ぶるに及ては判太守と稱す、郡政を總理するをつかさどる、是れより諸侯の勢ひ輕くして禍難起らず、專ら民の力を愛し養ふことを務め、貢獻を罷めしりぞけ、年貢の餘り金を進むるを禁じさゝむ、平生は洗ひ滌ぎたる衣服を衣て、寢殿は青色の布を以て、蘆葦にて作りたる簾に緣を取る、晩年に書物を讀むを好めり、ある時歎息して、唐堯虞舜の世の頃は、四凶の罪は、遠地へ追放せらるゝだけに止まる、近代に至りては、何ぞ法律のこまかくしてきびしくあるぞといはれたり、

削平諸國。必招之。不至。而後用兵。及其既降。皆不加戮。禮而存之。終其世。嘗幸武成王廟。觀從祀。有白起。指曰。起殺已降。不武。命去之。周恭帝封鄭王。後遷于房州。上以辛

文悅長者。俾爲房州守。恭帝先上二年始卒。上發哀輟朝十日。還葬如禮。上初入京時。周韓通死節。追贈優厚。王彥昇棄命專殺。終身不授節鉞。受禪之際倉卒。未有恭帝禪制。學士陶穀出諸懷中。上薄之。穀久在翰林。頗怨望。上曰。吾聞學士草制。依様畫葫蘆耳。何勞之有。卒不登之政府。內外官有時望者。籍記姓名。以待不次選用。稱職者。多久任不遷。定銓選法。嚴擧主連坐法。嚴贓吏法。有寘極刑者。懲五代藩鎭苛征重斂之弊。寬商征。寬麴塩酒禁。倉吏多入民租者。或棄市。五代多以武人爲牧守。率意用刑。上懲之。故入者必抵罪。定大辟詳覆法。定折杖法。頒新刑統。定差役法。作版籍戶帖戶鈔。長吏有度民田不實者。或杖流之。諸州旱蝗。賑饑蠲租。惟恐不及。擧德行孝悌親策制科。擧人放進士榜。嚴覆試法。御殿親試進士。試書判拔萃。數幸國子監。詔天下求遺書。初用和峴所定雅樂。初行劉溫叟所上開寶通禮二百卷。命宰執日記時政。送史館。撰日曆。制度曲章。彬彬有條理。太弟晉王立。是爲太宗皇帝。

◎【解釋】禮而存之（優禮を加へ、存恤(ソンジュツ)するなり、蜀主孟昶を、秦國侯とし、南漢主劉鋹を、恩赦侯とし、南唐主李煜を、違命侯とせるなり、）武成王廟（武成王は、齊太公望の諡號(シガウ)、廟は鳳翔府下磻溪(ハンケイ)の側にあり、）從祀（武成王の傍の左右に、あはせまつるもの、）白起（戰國秦の將軍、功高かりし者、）殺已降（白起は、趙の降卒四十万を坑殺す、）不武（白起の降卒を殺す、他日の叛亂をおそれてなり、成武を以て服せしむるかなじ故に不武といへるなり、）長者（篤實なる者の稱、）發哀輟朝（喪に、こもり、外朝え出でず、深宮につゝしみ居るなり、）還葬如禮（房州より京師に喪を迎へ、王禮を以て葬る、）死節（太祖が陳橋驛より、京師に軍を回(カヘ)す時、韓通衆を率ゐ、禦がんとす、王彥昇(ゲンシヤウ)妻子を併(アハ)せ之れを殺す、）棄命專殺（前に云、譬(クツ)を擅(ト)り、諸將に誓ふの命を用ゐす、公卿を專殺せるを以て、太祖は之れを薄んず、）終身不授節鉞（節度使となるものに、節旄斧鉞(セツバウフエツ)を假(カ)す、彥昇は專殺の罪ありて、生涯節度使に任ぜられざるなり、）倉卒（にわか、）禪制（位を禪(ユヅ)る、詔命書、）薄之（その不忠を、うとんず、）草制（詔書の草案、）依様（舊例古格の文言を、踏襲すると、）畫胡蘆（ふくべの形を、かく如く、最も容易なりと云ふ、）時望（當時人望、）不次選用（順序に拘らず、その才德ある者は、時ならず、とりあげると、）稱職（職務にたへたるを、）久任（永勤なり、）銓選法（銓は量なり、その才德を量(ハカ)りて、官に選用する法則、）擧主連坐法（人才に薦擧(センキヨ)する者は、擧主なり、もし不適任の人をすゝめし者は、その身も連坐せられ、官祿をうばふなり、）贓吏（賄賂不法の財を取る役人、）有寘極刑者（その贓罪の次第によりては、死刑に處せらるゝ者あり、）苛政（きびしきまつりごと、）重斂（おもき取り立て、）寬商征（商賈の税をゆるくす、皆除するにあらず、）麴鹽酒禁（漢以來、民間私に麴(コウジ)をつくり、鹽を煎じ、酒を釀(カモ)すを、禁制す、當時尙ほ然り、今まで其嚴酷の法をゆるくす、）率意（心まかせにす、）牧守（刺史太守なり、人民を牧養する任務をいふ、）故入者必抵罪（わざと人を罪に陷ゐる者は、その主者を罪に處す、）倉吏（租税徴收の役人、）多入民租者（とりたてをきびしくするもの、）或棄市（そのしなにより、死刑に處す、皆な然るに非ず、）大辟詳覆法（大辟は、死罪なり、詳覆は不法寃獄(エンゴク)なきやう、いくたびもしらべると、）折杖（杖は罪人をたゝくしもと、折は代なり、少きを以て、多きに代るの義とす、）頒新刑統（頒は發行なり、後周の代、大周刑統の法律書あり、此は竇儀(トウギ)等の書に依り、取捨選定(シユシヤセンテイ)するもの、故に新の字を冠す、）差役（人を差發して、役を賦するおと、）版籍（人民の戸口田產帳なり、官に納む、）戶帖（戸口田產の高を記し、家に納む、）戶鈔（戸券(ケン)の類、）長吏（けんちがゝりの役人、）度民田不實（田畑の撿地に、間尺(ケンザホ)をのびちゞみの曲事をなし、上下をあざむく、）杖流（杖は杖罪、流は流罪、）恐不及（ゆきとゞかざるやと、氣つかふとなり、）放進士榜（榜は考官より、進士の等級をかきつけて、上るなり、放はかきあらはす義なり、）覆試（再ぎんみ、）書判拔萃（唐の時、吏部士を擧ぐるに、身言書判の四項を以てす、身は休良のゆつたり大なるを取る、言は言辭のさわやかに正しきを取る、書は楷法と、のびうるわしきを取る、判は文理のまさりたるを取る、宋の初め、之れにならび、其の後異なるを擧ぐ、之れを拔萃と曰

ふ、遺書（うづもれて、世上に出でざる書物）、宰執（宰は宰相、執は執政）、日暦（日次日記のこと、）制度（おきて、）典章（儀式、）彬々（盛んなる貌、）有條理（錯雜混亂（サクザツコンラン）なく、筋道のよく立ちたるをいふ、）

●〔講義〕諸國を創（ケゲ）り平げんとする時は、必ず先づ之れを招きて來り朝せしむ、至らずして後ち兵を用ゐて征伐す、其の既に降るに及び、皆な誅戮を加へず、禮義を以てして之れを存し置き、其の身を終らしむ、嘗て齊の太公望の廟に幸せられし時、太公望とあはせまつる者を觀るに、白起と云へる古の大將も、其の中にありたり、太祖が指し示して曰く、白起は已に降る者を殺せり、武にあらずとて、命じて之れを去らしむ、周の恭帝は鄭王に封ぜられ、後ち房州（今の鄖（ウン）陽府に屬し縣となる）に遷る、太祖は辛文悦（シンブンエツ）が寬大の長者なる故に、房州の守と爲さしむ、恭帝は太祖に先きだつこと二年にして卒す、太祖は喪（モ）にこもり外朝に出でざること十日、房州より京師に還り葬るに天子の儀式の如くす、太祖が初め京に入る時、周の韓通なる者、忠節に死す、追贈せらるゝこと、至りて手厚かりし、王彥章なる者が、太祖の命令にそむきて、韓通の妻子を殺戮す、故に太祖が深く其の不忠不義を惡みて、生涯節度使の役に用ゐざりし、太祖が周の禪りを受けらるゝの時は、にわかの事にて、未だ周の恭帝より天子の位を讓るの詔命あらず、學士の陶穀（タウコク）が、之れを懷中より出す、太祖は其の恭帝に不忠なるを以て、之れを薄んず、陶穀は久しく翰林院にありて、官の進まざるを怨めり、太祖の曰く、吾れ嘗て聞く、翰林學士の書付するは、てほんに因りて、ひやうたんを畫（ヱガ）くやうな者のみ、何の苦勞か有らんやと、つひに之れを政府に登さず、內官外官の時の人望ある者は、姓名を記し、以て人の欠（カ）けたる時、選び用うるを待つ、官員の中、其の職分にかなふものは、久しく其の職を任せて、他の職に遷らざること多し、銓選の法を定め、擧主連坐の法を嚴重にし、賄賂を取る役人の法を嚴重にす、若し之れを犯す者有る時は、重もき刑に處することあり、五代の世、苛斂が嚴（キビ）しく、商賈の稅を取り、重く年貢の稅を歛めなさする懲罰により、商賈の稅を寬るめ、麴鹽酒の禁を寬（ユル）ふす、倉庫の吏が民の租稅を多く入るゝ者は、或は市中に於て之れを斬り棄つ、五代の世、多く武人を以て太守となす、吾が意のまゝ刑を用ゆ、太祖は之れに懲（コ）りわざと人を罪に陷ゐる者は、必ず罪に抵（イタ）る、大罪を再三吟味する所の法を定め、折杖の法を定め、新に作りたる法律書を發行し、賦役の法を定め、人民の戶口田產を調べたる帳面、又は戶券の類を作る、役人が人民の田を度りて實ならざる者は、或は之れを杖し、或は之れを流す、諸州に旱（ヒデリ）や蝗（イナムシ）のわざはひあらば、饑（ウ）ゆるものを賑はし、租稅をのぞく、惟（ネ）いきとゞかざるを恐る、德行あり、父兄に孝悌なるものを擧げて、制科を親から策す、擧人進士の誘を放す、再吟[illegible]

皇帝と爲す。

太宗皇帝。初名匡乂。太祖長弟也。太祖入京城。匡乂首請號令諸將戰士卒。仍自於馬前。戒摽掠。太祖受禪。乃改名光義。尹開封。同平章事。封晉王。建隆二年。昭憲杜太后臨崩。謂太祖曰。汝知所以得天下者乎。太祖曰。皆祖考與太后之餘慶。太后笑曰。不然。正由柴氏使幼兒主天下耳。汝萬歲後。當傳位晉王。晉王傳秦王。秦王以傳德昭。國有長君。社稷之福也。太祖曰。謹受教。太后呼趙普曰。趙書記共記吾言。不可違。因命普於榻前爲誓書。普署紙尾曰。臣普記。藏之金匱。太祖友愛篤至。晉王嘗寢疾、灼艾、太祖亦自灸。以分其痛。嘗曰。晉王龍行虎步。且生時有異。佗日必作太平天子。福德非吾所能及也。太祖幸蜀。有布衣張齊賢。獻十策。召問。賜食。且啗且對。太祖善其某策。齊賢固稱餘策皆善。太祖怒斥。便出。既還語晉王曰。吾幸西都。得一張齊賢。吾不欲用之。佗日留與汝作宰相。蓋傳位之定久矣。太祖不豫。后遣王繼恩召皇子德芳。繼恩徑召晉王。王至宮中。散遣左右。所言皆不可得聞。但遙見燭影下。王有離席之狀。既而上引柱斧戳地。大聲曰。好爲之。遂崩。后見晉王。愕然曰。吾母子之命。皆託官家。王曰。共保富貴。無憂也。王即位。更名炅。秦王廷美尹開封。改封齊王。德昭封武功郡王。

◉〔解釋〕入京城（陳橋より軍を蹄し、周の汴都に入りて周の禪を受くる時、）號令諸將（擁立せし石守信等の麾下（キカ）に皆約を立たしむ、時に太祖令して曰く、主上は我れ北面して事ふる者、驚かし犯すべからず、公卿は我れ肩をならべるところ、侵暴凌虐（シンバウリヨウギヤク）するを得ざれ云々のこと、）戢士卒（戢は、とりまとめるなり、）成摽掠（摽は、剽に同し、劫（オビヤカ）すなり、かたく亂暴狼藉を禁ずるなり、）餘慶（おかげ、）柴氏（前代周の姓、）幼兒（恭帝は七歲にして、天子となるをいふ、）萬歲後（死後のこと、）晉王（太宗なり、太祖の弟、）秦王（廷美なり、晉王の弟、）德昭（太祖の長男、）趙書記（趙普、嘗て掌書記となり、太祖節度たる時、麾下に屬せり、）金匱（匱は匣（ハコ）なり、金鎖を以て封じたる匣をいふ、）友愛篤至（弟を愛して、恩撫（オンブ）のよくとゞくなり、）灼艾（灸をすゑる、）分其痛（ともに、苦痛のめをする、）龍行虎步（天子になる貴相をいふ、）生時有異（太宗生れしとき、赤光天にあがり、火の如くありしこと、）徑召晉王（德芳を召さず、直に獨斷にて、晉王を召す、太祖傳位の意を知るなり、）所言（太祖、太宗の言ふところ、）遙見（左右の散避せられし者の、遠目より見ると、）燭影下（ともしびのもと、）王離席之狀（太宗傳位の恩を謝し、席を起（タ）ち拜し受く、）戳地（柱斧を以て、をうつこと、）好爲之（よく天下を治めよとなり、）愕然（后、德芳を以て天子とせんと欲し、之れを召さしむ、然るに晉王に位を傳ふ、故にびつくりす、）母子之命（母は后、子は德芳なり、）官家（晉王を指す、三王は天下を家にし、五帝は天下を官にすと云ふより、天子の稱となれり、）

◉〔講義〕太宗皇帝、初の名は匡乂（キヨウギ）、太祖の長弟なり、太祖が京城に入る時、匡乂は第一番に諸將を號令し、士卒を戢（ヲサ）めんと請ふ、太祖は仍（ヨ）りて自から馬の前に於て民の物をかすめとることを戒む、太祖は周の恭帝の禪を受け、それで、太宗の名を光義と改め、開封尹として、同平章事たり、晉王に封ぜらる、建隆の二年、昭憲杜太后崩ぜらるゝに臨み、太祖に謂て曰く、汝は天下を得たる所以を知りたるか、太祖の曰く、皆な是れは先祖と太后とのおかげに因てなり、太后笑ふて曰はれるには、然るに非ず、是れは正に周の世宗が幼き兒をして天下に主とならしむに由るばかりなり、汝千萬歲も生き後ちは當に位を光義に傳へ、光義は光美に傳へ、光美は以て德昭に傳ふべしと、光美は廷美の初の名なり、宋史に開寶六年、太祖光美を封して晉王となす、太平興國四年、太宗廷美を封して秦王となす、國に年の長じたる君あるは國家の仕合せなりと、太祖の曰く、[illegible]

晉王は龍の如く行き、虎の步むが如く、且つ又生るゝ時に、異なるとあり、他日には必ず太平の世の天子とならん、晉王の德の如くは吾々及ぶ所ではないと、太祖が洛の地に行幸す、張齊賢が十[illegible]

○遣使分行州縣。廉察官吏。第其優劣。罷軟不勝任。惰慢不親事。免官。◉〔講義〕[illegible]

敍。○大理評事陳舜封。奏事口捷。擧止類倡優。問誰氏子。對以父爲伶官。上曰。汝眞雜類。豈得任淸望官。改授殿直。○陳洪進來朝。獻漳泉二州。○吳越王錢俶來朝。遂獻其地。○命潘美伐北漢。尋親征。圍太原。劉繼元出降。北漢亡。○詔征契丹。易州涿州來降。上攻幽州。旬不下。遂班師。郡王德昭從征幽州。軍中嘗夜驚。不知上所在。有謀立德昭者。上聞不悅。及歸。以北征不利。不行平北漢之賞。德昭言之。上大怒曰。待汝自爲之賞未晚。

也。德昭退而自刎。後二年。岐王德芳卒。自太祖二子相繼死。齊王廷美不自安。佗日上嘗以傳國意訪趙普。普曰。太祖已誤。陛下豈容再誤邪。於是普復入相。廷美遂得罪。降涪陵縣公。普復使知開封府李符。告其怨望。南還房州。尋殺之。普恐李符漏言。因彈德超譖曹彬故。以符薦德超。貶符春州卒。

◎〔解釋〕大理評事（官は折杖詳刑を掌ごろ、）陳舜封（陳は姓、舜封は名）伶官（樂工）淸望（淸要望官）陳洪進（初め泉州の衙將と爲り、後ち其地に據る、）一州（福建に屬す、）錢俶（詔して俶を封して淮海國王と爲す、）繼元（詔して繼元に爵彭城郡公に賜ふ、）廷美遂得罪（廷美の罪を得るは趙普之を爲す）涪陵（縣は涪州に屬す、音浮、）弭（唐韻を案ずるに彌に作るべし、姓なり、）南還（還當に遷に作るべし、）

◎〔講義〕贓吏の配流せらるゝ者は赦に逢ふと雖ども叙し用ゐず、蓋し贓（マイナイ）を受るの吏は遠國に徙し流さる、是罪の至て重ければなり、故に罪を赦されて歸ると雖も、亦た官に登け庸ゐず、大理評事陳舜封事を奏聞すること口で言ふが早くして、大優の容止なく、擧動が倡優とて俗に云ふ能狂言の役者に似たり、故に問ふ、誰なる者の子ぞと、舜封對るに吾が父は伶官とて樂人なるを以てす、帝の曰く、汝はたに雜類とてやくざものなり、豈に大理評事との淸要官な、望の官に任すべけんや、改て殿直を授く、陳洪進來朝し、初め泉州の衙將となる、後ち其地に據る、故に漳泉の二州を獻すと云ふ、吳越王錢俶來朝す、遂に其地を獻す、右吳越錢鏐梁の太祖開平元年兩浙を據有して是に至て七世凡て七十四年、太宗廷美に命して北漢を伐しむ、尋て太宗が親から征伐して太原を圍む、劉繼元出て降る、北漢亡ふ、詔して繼元に爵彭城郡公を賜ふ、右北漢の劉崇周の廣順元年僭號してなり、是に至て四世凡て二十九年にして而して亡ぶ、詔して契丹を征す、易州涿州來り降る、上幽州を攻む、一旬を踰ても降參せず、遂に師を班す、郡王德昭從て幽州を征す、軍中嘗て夜驚く、帝の在る所を知らず、故に德昭を立て帝と爲んと謀る者あり、後ち帝其謀を聞て悅はず、帝の歸るに及んで、北契丹を征するの利あらざるを以て、北漢を平くるの賞を行はず、德昭言て之を行はんと請ふ、帝大に怒て曰く、汝が帝と爲る時之を行ふも、賞罰未た晩からざるなり、德昭退て而して自ら刎ぬ、後ち二年岐王德芳卒す、太祖の二子相繼て死せしにより、齊王廷美自ら安んぜず、他日帝嘗て國を傳ふるの意を以て趙普に問ふ、普が曰く、太祖其子に傳へずして弟に國を傳て、已に誤れり、陛下豈に再び誤るべけんや、宜しく其子に傳ふべしと、是に於て普復た入て相たり、廷美遂に罪を得て涪陵縣公に降貶す、普復た知開封府李符をして廷美の怨望を告げしむ、南の方房州に遷し、尋て廷美を殺さしむ、普李符が其言を漏さんを恐る、彌德超が曹彬を誣する、故に因て其德超は李符が薦むる人なるを以て符を貶して春州に徙す、李符を他の事に坐して、寧國の司馬に貶すとあり、

○种放隱于終南山。結草爲廬。以講習爲務。後進多從之學。上聞召之。辭以母老。上高其節。厚賜錢帛旌之。○呂蒙正爲參政。有朝士。指之曰。此子亦參政邪。蒙正佯不聞。同列欲詰其姓名。蒙正止之曰。若一知名姓。則終身不忘。不如無知也。○召華山陳摶。賜號希夷先生。○開寶寺塔成。前後八年。所費億萬。田錫奏曰。衆以爲金碧熒煌。臣以爲塗膏釁血。上不怒。○先是西夏李光叡卒。子繼筠嗣。又卒。弟繼捧嗣。繼捧來朝。獻四州地。其弟繼遷叛去。數入寇邊。○契丹主明記殂。號景宗。子隆緒立。年十二。母蕭氏專其國政。○上命曹彬等分道伐契丹。彬兵大敗於岐溝關。詔班師。契丹自是連年入寇。後女眞以契丹隔其朝貢之路。請擊之。不許。女眞遂臣於契丹。○上賜李繼捧姓名趙保忠。授節度使。命管夏銀綏宥靜五州。使圖繼遷。繼遷降。賜姓名趙保吉。保吉復寇邊。命李繼隆討之。保忠言。已與保吉解仇。乞罷兵。上怒。命繼隆先移兵討之。繼隆入夏州。檻送保忠於闕下。保吉尋亦請降。而復叛。命繼隆討之。○蜀自既平之後。府庫之物悉載歸內府。士狹民稠。有司不無賦外之科。王小波起爲盜。小波死。李順繼之。攻陷成都。僭號蜀王。上命王繼恩討擒之。蜀平。○交趾丁連卒。

大校黎桓。囚其宗族而專其國。上初命討之。◉【解釋】終南（山は武功縣にあり、）開寶寺（汴京にあり、）斲血（民の財を聚斂するは、民の膏血を以て塗り斲るが如し、）四州（夏銀綏宥。）岐溝關（涿州の西南に在り、）五州（綏州は即ち彫陰郡陝西に屬す、餘の四州は甘肅に屬す、）賦外之科（租賦の外別に科征あり、）李順（小波が妻の弟、）黎桓（大將校、黎は姓、桓は名なり、）◉【講義】柳放は終南山に隱る、草を結て盧りと爲し、講習を以て務めと爲す、後進もの多く放に從て學ぶ、帝聞て之を召す、辭するに母の老たるを以す、帝其節を高しとして厚く錢帛を賜ふて其名を爽はすと云ふ、呂蒙正參政と爲る、朝士あり、之を指して曰く、此の子も亦た參政か、蒙正佯りて聞かさる風を爲す、蒙正が同列其姓名を詰らんと欲す、蒙正之を止めて曰く、若し一たひ名姓を知らは、則ち身を終るまで之を忘れす、知るとなきにしかさるなり、史は蒙正の雅量を言ふなり、華山の陳摶を召す、號を希夷先生と賜ふ、陳摶字は圖南、亳州眞源の人、華山に隱れて道を修む、周の世宗召し見る、飛昇黄白の術を問ふ、對て曰く、陛下天子と爲り、當さに天下を治むるを以て務めと爲すべし、安んぞ此を用るを爲ん、乃ち遣り山に還らしむ、嘗て白騾に乘り汴に入らんと欲す、中途にして太祖登極を聞き、大に笑て騾より墜ち、乃ち曰く、天下此より定らんと、太宗の時入朝す、帝人を遣はし支獄修養の道を問ふ、摶曰く、山野の人、時に於て用なし、亦た神仙黄白の事、吐納養生の理を知らず、方術のふ可きあるにあらず、假令白日天に沖するも亦た何んぞ世に益あらん、正に君臣心を協はせ、德を同ふせは、化と治を致すの秋、勤行修煉此に出るなし、華山に還る、尋て卒す、開寶寺の塔成る、前後八年、費す所億萬、田錫疏して曰く、衆は以爲らく金碧か炎煌と、臣は以爲らく民の膏らを絞りて之を塗り附り、百姓の血を瀉へて之を血ぬるに、帝之を聞て怒す、怒らすの字妙味あり、是より先き西夏の李光叡卒す、其子繼筠か嗣て立つ、又卒す、李光叡か弟繼捧嗣く、繼捧來朝す、四州の地を獻す、繼捧の弟繼遷叛き去る、數く邊まて入寇す、契丹の主明記殂す、景宗と號す、子隆緒立つ、年十二、母蕭氏其國政を專らにす、帝曹彬等に命して道を分て契丹を伐たしむ、彬か兵大に岐溝關に敗す、詔して師を班さしむ、契丹是より連年入寇す、後ち女眞、契丹か女眞の宋へ朝貢するの路を隔て邪間（シャ）こするを以て、契丹を擊たんとを宋に請ふ、宋許さす、故に女眞か契丹は臣たり、帝李繼捧に姓名を趙保忠と賜ふ、節度使を授く、命して夏銀綏宥靜五州を管轄せしむ、而して繼遷をはからしむ、繼遷も亦た降參す、姓名を趙保吉と賜ふ、保吉復た邊鄙に寇す、李繼隆に命して保を討たしむ、保忠言はく、已に保吉と仇を解く、乞ふ兵を罷んと、帝怒て繼隆に先つ兵を發して保忠を討たしむ、繼隆夏州に入るし保を闕下に檻送す、保吉尋て亦た降參せんと請ふ、而して復た再たひ叛き去る、故に繼隆に命して保吉を討たしむ、蜀か既に平ぎしよりの後ち、府庫の物悉く載て內府に歸す、土狹く民貧けし、有司賦外の科なきにあらず、故に王小波起て盜を爲す、小波死す、李順之に繼く、成都を攻め陷る、蜀王と僭號す、帝王繼恩に命して討て李順を擒にす、蜀亂平らく、交趾丁璉卒す、大校黎桓其宗族を囚へて而して其國を專らにす、帝初て命して之を討せしむ、功なし、已にして而して桓奉貢す、竟に桓を以て交趾の郡王と爲す、無功。已而桓奉貢。竟以桓爲交趾郡王。○時霖潦過度。上曰。朕於刑獄盡心。安得積陰之譴。寇準越班對言。某州局吏侵官錢若干。於法爲小過。陛下殺之。王淮參政王沔之弟。盜錢數百萬。於法爲大戮。陛下以沔故。務相容蔽。如此而曰刑獄盡心。如之何無積陰之譴。上即日誅淮。罷沔。俄而雨止。○上崩。在位二十二年。改元者五。曰太平興國。曰雍熙。端拱。淳化。至道。壽五十九。薛居正。沈淪。趙普。宋琪。李昉。呂蒙正。張齊賢。呂端等相繼爲相。普凡再入再罷。尋薨。普初以吏道聞。寡學術。太祖嘗勸以讀書。普遂手不釋卷。每朝有大議。趣闔戶自啓一篋。取一書閱之。及卒家人視其篋。則論語也。嘗謂上曰。臣有論語一部。以半部佐太祖定天下。以半部佐陛下致太平。蒙正晩出。嘗與普並相。普甚推之。蒙正嘗置冊子夾袋中。疏四方人才姓名。以待選用。初太祖嘗以張齊賢屬上。至齊賢擧進士。上欲置之上第。而有司第其名在下。乃詔一榜特與通判。卒至大用。呂端爲相。人謂呂相作事糊塗。上知之曰。端小事糊塗。大事不糊塗。自上即位以來。以小人爲相者。盧多遜一人而已。太子立。是爲眞宗皇帝。◉【解釋】霖潦（久雨を霖と曰ふ、原水なきを潦と曰ふ、潦は音老なり、）大憝（憝音隊、惡なり、書經周書康誥に元惡大憝と、）太平興國（四字の年號、）再罷（案するに趙普太祖の乾德二年を以て入て相たり、開寶六年に至て罷ら

る、太宗の太平興國六年に復た入て相たり、八年に至て又罷む、端拱元年再たび入る、淳化元年に罷む、前後二朝に歴事す、凡て三十餘年なり、太子（太宗の第三子なり、）

◉【講義】時に長雨度を過ぐ、左傳に凡そ雨三日以往を霖と爲すと、度を過ぐる日三日より以上を云ふ、帝の曰く、朕刑獄に於ける心を盡す、安んぞ積陰の責めを得たる、寇準位班を越て對て言ふ、某州の局吏官錢を侵すと若干（ソクバク）、法に於て小しき過なりと爲す、然るに陛下之を殺す、王淮は參政王沔が弟なり、錢數百萬を盗む、法に於て大惡と爲す、陛下沔が故を以て務めて相容れ蔽ふ、此の如にして而して刑獄に心を盡すと曰ふ、之を如何ぞ積陰の責なからん、即日に淮を誅して沔を罷む、俄にして而して雨止む、帝崩す、在位二十二年、改元する者五つ、曰太平興國、曰雍熙、曰端拱、淳化、至道と、壽五十九、薛居正、沈倫、趙普、宋琪、李昉、呂蒙正、張齊賢、呂端等相繼て相と爲る、趙普は凡て再たび入て再たび罷らる、老て薨す、普初め吏道を以て聞ゆ、學術寡なし、太祖嘗て勸るに讀書を以す、普遂に手に卷を釋かず、朝に大議あるごとに輙ち戸を閉（トヂ）て自ら一篋を啓らき一書を取て之を閲す、卒するに及んで家人其篋を覩れば則ち論語なり、嘗て帝に謂て曰く、臣論語一部あり、半部を以て太祖を佐て天下を定む、半部を以て陛下を佐て太平を致すと、呂蒙正晩（オソ）く出つ、嘗て普と並び相たり、普甚た此の人を推し重んず、蒙正嘗て冊子を懷袖の中に置て四方人才の姓名を疏す、疏は委しく記するを云ふなり、而して以て選び用るを待つ、初め太祖嘗て張齊賢を以て帝に屬す、齊賢が進士に擧げらるゝに至て、帝齊賢を上第に置んと欲す、而して有司其名を次第して下にあり、帝喜ばず、乃ち詔して一榜に詔して特に京官通判を與ふ、言は帝齊賢が下第に在るを以て故に一榜の進士にして盡く及第を賜ふ、特に京官通判を與ふるなり、齊賢遂に大理評事を以て衡州に通判たり、卒に大に用らるゝに至る、呂端相と爲る、人に謂ふ、呂相事を作す糊塗す、糊塗とは俗にのりのごとくねばつくをいふ、帝之を知て曰く、端は小事はねばつくも、大なる事に至てはねばつかねと、帝位に即て以來、小人を以て相と爲す、盧多遜一人のみ、太子立つ、是を眞宗皇帝と爲す、太宗紀に、呂端位に居る、重を持し大體を知る、淸簡を以て務めと爲す、時に同列奏對す、多く異議あり、惟端建明する所罕なり、一日帝手札戒諭す、今より中書の事必ず呂端が參酌を經て乃ち奏を得ん、端愈々諫諍して敢て當らず

眞宗皇帝。初名元侃。封襄王。有舉人楊礪。嘗夢至一大殿。有坐殿上者。語之曰。我非汝王。來和天尊汝主也。指示令識之。礪後進士第一。入爲襄王府記室。既識。如夢中所見。太宗嘗遣相者。詣襄王。及門而返曰。王門廝役。皆將相也。王可知矣。立爲太子。至是即位。更名恒。○咸平二年。契丹入寇。上親征。至大名府而還。○三年。益州卒王均反。僭號大蜀。以雷有終知州。討擒之。益州平。○范廷召擊契丹。求援於高陽關都部署康保裔。亟赴之。廷召潛遁。保裔爲所圍。力戰死之。○李繼遷。先朝奪所賜姓名。寇邊不已。攻陷靈州西涼六合。酋長潘羅支。乞會王師討之。繼遷攻陷西涼府。潘羅支要而擊之。繼遷中流矢。死於靈州之境。其子德明請降。復賜姓趙。後封爲西平王。○楊嗣楊延朗。智勇善戰。加團練使。虜憚之。目曰楊六郎。○景德元年。契丹主與其母蕭氏。大舉入寇。中外震駭。參政陳堯叟蜀人。請幸蜀。王欽若江南人。請幸江南。上以問宰相寇準。準問誰畫此策。上曰。卿姑斷其可否。勿問也。準曰。臣欲得獻策之臣。斬以釁鼓。然後北伐耳。遂定親征之議。上駐蹕韋城。尋至衞南。契丹擁兵抵澶州。圍合三面。李繼隆等出禦之。契丹撻覽中弩死。大挫退却。不敢動。寇準力勸上渡河。殿前帥高瓊亦力贊。猶豫間。瓊麾衞士進輦。曰。陛下若不過河。百姓如喪考妣。梁適呵之。瓊怒曰。君輩。此時尚責人失禮。何不賦一詩。退虜耶。遂擁上以渡。既至澶州。登北城。張黃旗幟。諸軍皆呼萬歲。聲聞數十里。契丹氣奪。

◉【解釋】記室（官校表奏答を掌とる、）廝（音斯、薪を折を廝と曰ふ）高陽（關は安州にあり、）都部署（官兵事を掌どる、）賜姓名（繼遷太宗の朝に當て叛て而して降る、姓名を趙保吉と賜ふ、既にして而して復た叛く、故に賜ふ所の姓名を奪ふと曰ふ、）西涼府（甘肅に屬す、即ち涼州、）斬以釁鼓（牲を殺して血を取り以て戰鼓に

諭ろなり。駐蹕（車駕暫らく止むを蹕を駐むと曰ふ。）韋城（縣は開州に屬す。）撻覽（統軍、順國王。）力贊（黄河を渡るのを贊成す。）猶豫（猶豫は疑慮して决せざるを謂ふなり。顔氏家訓に、猶は犬の子なり。人犬を將ひて行く、犬好て預め人の前にあり、人を待て得ず、又來て迎へ候ふ、此の如く往還する終日に至る、斯れ乃ち猶の未た定らずとする所以なり。故に猶豫と稱す。）百姓如喪考妣（百姓は此れ河北の百姓、周禮に生に父と曰ひ母と曰ふ、死にて考と曰ひ妣と曰ふ。）梁適（宋史に馮拯に作る、）

【講義】眞宗皇帝は太宗の第三子なり、初の名は元侃（カン）襄王に封せらる、襄人楊礪と云ふものあり、嘗て夢に一大殿に至る、殿上に坐するものあり、之に謂て曰く、我は汝か主君にあらず、來和天尊は汝か主なりと指し示して之に謂せしむ、楊礪後に進士第一たり、入て襄王府の記室と爲る、既に謁すれば夢中に見る所の如し、太宗嘗て相者をして襄王に詣らしむ、門に及んで而して返て太宗に謂て曰く、王門は薪を折る者までも皆將となり相となるものなり、王は知るべしと、立てて太子と爲る、是に至て位に即く、名を恒と更む、咸平二年契丹入寇す、帝親ら征伐して大名府に至て而して還る、三年益州の卒王均反す、大蜀と僭號す、雷有終を以て州に知とす、乃ち王均を討して之を擒にす、益州平らぐ、蓋し益州の戍卒亂を作す、卒王均を推し彌んて首領となす、范廷召契丹を擊つ、援兵を高陽關の都部署康保裔に求む、亟かに之に赴く、廷召潜かに遁れ去る、保裔契丹の圍む所と爲り、力戰して討死を爲す、李繼遷先朝に賜ふ所の姓名を稱はる趙保吉と謂ふ、是趙の諱を賜はるなり、故に怒て邊に寇して已まず、靈州を攻め陷る、西凉六谷の酋長潘羅支乞て王の師に會して之を討つ、繼遷西凉府を攻め落す、潘羅支要して而して之を擊つ、繼遷流矢に中て靈州の境に死す、其子德明降るを請ふ、復た姓を趙と賜ふ、後封して西平王と爲す、楊嗣楊延朗智勇にして善く戰ふ、團練使を加らる、虜之を憚りて楊六郎と曰ふ、案するに楊延朗の傳に邊防にあり二十餘年、敵人之を憚り目して楊六郎と爲せは、則ち蓋し楊嗣二字を衍するなり、然らずんば楊嗣の傳に二人久しく北邊に居り、俱に善く戰ふて以て聞ゆ、時に二楊と稱すれば則ち楊六郎は當に二楊に作るべし、景德元年契丹主其母蕭氏と大に兵を發けて入て寇す、中外震ひ駭く、參政陳堯叟は蜀人なり、蜀に幸せんと請ふ、王欽若は江南の人なり、故に江南に幸せんと請ふ、帝以て宰相寇準に問ふ、準が問ふには、誰か此の爲[illegible]の策を畫すと、帝の曰く、姑らく其善し否を斷せよ、其人は問ふなかれなり、準が曰く、臣此策を獻する[illegible]を得て斬り殺して以て攻め太鼓に血を塗りて然して後北伐せんと欲する耳、遂に親征の議を定む、帝蹕を韋城に駐む、車駕暫らく止るを曰ふ、尋て衛南に至る、契丹兵を擁して澶州に抵る、三面を合圍す、李繼隆等出て之を禦く、契丹撻覽矢に中て死す、故に其兵大に挫ちけて退却す、敢て動かす、寇準力めて帝を勸めて河を渡らしむ、殿前帥高瓊も亦た河を渡るの策を贊成す、帝決せす猶豫の間、高瓊衛士を麾いて輦を進めて曰く、陛下若し河を過ぎずんば百姓考妣を喪するか如けん、梁適之を呵る、瓊大に怒て曰く、君か輩此の時尚ほ人の失禮を責む、何ぞ一詩を賦して虜を退けざる耶、萬歳と呼ぶ聲數十里に聞ゆ、契丹氣奪はり、蓋し開州は即ち澶州、潜確類書に開州は古の澶淵なり、宋史地理志に、澶州は河北東路に作る、未た孰か是なるを知らず、又地理志に衛南縣は澶州に屬す、宋史宋元の通鑑に竝に云ふ、澶州の南城に至ると、衛南に南城あり、遂に澶州の北城に至るなり、蓋し澶州の地、北の方黄河に跨るなり、是時黄河澶州の北城に流る、神宗熙寧十年河澶州に決す、北流斷絶す、河道南に徙て分て二派と爲る、一は淮に入り、一は海に入る、

先是王繼忠者陷虜。嘗言和好之利。故雖大舉亦遣使以繼忠書來。上命曹利用報之。至是利用與契丹使者韓杞偕來。請世宗所取關南故地。上曰。地必不可得。寧與金帛以和。準意亦不欲與。且畫策以進曰。如此則可保百年無事。不然數十歳後。戎復生心。準蓋欲擊之。使隻輪不返。上曰。數十歳後。當有能禦之者。吾不忍生靈重困。姑聽其和。遂再遣利用往。利用請歳賂金帛之數。上曰。必不得已。雖百萬亦可。準召語之曰。雖有勑旨。不得過三十萬。如過此數。勿來見準。準斬汝矣。利用卒以絹二十萬銀十萬定和議。南朝爲兄。北朝爲弟。交誓約。各解兵歸。準初發京師。命朝士出知諸州。皆於殿廊受勑。戒之曰。百姓皆兵。府庫皆財。不責汝浪戰。但失一城一壁。當以軍法從事。恐欽若沮親征之議。以其有智且有福。出欽若知天雄軍。契丹至城下。欽若閉門束手。無策。修齋誦經而已。上還自澶淵。待準極厚。欽若歸深恨準。嘗退朝。上目送準。欽若進曰。陛下敬準。爲其有社稷功邪。城下之盟。春秋小國所恥也。上愁然。欽若毎曰。澶淵之役。準以陛下爲孤注。

上侍準遂寖薄。尋罷相。以王旦同平章事。旦王祐之子也。太祖嘗遣祐按事。謂祐還與王溥官職。祐不徇太祖意。竟不大用。祐曰。祐不做兒子二郎必做。植三槐于庭曰。吾後世必有爲三公者。至是旦果爲相。深沈有德望。能斷大事。上心深屬之。趙德明嘗以民饑。上表乞糧。群臣皆請責之。旦曰。臣欲詔德明云。塞上儲糧不可與。已於京師積百萬。可自遣衆來取。德明再拜受詔曰。朝廷有人。

◉〔解釋〕故地（初め晋王石敬塘契丹に請て共に唐を滅す、幽薊十六州を割て之を與ふ、後周の世宗契丹を伐ち、瓦橋關益津關の南、瀛莫易州の地を取る也、）百萬（絹百萬匹、銀百萬兩）天雄軍（河北魏博節度唐の代宗其軍を鎭して天雄と曰ふ、）澶淵（澶州古は澶淵と名く、）孤注（成語考に云ふ、財を盡し博を賭すを孤注と曰ふ、賭博の只一注の錢物あり、以て勝負を決するか如し、）按事（時に魏博の節度使呂彥卿飛語あり、任て問上に聞を、乃ち祐を遣はして按せしむ、）不大用（祐魏博に至る、但に彥卿日家僕二人勢を挾むの罪を決して配す、還て又力（ツトメ）て彥卿が罪なきを保す、且つ極て言ふ、當に五代の辜なきを殺すを以て戒と爲すべしと、帝怒て萊州に安置す、）

◉〔講義〕是より先き王繼忠と云ふ者虜に陷る、嘗て和好の利を言ふ、故に契丹大に兵を發ると雖も亦た使を遣り繼忠か書狀を以て來らしむ、帝曹利用に命して之に報す、是に至て利用契丹使者韓杞と倶に來る、世宗の取る所の關南の故地を請ふ、帝の曰く、地は必す得可からず、寧しろ金帛を與て以て和せん、準か意亦た與へんを欲せす、且つ策を盡して以て進て曰く、此の如ならは則ち百年の無事を保つ可し、然らずんは數十歲の後ち或復た叛心を生せん、準は蓋し契丹を擊て其の車をして隻輪もかへさらしめんと欲す、恐く變殺するを謂ふなり、帝の曰く、數十歲後の事は當に能く契丹を禦くものあらん、吾れ生靈の重を困むに忍ひす、姑（シバラ）く其和睦を許さんと、遂に再たび利用をして往かしむ、利用歲々賂ふ金帛の數を請ふ、帝の曰く、必ず已むを得ざれは百萬と雖とも亦た可なり、準利用を召して之に語て曰く、勅旨ありと雖とも三十萬に過るを得ず、如し此數を過ぎは、來て準を見ること勿れ、準汝を斬らん、利用卒に絹二十萬匹銀十萬兩を以て和議を定む、南朝を兄と爲し北朝を弟と爲す、交々誓約す、各々兵を解て歸る、準初め京師を發する時朝臣に分ち命して諸州の軍事に知たらしむ、皆殿廊に於て勅を受しむ、朝臣を戒めて曰く、百姓は皆兵、府庫は皆財なり、汝に妄りに戰ふを責めず、但々一城一壁を失はゞ軍法を以て事に從ふ可し、欽若が親征の議を沮まんを恐る、其の智ありて福あるを以て欽若を出して天雄軍に知せしむ、契丹城下にいたる、欽若手を束て策なし、齋を修め經を誦するのみ、經は佛經を曰ふ、帝澶淵より還る、準を待すること極めて厚し、欽若は踏て已れの功なきを以て還て深く寇準を恨む、嘗て朝より退くに帝準を目送す、欽若進て曰く、陛下準を敬す、其の社稷の功あるを以てか、城下の盟は春秋に小國たも恥る所なり、是れ城下の盟は他國來り伐て我か城下に迫り我れ已むを得ず和して而して之と盟ふを謂なり、故に春秋の時小國と雖とも之を恥るなり、今河を渡り契丹を逐ふて之と盟ふは本と恥つべきにあらず、唯欽若言を託して以て帝を欺く耳、帝愀然たり、欽若毎に曰ふ、澶淵の役に準陛下を以て孤注とす爲すと、是れ博する者錢を賭するを注と曰ふ、錢を輸して盡んと欲す、乃ち有る所を盡して而して之を出すを孤注と曰ふ、言は則ふれは則ち復た之に繼く者なし、帝準を待つ遂に漸々薄し、尋て相を罷む、王旦を以て同平章事とす、旦は王祐の子なり、太祖嘗て祐を遣はし事を按せしむ、謂ふ、祐還ては王溥か官職を與へんと、祐太祖の意に徇はず、竟に大に用られず、祐が曰く、祐ならず兒子二郎必すならんと、手つから三槐を庭に植ゆ、外朝の三公の位に槐を前に植ゆ、周禮に三槐た面して三公位す、故に祐之にならて曰く、吾が後世必ず三公と爲る者あらんと、是に至て旦果して祐か言の如く宰相と爲る、旦深沈にして德望あり、能く大事を斷ず、帝心深く之に屬す、趙德明嘗て民の饑たるを以て表を上て粟を乞ふ、群臣皆な之を責めんと請ふ、旦曰く、臣德明に詔せんと欲す、乃ち曰く、塞上の儲粟は與ふ可からす、已に京師に於て百萬を積む、自ら衆をして來り取らしむべし、德明再拜して詔を受て曰く、朝廷賢人ありと、

上既入欽若之言。數問欽若。何以刷恥。欽若知上厭用兵。謬曰。取幽薊乃可。上令思其次。乃請封禪以鎭服四海。誇示夷狄。又言。封禪當得天瑞。前代有以人力爲之。河圖洛書果有此邪。聖人以神道設教耳。於是自大中祥符以來。數有天書降。東封泰山。西祀后土於汾陰。又有趙氏祖九天司命天尊降。天下立天慶觀。置聖祖殿。諱聖祖名玄朗。京師作玉清昭應宮。旦不能止其事。〇上在位二十六年。自元年呂端罷。後張齊賢。李沆。呂蒙正。向敏中。畢士安。寇準。王旦。相繼爲相。惟旦居位十一年。當李沆爲相時。旦甫參政。沆喜讀論語。嘗曰。爲宰相如論語中節

用而愛人。使民以時。兩句。尚不能行。聖人之言。終身誦之可也。沆日取四方水旱盜賊奏之。旦謂細事不足煩上聽。沆曰。人主少年。當使知人間疾苦。不然。血氣方剛。不留意聲色犬馬。則土木甲兵禱祠之事作矣。吾老不及見。此參政他日之憂也。及太中祥符。封禪祠祀土木並興。旦乃歎曰。李文靖眞聖人也。每有大禮。旦輒以首相。奉天書以行。常悒悒不樂。欲去則上遇之厚。及薨于位。遺令削髮披緇以斂。議者謂旦得君而不能以正自終。或比之馮道云。張詠嘗言。吾榜中得人最多。謹重有德望。無如李文靖。深沈才德。鎭服天下。無如王公。面折廷爭。素有風采。無如寇公。當方面之寄。則詠不敢辭。當旦之世。王欽若已相。欽若罷。寇準再入相。參政丁謂事準甚謹。嘗會食。羹汚準鬚。謂起拂之。準笑曰。參政國大臣。乃爲官長拂鬚邪。謂甚愧恨。準罷。李迪丁謂爲相。準遠貶。迪罷。謂獨相。時上已有疾昏眩。如準罷貶。皆謂自中宮行之。上不知矣。尋崩。年五十五。在位改元者五。曰咸平。景德。曰大中祥符。曰天禧。乾興。太子立。是爲仁宗皇帝。

◎〔解釋〕入欽若之言（其の準を譖する言を納るなり、）刷（所劣の切拭なり、）河圖（既は大昊に見たり、）洛書（禹水を治むる時神龜文を負て數あり九に至る、而して洛に出つて禹遂に文を別て以て洪範九疇を作る、）大中祥符（四字の年號、）天書降（僞て書を作て天より降ると云ふ、宋するに太中祥符元年正月、天書左承天門の南に降る、四月大内に降る、六月王欽若奏す、天書泰山に降り、天禧三年乾祐山に降る、）分陰（水の南を陰と曰ふ、）天尊降（宋聖太中祥符五年、聖祖降て曰く、吾は人皇中の九人の一、是れ趙の始祖再たひ降し、乃ち軒轅黄帝、後唐の時七月一日、復た降て趙氏の族を生す、帝に謂て曰く、善く蒼生を撫育し前志を忘るゝと毋れと、尊て聖祖を尊號して九天司命保生天尊と曰ふ、聖祖の母を元天大聖后と曰ふなり、）文靖（李沆文靖公と諡す、）遺令（令は去髮を削り緇を被る、僧體の如し、）馮道（後唐の相可否する所なし、）王公（旦かと、）爭（辭と同し、）寇公（準かと、）方面之寄（一方に鎭し、自ら一面に當る、）遠貶（初め雷州の司戸に貶し、道州の司馬に移る、）中宮（劉后）太子（眞宗第六子、）

◎〔講義〕帝既に欽若の言を入れて數ゝ欽若に問ふ、何を以か城下に盟ふの恥を拭はん、欽若帝の兵を用るに厭ふを知て譏りて曰く、陛下兵を以て幽薊を取らは乃ち此恥を滌くべし、帝其次を思はしむ、乃ち請ふ、封禪を以て四海を鎭服して夷狄に誇り示さん、又曰ふ、封禪は當に天瑞を得て然して可なるべきのみ、天瑞安んぞ必す得べけん、前代人力を以て之を爲る者あり、惟人主信して而して之を崇奉して以て明に天下に示せは則ち天瑞と異なるなきなり、河圖洛書果して此れあらん耶、聖人神道を以て敎を設くる耳、天道は至神なり、故に神道と曰ふ、是に於て大中祥符より以來數ゝ天書あつて降る、皆王欽若等か爲す所なり、大中祥符より以來、數る天書あり降る、東の方泰山を封す、西の方后土を汾陰に祀る、又趙氏祖九天司命天尊あつて降る、眞宗紀に汀州黔卒王捷自ら言ふ、南岳に於て道人姓は趙氏に遇ふ、授るに小環神劍を以す、益して司命眞君なり、官者劉承珪其事を以て聞す、捷名を中正と賜ふ、而して祥瑞の事起る、天下天慶觀を立つ、聖祖殿を置て、聖祖の名玄朗を諱む、益し天下に詔して聖祖の諱玄を避て元と爲し、朗を明と爲す、京師玉淸昭應宮を作す、天書を奉するの宮なり、本と昭應宮と名く、後ち玉淸の二字を加ふ、旦其事を止る能はす、帝在位二十六年、元年に呂端罷てより後ち張齊賢李沆、呂蒙正向敏中、畢士安寇準王旦相繼て相と爲る、惟旦位に居る十一年、李沆か相となる時に當て旦甫めて參政たり、沆論語を誦む、嘗て曰く、宰相と爲る、論語中用の節をして而して人を愛し民を使ふに時を以すと云ふ兩句の如き尙行ふ能はす、聖人の言終身之を誦して可なりと、沆日々に四方の水旱盜賊を取て之を奏す、旦か謂く細事なり、帝の聽を煩はすに足らすと、沆か曰く、人主少年より當に人間の疾苦を知らしむべし、然らすんは血氣方さに剛し意を聲色犬馬に留めすんハ、則ち土木甲兵禱祠の事作らん、吾老たり、見るに及はす、此參政他日の憂ならん、太中祥符に及て封禪祠祀土木並び興る、旦乃ち歎して曰く、李文靖は眞の聖人なり、大禮ある每に旦輙ち首相なるを以て天書を以て行く、常に悒悒として樂ます、去らんと欲れは則ち帝之に遇する厚し、位に薨するに及んて遺令すらく髮を削り緇を披て以て斂せよと、譏者謂く旦君を得たり而るに正を以て自ら終る能はす、或は之を馮道に比すと云ふ、張詠嘗て言す、吾か榜中人を得る最も多し、吾か榜中は吾れと同榜の進士を謂ふなり、謹重にして德望あるは李文靖に如くはなし、深沈才德にして天下を鎭服するは王旦に如くはなし、面折廷爭して素より風采あるは寇準に如くはなし、方面の寄に當ては則ち詠敢て辭せすと、旦の世に當て王欽若已に相たり、欽若罷む、寇

準再たび入て相たり、參政丁謂準に事て甚だ謹しむ、謂は本と準の門下也、故に之を事ふる甚だ謹しむ、嘗て中書にて會食のとき、羹準か鬚を汚かす、謂起て之を拂ふ、準笑て曰く、參政は國の大臣也、乃ち官長の爲めに鬚を拂ふか、謂甚た愧恨す、準罷む、李廸丁謂相と爲る、準遂く貶らる、初め雷州の司戸に貶し、後ち道州の司馬に移る、廸罷む、謂獨り相たり、時に帝已に疾ひあり、昏眩なり、準か政を罷め貶らるか如きは、皆謂中宮劉后に白して之を行ふ、帝は更に知らず、尋て崩す、年五十五、在位改元は五つ、咸平、景德と曰ひ、大中祥符と曰ひ、天禧、乾興と曰ふ、天子立つ、是を仁宗皇帝と爲す、

仁宗皇帝。名禎。母李氏。章獻明肅劉皇后子之。眞宗得皇子已晩。始生晝夜啼不止。有道人言。能止兒啼。召入。則曰。莫叫莫叫。何似當初莫笑。啼即止。蓋謂眞宗嘗籲上帝祈嗣。問群仙誰當往者。皆不應。獨赤脚大仙一笑。遂命降爲眞宗子。在宮中好赤脚。其驗也。自昇王爲太子。年十三即位。劉太后垂簾同聽政。丁謂用事。竄寇準爲雷州司戸。參政王曾密奏。謂包藏禍心。眞宗山陵擅移皇堂於絶地。遂罷謂。貶至崖州司戸。謂初命學士草準責詞。令用春秋無將。漢法不道。爲證事。及謂竄。學士乃用其語。人快之。方逐準時。京師語曰。欲得天下寧。當拔眼中丁。欲得天下好。莫如召寇老。然準竟不及北還而卒。王曾爲相。王欽若再相。欽若卒。張知白相。知白卒。張士遜相。士遜罷。呂夷簡相。惟王曾自天聖初居相位。至是七年而罷。曾初興進士。青州發解。禮部廷試。皆第一人。曰狀元三場。喫著不盡。曾曰。平生之志。不在溫飽。眞宗末。正色立朝。朝廷賴以爲重。作相日。所進退士。莫有知者。或問其故。曾曰。恩欲歸已。怨使誰當。○交趾黎桓景德中卒。子龍廷。殺其兄龍鉞而自立。來貢。賜名全忠。太中祥符間。全忠卒。子幼。弟爭立。大校李公蘊遂殺之而自立。至是公蘊卒。子德政立。來告喪。封交趾郡王。○契丹主隆緒殂。號聖宗。子宗眞立。○西夏趙德明卒。子元昊立。○劉太后以上爲己子。而上母李氏。默默處先朝嬪御中。未嘗自異。人亦畏后不敢言。疾革乃進位宸妃而薨。宰相呂夷簡奏。太后宜備禮以葬。曰。他日莫道夷簡不曾說來。宸妃卒踰一年。太后崩。稱制十一年。

◉〔解釋〕李氏（帝を生む所の母なり、）劉皇后（眞宗の正后、）子之（養て子と爲す、）籲（音喩、和なり、商書盤庚に衆の戚を率籲して矢言を出す、孔の曰く、籲は和なり、衆憂の人を率ひて和して正直の言を出つ、又蔡注に籲と呼なり、）雷州（海南に屬す、）山陵（眞宗の葬所、）擅移（皇堂は壙穴なり、時に丁謂山陵使と爲る、山陵都尉雷允恭に因て邢中和か言に從て、山陵を移して上に向へ、既にして上穴に水石あり、故に王曾これを奏す、）無將（春秋傳に云ふ、大臣將なし、將にして而して必す誅せらる、公子牙今將爾、將とは君を弑せんとするを言ふ、春秋莊三十二年、公羊傳、君親將なり、將にして誅せらる、）不道（大逆無道上を誣る不道の類の如し、）用其語（草詞に曰く、無將の戒め、舊典甚はだ明なり、不道の辜、常刑赦もなし、）眼中丁（一に眼前の釘に作る、）發解（鄕擧なり、）禮部（會試、）廷試（殿試、）景德（眞宗の年號、）嬪御（周禮に九嬪九御あり、李氏眞宗嬪御の中に處るなり、）革（音棘、急なり、）

◉〔講義〕仁宗皇帝名は禎、母は李氏、章獻明肅劉皇后之をトす、眞宗皇子を得ると已に晩し、始て生れて晝夜啼て止まず、道人あり言はく、能く兒の啼を止めんと、召して入る、則ち曰く、叫ふ莫れ叫ふ莫れ、何ぞ當初の笑ふ莫きに似かんと、啼を即ち止む、蓋し謂ふ、眞宗嘗て上帝に呼で嗣を祈る、群仙に誰か當に往くべき者と問ふ、皆之に答へず、獨り赤脚の大仙一笑す、赤脚は徒跣を謂ふなり、遂に命して降して眞宗の子と爲す、宮中に在て徒跣を好むと其驗なり、昇王より太子と爲る、年十三にして位に即く、劉太后簾を垂れて同じく政を聽く、丁謂事を用て、寇準を竄して雷州の司戸と爲す、參政王曾密かに奏す、謂禍心を包藏す、眞宗の山陵擅に皇堂を絶地に移すと、蓋し天子の葬所、秦に長山と曰ひ、漢に陵と曰ふ、故に後世通して山陵と名く、皇堂は陵隧を謂ふなり、絶地は懸絶の地なり、遂に謂を罷む、貶して崖州の司戸にいたる、謂初め學士に命して準か責詞を草す、春秋に將なし、是は春

秋公羊傳に、君親將なし、將して而して必す誅せらる、將は將に逆亂を爲んとするを謂ふなり、人臣將さに逆亂を爲んとするの意あれば、輒ち發覺を待たずして而して之を誅するなり、漢法、不道は大逆無道、上を誣ゆる不道の類の如し、今此語を用しめて寇準を貶するの證事と爲す、謂か發貶せらるゝに及んで、學士劉筠其責詞の語を用て之を貶す、人之を快とす、準を逐ふ時に當て、京師語て曰く、天下の寧きを得んと欲せば、當に眼中丁を拔くべしと、丁釘通す、當に丁謂を去るべきを言ふなり、天下の好きを得んと欲せば、寇老を召すに如くなし、然に準竟に北に還るに及ばずして而して卒す、王曾相と爲る、王欽若再び相たり、欽若卒す、張知白相たり、知白卒す、張士遜相たり、士遜罷む、呂夷簡相たり、惟ゝ王曾天聖の初めより相位に居る、是に至て七年にして而して罷む、王曾初め進士に擧らる、青州の鄕擧、會試、殿試、皆第一番たり、人之を戲りて曰く、狀元三場、喫著し盡きす進れ、進士第一を狀元と謂ふ、言は喫飯著衣餘りあつて盡きざるなり、曾が曰く、曾が平生の志は衣裳の溫さ喫飯に飽くに非す、志は天下を安するにありと、眞宗の末、色を正ふして朝に立つ、朝廷之に賴て以て心を重しと爲す、相と爲る日、進退する所の士、人知る者あるなし、或は其故を問ふ、曾が曰く、恩を己れに歸せんと欲せば、怨は誰をして當らしめん、矢張り己れが身に歸するなり、交趾の黎桓、景德中に卒す、子龍廷其兄龍鉞を殺して而して自から立つ、乃ち宋へ來貢す、名を至忠と賜ふ、大中祥符の間、至忠卒す、子幼なり、弟明提明昶爭て立つ、大校李公蘊遂に之を殺して而して自立す、是に至て公蘊卒す、子德政立つ、來て喪を告く、交趾郡王に封せらる、契丹の主隆緒殂す、聖宗と號す、子宗眞立つ、西夏の趙德明卒す、子元昊立つ、劉太后帝を以て己か子と爲し、而して帝の母李氏用られず、默默として先朝嬪御の中にあり、未だ嘗て自ら嬪御に異にせず、人も亦た劉太后を畏て敢て言はず、李氏疾ひ急なり、乃ち位を宸妃に進む、而して薨す、宰相呂夷簡太后に奏す、宜しく禮を備て以て葬す可しと、蓋し李氏薨す、太后抑へて未だ喪を治せず、夷簡入て奏す、太后許さず、夷簡曰く、佗日劉氏を全するを欲せざらん乎、遂に哀を發し服を成して之を殯る、時に詔して宮城の垣を鑿して以て喪を出さんと欲す、夷簡復言す、垣を鑿つは禮に非す、宜しく西華門より出すべし、且つ曰く、宸妃聖躬を誕育す、而して喪禮を成さず、後ち必す其罪を受る者あらんと、乃ち之を許す、乃ち夷簡曰く、他日夷簡嘗て說きて來らすと道と莫れ、宸妃卒して一年を臨て太后崩す、制を稱する十一年、綱目、劉太后帝を愛す、己か出の如く、帝も亦た孝を盡す、故に始終毫髮の間隙なし、后制を稱する十一年、政宮閣に出ると雖ども、而して號令嚴明、恩威天下に加ふ、左右近習假借する所少く、宮掖の間、未だ嘗て妄りに改め作らず、內外賜予節あり、

上始親政。先是呂夷簡張士遜並相。夷簡罷。李迪相。而士遜爲首相。無所發明而罷。夷簡復相。迪罷。王曾復相。而權在夷簡。夷簡之初罷也。以郭皇后之言。及復入。而后有尚美人爭寵。之際。遂廢郭后。夷簡有力焉。臺諫孔道輔范仲淹爭。不得而出。仲淹還朝。爲待制。知開封府。言事愈急。數議時政。夷簡訴其越職。罷知饒州。館閣余靖尹洙爭之。皆坐貶。歐陽脩責諫官高若訥不諫。謂不知人間有羞恥事。若訥奏其書。亦貶。蔡襄作四賢一不肖詩。四賢指仲淹洙靖脩。不肖指若訥也。王曾因對斥夷簡納賂示恩。夷簡曾並罷。王隨陳堯佐代之。以無所建明而罷。張士遜章得象代之。○趙元昊據有夏銀綏宥靈鹽會勝甘涼瓜沙肅州之地。居興州。阻賀蘭山爲固。僭號大夏皇帝。入寇西邊。騷然。范雍經略西夏。聞元昊將攻延州。懼甚閉門。不救。劉平戰。中官黃德和誣奏平降賊。以兵圍其家。議收其族。富弼言。平自環慶來援。姦臣不救。故敗。罵賊而死。德和誣人冀免坐腰斬。范雍罷。時軍興多事。張士遜無所補。諫官韓琦上疏曰。政事府豈養病坊邪。於是士遜致仕。呂夷簡復相。用韓琦范仲淹爲邊帥。仲淹嘗兼知延州。夏人相戒曰。毋以延州爲意。小范老子。胸中自有數萬甲兵。不比大范老子可欺也。邊人爲之語曰。軍中有一韓。西賊聞之心膽寒。軍中有一范。西賊聞之驚破膽。昊之不得大逞。蓋藉琦仲淹之宣力居多。

◎〔解釋〕郭皇后之言（宋鑑に上夷簡と謀て張耆等皆太后の任する所なるを以て悉く之を罷む、退て郭后に告く、后の曰く、夷簡獨り太后に附かざるか、是に由て夷簡を合せ罷む、）尚美人（尚は姓なり、九嬪の下には美人の官あり、）出（道輔出て泰州に知たり、仲淹出て睦州に知たり、）知開

封府（景祐元年、仲淹を召して、刑部員外郞天章閣待制と爲す、執政之を恐る、命して開封府に知たり、）饒州（仲淹か前職を罷む、而して饒州に知たり、）館閣（余靖尹洙館閣の職にあり、）坐貶（靖は筠州の酒税を監す、洙は郢州の酒税を監す、）羞恥事（郭后を廢するの事の如し、）亦貶（修を夷陵の令に貶す、）夏銀（已下の十四州、綏は陝西に屬す、食は鞏昌に屬す、餘は並に甘肅に屬す、）延州（陝西に屬す、即ち延安郡、）環慶（二州は皆鞏昌に屬す、）姦臣（范雍）冀免（案するに元昊延に寇する時、德和兵を引て先つ走る、是に至て遂に平を誣奏して以て自ら免するを冀ふ、）腰斬（竟に德和を斬る、）無所補（朝廷に補益する所無し、）小范老子（仲淹を戎人知州を謂て老子と曰ふ、）大范老子（范雍を云ふ、）◎〔講義〕劉太后崩して、帝始て政を親らす、是より先き呂夷簡張士遜並ひ相たり、夷簡罷む、李迪相たり、而して士遜首相たり、發明する所なくして、而して罷む、夷簡復た相たり、迪罷む、王曾復た相たり、而して權夷簡にあり、夷簡の初め罷めらるゝは、郭皇后の言を以す、復た入るに及て、而して后尙美人と寵を爭ふの隙あり、遂に郭后を廢す、夷簡力らあり、尙美人嘗て帝の前に於て郭后を侵すの語あり、后怒に勝へず、其頰を批つ、帝自ら起て之を救ふ、后誤て帝の頰を批つ、帝大に怒る、夷簡初め郭后の言を以て相を罷めらる、故に后に恨みあり、臺諫は言官を云ふ、孔道輔范仲淹と爭ふ、得ずして而して出つ、蓋し二人共に諫む、皇后は天下の母、當に輕しく廢すべからず、是時道輔は出て泰州に知たり、仲淹は出て睦州に知たり、然れども歲餘にして仲淹は朝に還て侍制と爲る、開封府に知たり、事を言ふ愈々急なり、數々時政を議す、夷簡仲淹か職を越るを訴ふ、罷られて饒州に知たり、館閣余靖尹洙仲淹の音を稱し、仲淹を出すの惡なるを爭ふ、是時余靖集賢校理と爲り、尹洙館閣校勘と爲り、皆館閣の職にあり、二人共仲を救の故を以て、皆坐して貶せらる、歐陽脩諫官高若訥諫めざるを責て謂て、人間羞恥の事あるを知らずと、案するに仲淹罪なくして貶せらる、若訥諫官に居て而して諫め止る能はず、此れ羞恥の事となす、註に郭后を廢するの事の如きは誤れり、若訥の傳に、歐陽脩書を若訥に遺て責るに、仲淹は剛正にして古今に兼通す、班行の中に與に比をなすなし、今君諫官となうて、目よ非罪を親て、而して辨する能はず、猶を醜面して以て士大夫を見て、朝廷に出入す、復た人間に羞恥の事あるを知らざらんや、今より而して後ち決して知る、足下は君子に非すと、若訥其書を奏す、亦た脩を夷陵の令に貶す、襄四賢一不肖の詩を作る、四賢は仲淹尹洙余靖歐陽脩を指す、不肖は若訥を指す也、王曾對に因て夷簡か路を納れ恩を示すを斥す、夷簡曾並に罷らる、王隨陳堯佐之に代る、建明する所なきを以て而して罷らる、張士遜章得象之に代る、趙元昊夏銀綏宥靈鹽會勝甘凉瓜沙肅州地を據り有ち、興州に居る、賀蘭山を阻て以て固めと爲す、大夏皇帝と僭號し、宋國に入寇す、因て西邊騷然たり、范雍西夏を經略す、元昊か將さに延州を攻んとするを聞き、懼るゝこと甚し、門を閉て救はず、劉平戰ふ、中官黃德和平か賊に降ると誣奏す、兵を以て平か家を囚む、其族を收へんと議す、富弼言く、平殺臣より來り援ふに、姦臣范雍救はず、故に敗る、賊を罵て而して死す、德和人を誣ゐて免れんを冀ふ、是より先き元昊延に寇する時、德和兵を引て先つ走る、是に至て遂に平を誣奏して以て自ら免れんを希ふなり、竟に德和を腰斬す、雍罷らる、時に軍興て多事なり、張士遜朝廷に補益する所なし、諫官韓琦疏を上て曰ふ、政事府は豈に病を養ふ坊室ならんや、是れ張士遜か政を執り朝廷の事を輔ふ所なく、闕に居て病を養ふか如きを譏るなり、是に於て士遜仕を致して隱居す、呂夷簡復た相たり、韓琦疏に仲淹を以て邊の帥と爲す、仲淹は嘗て兼て延州に知たり、夏人相怖れ戒しめて曰く、延州を以て意となすなかれ、小范老子は胸中自ら數萬の甲兵あり、大范老子の欺く可きにはくらぶられぬ、老子は之を尊稱する耳、老學庵筆記に、西人父を謂て老子と曰ふ、仲淹大に州兵を閲し、萬八千人を得たり、六將に分て之を領せしめ、日夜訓練す、賊の衆寡を量り、更に出て敵を擾がしむ、又大に營田を興し、堡砦を脩め、流亡を招き、斥候と通し、是に於て羌漢の民相踵て業に歸す、邊人之が語をなして曰ふ、軍中に一韓あり、西賊之を聞て心膽寒し、軍中に二范あり、西賊之を聞て膽に驚き破ると、昊の大に志を逞ふするを得ざるは、蓋し琦仲淹の力らを宣る居多なるに因るなり、

契丹乘朝廷有西夏之撓。遣泛使求石晉所割周世宗所取關南地。知制誥富弼接伴。時夷簡任事。人莫敢抗。弼數侵之。夷簡欲因事罪弼。以弼報使。弼至往返論難。力拒其割地。使還。再遣而國書故爲異同。夷簡欲以陷弼。弼疑而啓觀。乃復回奏。面責夷簡。易書而往。增歲賂銀絹各十萬。定和議而還。○呂夷簡求罷。上遂欲更天下弊事。增諫官員。命王素歐陽脩余靖蔡襄供諫院職。以韓琦范仲淹爲樞密副使。召夏竦爲樞密使。諫官論罷竦。以杜衍代之。國子直講石介喜曰。此盛德事也。乃作慶曆聖德詩。有曰。衆賢之進。如茆斯拔。大姦之去。如距斯脫。大姦指竦也。◎〔解釋〕泛使（海に浮ふの使、）關南地（說は上に見たり、）接伴（泛使に陪奉す、）報使（報書を以て契丹に奉使す、）茆拔（易に曰く、茆を拔く、連茹、言は善類相引、）距脫（雞の勇は距を以なり、距脫すれは他雞の害を爲す能はさるなり、）◎〔講義〕契丹朝廷に西夏の撓みあるに乘して、海に浮て使を遣はし、石晉の割く所の周

の世宗の取る所の關南の地を求めしむ、知制誥富弼泛使に陪奉す、時に夷簡政事に任す、人敢て夷簡を畏れて抗するものなし、富弼獨り夷簡を侵す、夷簡事に因て弼を罪せんと欲す、故に弼を以て報書を以て契丹に奉使す、弼契丹に至り、往返論難す、力めて其の地を割くを拒む、使して還る、再たび弼を遣る、而して國書故らに富弼の言ふは文面を異にす、夷簡是異同を以て弼を陷らんと欲す、弼疑て而して啓き視る、乃ち復た回り奏し夷簡を面りに責め、書を易て而して往て、歳々銀絹各々十萬を賂ふて増し和議を定て而して還る、案ずるに弼契丹に使し既に歸て復命す、再び往て聘す、草詔及び誓書、弼三事を増すを請ふ、既く塘地を開き、屯兵の騎を増し、叛を容れ受ることなかれ、行くに及で中使誓書を持して武疆に至て之を授く、弼私に三事を念ひ前に虜と約束す、萬一書詞口と異ならば、則ち事敗れんと、發して之を視れば、果して口と書と同じからず、乃ち馳せ還て書を易て行く、呂夷簡罷んことを求む、帝遂に天下の弊事を更めんと欲す、諫官の員を増し、王素、歐陽脩、余靖、蔡襄に命して諫院の職に借し、韓琦、范仲淹を以て樞密副使と爲す、夏竦を召して樞密使となす、諫官論して竦を罷む、杜衍を之に代ふ、國子直講石介喜で曰ふ、夏竦を退るは此れ盛德の事なり、乃ち慶曆聖德の詩を作る、曰へるあり、衆賢の進むは茅の斯に連茹として根まで拔けるがごとし、是善類相引くは茅の根を連れて皆な拔くを云ふなり、大姦の去るは雞距の斯に脫するが如し、雞と距（ケツメ）を以て他雞の害を爲す、今其距を取り除けは他雞を害するを能はざるなり、大姦は夏竦を指すなり、

仲淹琦適自陝西來。道中得詩。仲淹拊股謂琦曰。爲此怪鬼輩壞事。竦因與其黨造論。目衍等爲黨人。歐陽脩乃作朋黨論上之。畧曰。小人無朋。惟君子有之。小人同利之時。暫爲朋者僞也。及其見利而爭先。或利盡而情疎。反相賊害。君子修身。則同道而相益。事國則同心而共濟。終始如一。此君子之朋也。爲君者。但當退小人之僞朋。進君子之眞朋。則天下治矣。○仲淹遷參政。富弼爲樞副。上既擢仲淹等。每進見必以太平責之。開天章閣召對賜坐給筆札。仲淹等皆惶恐退。列奏十事。一曰明黜陟。二曰抑僥倖。三曰精貢擧。四曰擇官長。五曰均公田。六曰厚農桑。七曰修武備。八曰減徭役。九曰覃恩信。十曰重命令。上方信向。悉用其說。惟武備欲復府兵一說。宰相以爲不可。時章得象晏殊。並同平章事。未幾。仲淹宣撫陝西河東。富弼宣撫河北。竦等造謗。故仲淹等不安於朝。歐陽脩亦出使河北。晏殊罷。杜衍同平章事。衍務裁僥倖。每内降。率寢格不行。積詔旨十數。輒納上前。上嘗語諫官曰。外人知衍封還内降。邪朕在宮中。每以不可告而止者。多於所封還也。會衍婿蘇舜欽。監奏進院。用鬻故紙公錢。祀神會客。御史中丞王拱辰。素不便衍等所爲。因攻其事。置獄得罪者數人。拱辰喜曰。吾一網打去盡矣。衍相七十日而罷。賈昌朝平章事兼樞密使。韓琦罷樞副知楊州事。章得象罷。陳執中平章事。昌朝罷。夏竦代爲樞密使。

◎〔解釋〕目（稱なり、）札（紙札）覃（延なり、）内降（詔旨）會客（進奏院に會す、神を祠るの舜欽故紙を賈ふの公錢を用て、妓を召し客を會す、王洙、呂溱、王柔等與かる、）得罪（舜欽名を除す、洙等皆遂に去る、遂字一に逐字に作る、是なり、）

◎〔講義〕仲淹と韓琦と適く陝西より來る、道中にて詩を得たり、仲淹歎息して股（モヽ）を折（ウツ）て琦に謂て曰ふ、此の怪鬼輩の爲めに事を壞ちるゝと、是れ怪鬼輩とは夏竦を指すなり、言は此詩を得て深く姦竦の爲に事を壞らるゝを知るなり、竦因て其黨と論を造て衍等を目して黨人となす、歐陽脩乃ち朋黨論を作て之を上る、畧文曰く、小人は朋なし、惟だ君子は之あり、小人利を同するの時暫らく朋を爲す者僞なり、其利を見るに及て而して先を爭ふ、或は利盡きて而して情疎なり、則ち心を同して而して共に濟す、終始一の如し、此れ君子の朋なり、君たる者但だ當に小人の僞朋を退け君子の眞朋を進むるときは則ち天下治らん、仲淹參政に遷る、富弼樞副と爲る、帝すでに仲淹等を擢て、進見するごとに必す太平を以て仲淹らを責む、天章閣を開て召對坐を賜ふて筆札を給す、蓋し其のなさんと欲する所を條陳せしむ、仲淹等皆惶恐す退て十事を列ね奏す、一に曰ふ黜陟（チツチヨク）之を明にせよ、是は善惡を擇び、善を陟げ惡を黜くるなり、二に曰ふ僥倖を抑（ヲサ）へよ、抑は裁抑するなり、三に曰く、貢擧を精（クハシ）ふせよ、是れ國邑より貢し擧る所の士を善く精撰するを云ふ、四に曰ふ官長を擇べ、五に曰ふ公田を均（ヒトシ）ふせよ、六に曰

く、農桑を厚くせよ、七に曰く、武備を修めよ、八に曰く、徭役を減（ゲン）ぜよ、是は百姓を使役することを少なくするを云ふ、九に曰く、恩信を覃（アック）せよ、十に曰く、命令を重くせよ、帝方さに信し向ふ、悉く其說を用ふ、惟ゝ武備府兵を復せんと欲するの一說は、宰相以て不可と爲す、蓋し唐の太宗府兵を定む、凡そ十道府を置く六百三十四、而して關內二百六十一、皆諸衛及ひ東宮六率に隷す、上府の兵は凡て千二百人、中府は千人、下府は八百人、三百人を團となし、團に校尉あり、五十人を隊と爲す、隊に正あり、二十人を火と爲し、火に長あり、人ことに兵甲糧裝各ゝ數あり、之を庫に致し、征行には之を給す、二十にして兵となる、六十にして而して免す、能く騎射する者を越騎と爲し、其餘は歩兵となす、時に章得象晏殊並に同平章事たり、未た幾くならずして仲淹陝西河東を宣撫す、富弼河北を宣撫す、竦等誹謗を造る、故に仲淹等朝廷に安んぜず、歐陽脩も亦た出て、河北に使す、晏殊政を罷む、杜衍同平章事たり、衍務めて僥倖を裁抑す、內降あることに率（ヲホム）ね寢格して直に行はず、詔旨を積む、十數輒ち帝の前に納る、帝嘗て諫官に語て曰く、外人は衍か內降を封還するを知るや、朕宮中に在て毎に告く可からざるを以て而して止む者は、衍か封還する所よりも多きなり、會々杜衍か壻の蘇舜欽進奏院を監す、故紙を賣て貯ふる所の御上の錢を用て、神まさを祀り、客を會し妓を召す、王洙呂溱王益柔等あつかる、御史中丞王拱辰素より杜衍等か爲す所を便とせず、因て其事を攻む、獄を置て罪を得る者數人、拱辰喜て曰く、吾れ一網に打し去り盡すと、衍相たる七十日にして而して罷む、賈昌朝平章事兼樞密使たり、韓琦樞副を罷て揚州の事を知す、章得象罷む、陳執中平章事たり、昌朝罷む、夏竦代て樞密使と爲る、

○貝州卒王則反。文彥博宣撫河北。討平之。彥博入爲平章事。○趙元昊慶曆初。嘗因范仲淹請和。反覆數歲。竟納款。復稱臣。策命爲夏國王。名曩霄。歲賜銀絹茶綵二十五萬五千。遂不復寇邊。卒。子諒祚立。○陳執中以無所建明罷。○夏竦罷。宋庠代之。尋同平章事。未幾罷。○張貴妃兄堯佐。一日除四使。監察御史裏行唐介論之。不聽。遂劾奏。文彥博向守蜀。以燈籠錦獻貴妃。得執政。故黨堯佐。上怒遠貶介。彥博亦求罷。龐籍平章事。○廣源州儂智高寇廣州。連歲陷諸州。自邕至廣西。皆被其害。命樞副狄青討平之。還爲樞密使。○龐籍罷。○陳執中梁

適平章事。適罷。劉沆代之。執中罷。文彥博富弼並同平章事。士大夫相慶得人。上曰。人情如此。豈不賢於夢卜哉。上嘗問王素。孰可爲相。素曰。惟宦官宮妾。不知姓名者。可充其選。上慨然曰。如此則富弼耳。○契丹主宗眞殂。號興宗。子洪基立。○交趾李德政卒。子日遵立。○劉沆罷。文彥博罷。韓琦平章事。富弼罷。○王安石知制誥。安石每遷官。遜避不已。至知制誥則不復辭官矣。安石嘗侍賞花釣魚宴。誤食鉤餌。已悟而食之。既上以其不情而遂非惡之。安石有重名。士爭向之。惟蘇洵不見。著辨姦論。亦以爲不近人情。必大姦慝。○司馬光知諫院。進三劄。一論君德。有三。曰仁。曰明。曰武。二論御臣。曰任官。曰信賞。曰必罰。三論揀軍。又進五規。曰保業。曰惜時。曰遠謀。曰謹微。曰務實。○策制科人。得蘇軾蘇轍。○曾公亮平章事。○上在位四十二年。改元者九。天聖明道。則垂簾之政也。景祐以來。政由己出。寶元康定間。西鄙多事。慶曆更化。君子滿朝。至皇祐至和嘉祐。天下承平無事。恭儉之德。愛人恤物之心。自即位至升遐。終始如一日。遺制下。雖深山窮谷。莫不奔走悲號而不能止。壽五十四。皇子立。是爲英宗皇帝。

◉〔解釋〕兄（當さに諸父に作るべし、宋監を按すろに貴妃は乃ち張堯佐か姪なり、）四使（淮康軍の節度、群牧制置、宣徽南院、景靈宮の四使並ひ命せらろ、）裏行（唐の朝に御史裏行あり、景祐中に至て、始て置て以て御史の官の卑（イヤシ）き者を處す、又曰ふ、裏行はいまだ監察御史に正除せず、監察御史の班裏に於て行かしむるなり、）燈籠錦（間金奇錦と名く、貴

妃以て服となす、

遠貶（唐介を貶して春州の別駕と爲す、王擧正之を救ふ、英州に改む、）

源州（箋註に云ふ、源州號して邕管と爲す、即ち邕州、）

夢卜（商の高宗夢に傅說を得たり、西伯卜して太公を得たり、）

遂非（人情に近からずして而して過を改めず、）

垂簾（劉太后政を聽く、）

遺制（升遐の詔制、）

〔講義〕

貝州の卒王則反す、文彥博河北を宣撫す、討して之を平らぐ、彥博入て平章事と爲る、趙元昊は慶曆の初嘗て范仲淹に因て和を請ふ、反覆數歲、竟に款を納れて復た臣と稱す、冊命して夏國王となす、曩霄と名く、歲に銀絹茶綵二拾五萬五千を賜ふ、故に遂に復た邊に寇せず、卒す、子諒祚立つ、陳執中建明する所なきを以て罷む、夏竦亦た罷む、宋庠之に代る、尋て同平章事たり、未だ幾ならずして罷む、張貴妃の諸父堯佐一月四使に除せらる、監察御史裏行唐介之を論す、帝聽かす、唐介遂に劾奏す、文彥博向きに蜀に守たり、燈籠錦を以て貴妃に獻して執政を得たり、故に彥博か堯佐に黨すと、帝怒て介を遠貶す、王擧正之を救ふ、故に春州別駕を改めて英州に知たり、廣源州の儂智高廣州に寇す、蹂躪して諸州を陷る、邕より廣西に至る、皆其害を被る、樞副狄青に命して討て之を平らぐ、還て樞密使と爲る、龐籍罷む、陳執中梁適平章事たり、適罷む、劉沆之に代る、執中も罷む、文彥博富弼並に同平章事たり、士大夫善人を得たるを相賀す、帝の曰く、人情此の如し、豈に商の高宗の傅說を夢みて傅巖に得たり、周の文王の卜して呂尙を磻溪に得たるより賢されりと、帝嘗て王素に問ふ、孰か相と爲すべしと、素か曰く、惟く宦官宮妾の姓名を知らさるものを以て其選に充つべし、帝慨然として曰く、此の如んは則ち富弼耳、契丹主宗眞殂す、興宗と號す、子洪基立つ、交趾の李德政卒す、子日尊立つ、劉沆罷む、文彥博罷む、韓琦平章事たり、富弼罷む、王安石知制誥たり、安石官に遷ることに遜避して已まず、知制誥に至て則ち復た官を辭せず、是より先き安石好て書を讀み、善く文を屬す、曾鞏其撰む所を攜け以て歐陽脩に示す、脩之か延譽を爲す、進士上第に擢んす、是より先き館閣の命屢下る、安石輙ち辭して起たず、士大夫其世に意なきを謂ふ、其面を知らざるを恨む、朝廷毎に畀るに美官を以てせんと欲す、惟其就かざるを患るなり、是職に赴くに及んで、聞く者喜悅せざる莫し、安石嘗て花を賞し魚を釣るの宴に侍して、誤て釣餌を食す、己に悟て而して之を食ひ盡くす、帝其不情にして而して非を遂るを以て之を惡む、蓋し己に誤て鉤餌を食ふを覺て而して盡く之を食ふ、故に人情に近からずして而して過を改めず、安石重名あり、士爭て之に向ふ、惟り蘇洵見ずして辨姦論を著す、亦た以爲らく人情に近からず必ず大なる姦匿あらんと、司馬光諫院に知たり、三劄を進む、一には君德を論す、三つあり、曰く仁、曰く明、曰く武、論に曰く、仁者嫗煦（クチニテアタヽメル）姑息の謂に非ざるなり、敎化を興し政治を修し百姓を養ひ萬物を利す、此人君の仁なり、明者煩苛伺察の謂に非ざるなり、道理を知り、安危を識り、賢愚を別ち、是非を辨す、是人君の明なり、武者强亢暴戾の謂に非ざるなり、唯道の在る所之を斷して疑はざるのみ、姦も惑はす能はず、佞も移す能はず、此人君の武なり、故に仁にして而して明ならず、猶を良田ありて而して耕す能はざるが如し、明にして而して武ならざるは、猶を田の穢を視て而して耘きる能はざるがごときなり、武にして而して仁ならざれば、猶を穫るを知て而して種するを知らざるが如し、三つの者兼ね備はれば則ち國治り强く、一を闕けば則ち衰ふ、二を闕けば則ち危し、三者一なければ則ち亡ぶ、二には臣を御するを論す、曰く官に任す、曰く賞を信にす、曰く罰を必とす、其畧に曰く、官に任ずる者は博く在位の士を選て、德行ある者は敎化を掌どり、文學ある者は顧問に待ち、政術ある者は守長と爲る、勇畧ある者は將帥と爲さしむ、賞を信にするは功あれば則ち秩を增し賞を加て而して其官を徙す勿れ、罰を必とする者は罪あれば則ち流竄刑誅して而して寬貸を加るなかれ、三には軍を揀（エラ）ふを論す、論に曰く、軍を揀ふ者は兵を養ふの術精を務て多を務めず、又五規を進む、曰く業を保す、曰く時を惜む、曰く謀を遠くす、曰く微を謹む、曰く實を務む、一に曰く業を保す、其畧に曰く、天下は重器なり、之を得る至難、之を守る至難、王者始て天命を受るの時、天下の能人皆我か比肩なり、相與に智力を角して而して之を爭ふ、智竭て抗する能はず、力屈して支る能はず、然して後ち稽顙して而して臣と爲んを顧ふ、自ら智力首さして世に出るに非んば則ち天下得て而して一にする莫きなり、斯れ亦た之を得るの至難ならずや、夫の群雄已に服し、衆心己に定るに及ては、常人の性皆以爲らく、子孫萬世泰山の搖かす可からざるが如し、是に於て驕惰の情生し、兵を玩び武を黷し、奢を窮め侈を極め、一旦渙然として四方廢讚す、秦隋の季是なり、斯れ亦た之を守るの至難ならずや、二に曰く時を惜む、其畧に曰く、日中すれば則ち昃く、月盈れば則ち食す、是を以て聖人國家隆盛の時に當て則ち戒懼彌く甚し、故に能く其令聞を保して亦た疆く無し、三に曰く謀を遠くす、其畧に曰く、詩に云ふ、天の未だ陰雨せざるに迨ふとは、國家閑暇災害なきの時なり、彼の桑土を徹るとは、賢を隱微に求るなり、牖戶を綢繆すとは、其政治を脩整するなり、四に曰く微を謹しむ、其畧に曰く、宴安怠惰荒淫の基を肇しむ、奇巧珍玩は奢泰の端を發らく、甘言悲辭は僥倖の塗を啓らく、附耳屏語は讒賊の門を開らく、名器を惜まざれは僭逼の原を導く、威福を假借すれは陵替の柄を授く、五に曰く實を務とむ、其畧に曰く、國家を安じ百姓を利するとは仁の實なり、國緒を保ち子孫に傳ふは孝の實なり、貴賤を辨じ綱紀を立は禮の實なり、上下を和し遠近を親むとは樂の實なり、是非を決し好惡を明にするは政の實なり、姦邪を詰し暴亂を禁するは刑の實なり、言行を察し政事を試むは賢を求むるの實なり、材能を量り功過を課するは官を察するの實なり、安危を詢ひ治亂を防くは諫を納るの實なり、勇果を選ひ嚴閲を習は兵を治るの實なり、策を以て人を制科す、蘇軾蘇轍を得たり、曾公亮平章事たり、帝在位四十三年、改元する者九つ、天聖明道は則ち太后垂簾の政なり、景祐以來は政己れより出つ、寶元康定の間は西鄙多事なり、慶曆更め化す、君子朝に滿つ、皇祐至和嘉祐に至ては天下承平無事なり、恭儉の德、人を愛し物を恤むの心、即位より升遐に至るまで終始一日の如し、遺制下るとき、深山窮谷と雖とも奔走せざるなく而して止む能はず、壽五十四、皇子立つ、是を英宗皇帝と爲す、

英宗皇帝。初名宗實。濮安懿王允讓之子。太宗之曾孫也。仁宗立爲皇子。賜名曙。仁宗崩。固避數四。而後即位。以憂疑致疾。慈聖光獻曹太后權同聽政。上舉措或改常度。遇宦官尤少恩。左右多不悅。乃共爲讒間。兩宮遂成隙。賴宰相韓琦參政歐陽脩等調護。上既康復親政。太后撤簾。琦一日出空頭勅。脩已僉。趙槩未僉。脩曰。第書之。韓公必有說。琦坐政事堂。召內侍任守忠。立庭下。曰。汝罪當死。責蘄州安置。蓋交鬪兩宮之人也。○議崇奉濮王典禮。執政欲稱皇考。又以太后詔。令上稱親。司馬光范鎭呂誨范純仁呂大防呂公著。交論以爲不可。鎭罷翰林。誨純仁大防解言職。公著罷侍講。義竟不決。○契丹改號大遼。○上崩。在位四年。改元者一。曰治平。年三十八。皇太子立。是爲神宗皇帝。

●〔解釋〕曹太后（仁宗の后なり）兩宮（太后英宗）康復（病安きなり）撤簾（后政を還す）空頭勅（勅出て、未た姓名を書せす）第書之（脩槩を勸め次第に僉署せしむ）濮議（司馬光の曰く、人の後たる者之か子となり、敢て復た私親を顧みず、濮王宜く皇伯と稱して而して名いわさるへし）解言職（呂誨范純仁呂大防、諫諍の職を解く、）罷侍講（呂公著侍講の官を罷む、）

●〔講義〕英宗皇帝初の名は宗實、濮安懿王允讓の子、太宗の曾孫なり、仁宗立て皇子と爲し、名を曙と賜ふ、仁宗崩す、固く避くる數回、而して後ち位に即く、憂疑を以て疾を致す、是より先き、遂に命を受て將に宮に入らんとす、其舍人を戒しめて曰ふ、謹て吾舍を守れ、上適嗣あれと、吾歸す、因て肩輿して召に赴く、良賤三十人に滿たす、行李蕭然たり、唯書厨のみ、中外相賀す、既に皇子となる、恂靜恭默、獻と爲す所なり、而して天下陰に其聖德あるを知る、乃ち慈聖光獻曹太后權りに同しく政を聽く、帝の舉措（フル）、或は常度を改む、宦官に遇する尤も恩少し、左右多く悅ばず、乃ち與に讒間をなす、兩宮遂に隙を成す、兩宮は太后と英宗となり、宰相韓琦參政歐陽脩等か調護するに賴て、帝既に康復して政を親らす、康復とは病安するなり、太后政を罷む、故に簾をとつてのぞく、琦一日空頭の勅を出す、未た姓名を書せざる勅なり、脩は已に僉す、僉簽と通す、署なり、趙槩は未た簽せす、脩か曰く、第（ダ）之を書せよ、韓公必す說あらん、琦政事堂に坐す、內侍任守忠を召して庭下に立しめて曰ふ、汝か罪死に當す、責て蘄州に安置す、蓋し兩宮を交々鬪はすの人なり、帝の生父濮王を崇奉する典禮を議す、執政は皇考と稱せんと欲す、又太后の詔を以て帝をして親と稱せしむ、司馬光范鎭呂誨范純仁呂大防呂公著交々論して以て親と稱するは不可と爲す、故に范鎭は翰林を罷む、呂誨范純仁呂大防は言職を解き、呂公著は侍講を罷む、議竟に決し定まらす、綱目に歐陽永叔の議に喪服大記を引き以爲らく、人の後ちたる者は其父母の爲に三年を降服して期と爲す、而して父母の名を沒せす、以て服は降す可し、而して名は沒す可からず、明の謝肇淛か曰ふ、世の非とする所にして而して實は是なるものあり、歐陽か濮議是なり、禮に人の後たる者は其本生の父母を顧るを得す、特に之か服を爲さゝるのみ、未た嘗て父母の名を併せて之を沒せず、禮に三父八母あり、養ふ者繼く者皆父母なり、大位を嗣て而して其生む所の父を改む、叔伯となして心に於て安き乎、理に於て順なる乎、此拘の見必す行ふ可からさるなり、契丹復た大遼と改號す、帝崩す、在位四年、改元する者一つ、治平と曰ふ、三十八、皇太子立つ、是を神宗皇帝と爲す、

神宗皇帝。名頊。母曰宣仁聖烈皇后高氏。曹太后之甥也。幼與英宗同鞠后所。後爲英宗配。生頊。自潁王爲太子。尋即位。○自有濮議以來。言者攻歐陽脩不已。遂罷。韓琦亦罷。○王安石爲翰林學士。入對。首以擇術爲言。言必稱堯舜。○富弼同平章事。王安石參政。安石既執政。士大夫素重其名。以爲太平可立致。呂誨時爲御史中丞。將對。學士侍讀司馬光。亦將詣經筵。相遇並行。光密問。今日所言何事。誨曰。袖中彈文。乃新參也。光愕然曰。衆喜得人。奈何論之。誨曰。君實亦爲此言邪。安石執偏見。喜人佞已。天下必受其弊。光退而思之。不得其說。搢紳間有傳其疏者。往往疑其太過。誨言大姦似忠。大詐似信。安石外示朴野。中藏巧詐。驕蹇慢上。陰賊害物。

疏其十事。上兩降手詔喩誨。誨論之不已。遂罷誨。安石建議。創制置三司條例司。議行新法。言周置泉府之官。變通天下之財。後世惟桑弘羊劉晏。粗合此意。今當修泉府之法。以收利權。安石多與呂惠卿謀。人號安石爲孔子。惠卿爲顏子。先是治平中。邵雍與客散歩天津橋上。聞杜鵑聲。愀然不樂。客問其故。雍曰。洛陽舊無杜鵑。今始至。天下將治。地氣自北而南。將亂。自南而北。今南方地氣至矣。禽鳥飛類。得氣之先者也。不二年。上用南士。作相。多引南人。專務更變。天下自此多事矣。至是雍言果驗云。

◉〔解釋〕將對（臨將さに入て對んとす）、司馬光（時に學士と爲りて而して經筵侍讀を兼ぬ、）乃新（新參政王安石を彈す、）泉府之官（周禮地官の下に、掌どるに市の征布を以す、市の售れざる、貨の民用に滯る者を斂む其價を以て之を貿す、）桑弘羊（漢の武帝の時の人、）劉晏（唐の德宗の時の人なり、）治平（英宗の年號）天津橋（洛陽に在り）杜鵑（成都記に杜宇亦た杜王と曰ふ、天よりして降り望帝と稱す、稼穡を好む、時に荊人鼈令死す、其尸江に泝て而して上る、汶山の下に至て復た生く、望帝を見る、望帝因て以て相となす、開明と號す、曾巫山江壅がる、人洪水に遭ふ、開明爲に鑿して流を通す、大功あり、望帝因て其位を以て之に禪る、望帝死す、其魂化て鳥と爲る、名て杜鵑と曰ひ、亦た子規と曰ひ、又杜宇と曰ふとあり、）

◉〔講義〕神宗皇帝名は頊（キヨク）、母を宣仁聖烈皇后高氏と曰ふ、曹太后の甥なり、幼にして英宗と同しく后の所に鞠はる、後に英宗の配となり、頊を生む、后は曾太后を曰ふ、顯王にり太子となる、尊て位に即く、濮議あつてより以來言者歐陽脩を攻て已まず、故に歐陽脩も遂に罷む、韓琦も亦た罷む、王安石翰林學士となり、入て對ふ、首として術を擇びて以て言を爲す、言へば必ず堯舜を稱す、初王安石京師に至る時に翰林學士の命を受く、已に七たび月を越ゆ、安石に詔して次を越て入て對しむ、帝治をなすの先する所を問ふ、安石對て曰ふ、術を擇ぶを先きとなす、帝曰く、唐太宗は何如、曰く、陛下當に堯舜を法どるべし、何ぞ太宗を以てなすものぞと、富弼同平章事たり、王安石參政たり、安石既に政を執る、士大夫素より其名を重んず、太平立ろに致す可しと以爲へり、呂誨時に御史中丞と爲る、將さに入て對せんとす、學士侍讀司馬光も亦た將さに經筵に詣らんとす、呂誨と相遇て並び行く、光密かに問ふ、今日の言ふ所は何事ぞ、誨が曰ふ、袖中の彈文は乃ち新參なり、光愕然として曰ふ、衆人を得るを喜ぶ、奈何ぞ之を論ずる、誨が曰く、君實も亦た此の人を得るを喜ぶの言をなすか、安石偏見を執て人の己れに倭するを喜ぶ、天下必ず其弊を受けん、光退て而して之を思ふに其說を得ず、緇紳の間呂誨の疏を傚ふるものあり、往往に皆な呂誨の太過を疑ふ、呂誨言ふ、大姦は忠に似たり、大詐は信に似たり、安石外朴野を示し、中に巧詐を蔵し、驕蹇にして上を慢（アナドル）す、陰に物を賊害すと、其十事を疏す、大略に言ふ、仁宗の朝にあり、學駁當らす、而して肯て恩を謝せす、憂に丁（アタツ）て服滿つ、而して累詔起たず、英宗の世を終にて而して臣たらず、神宗の初に在て而して疾に詐す、知江寧府に除するに及んで乃ち命に從ふ、一なり、小官に除すれば則ち遜避す、重任を承れは則ち辭せず、二なり、侍講侍讀本と說て進むをなす、乃ち坐を請ひ自ら尊す、三なり、政府に居して多く御批を乞ふを以て異議を沮む、四なり、自ら司擧駁を糾察して法官と爭論す、每に情を挾んで法を破る、私に拘はり怨を報す、五なり、翰林に入ては則ち帷其の第の貴顯を欲す、政府あつては則ち威權を發弄するより非るなし、六なり、己に異なるを貶黜して威を事らにし政を害す、七なり、賜座奏對に當て畏敬を知ず、唐介と論じて遂に喧嘩を致す、八なり、上方と九族を親睦す、乃ち張辟光に諷して岐王の罪を離間す、九なり、邦國の經費三司にあり、乃ち額外員を增んと欲す、十なり、帝再び手詔を下して誨を喩とす、誨之を論じて已まず、遂に誨を罷む、安石建議して創めて三司の條例司を制置して議して新法を行ふ、言く周に泉府の官を置て天下の財を變通す、後世惟り桑弘羊劉晏粗く此の意に合す、今當に泉府の法を修めて以て利權を收むべし、安石多く呂惠卿と謀る、人安石を號して孔子となし、惠卿を顏子となす、是より先き英宗治平中に邵雍客と天津橋上に散步す、杜鵑の聲を聞き愀然として樂まず、客其故を問ふ、雍が曰ふ、洛陽に元と杜鵑と云ふ鳥はなし、今始て至る、天下將さに治んとするときは、地氣北よりして而して南す、將さに亂れんとすれは南よりして北す、今南方の地氣至る、禽鳥飛類は氣の先を得るものなり、二年ならずして帝南士を用ひて相となし、多く南人を引きて專ら更變を務め、天下此れより多事なりと、是に至つて雍が言果して驗ありと云ふ、夫れ天道と南は陽にして而して北は陰なり、君は陽にして而して臣は陰なり、地氣北よりして而して南す、人臣君に朝するの義、故に天下治まる、地氣南より北するは君臣に從ふの義、故に天下亂る、案ずるに唯く杜鵑のみ氣を知るならず、來鳥も亦た然り、說書錄に禽鳥は氣の先を得る者なり、丑は則ち雞先づ鳴くものは陽氣動くなり、午中に雞亦た鳴く者は陰氣動くものなり、是皆天機の自然之爲、鳴雁の往來も亦た此の如し、

安石欲行青苗法。以爲周官國服爲息法也。蘇轍曰。以錢貸民。吏緣爲姦。錢入民手。雖良民不免妄用。及其納錢。雖富民不免違限。鞭箠必用。州縣不勝煩矣。參政唐介爭論新法。不勝。疽

發背卒。時人有生老病死苦之喩。謂安石爲生。曾公亮爲老。介死。富弼議論不合稱病。參政趙抃。無如安石何。惟稱苦苦而已。安石折抃曰。君輩坐不讀書耳。抃曰。皐夔稷契。何書可讀。安石亦不能對。○遣使察農田水利。○罷義倉。○行均輸法。○臺諫劉琦錢顗。以議新法貶。○諫院范純仁。檢詳文字蘇轍。以議新法罷。○行青苗法。置常平官。○富弼罷。陳升之同平章事。升之初附安石。既相頗爲異同。○行預買法。令諸路預給錢。和買紬絹。○趙抃罷。抃日所爲事。夜必焚香告於天。○親試擧人。初用策。葉祖洽以附會新法擢爲第一。○右正言孫覺。御史裏行程顥。以議新法罷。○中丞呂公著。裏行張戩。以議新法罷。○李定爲裏行。知制誥宋敏求蘇頌李大臨以繳定詞頭罷。○謝景温爲御史知雜。○直史舘蘇軾。以嘗上萬言書。及擬對廷試策。議新法忤安石。爲景温所劾去。

◉〔解釋〕（青苗法常平の入米を以て青苗の法を作り、入戸に散し與て息三分を出さしめ、春は散し秋は歛む、）國服爲息法（役人民にかすの物、其買を定て以て之を與ふ、各々其國事に服する所の貢物を以て息と爲し、農民のごときは粟米を以し、工は器械を以し其あるところを以てするなり、）何書（三代以前は文籍備はらず、）撿詳文字（官條例司を佐くるを掌さどる、）罷（范純仁は出て河中府を知す、轍は江甯の推官、）預買法（預買者、貨物を融通するか爲にして而して官預しめ之れを買ふなり、凡そ紬絹の類、民間に餘りあつて、而して售れざる所の物は、官之を買て異時其物足らざるを俟て、而して平價を以て之を資り與ふるなり、）紬絹（繒の大絲を紬と爲し、小絲を絹と曰ふ、）令諸路預給錢和買紬絹（春に方て庫錢を給して民に貸し、夏秋に至て、絹を官にいたさしめて預しめ紬絹を買ふを謂ふなり、預買法は物價を平和する所以なり、故に之を和買と謂ふ、）右正言（官諫郎を掌る、）用策（延試の策此より始る、）

◉〔講義〕蘇轍か曰く錢を以て民に貸せば、吏か其貸付法に緣て手數科とかく何とか名けて姦策を爲す、錢民の手元に入れは、良民と雖ども安りに用るを免れず、錢は投消し易きを以なり、其の錢を返納するに及んでは、富たる民と雖ども期限を違ふを免れず、期限に違ふを以て鞭箠を用ゆれは州縣煩きに勝へず、參政唐介も亦た新法を爭論して勝つ能はず、殘恨骨に徹し疽背に發して卒す、時の人生老病死苦の喩あり、蓋し釋氏は生老病死を以て四苦と爲して、法華の普門品に曰く生老病死苦漸を以て悉く滅せしむ、是に至て安石を謂て生と爲し、曾公亮を老と爲し、介は死す、富弼は議論合はず、病と稱す、參政趙抃安石をいかんともするなく、唯た苦苦と稱する而已、安石抃が譏を折て曰ふ、君が輩書を讀まざるに坐するのみ、抃が曰く、皐夔（カウキ）稷契何んの書をか讀む可き、是三代以前は文籍備はらざる故なり、安石も亦た對ふる能はず、又使を遣し農田水利を察せしむ、古制の廢する修めざるなし、義倉を罷む、皆制に鄕に置て以て凶荒に賑はす、是に至て之を罷む、鄕は一萬二千五百家、社は二十五家を謂ふ、均輸法を行ふ、發運使に命じて之を領せしむ、凡そ上供の物皆貴きを徙し賤きに就き、近を用て遠きに易るを得る、預しめ京に在て倉庫の當に辨ずべき所の者を知り、便宜に當買して以て之を待つ、臺諫劉琦錢顗新法を議するを以て貶黜せらる、琦は處州の鹽酒稅を監す、顗は衢州の鹽稅を監す、諫院范純仁檢詳文字蘇轍新法を議するを以て罷めらる、青苗の法を行ふ、常平官を置く、貨物の高き安きを制し常に其平を得せしむ、富弼罷む、陳升之同平章事たり、升之初め安石に附く、すでに相となり頗る安石の法と異同をなす、預買の法を行ふ、諸路に令して預め錢を給し紬絹を和買す、注は解釋に見合すべし、趙抃も罷む、抃は晝（ヒル）なすところの事は夜は必ず香を焚て天に告く、帝親ら擧人を試む、初て策文を用ゆ、葉祖洽新法に附會するを以て擢んてゝ第一番となる、右正言孫覺御史裏行程顥新法を議するを以て罷らる、中丞呂公著裏行張戩新法を議するを以て罷らる、李定裏行と爲る、知制誥宋敏求蘇頌李大臨定か詞頭を繳するを以て罷らる、詞頭は誥命也、李定秀州の判官となり、安石に阿附するを以てつひに定を以て監察御史裏行となす、宋敏求詞頭を封還す、定か驟かに選よりして而して位に升り法を執り、故事に非ざるを以なり裏行は監察御史裏行なり、俗に封繳して進め上るを繳と曰ふ、今李定を裏行に除するの詞命を封還するを謂ふなり、謝景温御史知雜となる、官御史の雜書を知するを掌さる、直史舘蘇軾嘗て萬言の書を上り、及ひ廷試の策に擬對して新法を議して安石に忤ふを以て、謝景温か爲に劾せられて去る、

○鄧綰上書言。陛下得伊呂之佐。百姓歌舞青苗免役等法。又與安石書及頌。置中書檢正。以綰爲之。鄕人皆笑罵。綰曰。笑罵從佗笑罵。好官我須爲之。○曾公亮罷。○策制科人。呂陶張繪孔文仲力詆

新法。皆報罷。○范鎭以數議新法。及嘗薦蘇軾孔文仲罷。乞致仕。陳升之罷。○韓絳王安石。同平章事。○立保甲法。○曾布爲中書檢正。○更科擧法。罷詩賦明經諸科。以經義論策試進士。○司馬光。先自學士除樞副。力辭不拜。數言新法之害。上喩安石曰。聞三不足之說。否。曰不聞。上曰。外人云。朝廷以爲天變不足畏。人言不足恤。祖宗法不足守。昨學士院進館職策問。專指此三事。策問光所爲也。光屢請外。得永興。移許州。上言臣之不才。最出群臣之下。先見不如呂誨。公直不如范純仁程顥。敢言不如蘇軾孔文仲。勇決不如范鎭。屢請判西京留司御史臺。至是得請。後四任提擧嵩山崇福宮。○歐陽脩先知靑州。以擅止給散靑苗錢。徙知蔡州。至是乞致仕。○富弼先知亳州。坐格靑苗法。徙知汝州。○中丞楊繪。裏行劉摯。以議新法罷。○罷差役。行募役法。○立大學三舍法。○行市易法。○行保馬法。○頒方田均稅法。

㊟〔解釋〕伊呂（伊尹呂望）免役（家貲の高下により、各々錢を出さしめ、人を雇ふて役に充つ、之を助書檢正司役錢と謂ふ）檢正（熈寧三年に置く、官中書の庶務を擧ぐる）保甲法（十家を保と爲し、五十家を大保と爲し、十六保を都保と爲す、衆の服する所の者二人を選で、都保正副と爲し、凡そ保丁自ら弓箭を置き武藝を習ふをゆるす）請外（光安石と合はず、故屢々出て、外官に補する請ふ）永興（宋陝西の安西府を名て永興軍京兆郡と爲す）移許（光初めいで、永興に如く、本路靑苗助役免ずるを得たり、後ち移て許州に知たり、赴かず、）屢請（西京に判たるの請に從はず）得請（西京に判たるを得たり、故に洛に居ること十五年なり）差役（田根を驗せず今差して役に充つ）募役法（人戶をして等第免役錢をいたさしむ、人を募て役に充つ、）行市役法（京師に於て市易務を置き、先つ官錢を支して、貨を收め問に在り、偶く客商の物貨あり、出し賣り行はれ賣て官に入るを願へは、許して務に至り、投して賣らしむ、如し官物を折換せんと願ふ者も亦た之を聽るす）

保馬法（宋史に、凡そ五路の義保馬を養はんと願ふ者、凡そ一四官より馬を給す、或は直を與ふ、歲々肥瘠を閲す、死病のものは補償す、宋鑒、凞寧五年開封府界に詔して諸縣保甲馬を養んと願ふ者は聽す、）頒方田均稅法（東西南北各々千步、四十一頃六十七畝に當る、一百六十步を一方と爲す、歲々九月を以て、令して地を分たしむ、地を驗し肥瘠を計量し、分て五等と爲す、稅數を均しく足す、）

㊟〔講義〕鄧綰書を上て曰ふ、陛下昔しの伊尹や呂望の如き佐補の臣を得たり、百姓靑苗免役等の法を歌舞す、又安石に書及び頌を與ふ、故に安石喜で鄧綰を以て中書檢正と爲しむ、鄕人皆な之を笑ひ罵る、綰が曰く、笑罵は佗の笑罵に從（マカ）す、好き官は我須らく之を爲さべし、曾公亮罷らる、科人を策試して、呂陶張給孔文仲力（ツト）めて新法を詆（ソシ）る、皆報じて罷らる、范鎭數く新法を議し、及び嘗て蘇軾孔文仲を薦むるを以て罷らる、乞て仕致して隱居す、陳升之も亦た罷らる、韓絳王安石同平章事たり、安石國に當てより其已れに附かざる者を斥く、一時新法を排斥するの諸賢之を外に任せしめざれば、則ち之を海隅に貶す、而して韓絳を用て並び用たり、則ち同惡相濟す、保甲法を立てつ開封府の諸縣に於て三千四陝西の五路に五千四曾布を中書檢正と爲り科擧の法を更めたり詩賦明經の諸科を罷て、經義論を以て進士を試す、司馬光先に學士より樞副に除らる、力め辭して拜せす、數く新法の害を言ふ、帝安石に喩して曰ふ、三不足の說を聞や否や、司馬光對て曰く、聞かすと、帝の曰ふ、外人の云ふには、朝廷以爲らく、天變は畏るゝに足らず、人言は恤るに足らず、祖宗の法[illegible]

○置熈河路。以王韶爲經略安撫等使。先是韶上平戎策。謂欲平西

夏。當復河湟。今古渭之西。熙河蘭鄯。皆漢隴西等郡。吐蕃唃廝囉一族國其間。宜併有之。以絶夏人右臂。安石以爲奇謀。始開熙河之役。詔克河洮岷疊宕等州。又據青唐咽喉之地。邊堠益斥。役兵之死亡甚多。○中書檢正章惇。察訪湖北。始議經制南北江蠻。辰州南北江。乃古錦州之地。接施黔牂柯。命章惇措置。惇言招諭梅山蠻猺。令作省戸。皆歡迎。其實殺戮浮屍蔽江。○置詩書周禮三經義局。安石提擧。呂惠卿及安石子雱等爲檢討。○熙寧七年。天久不雨。河東北陝西流民。皆流入京城。而京城外饑民尤多。監安上門鄭俠。畫爲圖。上書曰。陛下南征北伐。皆以勝捷之勢。作圖來上。無一人以天下憂苦妻子不相保。遷移困頓。遑遑不給之狀。爲圖而獻者。安上門。逐日所見。百不及一。亦可流涕。況千萬里外哉。時以旱故求直言。言者皆咎新法。上疑欲罷之。安石不悅求去。除知江寧府。安石薦韓絳代已無相。呂惠卿爲參政。時號絳爲傳法沙門。惠卿爲護法善神。惠卿建議。免役出錢不均。出於簿書之不善。行手實法。惠卿既得勢。恐安石復入。遂逆閉其途。出安石私書。有勿令上知之語。凡可以害安石者。無所不用其智。又數與絳忤。絳乘間白上。復相安石。安石罷。不一年再入。聞命不辭。自金陵七日至闕下。後數月。絳與惠卿相繼罷。○行戸馬法。●〔解釋〕熙河路（鞏昌に屬す、即ち臨兆府なり、）河湟（水は閻州大小楡谷よ出て、東して河に入る、）古渭（皇祐中に渭州の地を以て、古渭寨を置く、即ち隴西郡、）蘭（州は鞏昌に屬す、即ち金城郡、）鄯（音善、州は鞏昌州に屬す、）唃廝囉（唃音格、色廝は蕃族首領の名、）絶夏人右臂（言は若し熙河等の處を得る、西夏人の臂を絶ち切るか如きなり、）河洮（即ち熙河路、）岷（音泯の平聲、鞏昌に屬す、今の西和州、）宕（順元に屬す、今渠州、）青唐（鄯州又青唐と名く、）咽喉之地（要害の地、咽喉の如し、）堠（音后、土を封し、界を表するを堠と云ふ、十里一置、五里に一堠、）察訪湖北（惇中書檢正となつて、而して命を承て湖北を察論す、）經制江蠻（方に始て議を立て、南北江の蠻夷を制御す、）辰（州は湖廣に屬す、）施（州は州南に屬す、）牂柯（郡は川南に屬す、今黔州）猺（音遙、南夷の別種を猺と曰ふ、）省戸（歸附の民、戸口を減省す、）監安上門（汴州の城門、）百不及一（百中一もなきなり、）江寧府（江東に屬す、即ち金陵、）手實法（人戸をして丁口田宅の實を具せしむ、如し隱し落すあれば、許すよ其三の一を以て告獲のものに付して其賞に充つ）逆（未た至らずして而して之を迎ふるを逆と曰ふ、）●〔講義〕宋始て熙河路を置き王韶を以て經略安撫等の使となす、是より先き韶戎を平くるの策を以てす、謂く西夏を平けんと欲せば當に河湟を取り還す可し、今古渭の西熙河蘭鄯、皆漢の隴西等の郡、吐蕃唃廝囉の一族其間に國す、宜しく此の一族を併せて有ち以て夏人右の臂を絶ち切るかごとし、安石以て奇謀と爲す、始て熙河の役を開く、詔河洮岷疊宕等の州に克つ、又青唐要害の地に據る、邊堠益〻斥ぞく、役兵の死亡甚た多し、中書檢正章惇湖北を察訪す、始て議して南北江蠻を經制す、辰州南北江は乃ち古の錦州の地なり、施黔牂柯に接續す、章惇に命して措置せしむ、惇言ふ梅山の蠻猺を招き諭して令命して戸數を省ふくを作すに皆歡迎すと、其實は殺戮す、浮屍江を蔽ふ、詩書周禮三經の義局を置く、安石提擧たり、呂惠卿及ひ安石か子雱等檢討たり、熙寧七年ひさしく雨らず、河東北陝西の流民、皆流れて京城に入る、而して京城の外饑民尤も多し、安上門を監する鄭俠と云ふ人か饑民の狀を圖して上書して曰ふ、陛下南征北伐皆勝捷の勢を以て圖を作り來り上つる、一人も天下の憂苦て妻子相ひ保たず、遷移し且つ困頓し、遑遑として物の給せざるの狀を以て圖を爲して而して獻する者なし、臣謹て安上門日を逐て見る所を按するに給[illegible]て一圖を成す、百にして一に及ばさるも、盖し百分の一に及はざるなり、亦た涕を流す可し、況や千萬里の外なや、時に旱を以ての故に直言を求む、言者皆な新法を咎む、帝亦疑て之を罷んと欲す、安石悦はずして去らんを求む、知江寧府に除せ、安石韓絳を薦て已に代て相と爲す、呂惠卿參政と爲る、さきに絳を號して傳法沙門と爲す、俗髮れて佛を歸依するを沙門と曰ふ、惠卿を護法善神と爲す、惠卿議を建て曰く、免役より出す所の錢均しからずと、是れ簿書の善ならざるに出つと、手實の法を行ふ、惠卿既に勢を得て安石か復た入らんを恐てつひに預じめ其途を閉ち安石か私

（書を出す、帝をして知らしむる勿れの語あり、凡そ以て安石を害す可き者は、其智を用ひざる所なし、又數々絳と怍ふ、絳問に乘し上に白して復た安石を相とす、安石罷て十年ならずして再たひ入る、安石命を聞て辭せず、金陵より七日にして闕下に至る、後ち數月あつて絳と惠卿と相繼て罷らる、）○判相州韓琦薨。琦天資忠厚。能斷大事。治平間爲首相。政事問集賢。典故問東廳。文學問西廳。大事則自決之矣。出判相州。初言青苗不便。朝廷不從。即命散給。曰。藩臣之體當如是。在鄕郡八年而終。御製碑曰。兩朝顧命定策元勛之碑。○命韓縝如河東割地。先是遼使屢至。言河東沿邊。增修戍壘。起鋪舍。侵入彼國蔚應朔州界。乞行毀撤。別立界至。蓋遼人見朝廷招高麗。建澠河西山植楡柳。創保甲。築河北城池。創都作院。降弓刀新樣。置界北三十七將。疑有復燕之意。故以爭地界爲名。觀朝廷所以應。安石斷之曰。將欲取之。必姑與之。東西失地七百里。○安石再相二年。屢謝病。子雱死。求去尤力。上益厭其所爲。出判江寧府。遂不復用。自安石用事。口談先王。而專行管商之政。知上有富強之志。思所以濟其欲。謂立法當用小人。而後以君子守之。不悟其無是理也。天下騷然。而國未嘗富。邊鄙生事。徒多喪敗。而國未嘗強。西鄙自治平末种諤取綏州。夏人即欲興兵報復。夏主諒祚卒。子秉常立。大入寇。安石雖用王韶取澠河之策。徒搆怨西蕃。致鬼章等屢爲寇患。初不能以此制西夏。所用沈起劉彛。又生釁南方。交趾李日遵卒。子乾德立。起彛相繼知桂州。集土丁爲保甲。於海濵集舟師。敎水戰。禁止州縣與交人貿易。交人大舉入寇。圍邕州。陷欽廉。聲言中國作青苗助役法以困民。出兵相救。安石怒。遣趙卨等討之。官軍死者十六。兵禍訖安石之去而未已。吳充王珪繼安石爲相。充先在政府。數言政事非便。既代安石。蔡確鄧潤甫等共攻之。不能去。

◉〔解釋〕集賢（次相曾公亮、）東廳（參政趙槩、）西廳（參政歐陽脩、）鄕郡（琦本は相州の人、而して相州に判たり、故に鄕郡と曰ふ、）兩朝（仁宗英宗の遺命を承て而して天子を策立するの元勛あり、）割地（地を割て遼に與ふ、）西山（鞏昌寧武縣に在り、）都作院（兵器を修する所、）管商（管仲、商鞅、）鬼章（西蕃の大酋、）交人（交趾の人、）邕欽廉（三州は海南に屬す、）十六（十の中死六、）

●〔講義〕判相州韓琦薨す、琦天資忠厚にして、能く大事を決す、治平の間首相となる、政令は集賢に問ふ、曾公亮を曰ふ、案するに政事當にて政令に作るべし、凡そ事政令を兼ぬれは、則ち集賢曾公亮に問て曰ふ、典故は東廳に問ふとは、凡そ事典故を兼ぬれば、則ち參政趙槩に問ふなり、文學は西廳に問ふとは、凡そ事文學を兼ぬれは、則ち參政歐陽脩に問ふなり、大事に至ては則ち自ら之を決す、人以て相の體を得たりと爲す、初め出て相州に判たり、初め青苗の不便を言ふ、朝廷從はず、即ち命して青苗の錢を散し給ふて曰ふには、藩臣の體當に是の如なるべし、鄕郡に在るとは年にして而して終ふ、琦は本と相州の人、帝の御製の碑に曰く、兩朝顧命定策元勛の碑と、又韓縝に命して河東にゆき地を割かしむ、蓋し地を割て遼に與ふるなり、是より先き遼使屢く至て言ふ、河東は邊に沿ふて戍壘を増修す、鋪舍を起して彼の國の蔚應朔の州界を侵入す、鋪舍は買肆なり、乞ふ毀撤を行ふて別に界至を立らんと、蓋し遼人朝廷の高麗を招き澠河を建て西山に楡柳を植ゑ、蓋し楡柳を植ゑは其戍長して蕃驕を拒くが爲めなり、保甲を創しめ河北の城池を築き、都作院を創し兵器を修め弓刀の新樣を降し界北の三十七將を置くを見て燕を復するの意あらんと疑ひ、故に地界を爭ふを以て名となし、朝廷の以て應ずる所を觀る、安石を之を斷して曰く、將に燕を取らんと欲せば、必ず暫らく之を與へんと、是に因て東西地を失ふ七百里、安石再たび相たると二年、屢く病を謝す、子雱死す、位を去らんを求むる事を力とむ、帝益く安石か爲る所を厭ふ、故に出して江寧府に判たらしむ、遂に復た用られず、安石事を用ひしより口に先王を談す、而して專はら管仲商鞅の覇政を行ふ、帝の富強の志あるを知り、以て帝の其欲を成さん所を思ひ、謂く法を立るは當に小人を用て而して後に君子を以て之を守しむべしと、其の是理の

なきを悟らざるなり、天下騒然として騒ぎ立てるを謂ふ、而して國未だ嘗てよく富まず、還て邊部に事を生じ、兵徒多く喪敗す、而して國未だ嘗てより強からず、西部治平の末に种諤が綏州を取りしより、夏人即ち兵を興して報復せんと欲す、夏主諒祚卒す、子秉常立つ、大に入寇す、安石王韶が熙河を取るの策を用ゆと雖ども、徒に怨を西夏に構へて、鬼章等が屢ふ寇患を爲すを致す、初より此寇思を以て西夏を制する能はず、用ゆる所沈起劉彝、又隙を南方に生ず、交趾の李日遵卒す、子乾德立つ、沈起劉彝相繼で桂州に知たり、土丁を集めて保甲となし、海濱に於て舟師を集めて、水戰を敎て、州縣の交趾人と貿易するを禁止す、故に交趾大に兵を擧げて入寇す、邕州を圍み欽廉を陷る、聲言すらく、中國靑苗助役の法を作て以て民を困しめ、兵を出して相救ふと、安石之を聞て怒り、趙卨（キツ）をつかはし之れを討たせしむ、官軍死するもの十中の六分なり、兵禍安石の去に訖るまで、而して未だ已まざるなり、吳充王珪安石に繼て相と爲る、充先に政府にあり、數く政事非便を言ふ、既にして安石に代る、蔡確潤郎南等共に之を攻む、吳充を去る能はず、

○元豐元年。知湖州蘇軾。安置黃州。先是。中丞李定言。軾自熙寧以來。怨謗君父。舒亶亦言。軾議時事。陛下發錢。本以業貧民。則曰。贏得兒童語音好。一年強半在城中。明法以課試群吏。則曰。讀書萬卷不讀律。致君堯舜終無術。興水利。則曰。東海若知明主意。應敎斥鹵變桑田。謹鹽禁。則曰。豈是聞韶解忘味。邇來三月食無鹽。其他觸物即事。無不以譏謗爲主。乃追軾繫御史獄。詔定與張璪推治。王珪言。軾有不臣意。擧軾檜詩根到九泉無曲處。世間惟有蟄龍知。陛下飛龍御天。而軾彼求之地下之蟄龍。非不臣而何。上曰。彼自詠檜。何預朕事。上本無意罪軾。吳充王安禮皆勸上容之。獄成而有是命。弟轍亦坐救軾而貶。坐軾詩案。黜罰者。張方平司馬光以下二十二人。上實憐軾。尋移汝州。且復用矣。爲蔡確張璪等所沮。○吳充罷。踰月而卒。○元豐元年。大正官名。

元豐五年。官制成。改平章事爲左右僕射。以王珪蔡確爲之。參知政事爲門下中書侍郎。章惇張璪爲之。置尚書左右丞。蒲宗孟王安禮爲之。以三省統領百職。中書取旨。門下覆奏。尚書施行。珪爲相。人謂之三旨宰相。凡事惟曰取聖旨。得聖旨則曰領聖旨。退書之則曰奏聖旨而已。上厭之。確譖珪曰。上久欲取靈武。公能任責。則相位可保也。珪喜。如其言。命內侍李憲等。分道伐夏國。攻靈州。不克。士卒死及凍餒者十五六。憲上再擧之議。徐禧又議築永樂新城。夏人大擧攻城。城陷。禧等蕃漢官及諸軍死者萬三千。上聞奏慟哭。

◎〔解釋〕湖州（江浙に屬す、即ち吳興、）黃州（淮西に屬す、）業（之を賑恤するなり、）強半（大半なり、）明法（唐制に明法あり、）律（法律の書なり、）鹵（音魯、鹹地なり、東方に斥と曰ひ、西方に鹵と曰ふ、）檜（木名、柏葉松身、）有是命（蘇軾が獄詞已に成る、始て寬容の命あり、）門下中書侍郎（門下省參政を門下侍郎と爲す、中書省參政を中書侍郎と爲す、）三省（中書門下、尚書、）十五六（十に五六を損す、）新城（銀州の東南二十五里にあり、）

◎〔講義〕元豐元年、知湖州の蘇軾を黃州に安置す、是より先き中丞李定言ふ、軾熙寧より以來、君父を怨謗す、舒亶も亦言ふ、軾時事を議す、陛下錢を發し出すは、本と以て貧民を賑恤す、蓋し貧民を賑恤して、以て作業の資本と爲す、然るに軾が曰ふには、杖藜裹飯去匆匆、過眼青錢轉手空、贏得たり兒童語音好、一年強半在城中、案ずるに此の詩青苗助役の不便を譏る、言は百姓城中に於て浮役す、而して莊家の子弟此を以て多く城中に在て、次第を著けず、但ゝ城中の語音を學び得る耳、明法課程を以て群吏を試むれば、軾が曰ふには、讀書萬卷不讀律、致君堯舜終無術、又水利を興すには、軾が曰ふには、東海若知明主意、應敎斥鹵變桑田、是は神宗の阡陌を開き、國家富強の意にあるを譏ると云ふなり、故に又鹽の禁を謹めば、軾が曰ふには、豈是聞韶解忘味、邇來三月食無鹽、是孔子齊に在して韶を聞く、三月肉の味を知らずと云ふを以て、亦た故事つけて、軾が上を誹るするなり、其の他物にふれ事に即きて、上を譏りて以て軾を罪するの主とせざるなし、乃ち軾を追て、御史の獄に繫ぐ、御史獄は禁裏にあるなり、李定と張璪とに詔して、軾を推し究はめ治めしむ、王珪亦た曰ふ、軾不臣の意ありと、軾が檜の

詩を讒す、詩に曰ふは、凜然相對敢相欺、直幹凌雲未要奇、根到九泉無曲處、世間惟有蟄龍知是れ陛下は飛龍の天に御するが如きも、而して軾陛下を地下の蟄龍に求めんと欲す、不臣に非ずして而して何ぞや、帝の曰く、彼れ自ら檜のことを詠するなり、何ぞ朕が事にあづからん、帝本と軾を罪するに意なし、呉充王安禮皆帝を勸めてこの讒言をいれしむ、獄なつて是の命あり、是の命は即ち上文の黃州に安置するなり、李定等軾が時の事を譏るを以て、必ず軾を死に置かんと欲す、獄詞已に成る、神宗軾を憐んで黃州の團練副使に貶して安置す、弟轍も亦た軾を救ふに坐して而して貶せらる、軾が詩案に坐して黜罰せらるゝもの、張方平司馬光以下二十二人、李定等軾が詩を案驗して、因て其往來する所の文字書簡を求めて、逐に二十二人を以て軾が黨となし、其罪を構成す、帝寬に軾を憐れむ、尋て汝州に量移す（量移とは近國に移替るなり）且に復た用ひんとす、蔡確張璪等が沮（はゞ）む所と爲る、已むを得ず乃ち止む、呉充罷めらる、月を踰て而して卒す、元豐三年（元年に作るは誤る）大に官名を正す、五年に乃ち官制成る、平章事を改て左右の僕射と爲し、王珪蔡確を以て之れをなす、參知政事を門下中書侍郎となす、章惇張之れを爲す、尚書左右の丞を置く、蒲宗孟王安禮之れをなす、三省を以て百職を統領す、中書旨を取り、門下省奏し、尚書施行す、珪が相となる、人之れを三旨の宰相と謂ふ、凡の事には惟だ聖旨を取ると曰ふ、聖旨を得れは則ち聖旨を領すと曰ふ、退て之れを書すれは則ち聖旨を奉ずる而已と、帝之れを厭ふ、確珪に謂て曰ふ、帝久しく靈武を取らんと欲す、公能く責に任せは則ち相の位ひ保つ可きなり、珪喜んで其言の如くす、內侍李憲等に命す、道を分て夏國を伐つ、靈州を攻め克たす、士卒死し及ひ凍餒するもの十に五六、憲再たび兵を擧るの議を上る、徐禧又議して永樂の新城に築く、夏人大擧して新城を攻む、城落陷す、禧等蕃漢の官及ひ諸軍死するもの一萬三千人、帝奏を聞て慟哭す、

○富弼上遺表言。忠諫杜絕。諂諛日進。興利之臣。爲國斂怨。又言。西事大可憂。望留聖念。弼早有公輔之望。名聞夷狄。遼使每至。必問其出處安否。忠義之性。老而彌篤。家居一紀。斯須不忘朝廷。至是薨。○宰相同對。上有無人才之歎。蒲宗孟曰。人才半爲司馬光邪說所壞。上不語。視宗孟久之曰。蒲宗孟。乃不取司馬光邪。宗孟尋罷。司馬光資治通鑑成。上即位之初。已嘗御製序。至元豐七年。書始上。初官制將行。上欲取新舊人兩用之。曰。御史大夫。非司馬光不可。蔡確曰。國是方定。願少遲之。既而上有疾。又曰。來春建儲。當以司馬光呂公著爲師保。公著夷簡子也。上在位十八年。改元者二。曰熙寧元豐。厲精求治。日昃不暇食。平生不御畋游。不治宮室。惟勤惟儉。將以大有爲也。奈何熙寧以來。誤於安石。元豐以後。用事者。終始皆安石之黨。竟爲天下患。憤北狄倔强。慨然有恢復幽燕之志。欲先取靈夏。滅西羌。乃圖北伐。及安南失律。喟然歎赤子無罪而死。永樂之敗。益知用兵之難。始息念征伐。卒無一事如意。崩。年三十八。皇太子立。是爲哲宗皇帝。

◎〔解釋〕公輔之望（宰輔の望、）一紀（十二年を紀と曰ふ、）乃不（之れ乃ち汝なり、）國是（國家の公論、）失律（沈起劉彝交を激變す、）皇太子（神宗の第六子、）

◎〔講義〕富弼遺表を上て曰ふ、忠諫國ために怨みを斂さむ、又た言ふ、西杜絕して諂諛日に進む、利を興すの臣事大に憂ふべし、望むらくは聖念を留めよと、弼早く公輔の望あり、公輔の望は謂ふに三公となつて于を輔弼すべきものゝ名留なり、名は夷狄に聞ゆ、遼使至るごとに必ず其出處安否を問ふ、忠義の性老て而して彌く篤し、家に居る十二年、暫らくも朝廷を忘れず、宰相同しく對す（同く對は同しく召して對するなり）上人才なきの歎あり、蒲宗孟曰く、人才半は司馬光か邪說の爲に壞らると、帝語せず、宗孟を視ること久ふして曰ふ、蒲宗孟乃ち司馬光か說をとらざるか、視は視て移らざるなり、宗孟は安石の黨なり、ふ傳に上語せず、宗孟を直視すること久ふして曰く、蒲宗孟乃ち司馬光を取らざるか求た別棄を論せず、只樞密を辭する一節、朕即位より以來唯此の一人を見る、他人は則ち之に迫て去らしむと雖とも亦た肯んぜず、宗孟懇擢して以て容を爲るなし、司馬光か資治通鑑成る、帝即位の初め已に嘗て御製の序あり、元豐七年に至て書始て上つる、初め官制將に行はれんとす、帝新舊の人を取て兩ながら之を用んと欲す、曰く、御史大夫は司馬光にあらざれば不可なり、蔡確が曰く、國是方に定る、願くは少しく之を待て（蓋し國是に託して而して之を沮むなり）國是は擧國の公けに是とする所なり、既にして而して上疾あり、又曰く、來春儲を建つるに司馬光呂公著を以て師保と爲すべし、公著は夷簡の子なり、帝在位十八年、改元する者は二つ、熙寧元豐曰ふ、精を勵まし治を求む、日昃（カタムク）まで食するに暇あらず、平生畋游を御せず、宮室を治せず、惟れ勤め惟れ儉、將に以て大に爲することあらんとす、奈何熙寧以來安石に誤られ、元豐以後は

事を用ゆる者、終始皆安石の黨なり、竟に天下の患を爲す、北狄の倔强を懐り、慨然として志を起し、幽燕を恢復するの志あり、先つ靈夏を取て、西羌を滅し乃ち北伐をはからんとす、安南律を失ふに及んて、喟然として罪なくして而して死するを歎す、永樂の敗に益ゝ兵を用ゆるの難きを知る、始て征伐を念ふを息む、卒に一事の意思の如なるなふして崩す、年三十八、皇太子立つ、是を哲宗皇帝と爲す、

十八史略講義巻之六

十八史略講義巻之七

前進上　盧陵　曾先之編次
大日本東京　土田泰士亮講義

宋

哲宗皇帝名煦。初爲延安郡王。神宗大漸。立爲太子。先是蔡確遣舍人邢恕邀高公繪。欲使白太后。言延安冲幼。岐嘉皆賢王也。公繪懼曰。公欲禍吾家。亟去。恕包藏禍心。反謂太后與王珪表裏欲捨延安而立子顥。頼已及章惇蔡確得無變。且播其說於士大夫間矣。神宗崩。太子即位。甫十歲。太皇太后同聽政。熈寧中。太后已嘗流涕。爲神宗言安石變法不便。既垂簾知天下厭苦日久。首罷東京戸馬。罷京東西路保馬。罷京東西物貨場。罷諸州鎭寨市易抵當。罷汴河堤岸司地課。放市易常平免役息錢。罷在京免行錢。罷提擧保甲錢糧巡教等官。罷方田等。皆從中出。大臣不與。

◉〔解釋〕舍人（唐百官志に、起居舍人、分て左右に侍す、四方の書を獻納するを掌る、）東京戸馬（凡て五路の義保（クミ）馬を養はんと願ふ者ハ、凡ろ一匹官より馬を給す、或ハ直（馬を買直（價）を與ふ、歳々肥（コヘ）瘠（ヤセ）を閲す、死するか、又ハ病る者は補ひ償ふ、）京東西路保馬（熈寧五年、開封府の界に詔して、諸縣の保甲（ヨロヒヲキルチエルス）馬を養はんと願ふ者は、是亦た許して養はしむ、）京東西物貨場（京の東西の街衢に物貨を置き、官にて人に賣り與ふるを云ふ、）諸州鎭寨市易抵

當（市易法は、京師に於て、市易所を置き、先つ官錢を支して、貨を收めて間に在り、偶〻官商の物貨あり出し賣り行はれず、賣て官に入るゝを願へは、許して市易務(ヤクシヨ)に至る投じて賣らしむ、若し官物を折換(ネヂ、リ)せんと願ふ者も、亦た之を聽す、是より先き、神宗の時人に聽して縣官の財貨を貸し、田宅或ハ金帛を以て抵當と爲し、息十分の二を出し、期限を過て返さゞるときは、息の外に、毎月更に錢百分の二を加ふ、）汴河免役息錢云云（汴河の堤岸司(官名)の毎歳收る所の地課、及び放つ所、市役、常平、免役、科息錢を罷む、市役ハ前卷細に爲す、常平は貨物の抵昂(テイカウ)を制し、常に其平を得せしむ、免役は家貲の高下に據り、各錢を出さしめ、人を雇て役に充(ミ)つ、之を助皆撿正司役錢と云、）免行錢（是より先き京師の百物に行官司あり、用る所俱に以て貲辨す、類(チ、ヒ)れ倍折あり、神宗の時、呂嘉問奏す、衆行願に免行錢を出さんと、詔して之に從ふ、）從中出（太后より出るなり、）●(講義)（哲宗皇帝、名は煦、神宗の第六子、初め延安郡王に封らる、後ち立て太子となる、在位十五年、壽二十五歳にして崩す、高繪(クハイ)は太后の姪なり、太后は神宗の母、高氏、神宗崩して、尊て太皇太后と爲す、扱て神宗の病ひ、大漸と已に危きとき、立て太子となす、初め蔡確舍人の邢恕を遣て、公繪を迎て自家に歸り、公繪は太后の姪なれは、之を誘ひ欺き、太后に白さしめ、蔡確と權を恣に弄せんと思ふ、是邪雍が云ふ所、徒に姦雄を長する所とて太后に白さしむるには、延安は尚ほ幼沖なり、岐王、嘉王は皆賢王なりと、公繪は正直なる人なり、故に之を聞て大に驚き、懼れて曰く、若し太后に白して、太后の怒りに逢ふ時は、我家は斷絕せん、故に君等吾家を禍せんと欲す、亟に去て歸る、然に邢恕、復び禍心を包み藏し、知らざる眞似(マネ)し、反て謂ふ、太后王珪と表裏し、延安を廢して捨て、太后の子顥を王に立んと欲する謀なり、己れ及ひ章惇蔡確が保護するに賴て、變故を得たりと、且つ其觀を士大夫の間に傳播す、神宗崩して、太子延安位に即く、時に十歳なり、太皇太后同しく政を聽く、熙寧中、太后嘗て流涕して、神宗に言て曰く、安石が變法は、天下の爲に便利でなし、故に元祐の法に從ふべしと、其中神宗崩す、故に已むを得ず、堅く先例を守る、故に天下の新法を厭苦する日久しきを知る、因て天下の爲に、新法の害ある法を罷る也、乃ちついでに邢恕が始終を語らん、是の時邢恕は罪を得て貶して隨州に知たり、恕博く經藉に通じ、文章を能くす、程顥に從て學ぶ、然天資詭詐冒進、蔡確と岐王顥を立んと謀る、事既に成らず、會〻王珪卒す、恕確及び章惇と宣言す、太皇太后毀充と異議あるも、確が擁護するに賴て止む、自ら以て功を爲す、是に至て復たと、高公繪が爲に、草奏し、朱太后を尊崇して、高氏異日計を爲んと乞ふ、太后怒て黜て隨州に知たり、）

○王珪卒。蔡確韓縝爲左右僕射。章惇知樞密院。司馬光門下侍郞。光居洛十五年。兒童走卒。皆知司馬君實。神宗升遐。赴闕入臨。衞士望見。以手加額曰。司馬相公也。爭擁馬首呼曰。公毋歸洛。留相天子。活百姓。所在數千人聚觀之。光懼歸洛。已而召爲執政。○河南程顥以是歲卒。顥字伯淳。弟頤字正叔。兄弟皆從濂溪周惇頤受學。惇頤字茂叔。博學力行。聞道早。遇事剛果。有古人風。爲政嚴恕務盡理。以名節自礪。雅有高趣。牕前草不除。曰與自家意思一般。黃庭堅稱其人品甚高。胸中灑落。如光風霽月。有太極圖通書。行于世。顥頤初從之。首令尋仲尼顏子所樂何事。學成。各以斯文爲己任。顥嘗言。一命以上。苟存心於愛物。於人必有所濟。熙寧中。以新法不合去國。神宗嘗使推擇人才。所薦數十人。以表叔張載弟頤爲首。其死也。文彥博采衆論。表其墓曰明道先生。而弟頤爲之序曰。周公沒。聖人之道不行。孟子死。聖人之學不傳。道不行。百世無善治。學不傳。千載無眞儒。無善治。士猶得明夫善治之道。以淑諸人。以傳諸後。無眞儒。天下貿貿焉。莫知所之。人欲肆而天理滅矣。先生生于千四百年之後。得不傳之學於遺經。辨異端。息邪說。使聖人之道。復明於世。蓋自孟子之後。一人而已。頤嘗語人。欲知吾之道者。觀此序可矣。

●(解釋)走卒（伍伯の類なり、今の行縢杖(ヒキヤク)たいふ賤き者を謂ふ、飛脚と云が如し、）臨（去聲、弔哭するなり、）以手加額（合掌して額に加へて跪拜す、即ち南膜拜(ナムハイ)梵語に南無と云ふ、或は南膜と曰ふ、猶ほ歸依すると言ふか如し、胡人佛を拜する毎に、必す南膜と呼て其號を誦す、故に佛を拜するを謂て、南膜拜と曰ふ、亦た膜拜と曰ふ、此れ衞士司馬光を遠く望み見て、胡人佛を拜する體を爲す、）以是歲卒（神宗元豐元年、姓は周、名は淳頤、字は茂叔、宋の儒臣、開山人、濂溪は茂叔が居所、太極圖及び通書數十篇を

（作る、上は洙泗千載の統を接き、下は河洛百世の傳を啓く、宋の熙寧中に提刑に除し、元公と諡す、）意思一般（意思とは、先生の意思、）灑落（風塵を灑落するなり、）光風霽月（皆雨後の風月を謂ふ、有德者の氣象を形容す、楚詞註に、光風は雨歇み月出て而して風ふき、草木山林光色あるを謂ふ、）太極圖（無極、太極、陰陽五行の妙を形容す、）通書（四十篇、）各以斯文（聖人の道を謂ふ、）一命（周禮の九命、今第九品也、即ち一命して士と爲り、再命して大夫と爲る者、）表叔（程顥の張載に於ける、外兄弟子と爲す、故に顥に於ける、叔父行なり、故に表叔と謂ふ、）淑諸人（淑は善也、後學之を先覺に聞を得て以て其身を善くす、）質質然（明ならざるの貌、）千四百年（明道先生孟子の世を去ること千四百年、）

●〔講義〕王珪卒、元豐元年、官制成る、平章を改て、左右の僕射と爲す、王珪蔡確を以て之を爲す、是に至て蔡確韓縝と云ふ姦人、左右僕射と爲る、章惇と云ふ姦人も、樞密院に知事となる、司馬光は、門下侍郎たり、門下侍郎は、參知政事たり、元豐元年に門下侍郎に改む、司馬光と云ふ人は、德實なる故に洛陽に居らること十五年の久きも、宋人其德望に服し、厭苦するなく、兒童や走卒の幼少なるものも卑しき走卒も殘らず、司馬君實(君實は字)の德行なるを知聞す、神宗の升遐と遠きへ升るとき、(死するを云)禁闕に赴て、宮殿に入て臨哭す、宮殿を衞るの士、今司馬光の來るを望み見て、合掌して額に加へて曰ふには、他人にあらずして司馬相公也と、爭て司馬光の馬首を圍み擁して呼つて曰ふには、公は洛陽に歸ることをするな、長安の部に何までも留り居て、天子に宰相となり仁政を行ひ、德望をひとぎ、是民人百姓を活して賜ひ、民人百姓今まて虚政に苦む年久し、實に死せるが如し、願くは民人百姓を救ひ給ひと、到る處民人數千聚て司馬光を觀る、餘り大勢にて聚り、司馬光を觀る故、司馬光驚き懼て洛陽に歸るもはやすると來人德望を以て召されて執政と爲る、河南程顥明道先生卒す、顥字は伯淳、弟頤字は正叔、伊川先生と號す、兄弟皆濂溪先生に從て、聖人の學を受く、茂叔す博く學び、學びたる道を勉て行ふ、道を聞く人に勝れて早く爲すと剛く禽度果たす、少しも踟躕せず、古人の風雅あり、然れども疎を爲すよ嚴しく、又恕として人の事を思ひやり惑むこと多し、務て理のある所を盡し、只各ゝ節とを以て自ら勵す、雅より高く趣きもあり、窓前の草除き拂すして曰(イフ)には我家の意思と同きと也と、黃庭堅と云名高き人、茂叔の德を稱す、茂叔の人品甚た高尙なり、茂叔胸の中の清潔なること雨後の風霽の晴たる月の如しと、其著す所太極圖及び通書あり、皆世界の人が之を讀む、程顥程頤初め茂叔に隨從して、昔て仲尼顏子の樂む所の道は何を事とすとぞ尋ねしむ、然らは則初め直ちに從わず人をして仲尼顏子の樂む所は何を事とすると尋ねさせ、茂叔の答ふる所の甚た善きを以て、後ち從て之を學ふと、數年にして學問の道も成就するに因て、兄弟各論語を以て己か任と爲す、顥先に言ふ、一命して士と爲るより、以上は苟(カリソメニ)も我心を人物を愛するに存在せば、其人に於ける、必す物を濟す所あらん、神宗熙寧中、安石の新法と其意合わざるを以て國を去る、神宗先きに程顥をして人才を推し上け擇ばしむ、薦むる所の者は數十人、外叔父張載弟頤を以て首めと爲す、其死る時也、文彦博程顥の墓に書きて表わして明道先生と曰ふ、弟頤序を爲て曰く、周公と云ふ聖人が死なれて、堯舜の道が世に行れず、孟子軻没して堯舜の學傳わらず、故に百代善く治る世なく、堯舜の學傳わらされば、千載の久きと雖とも眞の儒者なし、假令(タトヒ)善く治るなくも、士大夫の善く治るの道を世に明にして、以て後學之を先覺に聞くを得て、以て其身を善くして、以て諸の學を後世に傳ふるを得る、眞の儒者なければ天下質質然として明かならされば、越きて行く所を知るものなし、然るときは、人欲か肆恣にして、天理かなくなる、夫れ先生は、孟子の世を去る千四百年の後の世に生れて師匠より傳わらざるの學を聖人の遺されたる經書を得たり、因て異端は老子や佛氏の邪道を辨論し、邪說と世に害あると視とめれは、塞ぎ息め、堯舜の道をして復び世界に明らかならしむる、蓋し思ふに孟子の後よりは、惟一人のみと歎息す、顥嘗て人に語て曰く、吾が學ふ所の道を知らんと欲せは、此序を觀ば大抵分るなりといふ、

張載字子厚、初無所不學。後聞二程之言。乃盡棄其學。而講焉。有東銘。西銘。正蒙。理窟等書。行于世。人謂之横渠先生。共城邵雍字堯夫。居河南。與二程友。雍之學。玩心高明。觀天地變化陰陽消長。以達萬物之變。精於物數。推無不中。顥嘗在考試院。以其數推之。出謂雍曰。堯夫數。只是加一倍法。雍歎其聰明。雍欲以數學傳二程。二程不受。邢恕欲受。雍不許曰。徒長姦雄。雍有皇極經世書十二卷。擊壤集歌。傳于世。人謂之康節先生。富弼司馬光等。皆深敬重之。宋自歐陽脩。以古文倡天下。文章雖大變。而儒者義理之學。至周程出。然後大明。雍惇頤載皆歿於神宗之世。至是顥又歿。惟頤在。學者宗之。爲伊川先生。

●〔解譯〕二程（明道伊川）共城（縣は衞州に屬す、）加一倍法（太極兩儀を生し、兩儀四象を生し、四象八卦を生するの類の如し、之を推すに窮りなし、太極とは陰陽の變化する所以の者は個の理あり以て之が主宰と爲る、太極は即ち理なり、兩儀は陰陽なり、四象は太陽少陽太陰少陰、八卦は乾兌離震巽坎艮坤）皇極經世書（大中至正、變に應して窮り無きの義を取る、）

（觀物外篇二卷、）◎〔講義〕（張載字は子厚長安の人世に橫渠先生と云ふ是なり初は孫子吳子佛氏老子の類を悉くは學び習わざるなし後ち二程兄弟の言ふ所を聞て大ひに喜ひ、うこで窺らず初の學問を棄てゝ仕舞而して二程の學を講す東銘西銘正蒙理窟等の書あり張載其書室の兩牖に銘して東を砭愚と曰ひ西を訂頑と曰ふ伊川先生曰く是れ爭論を起す也若かずたゞ之を東西の銘と曰んには因て改て西銘東銘と曰ふ朱濂の曰く天地の間万物一体理一のみ又共城と云所の人にて邵雍字は堯夫と云ふ人あり時に河南に居す二程兄弟と友親たり雍の學は心を玩味すると高尙明白にして天地の變化とは還り遷ること陰陽暑ゆけば寒來る月盈れは復た消滅するを觀て萬物の變するは春ハ花夏ハ綠秋は落葉冬は雪ふるの類を云ふ物類を精ふす物一に象に作ろ言は周易に通し象數に精しと程子嘗て考試院の中に在て其數術を以て推究す考試院を出て邵雍に謂て曰くおまへの數は只是加一倍の法なり云ふ所太極兩儀を生し兩儀四象を生し四象八卦を生するの類なり邵雍大歎美す邵雍は數學を以て二程に傳へんと思ふに二程は服せす邢恕は受んと欲すも邵雍之を許さすして曰ふ此の樣ふな人物に數學を施こせば、いたづらに姦雄を長ずと恕は經術に通じ文章を能くし程頤に從て學ふ司馬光呂公著王安石吳充皆な邢恕を重す然とも天資詭詐なり故に姦雄を長すとさて宋國歐陽脩字永叔と云ふ人か（八大家一人）古文を以て天下に唱へ首てより文章大に六朝の四六の文を變すと雖とも而も儒者義理の學問は周茂叔二程兄弟顯れ出るに至て然して後ち堯舜禹湯文武周公孔子の道大に明晰なり邵雍周惇頤張載皆な神宗の世に沒死す是に至て程顥又沒死す故に程頤のみ在り學者之をたつとんで伊川先生と曰ふ、）

元祐元年。蔡確罷。確與章惇邢恕相交結。恕往來傳送語言。自謂有定策功。言官王覿。極言惇確及韓縝張璪朋邪。劉摯朱光庭蘇轍。累數十疏論劾。確先黜。以司馬光爲左僕射。時王安石已病。其弟以邸吏狀示之。安石曰。司馬十二作相矣。悵然久之。議者或謂三年無改父道。新法姑稍損其甚者足矣。光慨然爭之曰。先帝之法。善者雖百世不可變。若安石惠卿等所建。爲天下害。非先帝本意者。當如救焚拯溺。猶恐不及。況太皇太后。以母改子。非子改父。衆議乃定。或謂光曰。章惇呂惠卿輩。他日有以父子之議間於上。則朋黨之禍作矣。光起立拱手。厲聲曰。天若祚宋。必無此事。安石每聞朝廷變其法。夷然不以爲意。及聞罷助役復差役。愕然失聲曰。亦罷至此乎。良久曰。此法終不可罷。安石與先帝議之二年乃行。無不曲盡。◎〔解釋〕言官（即ち諫官なり）累（上聲）先黜（陳州に知たるを云）其弟（王安國を謂ふ）十二（司馬光は十二人めの行にて九郎幾經と云が如し）爭（字の如く）拯（音蒸の上聲亦た丞なり）父子之議（言は新法は乃ち先帝の立る所而して之を改む）復（音伏、）◎〔講義〕（元祐元年春閏二月蔡確罪あり免す是より先き右司諫王覿上疏して言ふ國家安危治亂は大臣に繫る今執政は一人にして姦邪半に居る一二元老をして何を以て其志を行はしめんや因て蔡確章惇韓縝張璪朋邪正を害するの章數十を上ル會右諫議大夫孫覺左司諫蘇轍等連章確罪を論ず太后之を斥るに忍びず但政を罷む出して陳州に知たり故に政を罷と云ふ因て司馬光を以て左僕射と爲し門下侍郎を兼ぬ時に王安石は已に病に臥す弟安國其邸の吏の檄子書を以て王安石に觀示す安石歎して曰く司馬十二郎復タ宰相と爲ると悵然（イタミ）たる久し壺諫議者或は司馬光に謂て曰く論語にて三年父の道を改るなきを孝と謂ふと可し新法は先帝施す所抑々哲宗神宗第六子なり故に先帝の法は姑らく稍人心に害あるの甚しき者を損減すれは足るならん司馬光慷慨然として之を爭ひ褒て曰く先帝の法善き者ハ百世と雖とも變ず可からず況や數年なるを乎安石惠卿等か建議する所の若き天下の害を爲し先帝の本意に非る者は當に火に焚るゝを救ひ水に溺るゝを拯ふか如なるべし夫にても猶ほ及はざらんを恐ろ況や太皇太后母を以て子を改む子の父を改ろに非ずと是に至て衆議乃ち定まり誰も口を聞く者なし或る人か司馬光に謂て曰く章惇や呂惠卿か輩若しも此の先き神宗と哲宗とは父子の議を以て哲宗皇帝に奏聞するあらは哲宗は幼冲なり何の辨へもなく承知をなさば則ち正と邪との朋黨の禍作らん其時光は起き直りて手を拱き聲を勵まして曰く天若し宋國に祚兆せは必す此の禍事無んと斷言す又安石は朝廷の新法を變して舊法に復すと言ふを聞く毎に爽然として替らずして以て心意に掛けす已にして助役を罷て復た差役の法を行ふと聞き愕然として大に驚き聲を失して曰亦罷て此に至る乎蓋神宗世差役を罷め募役法を行ふと註に見たり乃ち良や久うして曰く此差役終に罷む可からず安石先帝と之を議論し二年にして乃ち行ふ、一塲し盡さゝるなし、）◯章惇韓縝罷。◯王安石卒。安石在金陵。常獨語福建子。恨惠卿也。惠卿叛安石。惟章惇終始不叛。安石又常曰。新法之行。始終

以爲可行者。曾子宣也。始終以爲不可者。司馬君實也。○呂公著右僕射。文彦博軍國重事。程頤崇政殿說書。蘇軾翰林學士。竄貶呂惠卿鄧綰等。

○司馬光爲相。八閱月而薨。太皇太后哭之慟。上亦感涕不已。贈太師溫國公。諡文正。光在位。遼人夏人使來。必問光起居。而遼人勅其邊吏曰。中國相司馬矣。切毋生事開邊隙。及卒。京師民罷市。畫其像印鬻之。畫工有致富者。及葬。四方來會者。哭之如哭其親戚。光嘗語晁無咎曰。吾無過人者。但平生所爲。未嘗有不可對人言者耳。劉安世問光一言可以終身行之者。光曰。其誠乎。安世問其所從入。曰自不妄語入。○蘇軾程頤同在經筵。軾喜諧謔。而頤以禮法自持。軾每嘲侮之。光之薨也。百官方有慶禮。事畢欲往弔。頤不可曰。子於是日哭則不歌。或曰不言歌則不哭。軾曰。此枉死市叔孫通制此禮也。頤怒。二人遂成隙。門人朱光庭賈易爲言官。力攻軾。傳堯俞王巖叟呂陶等。相繼論列。堯俞巖叟右光庭。陶右軾。是時元豐大臣。退於散地。皆銜怨入骨。陰伺間隙。諸賢不悟。方自分黨相攻。有洛黨川黨朔黨。洛黨以頤爲領袖。光庭易爲羽翼。川黨以軾爲領袖。陶等爲羽翼。朔黨以劉摯王巖叟劉安世爲領袖。而羽翼尤衆。未幾頤罷。不復召。久之軾亦罷。後再入。三入。皆不久而出。◉〔解譯〕福建子（註に曰く、惠卿は福建の人）印鬻之（印は板印なり）方

有慶禮（慶禮は賀を稱するの禮也、宋史元祐元年九月、明堂に大享して、神考を以て之に配す、因て天下に赦す、百官赦を賀す、是也、）◉〔講義〕章惇司馬光と役法を太后簾前に爭辨す、其語甚た悖る、太后怒て斥て汝州に知す、安燾を以て惇に代ふ、尋て韓維も亦た免す、王安石も卒す、安石性疆忮、事に遇ふて可否となく、自ら所見を信じて意を執て回らす、然れとも議論奇高にして、能く辨博を以て其說を濟す、概然世を矯め俗を變するの志あり、故に神宗衆論を排し力て之に倚任す、變法を議するに及て、在廷交〻不可を執る、安石經義に傅き、己が意を出し、辨論輙ち數百言、衆誹する能はず、甚き者は天變は畏るゝに足らず、祖宗は法るに足らず、人言は恤るに足らず、是以怨議紛起す、神宗の世を終て復た召れず、凡て八年、安石金陵に在て常に福建子ト獨語す、大に惠卿か己に叛くを恨て也、惠卿は福建の人、故に呂惠卿を斥して之を言ふ、安石又嘗て曰く、新法始終以て行はる可きと爲す者は曾布、字は子宣なり、始終以て行ふ可からずと爲す者は司馬君實なり、又呂公著を以て尙書右僕射兼中書侍郎たり、時に兩宮己を虛ふして以て光等が政を爲すを聽く、光亦た自ら言行はれ計從るゝを見て、身を以て社稷に徇へんと欲し、躬庶務を親らし、晝夜を舍てず、賓客其體羸るゝを見て、諸葛亮食少く事煩しきを擧け以て戒めと爲す、光曰く、死生は命也と、之を爲す益力む、病革（スミヤカ）諄諄語夢中の如し、云ふ所皆朝廷天下の事なり、是に至て薨す、太后之を哭して慟す、帝と其喪に臨す、士も亦た感涕して已まず、太師溫國公を贈り、文正と諡す、時年六十八、光曩きに位に在るとき、遼人や夏人の使ひ來るときは、必す光が起居をたつね、又遼人其邊吏に敕を附けさせて曰く、中國司馬を相となす、妄りに戰時を生し邊地にすきまを開く毋れと、京師の人市を罷め往て弔す、陝州に如て葬むるに及んで、送る者私親を哭するが如し、四方皆な像を畫て以て祀る、或は板に印して之を賣る、畫工富を致す者あり、光が子康喪に居り、寢地に因り、腹疾を得たり、詔李積を兗に召す、鄉民之を聞き、積に告て曰く、百姓司馬光の恩を受る深し、今其子病む、願くは速に往けと、至れは則ち康か病ひ爲す可らず、司馬光孝友忠信、恭儉正直、居處法あり、動作禮あり、少より老に至るまで、語未た嘗て妄りにせず、嘗て晁無咎に語て曰く、吾れ人に過ぐる者無し、但平生の爲す所、未た嘗て人に對して言ふ可からさる者あらさる耳と、誠心自然に天下敬信す、[illegible]

作するなり、叔孫通は市や街て殺されす、只東坡の諧謔にて程頤を玩弄するなり、頤之を聞て大怒り、程蘇二人遂に隙を成す、頤門人右司諫賈易、左正言朱光庭等憤て平なる能はず、軾が策問に殿中を謗訕すと劾す、侍御史呂陶言ふ、臺諫は當に至公を徇ふ可し、假りに事權を借て以て私怨を報ず可からずと、右司諫王覿言ふ、軾命辭輕重を失ふ、其事は考するに足らず、若し恐く同異を考み、深く嫌疑を究めは、則ち兩岐遂に分る、士大夫をして朋黨の名あらしむるは大患なり、范純仁も亦た言ふ、軾罪なしと、遂に置て問はず、會〻帝瘡疹を患へて出てず、程頤宰臣に詣て知否を問ふ、且つ曰く、上殿に御せず、太后當に獨坐すべからずと、人主疾あつて而して大臣知らざる可ん乎、翌日宰臣頤が言を以て疾を問ふ、是に由て大臣亦た多く悅びず、御史中丞胡宗愈、左諫議大夫孔文仲、給事中顧臨、遂に連卒して力めて頤を詆り、宜しく經筵に在るべからずと、乃ち頤を罷め、管句西京國子監と爲す、時に呂公著獨り國に當る、群賢咸く朝に在り、類を以て相從ふ能はず、遂に洛黨蜀黨朔黨の語あり、洛黨は頤を以て首と爲して而して朱光庭賈易輔けと爲り、蜀黨蘇軾を以て首と爲して而して呂尙等輔けと爲る、朔黨劉摯梁燾王巖叟劉安世を首と爲して而して之を輔る者尤も衆し、是時熙豐事を用るの臣散地に退休し、怨骨髓に入る、陰に間隙を伺ふ、而して諸賢悟らず、各黨比を爲して以て相訾議す、惟り呂大防秦人戇直にして黨なし、范祖禹司馬光を師とし、黨を立てず、既にして帝之を聞き、以て胡宗愈に問ふ、宗愈對て曰く、君子は小人を指して姦と爲し、小人君子を指して姦と爲す、陛下能く中立の士を擇て而して之を用へは則ち黨禍息んと、因て君子無黨論を著して以て進む、時に程頤蘇軾交惡む、其黨互に相攻許す、易因て呂陶軾兄弟に黨すと劾す、語文彥博范純仁を侵す。太后怒り峻しく易を責めんと欲す、呂公著言ふ、易が言頗る直也、惟大臣を詆る太甚し、諫列に處る可からざる耳、乃ち止む、罷て潁州に知たり、未た幾ならずして軾も亦た罷む、後再び入り復た三たび入る、皆久からずして出つ○呂公著爲司空同平章軍國事。呂大防范純仁左右僕射。純仁仲淹子也。公著尋薨。○知漢陽軍吳處厚言。蔡確謫安州日。作夏中登車蓋亭詩。譏訕臺諫。論確不已。安置新州。呂大防劉摯范純仁王存等。以爲不宜令過嶺置死地。純仁曰。此路荆棘八十年矣。奈何開之。吾曹政恐不免耳。爭之不得。臺諫交章攻純仁黨確。純仁遂罷。劉摯爲右僕射。大防摯欲引用元豐黨人。以平舊怨。謂之調停。蘇轍等力陳其不可。摯罷。蘇頌爲右僕射。頌罷。純仁又代之。○元祐八年。九月。宣仁聖烈太皇太后崩。臨崩。對上謂大防純仁等曰。老身沒後。必多有調戲官家者。宜勿聽之。公等亦宜早過。令官家別用一番人。呼左右問曾賜出社飯否。因曰。公等各去喫一匙社飯。明年社飯時。思量老身也。后聽政九年。天下稱爲女中堯舜。不比外家。以擁佑嗣君之故。二子一女皆疏。以至公御天下。當世賢者畢集于朝。君子之盛。後世以慶曆元祐並稱焉。承神宗厭兵之後。與民休息。西蕃鬼章爲邊將。擒獻釋不誅。以招其部屬。夏國自其主秉常卒乾順立。政亂主幼。屢寇邊。失藩臣禮。皆強臣爲之。以其君民非有罪。不忍興師討伐。詔諸路嚴兵自備而已。

◉〔解釋〕漢陽軍（湖廣に屬す）安州（湖地に屬す、今德安府、）車蓋亭（安州の郡治、）譏訕（其詩に曰く、矯矯たる名臣郝甑山、忠言直節上元の間、釣臺蕪沒知ぬ何れの處ぞ、歎息して君を思て碧灣に倚ると、是は唐の高宗の上元中、高宗疾を以て位を武后に遜らんと欲す、甑山公郝處儉諫て之を止む、今之を思て、乃ち[illegible]の諫むる能はざるを識る、）新州（廣東に屬す、）過嶺（廣に入る途、五嶺を過く、）荆棘（[illegible]）黨人（神宗の末年安石の黨、）調停（調停は和解を謂ふ、當時俗語なり、）一番人（[illegible]斥す、）社飯（風土記に、荊楚社日に於て、猪羊の肉を以て其飯を調和す、之を社飯と謂ふ、胡盧を以て之を盛り、人に相送り以て故舊の情を敦ふす、）不比（私昵を比と曰ふ、）嗣君（哲宗、）二子（徐王、魏王、）◉〔講義〕元祐三年夏四月、呂公著[illegible]以て懇に位を辭す、乃ち是[illegible]

す、薨して太師を贈り、申國公に封す、正獻と諡す、公著は少きより學を講す、即ち心を治め性を養ふを以て本と爲す、平居疾言遽色なく、聲利紛華に於ては泊然として好む所なく、簡重清淨蓋し天稟なり、然とも其識慮深く敏、量宏にして學粹也、事に遇て善く決す、苟も國に便なれは利害を以て其心を動さす、人と交る至誠に出つ、德を好み善を樂む、蔡確勢を失する日久し、遂に怨望を懷く、安州に在り、嘗て車蓋亭に遊び、詩十章を賦す（其詩は解釋に出つ、復た贅せす）時知漢軍吳處厚確と隙あり、是詩を上て以爲らく、皆譏訕に涉ると、其郝處俊か上元ノ間、高宗か位を武后に傳んと欲するを諫むる事を用て以て太后の朝を斥す、語尤も切害なり、是に於て臺諫言ふ、確怨謗す、其罪を正んと乞ふ、執政議して確を法に置く、呂大防劉摯范純仁王存等以爲らく不可と、力めて之を爭ふ、文彥博確を嶺嶠に貶んと欲す、純仁呂大防に謂て曰く、此路乾興より以來荊棘八十年に近し、吾輩之を開く、恐らくは自ら免かれさらんを、大防遂に敢て言はす、越て六日、確を英州別駕に貶し、新州に安置す、確新州に至り、未た幾ならすして卒す、呂大防言ふ、蔡確の黨盛なり、治せさるべからす、純仁面に朋黨辨し難きを諫む、恐らくは誤り善人に及はん、司諫吳安詩、正言劉安世因て純仁か確に黨すと論す、純仁も亦た政を罷んと求む、乃ち出して穎昌府に知とす、呂大防劉摯、安石か黨人を引き用て以て舊怨を平けんと欲す、世之を和解すと謂ふ、蘇轍等力めて和解す可からさるを陳す、上疏して曰く、先帝顧離の俗を疾み、將に以て四方を綱紀せんとす、而して臣下將順する能はす、諸法を造作し、上み天意に逆ひ、下も民心を失ふ、今二聖（太后帝）民の願ふ所に因て取て之を更めは、上下析慰せん、前きに事を用るの臣、斥逐を加へす、之を外に宥む、蓋し已に厚し、而して識者衆說に惑ひ、乃ち招て之を納れ、之れと事を共せんと欲す、此輩若し返さば、豈に肯て但已ん哉、必す衆人我害を以て私怨を快せんとす、人臣禍を被る、蓋し言ふに足らす、臣惜む所の者は祖宗朝廷なり、疏入る、太后曰く、轍吾か君臣邪正を兼ね用るを疑ふ、其言極て理に中る、諸臣繼て之に和す、調停の說に已む、元祐八年九月、宣仁聖烈太皇太后崩す、初め太皇太后不豫なり、呂大防范純仁疾を問ふ、太皇太后曰く、老身沒後必す多く官家を調戲する者あらん、是官家は皇殿を謂ふ、五帝は天下を官とす、三王は天下を家とす、故に稱す、宜く聽く勿れ、公等亦た宜く早く退く可し、乃ち官家に令して別に黨派に管せさるの人を用よ、乃ち左右を呼て社飯を賜て曰く、明年社飯の時、老身を思量せよ、尋て崩す、太后朝に臨む九年、朝廷清明、華夏綏定す、力（ツト）めて故嫁チ行ふ、外家の私恩を抑絶す、人以て女中の堯舜と爲す、嗣君を擁佐するの故を以て、二子一女皆疎せらる、至公清明を以て天下治御す、當世の賢人君子悉く朝廷に集聚る、君子の盛大なる、後世慶曆（仁宗）元祐（哲宗）を以て並べ稱す、神宗兵を厭ひ嫌ふの後を承て、民百姓と休息す、西番の鬼章と云者が、邊の將の擒りと爲り、之を朝廷に獻するとき、鬼章を釋して誅戮せす、以て其部屬を招き之を安す、夏國其主秉常卒して乾順立つより、政亂れ主幼し、歷ミ邊際に寇して、藩臣の禮法を失ふ、皆其國强臣之を爲め、其君王や民人は罪有るに非さるを以て、師を興して討伐するに忍ひす、諸路に詔して兵を嚴亟にして自ら備ふる而已、

○上始親政。侍郎楊畏首叛呂大防。自謂迹雖元祐。心在熙豐。入對乞召章惇。明年改元紹聖。大防罷。惇爲右僕射。純仁罷。惇之來也。道遇陳瓘。惇素聞其名。獨請共載。訪以世務。瓘曰。請以所乘舟爲喩。偏重其可行乎。或左或右。其偏一也。惇默然。良久曰。司馬光姦邪。所當先辨。瓘曰。相公誤矣。此猶欲平舟勢。而移左以置右。也果然。將失天下之望。惇既至。以漸盡復熙豐之法。治元祐人之罪。無虛日。司馬光。呂公著。王巖叟。趙瞻。韓維。孫固。范百祿。胡宗愈。司馬康等已死者。皆追貶奪贈。呂大防。劉摯。蘇轍。梁燾。范純仁。劉奉世。韓維。王覿。韓川。孫升。呂陶。范純禮。趙君錫。馬默。顧臨。范純粹。孔武仲。王欽臣。呂希哲。呂希哲。呂希績。姚勔。吳安詩。王份。張耒。晁補之。黃庭堅。賈易。程頤。秦觀。朱光庭。孫覺。趙卨。李之純。杜純。李周。蘇軾。范祖禹。劉安世。鄭俠等。皆連貶竄。文彥博久致仕。降爲太子太保。罷節鉞。尋薨。皇后孟氏。太皇太后所選聘也。在中宮五年而廢。章惇蔡卞。請追廢太皇太后。賴太后向氏。太妃朱氏泣諫。上悟。惇卞堅請施行。上怒曰。卿等不欲朕入英宗廟庭乎。抵其奏於地。○立賢妃劉氏爲后。右正言鄒浩乞追停册禮。別選名族。詔浩除名。勒停羈管新州。浩道過其友田晝。臨別出涕。晝正色曰。使君隱默官京師。遇寒疾不汗。五日死矣。豈獨嶺海之外能死人哉。願無自沮。士所當爲

者未止此也。○元符三年上崩。在位十五年。改元者三。壽三十五。皇弟立。是爲徽宗皇帝。◉〔解譯〕首叛呂大防（楊畏は安石黨なり、元祐の初罪を得んを恐て、媚を極て大防に附く、大防之を信して、先づ密にて畏か已を助くるを約して、遂に畏を超遷して禮部侍郎と爲し、是に至て畏大防に叛て首として熙豐の法を復するを唱ふ、）跡雖元祐（跡は行迹なり、）偏重其可行乎。或左或右。其偏一也。（偏重は、或は古法に偏り、或は新法に偏るに喩ふ、言は新古の二法を斟酌して中道を得て、而して之を施行せは則ち以て弊を救ふ可しと、）司馬光姦邪（惇光か新法を改るを以て姦邪と爲す、）皆追貶奪贈（或は追て其官爵を貶し、或は追て其封贈を奪ふ、）文彦博久致仕（神宗元豐六年、彦博老を請ふ、太師を以て致仕す、）罷節鉞（神宗彦博の英宗を輔立して而して其功に伐らざるを以て、兩鎭の節度使を加ふ、今並びに之を罷む）在中宮五年而廢（時に劉婕妤寵を恃て、后に禮せす、后不平なり、因て隙を成す、宮中に后の爲に醮祀するに會す、事聞す、章惇陰に劉婕妤に附て、婕妤內侍の郭隨と獄を構へて之を廢す、）請追廢太皇太后（章惇蔡卞太后太皇を詆て、老奸と爲す、譖るに嘗て帝を危ふせんと欲するの事を以す、因て之を追廢せんと請ふ、死する者罪す、故に追となり、）寒病不汗（寒疾は、傷寒疾を得なり、）向氏（神宗の后、哲宗の母向は音裔なり、）上悟（朱熹に云ふ、惇か奏を以て燭に就て之を焚く、）冊禮（皇后を冊立するの禮、）勒停（官職を停罷す、）改元者三（元祐、紹聖、元符）◉〔講義〕哲宗幼なるも、初て政を親らす、時に呂大防山陵使と爲り、甫て國門を出つ、楊畏首として大防に叛く、上疏して云ふ、神宗法を更め制を立て、以て萬世に埀れ、謀求を乞賜て以て繼述の道を成すと自ら謂ふ、述は元祐に存すと雖も、心は熙豐の政にあり、帝則ち召して、對へしむ、詢ふに先朝故臣孰か召して用ゆ可き者を以す、畏遂に章惇、安燾、呂惠卿、鄧潤甫、李清臣等の行義を列上す、各一品を加へ、且つ神宗の法度を建立する所以の意と、王安石學術の美と爲すを言ふ、章惇を召して相と爲んと乞ふ、帝深く之を納る、遂に呂惠卿を復す、劉安世諫て以て不可と爲す、出して成德軍に知たり、惇の召さるゝや、通判陳璫衆に從ひ道にて之に謁す、惇璫か名を聞き迎て與に同載る、當世の務を諭ふ、璫因て惇に問て曰く、天子公を待て政を爲す、敢て何を先んと問ふ、惇曰く、司馬光姦邪、當に先つ辨すべし、此より急なるは無し、璫曰く、公誤る、果して然らは將に天下の望を失はんとす、惇聲を勵して曰く、光務て先烈を纘述せす、而して大改緒を爲す、國を誤る此の如し、姦邪に非すして而して何そや、璫か曰く、其心を察せす、而して其迹を疑は、則ち罪なしと爲さす、若し指して姦邪と爲し、又復た改作せは、則ち國を誤る益甚矣、今の計を爲すは、惟顧激を消し、中道を持せは、庶くは以て弊を救ふ可し、惇悅ひす、帝既に惇を相とす、純仁去らんと請ふ、益力む、乃ち觀文殿大學士を以て出て潁昌府に知たり、黃履張商英上官均來之邵等交章して司馬光等が先朝の法を變更し、道に畔き理に逆ふを論す、章惇蔡卞光や公著か冢を發き棺を斬り尸を暴さんと請ふ、帝許將に問ふ、將對て曰く、此盛德の事に非る也、帝乃ち止む、是に於て光公著の贈謚を追奪し、立る所の碑を仆し、王巖叟か贈官を奪ふ、大防を貶して秘書監と爲す、劉摯を光祿卿と爲し、蘇轍を少府監と爲し、並に分て南京を司る、初め李清臣相と爲んを冀ふ、首として紹述の說を倡ひ、計を以て蘇轍范純仁を去る、亟に青苗免役法を復す、章惇至るに及て、心甚た悅ひす、復た惇と異なり、惇已に司馬光等を貶し、又文彦博以下三十人を籍して悉く嶺表に竄す、清臣進て曰く、先帝の法度を更るは過なき能はす、然れとも累朝元老若し駭が言に從はゝ、必す大に物聽を駭さん、監察御史常安民言ふ、北都は重鎭にして、而して惠卿除せん、惠卿賦性深險、王安石に背く、其君に事る知る可し、今將に闕を過んとす、必す先帝を言て泣て以て陛下を感動して、留京を希望せん、帝之を納る、惠卿至るに及んて、果して先朝の事を言て而して泣く、帝色を正ふして答へす、計卒に施さすして去る、時論之を快とす、蔡卞神宗實錄を進む、是に於て祖禹及ひ趙彥若黃庭堅等並に詆誣に坐して、官を降して永澧黔州に安置す、卞を還して翰林學士と爲す、時に呂大防等遠州に寬居す、會明堂赦あり、章惇言ふ、此數十人當に終身徙す勿るべし、純仁之を聞て亟憤し、申理せんと欲す、所親の者勸む、其怒に觸るゝ勿れ、萬一遠く斥らる、高年の宜き所に非す、純仁曰く、此事至る、一人敢て言ふ無し、若し上の心遂に回らは繫る所大也、如し其れ然らすは、死も亦何そ憾みん、因て上言す、大防等罪する所も亦た持心の恕を失ふに因る、好惡情に任す、老氏好還の戒に違ひ、孟軻反爾の言に忽す、然も牛李の禍、數十年淪胥して解せす、豈に倚ほ前軌に遵ふ可けんや、願くは大防等を放たんと疏奏す、章惇大に怒り、遂に觀文殿大學士に落し、徙して隨州に知たり、秋七月、范祖禹を賀州に、劉安世を英州に竄す、時に劉婕妤寵を內庭に專らにす、章惇蔡京、祖禹安世が元祐中乳媼を諫むる事を摭ひ、以て婕妤を斥すと爲すなり、是に於て二人誣謗を構造するの罪に坐し、賀英に安置す、三省又言ふ、呂大防等臣と爲るなし、遂司馬光等と異ならす、頃ろ朝廷嘗て懲責すと雖も、而して爵秩は以て萬世に埀示す不忠、罪に呂大防劉摯蘇轍梁燾范純仁を循新雷化永五州に安置す、劉安世柳州に安置す、韓維落職して致仕す、再ひ均州に安置す、王覲韓川孫升、呂陶范純仁、趙君錫、馬默顧臨范純粹、孔文仲、王欽臣、呂希哲呂希純呂希績姚緬吳安詩秦觀十七人を遠州に居住す、王欽臣落職して致仕す、張來晁補之、賈易並に當官に監す、朱光庭孫覺趙爲李之純杜純李周並に官秩を奪ひ、葉濤か制に當る、文極て醜詆す、聞者切齒す、時に梁燾已に卒す、大防行て虔州信豐に至て卒す、天下之を惜む、既に當て蘇軾ハ、惠州より昌化軍に還る、范祖禹賀州より賓州に徙る、劉安世英州より高州に徙る、純仁時に疾に因て明を失ふ、命を聞き、恰然として道に就く、或人純仁に謂て曰く、七十年兩目倶に喪す、萬里の行、豈に其れ欲せん哉、但區々の君を愛する、懷あつて惡とす、若し名を好み嫌を避けゝ、即ち善を爲すの路なし、曩子司馬光と役法を議して同からさるを以てなり、純仁曰く、吾れ君實の薦

な用て、以て宰相を致す、昔し同朝事を論し、合はされは則ち汝辜を以て今日の言と爲は則ち不可なり、愧心あつて生るは、愧心なく死するに若かす、其子は乃ち止む、辭に子弟を戒しむ、少も不平有ろ可からずと、諸子章惇を怨むと聞き、必す怒て之を止む、道に在るに及て舟江に覆る、純仁衣盡く濕ふ、顧みて諸子に謂て曰く、此豈に章惇之を爲ん哉、初め章惇范祖禹劉安世を怨む尤も深し、必す諸を死地に置んとす、是に至て蔡京に諷して、併て二人を陷るゝに罪を以す、詔して祖禹を化州に、安世を梅州に徙す、安世貶所に至る、章惇將に必す之を死に置んとす、土豪を擢て轉運判官と爲す、之を殺さしむ、判官意を承け疾く馳せ、未だ梅に至らず三十里血を嘔て而して死す、安世免るゝを獲たり、祖禹平居恂々として、口言す、人過事に過へば則ち明に是非を白し、少も借隱せす、勸講論諫に長す、嘗數十萬言のみならず、治道を開陳し、事宜を敷釋す、平易明白、洞見底蘊なり、賈誼陸贄と雖とも是に過さるなり、賢妃劉氏を立て皇后と爲す、妃材藝多く盛寵あり、陰に構て孟后を廢す、章惇内侍郝隨劉友端と相結ひ、妃を請て中宮に正位せんと、時に帝未た儲嗣あらず、會妃は子茂を生す、帝大に喜ひ遂に之を立つ、鄒浩敢て事を論するを以て、帝親ら擢て右正言と爲す、露章して章惇か不忠上を慢するの罪を劾す、未た報せすして劉后立つ、浩上疏して言ふ、賢妃孟后と寵を爭て而して孟后廢す、今乃ち之を立つ、殊に聖德を累はす、乞ふ册禮を追停せん、帝の曰く、此祖宗の故事、豈に獨朕のみならん耶、蓋し眞宗劉德妃を立るを指し云なり、浩對て曰く、祖宗大德法る可き者多し、陛下之を取らずして小疵を效はんや、帝色を變し、其章を持し思ふ所あるが若し、因て外に付す、明日章惇其狂妄を詆り、名を除き勒停して新州に羈管す、黃履進て曰く、浩親ら拔擢せらるゝの故を以て、敢て顔を犯して忠を納る、陛下遽に之を死地に出す、人臣將に以て戒めと爲さんとす、誰か陛下の得失を論せんや、幸に晉地を與へよ、聽かず、初め陽翟田畫議論慷慨す、浩と氣節を以て相激厲す、劉后立つ、畫人に謂て曰く、志完（浩が字）言はずんば以て交を絶つ可しと、浩既に罪を得、畫諸を途に迎ふ、浩涕を出す、畫色を正ふして之を責めて曰く、志完をして隱默して京師に官たらしむるも、寒疾に遇て汗せずんは、五日にして死せん、豈に獨り嶺海の外のみ能く人を死せしめんや、願くは君此擧を以て自ら滿する勿れ、士の當に爲すべき所の者は、未た此に止まらさるなり、浩茫然として自失す、謝して曰く、君我に賜る厚しと、

徽宗皇帝名佶。神宗第十一子也。初封端王。哲宗崩。欽聖憲肅皇太后向氏。召宰執議立嗣。后欲立端王。章惇曰。端王浪子耳。曾布身長。望見端王已在簾下。叱曰。章惇聽太后處分。王出簾。惇惶恐失措。王即位。請太后權同處分軍國事。范純仁等。二十餘人。並收敍。龔夬陳瓘鄒浩爲臺諫。○韓忠彥爲右僕射。忠彥琦子也。○文彥博司馬光等。三十三人。追復官。○太后垂簾半年而還政。○章惇罷。尋竄。○韓忠彥曾布左右僕射。○貶邢恕。○貶蔡京蔡卞。卞安石婿也。先是臺諫龔夬陳瓘任伯雨等攻卞。罷其執政。京爲翰林承旨。瓘見其視日不瞬。謂此人必貴。然以其區區精神。敢抗太陽。他日得志。必爲天下患。瓘語人曰。射人先射馬。擒賊先擒王。連蹤攻之甚力。京罷。尋又以御史陳次升等言。與卞俱貶。

◉〔解釋〕徽宗（名は佶、神宗の第十一子、初め端王に封せらる、哲宗嗣なく、向太后之を立つ、在位二十五年、金の虜にする所と爲る、壽五十四歳にして殂す、）浪子耳（浪子は俗に輕浮淺率にして意見なき者を言ふ、）處分（處は區なり、分は分別なり、）二十餘人（皆章惇志を得る時に貶黜さるゝ者なり、）三十三人（文彥博、王珪、呂大防、劉摯、韓維、梁燾、司馬光、呂公著、孫固、傅堯俞、趙瞻、鄭雍、王巖叟、范祖禹、趙彥若、錢勰、顧臨、趙君錫、李之純、呂大忠、鮮于侁、孔武仲、姚勔、盛陶、趙卨、孫覺、杜純、孔文仲、朱光庭、李周、張茂則、高士英、孫升、亦皆章惇志を得る時追貶して贈を奪ふ者、）翰林承旨（官の名、位諸學士の上にあり、宋の第一閣に居る、大詔令、大廢置、丞相の密奏、内外の密奏、皆專ら專對を受く、）瞬（音舜、目の動を瞬と曰ふ、）擒賊先擒王（杜甫前出塞の詩の句に引て以て惡を去るは當に其魁を去るべきに喩ふ、）

◉〔講義〕哲宗崩す、子なし、皇太后向氏哭て宰臣に謂て曰く、國家不幸にして大行皇帝嗣なく、事須く早く定む可し、章惇聲を抗して曰く、禮律に在ては當に母弟簡王似を立つ可し、太后曰く、老身子なし、諸王皆神宗庶子、此の如き分別し難き莫し、惇復た曰く、長を以てすれは則ち申王似當に立つべし、太后曰く、申王目疾あり、不可なり、次に於ては則ち端王佶當に立つべし、惇か曰く、端王輕佻浪子耳、以て天下に君たる可からず、言未た畢らず、曾布之を叱して曰く、章惇未た嘗て臣と商議せず、皇太后の聖諭の如きは極て當れり、蔡卞許將相繼て曰く、合に聖旨に依るべし、太后又曰く、先帝嘗て言ふ、端王福壽あり、且つ仁孝と、是に於て惇默然たり、乃ち端王入て位に柩前に即く、群臣太后に請て權に軍國の事を處分せしむ、后長君を以て辭す、帝泣拜時移す、乃ち之を許す、端王は神宗の第十一子なり、皇后劉氏を尊て元符皇后と爲す、韓忠彥は琦か子也、入對して四事を陳す、曰く、仁恩を厲くし、言路を開き、疑似を去り、用兵を戒む、太后之を納る、是より忠直敢言知名の士稍く收用せらる、四月朔日食するに當り、詔して直言を求む、筠州推官崔鶠上書して曰く、

毀譽は朝廷の公議、故に授朱崖軍司戶、司馬光を責む、左右以て姦と爲して、而して天下皆忠と曰ふ、今宰相章惇、左右以て忠と爲して、天下皆姦と曰ふ、此れ何の理ぞや、賞僭り爵濫なり、倖人倘徉す、此の如くにして而して國亂れさるは未た之れ有らさるなり、龔夬を召して殿中侍御史と爲す、陳瓘鄒浩を左右正言と爲す、韓忠彥等か之を薦むるなり、御史中丞安惇言ふ、鄒浩復た用ゐられは、先帝の失を彰はすを慮る、帝曰く、后を立るは大事なり、中丞言はすして而して浩獨り敢て言ふ、何爲ぞ復た用ゆ可からさらん、惇懼て而して退く、陳瓘言ふ、陛下正路を開んと欲せは、浩か既往の善を取れ、惇乃ち主聽を廢惑し、其私を規霸す、若し明かに奸惡を示さは、當に惇より始むへしと、遂に惇を出して澤州に知たり、純仁時に永州に在り、中使を遣り賜ふに茶藥を以てし、之を諭して曰く、皇帝藩邸に在り、太皇太后宮中に在り、公先朝待事忠直を知る、今相位を虛して以て待つ、知らす、目疾如何、何人を用て之を醫す、純仁頓首して謝す、徙して鄧州に居る、道に在て觀文殿大學士中太乙宮使に拜す、制詞曰ふあり、豈に性德を尊ひ齒を尚のみならんや、昭に寵優を示さん、庶幾くは觀輪嵬觀日に忠告を聞かん、純仁制を聞きて泣て曰く、上果して我を用ひは、死も餘責あらん、既にして又中使を遣り入覲を趣す、純仁歸て疾を養はんと乞ふ、帝已むを得す之を許す、輔臣を見て安否を問ふ、毎に且つ曰く、范純仁一たひ面を見るを得は足らんと、軾は昌化より廉に移され永に徙る、三赦を更て復た玉局觀に提擧たり、未た幾ならすして常州に卒す、軾弟轍と洵を師とし、事へ文を爲る、行雲流水の如く、初め定質なきなり、嬉笑怒罵の辭と雖とも、皆書して而之を誦す可し、蔡卞罪あり、卞專ら紹述の說に託して、上は天子を欺き、下は同列を脅ふ、凡そ善類を中傷する、皆密に建白を疏し、然して後に帝に誣して、親ら札して外に付し之を行ふ、章惇巨姦と雖とも、然れとも猶其術中に在り、是に至て與に決す、惇卞の惡を論す、未た報せすして而して臺諫陳師錫陳次升陳瓘任伯雨張庭堅等極て卞か罪惇に浮たりと論す、典刑を正して以て天下に謝せんことを乞ふ、乃ち出して江寧に知たり、臺諫之を論して已ます、遂に秘書少監を以て分て池州に司たり、蔡京卞あり兄す、林希か官を削り、從て揭州に知たり、中丞豐稷京か姦狀を論す、帝未た納れす、臺諫陳瓘江公望等相繼て之を言ふ、帝亦た聽かす、稷曰く、京朝に在ては、吾か屬何の面目あつて此に居らんや、力（ツト）めて之を論す、始て出して永興軍に知たり、言者已ます、乃ち職を奪ひ杭州に居る、卞は安石か婿なり、瓘人に語て曰く、人を射るなら先つ馬を射よとは、馬は大にして人は小なれはなり、賊を擒にせは先つ王を擒にせよとは、王は賊王を云ふ、連疏して之を攻むこと甚力さむ、曾布初め尊惇に附し、凡そ惇か爲す所多く布か建白する所、同當を得さるに及びて始て惇と異なり、帝位に即くに及んて、銳意治を圖る、忠讜を延進す、布因て紹聖の人な力排して、而して惇之を去る、既に相に拜す、其弟翰林學士肇嫁を引て出て、陳に知たり、布に言て曰く、兄弟責を得る、當に普人を引て用し、正道を翊て以て惇卞の復起の萌を杜くべしと、而して數月以來、爾ぶ所端人吉士迹を繼て朝を去る、進む所は以て輔佐侍臺諫、往往皆前日惇卞に率る者と爲す、一旦勢異なるも今日必す首として之を引て以爲らく位を固するの計と、之を思ふに慟哭を爲す可し、異時惇卞縱ひ

（未た至らさるも、一蔡京以て二人を兼ぬるに足る、深く慮らさるべけんや、布從ふ能はす、十一月詔して改元す、時議元祐紹聖を以て均しく失ふ所あり、大公至正を以て朋黨を消釋せんと欲す、遂に詔して明年の元を改て、建中靖國と爲す、是に由て邪正雜進す）○上意專欲紹述熙豐之政。而曾布微有兩存熙豐元祐之意。故建中靖國。初嘗署變章惇蔡卞所爲。既而布迎上旨。正人任伯雨江公望陳瓘等。不容於朝。小人雖各有黨。更迭出入。意向則同祖安石而已。○遼主弘基殂。號道宗。孫延禧立。號天祚。○女眞阿骨打立。女眞本名朱里眞。肅愼之遺種。而渤海之別族也。或曰。本姓拏。辰韓之後。三國志所謂挹婁。元魏所謂勿吉。唐所謂黑水靺鞨者。其地也。有七十二部落。本不相統。自太中祥符以後。絕不與中國通。有生女眞者。其類猶繁。其酋曰巖版。有孫曰楊哥太師。遂雄諸部。或曰。楊割之先。新羅人。完顏氏。女眞妻之以女。生子三人。長曰胡來。傳三人而至楊割。阿骨打其子也。爲人沈毅有大志。

◉〔解釋〕建中靖國（四字の年號）女眞（女眞は遼に臣たり、興宗の諱を避て女直と改む）渤海之別族也（案に、金史に、渤海は本と靺鞨なり、靺鞨に粟末黑末の二部あり、唐の睿宗の先天二年に、使を遣して粟末の靺鞨の酋長祚榮を拜して、渤海郡王と爲す、此より初て靺鞨の號を去りて、專ら渤海國と稱す、五代の時、契丹渤海を滅す）完顏氏（完顏は漢に王と言ふか如し）辰韓（東夷に馬韓辰韓辨韓あり）元魏（元氏北魏）生女眞（大金志に、混同江の南に在る者を熟女眞と曰ふ、其契丹に服屬するを以てなり、江の北に居る者を生女眞と曰ふ、亦た契丹に臣たり）新羅（國は東夷にあり）三人（三人は當に三世に作るべし）

◉〔講義〕（任伯雨、惇か久しく朝柄を竊む、國を迷はし上を罔す、縉紳に遊流す、先帝變故倉卒を承け、異志を逞すことを向には其計をして行を得せしめは、將に陛下と皇太后とを何の地に置かんとす、若し貸して而して誅せすは、則ち天下大義明ならす、大法立たゝす、臣聞く此日使して言ふ、去年遼主食に方て、中國惇を黜くと聞き、箸を投て起

（ち善と稱する者再ひ、南朝錯て此人を用ゆと、北使も又問ふ、何爲れぞ只是の若く行ひ遣ると、此た以て之を觀れは、獨り孟子の謂ふ所國人皆殺す可しと曰ふのみならず、蠻貊の邦と雖とも以て殺す可しと爲さゞるなし、章八たひ上る、未た報せず、會〻臺諫陳瓘陳次升等復た極て之を論す、乃ち惇を貶して雷州司戸參軍と爲す、時に韓忠彦首相と雖とも、而して曾布政を專らにす、漸く紹述の説を進む、中丞趙挺之を颺して元祐の諸臣を排撃す、范純禮從容として帝に言て曰く、邇者朝廷の命令元豐を是として而して元祐を非とせざるなし、臣を以て之を觀れは神宗法を立るの意固より善し、吏之を推し行ふ、或は當を失するあり、以て民を病しむるを致す、宣仁聽斷して一時小しく潤色あり、蓋し大臣議見異同、必す盡く邪を懷きて私を爲すに非る也、今議論の臣志を得ざるあり、故に此を挾んで口を藉り、其心豈は國事を憶んや、直に私忿を快くし以て其姦を逞らんと欲す、深く察せざる可からざる也、純禮沈毅剛正、曾布之を憚る、駙馬都尉王詵に謂て曰く、上君を承旨に除せんと欲す、范右丞可かず、詵怨る、會詵遼使を館す、純禮宴を主とす、詵其語御名を斥すと誣ゆ、遂に罷て潁昌府に知たり、陳瓘議論平を持す、務て大體を存す、細故を以て口を藉かず、未た嘗て人の暗昧の過を言はず、權給事中に及んで、曾布客を使として告るに、將に冀に郎んとするを以す、其子正彙に語て曰く、吾丞相と事を議して多く合はず、今此の若し官爵を以て相餌せんと欲するなり、若し其職を受けは、復た異同あらん、則ち公議私恩兩なから愧るあらん、吾れに一書有り、其過を論じ將さに之を投じて以て去就を決せんとす、汝其れ之を審じ旦夕に持して書に入れ、布か使數入り、邀て相見る、甫て席に就き、邀に皆を出す、布大に怒る、爭辨時を移す、箕賜許語に至て、孔色變せず、徐に起て言て曰く、適論する所の者は國事是非公議あり、公未た遽に士を待するに禮を失す可からず、布黙然として容を改む、信宿にして擢を出て泰州に知たり、供奉官童貫性巧媚、善く人主の微指を窺ひ、事に先て順承す、故を以て幸を得たり、杭に留る累月、蔡京之と遊ぶ、晝夜を舍てず、凡そ蔡京か書く所の屏障扇帶の屬、貫日に以て禁中に達す、且つ詔言を附し帝所に奏す、是に由て帝意を屬して京を用ゆ、左階道録徐知常符水を以て元符皇后所に出入す、太博士范致虚之と厚し、因て京か才相とす可きを臨む、知潜宮に入て之を背ふ、是に由て宮妾宦官衆口一辭京を譽む、遂に京を知定州より起して大名に改む、會〻韓忠彦曾布と交惡し、布京を引き自ら助けんと謀る、乃ち召して翰林學士承旨と爲す、曾布紹述を主とし明年の元を改て崇寧と爲さんと請ふ、帝之に從ふ、洵武起居郎と爲る、嘗て對て言す、陛下乃神宗の子、今の相忠彦は乃琦の子、神宗新法を行て以て民を利す、琦嘗て其非を論す、今忠彦神宗の法を更む、是忠彦能く父志を繼くと爲す、陛下不能と爲すなり、必す志を繼ぎ事を述んと欲せば京を用ゐるに非れは不可なり、又曰く、陛下方に先志を紹述せは、群臣助くる者なし、乃ち愛莫助の圖を作り、以て獻ず、其圖史記年表の如く旁行七重を列す、別に左右を爲す、左を元豐と曰ひ、右を元祐と曰ふ、宰相執政侍從臺諫郎官館閣學校より各一重と爲す、左に紹述を序する者は執政中惟温益一人、餘は三四趙挺之范致虚王能甫錢遹の屬に過ぎざる而已、右は擧朝輔相公卿百執事なり、序して咸く在り、百を以て數ふ、帝出して曾布に示す、左方の一姓名を揭けて去る、布之を詰ふ、帝曰く、蔡京なり、洵武謂ふ、此人を相とするに非れは不可なり、意と同からざるを以て之を去る、布か曰く、洵武既に臣か見と異なり、臣安んぞ敢て與に諧せん、明日改て温益に付す、益欣然として奉行す、並に京を相とするを請ふ、而して異論を齢る者は逐に於て、善人皆容れられずして、而して帝意を決して京を相とす、乃ち洵武を中書舍人給事中兼侍讀に進む、姓名を籍記す、文彦博等凡て一百一十九人）

○建中靖國。一年而改崇寧。韓忠彦罷。再追奪司馬光等官。籍元祐黨人。○曾布罷。蔡京爲相。蔡卞執政。再貶竄元祐人。立姦黨碑。京自崇寧爲僕射。歷大觀政和重和。爲大師。嘗暫罷。輒復入。雖罷之日。實執國命。其間趙挺之張商英作相。嘗與京異。然在位各不過數月。或一年而罷。如何執中鄭居中劉正夫余深。雖在相位。或久或淺。居中亦與京異。常相排。正夫亦小異。然於京之權寵無損也。京子攸之婦出入宮禁。攸遂大用。至父子權勢自相軋。上寵攸而尊京。子弟親戚滿朝。皆其父子之黨。京倡邪說。以爲當豐亨豫大之運。專以奢侈勸上。窮極土木之功。廣京城。修大內。盛築西苑。鑄九鼎。鼎成。以九州水土納鼎中。及奉安北方寶鼎。忽水漏于外。作大晟樂。作玉清神霄宮。崇信道士林靈素。策上爲教主道君皇帝。作延福宮。作保和殿。作萬歲山。以朱勔領花石綱。奇花異木怪石珍禽奇獸。無遠不致。民間一花一木之妙。輒令上供。有一花費數千緡。一石費數萬緡者。二十年間。山林高深。麋鹿成群。改名艮嶽。又爲村居野店酒肆青帘於其間。每歲冬至後。即放燈。縱令飮博。

謂之先賞元宵。◉〔解釋〕籍元祐黨（尋て、詔す、其子孫官あるも官なきも、並に闕に列するを得ず、又詔す、宗室其子孫及び服親ある者も、婚姻を爲すを得ずと、）立姦黨碑（蔡京自ら姦黨を書し、大碑を爲り、郡縣に頒つ、監司長吏の輩をして皆石に刻せしむ、長安の石工安民あり、字を鐫るに當て、辭して曰く、民愚人、固より碑を立るの意を知らず、但司馬相公の如きは、海內其正直を稱す、今之を姦邪と謂ふ、民刻するに忍びずと、）排擯軋（輾ろなり、）爲豐亨豫大之運（豐は卦の名、豐盛の義なり、易に曰く、豐は亨る、王之に假る、豫も亦卦の名、豫樂の義なり、易に曰く、豫の時と義と大なるかな、蓋し豐豫の二卦の名に因て、邪説を倡作して以爲らく、財物豐盛なれば則ち奢侈を極めて吉なり、時世豫樂なれば所欲を逞して吉と、）鑄九鼎（宋鑑に、魏漢津議して鼎を制す、各以て八方に奠く、蒼を東方と曰ひ、形を南方と曰ひ、晶を西方と曰ひ、寶を北方と曰ふ、魁を東南と曰ひ、阜を西南と曰ふ、牡を西北と曰ひ、風を東北と曰ふ、凡て八にして、而して中を帝鼎と曰ふ、皆な九州の水土を以て之を納る、）忽水漏（此れ其後北方亂を致して兆を登く、）大晟樂（學校に先聖を祭るの樂、）神霄宮（初の名は玉清和陽宮、即ち福寧殿誕生の所、後改めて神霄宮と名く、）道君皇帝（策は玉冊也、尊號を上るの稱なり、徽宗を策立して道家の教主と爲す、道君皇帝と號す、）以朱勔領花石綱（舟汴の相繼て一運を一綱と爲す、帝時に浙中の珍異を取て以て進む、初て黃楊三本を致す、帝之を嘉す、後ち歲歲增加して五六品を貢す、是に至て漸く盛なり、舳艫淮汴に相銜む、花石綱と號す、）麋鹿（鹿の大を麋と曰ひ、小を鹿と曰ふ、）艮嶽（萬歲山を改めて艮嶽と爲す、又曰く、山艮の方に在り、故に艮嶽と名く、）帘（音簾、酒旗、）飲博（飲宴博奕、）謂之先賞元宵。（元宵は上元の宵なり、正月十五日を上元と曰ふ、是夜都城燈を張る、事物紀原に云ふ、史記樂書に、漢家正月上辛を以て太一を甘泉に祀る、昏時を以て祀て明に至る、徐堅謂く、今人正月の望夜遊して燈を觀る、是其の遺事なり、）

◉〔講義〕韓忠彦相と爲る、流人を召し還す、忠讜の士をとし、張庭堅、陳瓘、鄒浩、龔夬、江公望、常安民、任伯雨、陳君錫、張舜民等、皆臺諫に居る、然進用して稱して人を得ると、然れども曾布と協はず、是に至て左司諫吳材、右正言王能甫、布に附き、忠彦神考の法度を變ずるを論ず、神考の人材を逐ひ、遂に罷て大名府に知たり、元祐并に元符の黨人を稱す、乃ち碑忠彦嘗て任する宰相安燾、曾て任する執政王覲、豐稷、見任の侍從官外、蘇轍、范純禮、劉奉世等、凡て五十餘人、閏六月、曾布免す、布、蔡京と素と隙あり、事を議する多く合はず、會布婿夫陳佑甫を擬して戶部侍郎と爲す、京、曾布其所親に私すと、布忿然爭辨久し、色俱に勵し、溫益之を叱して曰く、曾布上前安んぞ禮を失するを得んと、帝悅びず、殿中侍御史錢遹言ふ、布元祐の姦黨を援け、紹聖の忠賢を擠すと、是に於て布罷んと請ふ、出して潤州に知たり、秋七月、京を以て尙書右僕射兼中書侍郎と爲す、時元禍、元符の末、群賢貶竄死徙略盡す、蔡京獨り未た嘗て懲はす、乃り其客强浚明、葉夢得と謀ひ、元祐人を貶竄す、乃ち姦黨の碑を立つ、是より先き、蔡京又自ら姦黨を書して大碑を爲し、郡縣に頒つ、監司長吏の輩をして皆石に刻せしむ、長安の石工安民あり、字を鐫するに當り、辭して曰く、民刻するに忍びざる也、府官怒て之に罪を加へんと欲す、民泣て曰く、役せらるゝは敢て辭せず、安民の二字を石末に鐫せんを免れん、恐くは罪を後世に得んと、聞く者之を愧づ、夏六月、熙寧元豐の功臣を顯謨閣に圖す、辟雍初て成る、荊國公王安石を詔して孟軻以來より一人而巳、其以鼎成ろに聖享し、位孟軻に次ぐ、吏部尙書何執中、學殿を開き、都人をして縱觀せしめんと請ふ、九て孔子九成宮を奉安し、蔡京を以て定鼎禮儀使と爲す、帝宮に幸し、酌獻の禮を行ふ、各一殿、中央を帝鼎と曰ひ、北を寶鼎と曰ふ、東を牡鼎と曰ふ、東北を蒼鼎と曰ふ、東南を岡鼎と曰ふ、南を彤鼎と曰ふ、西南を阜鼎と曰ふ、西を晶鼎と曰ふ、西北を魁鼎と曰ふ、時に新樂を制す、亦た名を大晟と名く、大晟府を置き官屬を建つ、九月帝賀を大晟殿に受く、帝の九成宮に幸するや、酌獻北方の寶鼎に至て鼎忽ち破る、水流て外に溢る、或は以て北方亂を致すの兆と爲す、詔して元祐黨人を近地に徙す、[illegible]旬に至るを得す、是より先き蘇州の人朱沖なる者あり、其子勔と俱に蔡京に給事す、帝頗る意を花石に垂る、京沖を誣して密に浙中の珍異を取て以て進む、初め黃楊三本を致す、帝之を[illegible]、後歲歲舳艫を增加して淮汴に相銜む、花石綱と號す、乃ち勔に命して應奉局及ひ綱を領す[illegible]して内帑に取る、蘊中の物の如くす、取に數百萬を以て計す、是に於て臘を換り、蔽を剔り、幽隱置かず、凡そ士庶の家、一石一木稍く玩に堪たる者は、即ち健卒を領し、直に其家に入り、黄封表識を用ひ護して之を視せしむ、敵しく躡まとれは即ち被るに大不恭の罪を以てす、發行に及ぶ、必す屋を撤し牆を抉して以て出づ、人不幸にして一物も小異あれば、共に指して不祥と爲す、惟之を芟除するの速らざるを恐る、民是役に預る者は、中家は產を破り、或は子女を鬻賣るときは、以て其須に供す、山を斷なり、石を發する、程督愴刻、江湖測らざるの淵に在りと雖とも、百計之を取る、必す得て乃ち止む、諸工栿師勢に倚り貪橫、州縣を凌轢す、道路目を以す、丙戌五年春正月、彗星西方に出づ、長と天を竟ふ、詔して直言を求む、

○時星甚屢見。地震河決。怪異迭出。率以爲常。京等誣奏。甘露降。祥雲現。飛鶴蔽空。竹生紫花。芝草產于艮嶽及諸州。連理木。雙花芙蕖。芍藥牡丹。至臘月雷。三月雪。皆稱瑞表賀。○內侍童貫梁師成用事。師成專務應奉。以蠱上心。勢焰薰灼。竊威福於中。童貫專務開邊。生事於外。皆與蔡京父子相表裏。○女眞阿骨打。以重和元年戊戌稱帝。初遼主天祚。刑賞僭濫。荒於禽色。歲索名鷹海

東青於女眞。女眞與其隣東北五國戰鬪。乃能獲此禽以獻。不勝其擾。阿骨打遂叛。攻陷混同江東之寧江州。遼遣將討之而敗。又起中京上京長春西遼四路兵並進。獨淶流河一路。深入大敗。三路皆退。女眞悉虜遼東界。熟女眞鐵騎益衆。天祚親征復大敗。女眞乘勝。并渤海遼陽五十四州。又度遼西降五州。阿骨打遂建號。改名旻。國號大金。明年破遼上京。

◉【解釋】連理木（本を異にし幹を連ぬるなり）雙花芙渠（芙渠は蓮なり、首を異にし帶を連ぬるを雙花と曰ふ）禽色（禽獸と女色と）海東青（五國の東大海に接す、名鷹を出す、海東より來る者之を海東青と謂ふ）五國（五國は女眞と相去る千里、五國は其國の名なり）乃能獲此禽以獻（金史に女眞甲馬數百人を發して五國の界に至り、巣穴に即て之を取る、往往爭戰して而して此禽を得たり、一說に五國は鐵勒、蹟訥、玩突、怕烈、咬里没なり）獨淶流一路（一路は即ち四路の一、獨り一路の兵、淶流河に至る者を謂ふなり）混同江（水は咸平府長白山より出づ、下流未だ詳ならず）寧江州（丹の東北の隅に在り）將（海州の刺史高仙壽なり）中京（遼陪にあり、今の大寧府なり）淶流河（源流、未だ詳ならず）國號大金（阿骨打の居る所、金水の上なり、因て金の堅固なるを取て國を建て大金と號す、金水、一に按出虎の水と曰ふ、其國語金を謂て按出虎と謂ふなり、又曰く、惟金は變せず壞はれず、金の色白し、完顏色白を尚ふ、況や居る所をや）

◉【講義】時に彗星芒光屢見る、地は震動し、河は決裂し、怪妖異變迭ひに出て、突る露は蔽れ率れ以て甚しと爲す、然るに蔡京等の姦人諛ひて奏聞す、甘露が降り、祥雲ゝ現る、飛鶴は空に蔽ひ、蔽くし竹に紫の花を生ずる、其他種々皆な瑞と稱し表賀す、帝然りと爲す、星變を以て殿を避け膳を損す、劉逵元祐黨人碑を碎き上書邪籍の禁を寬せんと請ふ、帝之に從ふ、夜半黃門を遣り朝堂に至り石刻を毀つ、翌日蔡京之を見て聲を勵しくして曰く、石は毀つ可し、名は滅す可からずと、尋て太白晝見る、赦して黨人一切の禁を除く、詔して崇寧以來左降する者は存沒を問ふなく稍其官を復す、盡く諸に徙す者を還す、京姦を懷き黨を植つ、紹述の名に託して法制を紛更す、群賢を貶斥して財利の政を增修す、務めて侈靡を以て人主を惑はす、周官惟王不會を以て說を爲す、彗星見るに及んで帝其姦を悟る、凡そ建置する所一切之を罷む、而して京を免じて中太乙宮と爲す、京師に留らしむ、京其黨をして帝に進言せしめて曰く、京の法度を改むるは皆上に稟けて私に之を爲すに非ず、今一切皆罷む、恐らくは紹述の意に非ずと、帝其說に惑ひ、復た京を用ゐるの心あり、是に於て京か御史余深石公弼劉逵專恣反覆、邪黨を引用するを論す、出して亳州に知たり、大觀元年春正月、蔡京を以て尚書左僕射兼門下侍郎と爲す、又蔡攸を以て京の長子龍圖閣學士兼侍讀と爲す、夏五月、蔡薿を以て給事中と爲す、蔡京且つ復た用らるゝ即ち疏對して曰く、熙豐之業、以て天に配するに足る、不幸之に繼ぐに元祐を以てす、紹聖の績、以て永く賴るに足る、不幸にして之に繼ぐに建中靖國を以てす、是に於て擢て第一と爲す、對策を以て天下に頒つ、甫て褐を解く、即ち秘書正字に除す、未だ年を踰えずして侍從に至る、此より先き未だあらざるなり、九月、故直秘閣程頤卒す、頤學に於て窺はざる所なし、其學誠に本く、大學論語孟子中庸を以て標指と爲す、而して六經に達す、動止語默一に聖人を以て師と爲す、卒に孔孟不傳の學を得たり、諸儒の倡を爲す、易春秋を著し、平生人に誨て倦まず、故に學者其門に出る最も多し、淵源の漸する所皆名士と爲る、而して劉絢、李籲、謝良佐、游酢、張繹、蘇昞、呂大臨、呂大鈞、尹焞、楊時、成就尤も著はる、世頤を稱して伊川先生と爲す、卒年七十五、初遼主春州に如き、混同江に幸す、釣魚す、生女眞の酋長千里の內に在る者は故事を以て皆來朝す、適魚頭宴に遇ふ、遼主諸酋に命して次第に起て舞ふ、阿骨打に至て不能を辭す、但端立直視す、遼主之を喩す、再三終に從はず、他日遼主密に北院樞密使蕭奉先に語して曰く、阿骨打雄豪常ならず、托するに邊事を以てし之を誅す可し、否ざれは則ち必らず後患を貽さん、奉先曰く、彼は麤人、禮義を知らず、且つ大過なくして而して之を殺さば、恐らくは向化の心を傷らん、若し異志あらは、蕞爾たる小國、亦た何ぞ能く爲さん、遼主乃ち止む、阿骨打歸て遼主の異志あるを疑ひ、且つ遼主淫畋、國政を恤へざるを以て、遂に兵を稱けて先つ旁らの近族を幷す、是に至て節度使烏雅東死す、阿骨打位を襲く、都勃極烈と爲す、都勃極烈は官長なり、遼使阿息保往て之に謂て曰く、何故に喪を告げざる、阿骨打曰く、喪あり弔する能はず、而して乃ち以て罪と爲すか、四年冬十月、女眞阿骨打遂に叛す、寧江州を取る、遼主寧江州陷ると聞き、乃ち司空蕭嗣先を以て東北路都統と爲し、蕭撻不也之が副たり、兵を帥て出河店に屯す、阿骨打衆を帥て來り禦ぐ、未だ混同江に至らず、會夜阿骨打方に枕に就く、若ち其首を扶くる者あらんと、三たひ寐て而して起て曰く、神明我を警しむるなり、即ち鼓を鳴らし燧を擧て而して行く、黎明混同江に至る、遼兵と遇ふ、會々大風起る、塵埃天を蔽ふ、阿骨打風に乘じて奮擊す、遼兵潰ゆ、將士多く死す、其免るゝを得る者十有七人、遼人嘗て言ふ、女眞兵萬に滿れば則ち敵す可からずと、是に至て始て萬に滿ると云ふ、五年春正月、女眞完顏阿骨打帝と稱し、國を金と號す、阿骨打既に屢々遼に勝つ、其弟吳乞買、將佐を率ひて其の帝と稱するを勸む、阿骨打遂に正月朔に於て皇帝の位に卽く、且つ曰く、遼は賓鐵を以て號と爲す、其堅きを取るなり、賓鐵堅しと終に亦た變壞せん、惟金は變せず壞はれず、金の色白し、況や居る所按出虎水の上なるをや、是に於て國を大金と號す、收國と改元す、名を旻と更め、吳乞買を以て諳班勃極烈、撒改斜也と爲す、國論と爲す、勃極烈は其國語なり、金を謂て按出虎と爲す、尊大を謂て諳班と爲す、國相を謂て國論斜也と爲す、

◯高麗來求醫。上遣

二醫往還。奏實非求醫。乃彼知中國將與女眞圖契丹。謂苟存契丹猶足爲中國捍邊。女眞狼虎。不可交。宜早爲之備。上聞之不樂。○上嘗微行都市酒肆妓館。正字曹輔上言。編管郴州。○童貫自崇寧間與王詔之子。領兵復湟州。任責措置邊事。已而復鄯州廓州。貫遂建節爲宣撫。既得志於西邊。遂謂北邊亦可圖。政和初。乃自請奉使覘遼國。有燕人馬植者陳滅燕之策。貫挾以歸。更姓名趙良嗣。復燕之議遂起。政和末。有漢人泛海來。具言女眞攻遼事。重和春。乃用蔡京童貫議。遣馬政由海道至阿骨打所居阿芝川淶流河。與議共攻遼。阿骨打遂遣使來。宣和初至京。詔京貫諭以夾攻取燕之意。差軍校呼慶送其使。由海道歸國。是歲王黼爲相。力贊攻遼之策。及呼慶復與金使來。時阿骨打在上京。遂遣良嗣往約金國取遼中京。本朝取燕京。歲幣如與遼之數。良嗣曰。燕京一帶則幷西京是也。金王亦許之。以札付良嗣。期以女眞兵自平地松林趨古北。南兵自白溝夾攻。良嗣歸。馬政復與子擴持國書往。訂彼此兵不得過關。未幾金使復來。又以國書就付其使歸國。時淮南京西河北江南相繼盜起。山東宋江方就招安。睦寇方臘連陷浙郡。中都爲震。童貫甫平方臘而北事作矣。金人悉師度遼。趨中京攻陷之。中京者故奚國也。遂引兵至松亭關。以與宋有各不過關之約止。引兵由其西而過。遼主先已引避。或言。金前鋒將至。遼王震驚。亟奔雲中入夾山。時燕王淳守燕。蕭幹立淳爲主。宋童貫蔡攸。帥師東路至白溝。西路至范村。蕭幹迎戰甚力。宋師敗退。耶律淳死。宋師再擧。遼涿州將郭藥師領常勝軍來降。宋兵五十萬進駐盧溝河。蕭幹拒之。藥師間道襲燕。幹還救死鬪。藥師屢敗。僅以身免遁還。盧溝之師遂潰。貫攸懼無功獲罪。時金主在奉聖州。乃遣客禱金主圖之。金主分三道進兵。遂入居庸關。燕降於金。金使來言。燕京以金兵攻下。其地與宋。租稅當以輸金。宋使趙良嗣往議之。許歲幣如契丹舊數。外更以百萬代租稅。而併求雲中之地。金人僅以燕京涿易檀順景薊六州來歸。貫攸入燕。燕之金帛子女職官民戶。金人席卷而東。所得空城而已。貫攸歸。以王安中知燕山府。詹度郭藥師同知。

◉〔解釋〕編管（編籍して罷官す、）湟（湟州は甘肅に屬す、）廓（廓州は甘肅に屬す、）更姓（更は音庚なり）復燕議（燕雲の役を復する者は、初めは則ち童貫志を西邊に得たり、遂に謂く北邊も亦た圖る可しと、繼て而して趙良嗣來歸す、獻する所燕を取るの策を以す、徽宗之を如何して喜ひさらん、夫れ豈に天下久しく安土、戰に習はざるを知らん、白溝の敗、金人の笑ふ所と爲る、遂亡て而して中國の憂始て大なり、）漢人（高藥師、）阿芝（阿は烏何の切、）遣使（李善慶）京貫（蔡京、童貫）呼慶（呼は姓、慶は名、）燕京（即ち幽州、）西京（即ち大同府、）古北（關は順州の北にあり、）白溝（涿州の南にあり、安肅を去る十五里、亦た巨馬河と名く、宋と遼人と界を分つ處、源流未た詳かならずと、）擴（音廓）幾（字の如し、）睦（州は江浙に屬す、今の建德府、）松亭（關は[illegible]州の北に在り、）雲州（郡の名、即ち西京、）燕王淳（遼の親王、）常勝軍（涿州人號して、常勝軍と曰ふ、）盧溝（河は北平に在り、其源代に出つ、小黃河と名く、奉

（聖州より、宛平の境に入り、北平に至り、東流して海に入る。）遣客（王環）進兵（粘罕は南暗口に趣く、撻懶駙馬は、北牛口に趣く、阿骨打は居庸關に趣くなり、）居庸（關は北平府昌平縣の西にあり、）景（河東に屬す、）燕山府（即ち燕京、）詹度郭藥師同知（詹は姓、度は名なり、同知は同知府なり、續文獻通考に、同知は知府の貳、）

【講義】高麗の人か、宋に來て、善き醫者を求て、國の病者を治療せんことを請ふ、因て宋の皇帝か二人の醫者を遣り、高麗に行かしむ、二人の醫者か宋に還て奏聞す、高麗實は醫者を求めに來るにあらず、乃ち彼の高麗は、我中國の女眞と契丹伐たんとするを知て、彼れ謂ふ、若し契丹を存在せは、また中國の爲めに邊隔を捍禦するに足らん、女眞は狼虎の如く只〻強暴にして信義を知らず、故に女眞とは決して交際す可らず、故に宜く早く女眞の爲に備を爲す可しと、皇帝之を聞て樂まず、徽宗嘗て都の市の酒屋の妓女の樓に微行す、正字曹輔諫言す、乃ち怒て郴州に編籍して竄管となす、童貫と云惡人か、崇寧の間たより王厚と兵を領し湟州を取りて還す、貫自ら專らに邊郡の戰事を措置と取締めるとを以てす、もはやすると、鄯州廓州を取り還す、貫遂に旗印を立て、宣撫使と爲り、又既にして志を西邊に得て、遂に思ふには、北邊も亦た充分に圖る可んと、安く考へ、政和の初、乃ち貫自ら請て、使を率して遼の國を覦ふ、燕人に馬植なる者あり、貫に向て燕を滅すの謀略を陳ふ、故に貫喜て馬植を挾み伴れ歸る、乃ち宋の姓を分て趙良嗣と更む、因て燕を復するの議遂に起る、政和の末（我鳥羽帝に當る）漢人高藥師海に舟を泛て來る、具に女眞の遼を攻むるの事を以て之を宋朝に言ふ、重和は政和に次ぐ、其春乃ち蔡京童貫か論議を用て、馬政と云ふ人を金に遣はし、海道より阿骨打か居る所の阿芝川（涞流河と云ふ）所に至らしめ、女眞と共に遼を攻め滅さんことを議す、阿骨打も亦た遂に使を發して宋に來しむるとあり、宣和の初、重和に次く、漸く宋京に至る、皇帝乃ち蔡京童貫に詔して女眞を驗すに、金と挾み攻て燕國を取るの宜を思を以す、乃ち宋よりも軍校の呼慶と云人を遣り、金の使を送らしむ、故に金使は海道より金國に歸る、是歲宣和初宋朝では王黼を相と爲し、滿朝力めて遼を攻むるの策畧を變成する、上て問にもなく、呼慶も復た金の使と歸り來る時に、金の阿骨打上京に在り、因て宋よりも趙良嗣を尋て京にも遣り往かしむ、金と約束す、金國は遼の中京を取り、宋朝は燕京を取らんと、宋より金に與ふるに歲幣は遼に與ふるの數の如くせんと、趙良嗣か曰く、燕京一帶は則ち四京を併て是也と、金主も亦た之を許す、札に書して其に付す、約束するに、女眞の兵は平地松林より古北の方に趣き、宋兵は白溝より挾み攻ると云ふを以て堅く契約を爲す、因て良嗣歸る、馬政再び子擴と宋國の書簡を持し往て曰く、彼此の兵關門を過るを得ざるを罰正ず、其事終り、未た幾日も立たざるに、金の使ひ復た再ひ來る、又宋より國の書を持して客舍に就て金使に付して金國に歸らしむ、時に淮南京西河北江南に盜賊相繼て起る、山東の宋江は及時雨（きうじう）と號す、梁山伯の大將なり、招安に就く、是より先き淮南の盜宋江三十六人を以て河朔に橫行す、南京東路郡を轉掠す、官軍敢て其鋒に嬰るなし、知亳州侯蒙上書して言ふ、江等必す人に過たる者なし、若かず之をさんには、又賠の寇方臘運りに潛郡を陷る、中都爲に叢ふ、帝侯蒙に命して東平府に知らしむ、未た赴かずして卒す、又た張叔夜に命して海州に知らしむ、叔夜間者をして向ふ所を睨はしむ、江遥海濱に趨く、鉅舟十餘を劫ず、齒獲を戰す、叔夜死士を募て千人を得て伏を設て城に近く、而して輕兵を出して海に距て之を誘ひ戰ふ、先つ壯卒を海旁に匿し、兵の合ふを伺ひ火を擧け其舟を焚く、賊之を聞て闘志なく、伏兵之に乘し其副賊を擒にす、江乃ち降る、其時童貫甫て方臘を平て、而して北事作る、金人師を悉くして遼を度り中京に趣き至り、中京を攻め陷る、中京者故との契國なり、遂に其兵を引て松亭關まて至る、先きに宋と彼此地の關を過て入らざるの約束あるを以て止て進ます、乃ち兵を引て其西方よりして過く、遼主は先にもはや兵を引て避るに、或人か言ふには、金の前鋒かろ將至んとすと、遼主之を聞て驚ひ路き蕭かに雲中に逃け奔り夾山に入る、時に燕王淳（燕國を守る）遼の親王なり、時に燕を守る蕭幹淳を立て主と爲す、宋の童貫蔡攸兵師を師て東路より白溝に至り、西路より范村に至る、蕭幹宋の師を迎へて戰ふ、甚た力とむ、宋の師敗れ退く、耶律淳戰死す、宋の師再ひ兵を擧く、時に遼の涿州の將郭藥師常勝軍を領す、（常勝軍）は涿州、乃ち來て宋の師に降る、宋兵五十萬退て盧溝河に駐る、諸將蕭幹之を拒く、先に宋に降る郭藥師宋の爲に間道より燕を襲ふ、蕭幹還て救て死闘す、郭藥師蕭幹と戰て蹙敗續す、僅に身を以て遁れ還る、盧溝に駐るの師遂に將を棄てゝ潰す、童貫蔡攸罪功なくして歸て罪を獲んを懼れ怖て如何せんを謀る、忽ち思を案し擧ひ、時に金主奉聖州にあり、其に因て王環を遣し金主に至を亡すを圖るを求む、乃て金主三道を分て兵を進む、粘罕南暗口に趣き、撻懶駙馬は北牛口に趣き、阿骨打は居庸關に趣く、遂に居庸關に入る、燕金に降る、金の使宋に來て言ふ、燕京は宋の兵を以て攻て降す其地宋に與へんか、其國より出す租稅は常に以て金に輸し取るへしと、宋の使趙良嗣往て之を論議す、金に歲幣を許すこと契丹に與ふる數の如くす、發數の外に更に百萬を以て其租稅に代へ、而して併せて雲中の地を求む、金人僅に燕京涿易檀順景薊の六州を以て宋に送る、故に童貫蔡攸燕に入る、燕の金帛子女職官民戶、金人か席を卷くか如くして、而して東に歸る、宋人の得る所は空城のみ、童貫蔡攸歸る、乃ち王安中を以て燕山府に知らしめ、詹度と郭藥師と同知たり、

○有星如月。徐徐南行、而落。光照人物。與月無異。○修神保觀。其神都人素畏之。傾城男女負土以獻。名曰獻土。又有飾作鬼使、催納土者。上亦微服觀之。後數日旨禁。○京師河東陝西地震。宮中殿門搖動、且有聲。蘭州草木沒入。山下麥苗乃在山上。○金國無城郭宮室。用契丹舊禮。如結綵山作倡樂。鬭雞擊鞠之

戲。與中國同。但於衆樂後。飾舞女數人。兩手持鏡。類電母。其國茫然。皆茇舍以居。至是方營大屋數千間。盡倣中國所爲。○兩京河浙路。災異疊見。都城有賣青菓男子。孕而誕子。又有豐樂樓酒保朱氏。其妻年四十。忽生髭髯。長六七寸。宛一男子。詔度爲女道士。○河北山東盜起。連歲凶荒。民食楡皮野菜。不給。至相食。饑民並起爲盜。有張仙者。衆十萬。張迪衆五萬。高托山衆三十萬。自餘二三萬者。不可勝計。

◉〔解釋〕其神（俗に謂て二郎神と曰ふ）使（去聲）旨禁（旨あつて、納を禁す、）結綵山（綵を結て山を爲す、）倡樂（倡匠の樂なり、）闘雞（筌蹄に、雞を蓋て其闘を看る、）撃鞠（革を以て之を爲す、內實るに物を以し、撃打して以て戲と爲す、今之を毬子と謂ふ、鞠は菊の入聲、）兩手持鏡類電母（三餘贅筆に、俗に雷電を呼て雷公電母と爲す、亦た本所あり、易に震を雷と爲し、離を電と爲す、震は長男陽なり、而して雷は天の陽氣より出つ、故に俗に雷公と云ふ、離を中女と爲す、陰なり、而して電は地の陰氣より出つ、故に電母と云ふ、）兩京（京東、京西、）見（音現、）稱男子（男子と稱する者、官辭なきなり、）豐樂樓（弘簡錄に、酒保の妻朱氏に作る、豐樂樓は酒樓の名、官之を市列に置て以て酒を貸る、酒保は酒家の醞匠なり、其醞造は、保信すべし、故に之を保と謂ふなり）詔度爲女道士（案に祠部をして度牒を給せしめて、其の女道士と爲るを許すを、之を度すと謂ふ、宋制にて道釋の二家課役を免する也、民乃ち課役を逃れんと欲して、濫りに僧尼道士と爲る者衆し、故に度牒の法を立てゝ以て之を禁す、度者蓋し僧家濟度の義に取る、）

◉〔講義〕是時星の出るあり、其光り月の如く徐徐として南に行て而して落つ、芒光は物を照す、月と異なるなし、是より先き、物あり、大さ鹿の如く、暁殿の上に見はる、而して神宗崩す、元符の末又見はる、哲宗崩す、大觀の間に至て漸く盛に見る、政和以來大に作る、毎に出て、列星搖き倒る、彗の若く、其形僅かに丈餘にして、彷彿龜の如く、黑氣之に蒙る、太ならずして了了たり、氣の及ぶ所、腥血四方に遍く、又或は人の形に變し、或は驢と爲り、晝夜出るに時なく、多く掖庭及內殿にあり、習ひ以て常と爲る、人亦た大に怖れず、又洛陽府畿內忽ち物あり、人の如し、或は犬の如く、其色正黑、層を擲せす、始夜より則ち小兒を掠めて之を食ふ、後ち白晝と雖も人家に入り患を爲す、至る所喧然安からす、之を黑漢と謂ふ、力ある者は、槍を執て自ら衛る、又神保觀を修覆す、其神は都人素より之を畏る、花街男女土を負て以て神に獻す、名けて獻土と曰ふ、又鬼使[illegible]

○金主稱帝。六年而殂。號太祖大聖武元皇帝。弟吳乞買立。改名晟。燕山之地。易州西北乃金坡關。昌平之西。乃居庸關。順州之北。乃古北關。景州之北。乃松亭關。平州之東。乃渝關。渝關之東。乃金人來路。凡此數關。天限蕃漢。得之則燕境可保。然關內之地。平灤營三州。自後唐爲契丹阿保機所陷。以營灤隸平爲平州路。得燕而不得平州。則關內之地。蕃漢雜處。而燕爲難保矣。遂張瑴守平州。金已遣人招瑴。瑴曰。契丹凡八路。今特平州存耳。敢有異志。既而乃以平州南附。宋遽納之。趙良嗣力爭以爲必招金兵。金人諜知。即襲平州。瑴陷之。得宋詔札。自是歸曲累檄取瑴。不得已。命王安中縊之。而函送其首。未幾。金太子斡離不。已由平州路。將入燕矣。宋方且遣人密誘天祚來降。以童貫宣撫兩河燕山路。將迎天祚。金人方退。天祚入陰夾山。不可得。

至是領衆南出。遂爲金人所敗。就擒。契丹自阿保機至天祚。九世而亡。時宣和七年乙巳歲也。是冬。金斡離不粘罕分道而南。斡離不陷燕山。郭藥師降之。金兵長驅而進。郭藥師爲前驅。童貫自太原逃歸。粘罕圍太原。太原帥張孝純歎曰。平時童太師作多少威重。乃畏怯如此。身爲大臣。不能死難。何面目見天下士。孝純以冀景守關。知朔寧府孫翊來救。兵不滿二千。與金人戰于城下。張孝純曰。賊已在近。不敢開門。觀察可盡忠報國。翊曰。但恨兵少耳。乃復引戰。金人大沮。再益兵。力不能敵。翊死焉。無一騎肯降。時王黼先一年已罷。而白時中李邦彥並相。皆鄙夫也。金兵來。時中但建出奔之策而已。上內禪。在位二十六年。改元者六。曰建中靖國。曰崇寧。大觀。政和。重和。宣和。太子立。是爲欽宗皇帝。

◉〔解釋〕昌平（昌平縣は、北平に屬す、）灤（音欒、河東に屬す、）詔札（宋朝の賜ふ所の手詔なり、）歸曲（宋の理の曲るを責る、）兩河（河東、河北、）就擒（金創て天祚を封して王と爲し、長白山に送り、城を築て之に居らしむ、）九世（遼の阿保機は、梁の均王貞明二年より始て元を建て、是に至て凡て二百一十年なり、）朔寧府（山西に屬す、即ち朔州なり、）觀察（唐の乾元の初め、採訪使を改て、觀察處置使と曰ふ、即ち今の提刑按察使也、孫翊時に此の職を兼ねたり、）內禪（位を太子に傳るを曰ふ、）建中（即位二年に改元す、）

◉〔講義〕金主阿骨打帝と稱し、六年にして而して殂す、太祖大聖武元皇帝と諡す、弟吳乞買立つ、晟と改名す、燕山の地は易州の西北は乃ち金坡關、昌平の西は、乃ち居庸關、順州の北は、乃ち古北關、景州の北は、乃ち松亭關、平州の東は、乃ち楡關、楡關の東は、乃ち金人の來路なり、凡そ此の上の數ヶ所は、天の蕃と、漢との境界を限る、故に此數關を得れは、則ち燕の境は保て晉地と爲る、然るに此關內の地にて平灤營の三州は、後唐の時契丹の主阿保機か爲めに陷られてより、灤營を以て平州に附歸す、故名で平州路と爲す、故に燕を得ても、而して平州を得ざれは、則ち關內の地は、蕃人漢人雜り居て、而して、燕は保ち難しと爲す、遼の臣張瑴平州を守る、金已に人を遣はして瑴を招く、瑴か曰く、契丹は凡て入路あるも、已に金の亡ず所となる、今特に平州存する耳、敢て異なる志しあらんや、と金に屬するの形勢を爲して、忽ち志を變して乃ち平州を以て南の方宋に歸附す、宋も亦た遣て此張瑴を納る、趙良嗣力めて不可なりとし之を爭ふて曰く、之を納れは以爲らく、必す金兵か怒て攻め來らんと、宋帝聽かず、金人誅忍の窺ひ知る、卽ち平州を不意に之を攻め陷る、[illegible]むて宋より張瑴に與ふる所の詔札を得たり、是より宋か金と約せしに背き、金の資を滑ぐゝり、張瑴か降を納るゝと、故に宋の仕方か枉曲して正しからずと、且つ張瑴の金を欺くを惡み、敵文を屬累れ、瑴を取て誅せんと責む、宋も道强に責られ已むを得ず王安中に命して張瑴を縊り殺し、而して其首を函に入れ之を金に送る、是宋の信なく燕遂に金の取る所と爲る所以なり、宋未た幾く程もなく、金の太子斡離不已に平州路より將に國に攻め入らんとす、宋方は且つ人を遣はし、密かに燕主天祚を誘ひ導き、宋に來り降らしむ、乃て童貫を以て河東河北[illegible]中靖國、崇寧、大觀、政和、重和、宣和、太子立つ、是を欽宗皇帝と爲す、

欽宗皇帝名桓。在東宮無失德。蔡京童貫輩。咸憚之。欲動搖不可。至是。即位。太學生陳東等。伏闕上書。乞誅蔡京童貫王黼梁師成李彥朱勔六賊。

以謝天下。彥以根括民田。破蕩百姓。結怨於河北京東西三路者也。勔以花石綱所在騷動。結怨於東南者也。靖康元年。首竄黼勔彥。尋皆殺之。○有狐升御榻而坐者。詔毀狐王廟。○上皇奔應天府。○以李綱爲行營使。定城守策。○除元祐黨籍。追贈范仲淹司馬光等官。○白時中罷。李邦彥張邦昌爲相。

◉〔解釋〕欽宗皇帝（名は桓、徽宗の太子、初め定王に封らる、金人入寇す、遂に內禪を受け、在位二年、遂に金に陷らる、而して汴宋亡ぶ、）括田（宋要に、政和六年、民の契券を案して、而して樂尺を以て打量し、其贏（アマリ）は則ち拘して官に入る、而して創て租課を立つ、之を公田錢と謂ふ、案に舊註の樂尺は大晟樂の尺なり、律呂に新嘗に、大晟樂尺は、徽宗皇帝の指の三節を三寸と爲す、唐に小尺大尺あり、小尺は十寸を以て尺と爲し、秬黍にて定を爲すなり、大尺は三尺二寸を以て尺と爲す、唐朝の遺る所なり、鐘律冠冕皆小なる者を用ゆ、此外官私悉く大なる者を用ゆるなり、宋の尺は唐の大小の尺に沿ふ、是に革て始て大晟尺を制す、玉海に官の小尺に比すれは短きこと五分有奇なり、）上皇奔應天府（舊註の河東、當に江東に作るべし、眞宗の朝に、宋州を陞て應天府と爲す、建てゝ南京と爲す、）

◉〔講義〕欽宗皇帝東宮に在て、德を失ふなく、蔡京童貫が輩咸く之を憚り懼る、之を動し、繼して太子の位を奪ひ、他の親王を立てゝ、已れ等が政を擅にせんと欲するも、動す可らず、遂に是に至て天子の位に即くの時に天下皆蔡京等が國を誤るを知る、而して事を用ゆる者多く蔡京が薦引を受く、故に肯て帝の爲に之を明言するなし、陳東諸生を擧て書を上て曰く、今日の事、蔡京前に壞亂し、梁師成內に陰賊す、李彥怨を西北に結び、朱勔怨を東南に衆む、王黼童貫又從て而して二虜に結び、邊隙を創開す、天下の勢危きこと累卵の如し、此六賊者、名は異なるも罪は同し、伏して願ふ陛下此六賊を擒にし、之を市朝に肆（サラ）し、四方に首して以て天下に謝せん、因て王黼を永州に竄す、李彥に死を賜ふ、並に勔と彥が家を籍す、朱勔を放ち田里に歸らしむ、黼雍邸に至る、盜之を殺す、狐が天子の御榻に登て坐する者あり、詔して狐王の廟を毀たしむ、帝斡離不が河を濟ると聞て、即ち詔を下して親征す、蔡攸を以て太上皇帝の行宮使と爲し、宇文粹を副使と爲し、上皇を奉して東行して以て敵を避けしむ、上皇亳州に如く、是に於て百官多く潜に遁る、初め童貫陝西に在り、長大の少年を募り、勝捷軍と號す、幾んと萬人、以て親軍と爲し、太原より京に還るに及んで、適上皇南幸す、貫即ち是軍を以て自ら上皇に隨ふ、浮橋を過く、衛士之を攀ち留て慟哭す、貫惟行の遂けさらんを恐て、親軍をして之を射せしむ、矢に中て踣るゝ者百餘人、道路流涕す、蔡京も亦た室を挈して南行し、自全の計を爲す、上皇鎮江に至る、李綱を以て尚書右丞東京留守兼親征行營使と爲す、京師戒嚴す、宰執議す、帝出てゝ襄鄧に幸して以て敵鋒を避けんと請ふ、李綱が曰く、道君皇帝宗廟を擧て以て陛下に授く、委てゝ而して之を去る可からん乎、帝默然たり、白時中謂ふ、都城守る可からず、李綱が曰く、天下城堞豈に都城に如く者あらん、且つ宗廟社稷百官萬民の在る所、此を捨てゝ何くに之かんと欲す、今日の計、當に軍馬を整飾し、人心を固結し、相與に堅く守りて以て勤王の師を待つへし、帝問ふ、誰か將たる可き者ぞ、白時中李邦彥等、必しも兵を知らず、然ども其位號を以て將士を撫し、以て敵鋒に抗するは乃ち其職なり、時中勃然として曰く、李綱能く兵に將たる、出てゝ戰ふ可きや否や、綱が曰く、陛下臣が庸懦を以せず、若し兵を治せしめは、願はく死を以て報せん、乃ち綱を以て東京留守と爲す、綱帝の爲に力めて去る可からざるの故を以す、且つ言ふ、明皇潼關の守を失ひ、即時に蜀に幸し、宗廟朝廷賊の手に毀たる、今四方の兵、日ならず雲集せん、奈何ぞ輕擧して以て明皇の覆轍を踏ん乎と、會內侍奏す、中宮已に行すと、帝色變し、倉卒御榻を下て曰く、朕留る能はずと、綱泣拜、死を以て之を邀ふ、帝綱を顧て曰く、朕今卿が爲に留て兵を治せん、敵を禦くの事、專ら之を卿に責む、疎戾を致す勿れと、綱皇恐して命を受く、宰臣猶ほ出幸を請て已まず、帝之に從ふ、綱朝に趨れば、則ち禁衛甲を擐し乘輿已に駕す、綱急に禁衛を呼て曰く、爾等宗社を守るを願ふ乎、幸に從ふを願ふ乎、皆曰く、願くは死守せん、綱入て見て曰く、陛下已に臣に留るを許す、而して復た行を被むるは何ぞや、今六軍父子妻拏皆都城に在て、死を以て守らんと願ふ、萬一道に中り散歸せは、陛下孰と與に衛るを爲ん、敵兵已に過り、乘輿未た遠からさるを知れは、健馬を以て疾く追はゝ、何を以て之を繫かん、帝感悟して止む、禁衛六軍之を聞て、悅ひさる者なし、皆拜伏して萬歲と呼ぶ、乃ち綱に命して行營使を兼ね、便宜を以て事に從ふ、城守の策を定しむ、元祐黨籍を除き、范仲淹司馬光等に官を復す、

○春正月。斡離不抵京師。先是。朝廷遣李鄴求和。斡離不携鄴以攻京城。不克。乃遣王汭與鄴偕來。邦彥等皆主和。惟綱欲戰。上是邦彥之計。遣鄭望之出使。未至而遇王汭。與俱入見。又遣李棁出使。棁又與金使偕來。金人需犒師金五百萬兩銀五千萬兩。牛馬萬頭。表段百萬匹。割中山河間太原三鎭地二十餘郡。且欲宰相親王爲質。遣張邦昌副康王如其營。金國太子與康王同射。連發三矢。皆中筈。金人謂是將家子非親王。遣歸。更請肅王爲質。种師道等諸路勤

王兵至。師道奏。京城周回八十里。城高數十丈。粟支數年。宜與城內劄寨拒守。俟困擊之。綱亦奏金以孤軍深入。如虎投檻。不可與角一旦之力。縱歸擊之。必勝之計。上然之。而李邦彦吳敏等專主和議。論不一致。虜有待汝議論定時。我已渡河之譏。未幾。統制官姚平仲。宵攻金營。不克。上大驚懼。廢行營。罷李綱。以謝金人。太學生陳東。及都人數萬。伏闕乞復用綱。得旨復右丞。充守禦使。衆乃散。金使復來。乃以割三鎭詔書遣使持往。時括在京金。僅得二十餘萬兩。銀四百餘萬兩。藏蓄已空。金人圍京城。凡三十三日。得割地詔。不俟金幣數足而退。种師道請臨河要擊之。綱亦以爲彼兵六萬。而我勤王之師二十餘萬。縱其半渡而擊之。必勝。邦彦等不從。惟詔三鎭仍堅守不割。

◉〔解釋〕表段（凡そ衣表あり裏あり、段は緞帛なり、猶ほ緞帛の用て表衣に爲くる可き者を言ふ）康王（皇弟構、）中筈（中は去聲、筈は音括、矢前の矢弦を受る處を筈と曰ふ、筈に中るは後矢前の矢を破るを謂ふなり）肅王（亦皇弟徽宗の第五子）种師道等（种師道[illegible]陝西路の姚平仲、鄜延の張俊、韓世忠、環慶の王似、馬忠、熙河の姚古、秦鳳の种師中、及ひ折彥質、折可求等を）勤王兵（王事に勤むるの兵）俟困（其糧乏しく兵困しむを俟つ）檻（檻なり、圏なり、）縱歸（紿くに誓言を以て詐て三鎭を復して、其の國に歸るを縱るす）統制官（軍政を宣撫するを兼る職官志に[illegible]師を出して征討す、諸將相統一せず、則ち一人を拔て、都統制と爲して以て之を總ふ、後ち統制官と爲すと云ふ）三鎭（中山、河間、大原）括金（王事の總議す、京に在る軍民官吏の金銀を括り取る）

◉〔講義〕春正月、斡離不京師に抵る、是より先き朝廷には李鄴を遣して和議せんを求む、斡離不乃ち李鄴を留て以て京城を攻ると雖とも克たず、乃ち王汭を遣り李鄴と偕に歸り來らしむ、李邦彥等皆和議を主とす、惟り李綱のみ戰はんこと欲す、欽宗は李邦彥の和を計るを是とす、鄭望之を遣り、出て金の陣に使せしむ、未た金に至らす、而して先きに使する王汭に遇ふ、乃ち王汭と與に倶に入て宋主に見ゆ、又李梲を遣はし、出て使せしむ、梲又金の使と偕に來る、金人師を犒ひ要する金五百萬兩、銀五千萬兩、牛馬萬頭、表段百萬匹、及ひ中山、河間、太原三鎭の地二十餘郡を宋に需む、且つ宰執親王を質と爲んことを欲す、故に張邦昌をして康王に副として金の營に如かしむ、金國の太子、王と同しく弓を射るに連りに發する三本の矢皆な筈に中る、是は放つ所の箭か的に當ると、又從より射る矢か先きに[illegible]に中る箭の筈に中る、實に弓に妙を得たるを云ふなり、因て金人か疑ふには、是れ將家の子にして天子の親王にて非すと、歸らしむ、康王幸にして免れて歸るなり、故に康王を更へて肅王を以て質と爲す、种師道等か[illegible]路勤王の兵至る、因て師道大に喜ひ、奏すらく京城の周圍八十里、城の高さ數十丈あり、殊に兵糧は數年を支ふるに足る、宜しく城內に寨を立て金兵の攻むるを拒守し、金の兵糧に困むを待て之を擊ち滅すべし、綱も亦た奏らく、金孤軍を以て深く敵地に入る、假令は虎の猛きも檻に投入すれは進退不自由にて如何ともするなきか如し、與に一旦の力を角ふ可らず、先つ暫らく之を縱し歸しめて之を擊て攻めは必ず勝つの計ならんに、欽宗帝は之を然りとし承引するも、李邦彥吳敏等專ら和睦を主とす、故に議論一ならす、金虜之を聞見して曰く、汝か議論の定る時を待たは、我か金は已に河を渡て來るの譏りあるを致す、未た幾日ならずして統制官姚平仲宵に金の陣營を攻めて克たす、帝大に驚き懼れて行營を廢し、職を主とする李綱を罷めて金人に謝す、太學生陳東及ひ都人數萬禁闕に伏して復た李綱を用ひんを乞ふ、君旨を得て李綱を右丞に復す、守禦使に充つ、因て衆乃ち散す、尋て金の使復た來る、乃ち三鎭を割く詔書を以て使を遣はして[illegible]を持ち往かしむ、時に京に在るの金を括し僅に金二十餘萬兩、銀四百萬兩を得て、宋の藏蓄已に空し、金人京城を圍む凡て三十三日、地を割くの詔を得て金幣の數の足るを俟たずとて而して退く、种師道金師未た河を渡らさるに河に臨み出てゝ之を要擊せんことを請ふ、李綱も亦た以爲らく、金の兵六萬にして而して我か勤王の兵は二十餘萬、其金兵の中ば渡るを縱るして而して之を擊たは、必す宋師は勝利を得んと、然に李邦彥等之に從はす、惟に三鎭に詔して仍て堅く三鎭を守て地を割さる耳

◯京師受圍時。梁師成已誅。至是竄蔡京於儋州。至潭而死。年八十。蔡攸竄萬安軍。尋有詔。卽所在斬之。童貫亦遠竄。追斬於南雄。◯李邦彦罷。張邦昌吳敏並相。邦昌罷。徐處仁相。處仁敏罷。唐恪相。恪罷。何㮚相。◯上皇歸京師。數月。金兵復至。斡離不由東路。陷眞定。長驅先抵京師。粘罕由西路陷隆德。太原府。汾澤州。平定軍。平陽府。河南府。河陽府。鄭州。懷州。抵京

師張叔夜等統兵赴闕。唐恪耿南仲專主和議。曰、今百姓困匱、養數十萬於城下、何以給之。乃止各道兵、毋得動。京師自十一月受圍。凡四十日。有卒郭京者。言能用六甲法、生擒粘罕幹離不。盡令守禦人下城。獨坐城樓上。以親兵數百自衞。俄頃金人鼓譟而進。京紿衆曰、須自下城作法。因引餘兵南遁。虜兵登城者纔四人。衆皆披靡大潰。上聞城陷慟哭曰、朕不用种師道言以至於此。時師道前一月卒矣。護駕人猶有萬餘。馬亦數千。張叔夜連戰四日。斬其貴將一人。欲護駕突圍而出。上惑於和議不定。士卒號哭而散。虜使劉晏請上出城。都民爭入襪而食之。何㮚欲率都民巷戰。聞者爭奮。金人由是斂兵不下。惟以割地責金幣和議爲辭。以誤戰守之計。侍郎耿南仲力主議和。上以爲然。遂墮其計。二元帥請與上皇相見。上曰、上皇驚憂已病。朕當自往。遂如青城見之。二宿而返。明年春復請上出郊。續逼出上皇。張叔夜諫曰、今上一出不歸。陛下不可再往。臣當率勵精兵護駕以出。縱虜騎追至。臣決死戰。或可僥倖。若天不祚。死於封疆。不猶生陷於夷狄乎。上皇欲飲藥爲范瓊所奪。逼上皇出宮。皇后太子親王帝姬皇族、前後三千餘人。悉赴軍前。城中子女金帛寶玩車服器用圖書。百物括索公私上下俱空。然後宣金主詔書。選立異姓。遂册前太宰張邦昌爲楚帝。以宋二帝北歸。金人在汴凡七閱月而去。始至。張叔夜嘗力戰。餘皆主和。以至吳开莫儔王時雍徐秉哲范瓊等往來逼遂上皇以下出郊。議舉異姓。方上在青城逼易御服。時惟李若水抱持大呼奮罵。金人刀裂其頤斷其舌而後梟之。相謂曰、大遼破、死義者十數。今南朝惟李侍郎一人。然一時憤死者甚衆。金人不知也。吳革結衆、欲刼還二帝。爲范瓊誘殺。何㮚孫傳張叔夜秦檜司馬朴。皆爭論乞存立趙氏。金人驅之從上北行。叔夜不食粟。惟飲湯。過界河死。㮚至燕亦不食死。當京城危急時。四方勤王之師至者。皆詔止不進。恐妨和議。訖金人之退。未嘗交兵。上在位不二年國破。改元曰靖康。弟康王立于南京。是爲高宗皇帝。

◉〔解釋〕儋（音擔、南海に在り、今瓊州府なり、）萬安軍（海南に在り、）南雄（府は廣東に屬す、）㮚（音栗、古の栗字、）眞定（府は河北に屬す、即ち鎭州なり、）定軍（山西に屬す、）河陽府（山西に屬す、）懷州（河東に屬す、即ち河内郡、）六甲法（甲子、甲寅、甲辰、甲午、甲申、甲戌の如き、遁甲の法、其法七千七百七十七人を用ゆ、能否を問ふ無く、但年命の六甲に合ふ者を擇ぶ、）种師道言（是より先き金人の去る時に師道之を要撃せんと請ふ、從はず、因て曰く、異日必ず後の患を爲さんと、是に至て果して然り、）二元帥（斡離不、粘罕、）青城（齋の營、）帝姬（政和の間、始て周の王姬の稱を采り、而して公主を改め帝姬と曰ふ、郡主を宗姬と曰ふ、縣主を族姬と曰ふ、議者謂ふ、姬は蓋し周姓猶を齊の女を齊姜と曰ひ、宋女を宋子と曰ふがごとし、皆其姓に因りて而して之を國に繫く、周姬と曰はず、而して王姬と曰ふ者は、蓋し同姓の諸侯に嫁し、衛姬に則つ耳、國家は趙氏は乃ち當に帝趙と曰ふべし、帝姬と曰ふを得ず、若し姬を以て嫁人の美稱と爲さは則ち尤も不可なり、漢書に諸姬趙の幽王友を生むと、師古が曰く、諸姬は衆妾を惣言する稱）往來云云（筌蹕に云ふ、往來婁を議して以て贊して異姓を擧るに至る者は、吳开莫儔也、上皇以下を逼逐して郊を出さしむる者は、王時雍、徐秉哲也、都人を脅嚇する者は范瓊也、）界河（雄州に出

つ、東して海に入る。**南京**（即ち應天府なり、）◉〔講義〕汴京圍を受る時、梁師成已に誅せらる、遂に至て蔡京を儋州に竄す、途に至て而して死す、年八十、蔡攸萬安軍に竄せらる、尋て詔あつて所在に即て之を斬る、童貫も亦た遠く竄せらる、遣て南雄に斬らる、徽宗上皇應天府より京師に歸る、五六ヶ月にして金兵復たび至る、斡離不は東路より眞定を攻め落し及く臨て先つ京師に抵る、粘罕は西路より諸州を攻め落し、亦た京師に至る、張叔夜等兵を總へて禁闕に赴く、唐恪耿南仲專ら和議を主とす、乃ち曰く、今百姓困窮、兵餉匱乏す、然るに敵十萬兵を城下に[illegible]はゝ何を以てか數十萬の兵に給せんと、乃ち各道の兵を止て勤戰するを得る毋しむ、京師圍を受しより凡て四十日、卒に郭京なる者あり、言ふには能く六甲の法を用て粘罕斡離不を生ながら擒にせんと、盡く守禦の人をして城を下て外に出てしめ、惟獨り城樓の上に坐し、衆兵數百を以て自ら衛る、俄頃にして金人鼓譟して而して進む時、京逃けんと欲するも能はず、兵くの樹を給き、歎て曰く、自ら城を下て法を作すへしと、因て餘兵を引て南の方へ遁る、故に守兵城に登る者僅に四人なるも、衆皆長慟して大に潰散す、欽宗城の陷るを聞て、聲を揚け慟哭して曰く、朕誤て种師道が言を用ひず、以て此に至る、時に師道は前に死す、護駕の人猶は萬餘人あり、馬も亦た數千匹あり、張叔夜連りに戰ふ四日、金の驍將一人を斬る、皇駕を護り圍を突て而して出んと欲するも、欽宗和議を聽て心定らず、敵に士卒號哭して而して散亂す、金の使劉晏欽宗に請て城郭を出しむ、說の民が爭ひ城に入り、劉婁が兩を慟して而して之を食ふ、何栗都臣を卒て卷だに戰んと欲す、之を聞き者は賤躍爭鑑す、金人是の勢ひに畏れて縮隙して兵を斂めて下して戰はず、憚ゝ地を割くと金將を貴る、この私議を以て辭として而して宋に遁り、之を以て戰守の計を誤らす、侍郎耿南仲力めて和議を主とす、欽宗以て然りと爲す、遂に金人の計に墜つ、斡離不粘罕の二元帥、徽宗上皇と相ひ逢んと請ふ、欽宗の曰く、上皇は驚き憂て已に病あり、朕當に自ら往く可しと、遂に青城に如て二元帥を見る、二宿して祗して返る、明年の春、復び二元帥復た欽宗の金の營に至らんことを請ふ、糧て過て徽宗を出して金營に至らしむ、上皇往んと欲す、張叔夜諫で曰く、今上一たひ出て歸らず、陛下再ひ往く可からず、臣當に精兵を率て勵まし皇駕を衛り以て出づべし、從ひ金騎追ひ至るとも、臣欲して死戰せん、或は僞俳すへし、若し天詐せずんば害か封醬に死せん、猶ほ生ながら異域に昭らさらんや、上皇毒藥を飲て死せんと欲す、范瓊の奪ふ所と爲る、遂に上皇に逼て宮を出しむ、皇后太子親王帝姫皇族前後三千餘人悉く金の軍前に赴く、城中子女金帛等、公私を括り盡め、上も下も俱に空虛なり、然して後ち金主の詔書を宣して宋と異なる姓の者を選み立つ、遂に前の太宰と爲る張邦昌を册立して楚帝と爲す、宋の徽宗欽宗を以て北に歸る、金人汴に在るもたひ月を閉して而して去る、縮めて至る時は張叔夜一たひ戰ふ、餘は者和睦を主とするを以て、矣開も莫た備ひ王時雍徐秉哲留施獲等に至て往來して上皇以下を遷り逃ひ郊野は出てか金營に如しむ、乃ち議して異姓を擧す、資に宋朝の大姦人なり、欽宗の背城に在るに方て二元帥返て御服を易しむ、時に李若水帝を抱持して大に呼び、甚ひ罵る、乃ち金人刃を以て其喉を裂き其舌を斷ち切て、而して發に之を乘す、金人相謂ていく、大遼破るゝとき義に死する者十數人、今南朝惟ゝ李侍郎一人のみと、然れども一時慨死するもの甚た多し、金人知らざるなり、吳革衆兵を結て二帝を刼還せんと欲す、范瓊か爲に誘ひ殺さる、何㮚孫傅張叔夜秦檜司馬朴皆な爭び論して趙氏を存立せんと乞ふ、金人之を罹て欽宗に從て北行せしむ、叔夜は粟を食はず、惟ゝ湯水を飲み、界河を過て死す、操も燕に至て亦た食はずして死す、京城危急の時に當て、西方勤王の師の至れるもの皆留して止て進まざらしむ、和議を妨害するを恐る、故に金人の退くに陀て、未た嘗て兵を交へず、上在位二年ならずして國破る、

南宋

高宗皇帝。名構。徽宗第九子也。母韋氏。徽宗夢吳越武肅錢王入室。已而生構。封康王。靖康初。嘗出使斡離不軍。是冬。斡離不再來。奉詔再出使。耿南仲偕行。至相州。民遮道請無往。至磁州。守臣宗澤止之。相州守以蠟書言。金人方遣騎物色康王。王所在。乃回相州。與南仲揭榜召兵勤王。有詔以康王爲大元帥。汪伯彥宗澤爲副。領兵入衛。王從伯彥議。出北門渡河。至太名。聞京師陷。澤請進兵向京城。伯彥請王移兵東平。措身安地。南仲亦以爲然。遂東去。知河間府黃潛善亦領兵至。進屯濟州。探報二帝北行。張邦昌爲金所立國號楚。是日風霾。日有薄暈。百官慘怛。邦昌亦有憂色。惟王時雍范瓊等。欣然若有所得。邦昌在位三十三日。御史馬伸貽書邦昌。請速行改正易服歸省。遂迎元祐孟太后聽政。太后迎立康王。詔告中外。有曰。漢家之厄十世。宜光武之中興。獻公之子九人。惟重耳之尙在。遣使

奉表。及以孟后詔來。邦昌繼至。伏地慟哭請死。使臣自河北竄來。進道君手札曰。便可即眞。來救父母。王慟哭拜受。遂趁應天府即位。改元建炎。以主和誤國。罷竄耿南仲。召李綱爲相。以宗澤知開封爲留守。綱至。邊防軍政。畧有緒。而潛善伯彥復主和。亟遣祈請使矣。綱相數十日而罷。潛善伯彥爲相。首誅上書人陳東歐陽澈。決策幸東南。無復經制兩河之意。是冬車駕遂至楊州。金人分三道南來。二年春。金人至汴。爲宗澤所敗。澤招撫群盜。募四方義士。合百餘萬。糧支半歲。表疏連數十。請上還汴。潛善忌其成功。從中沮之。憂憤疽發背而沒。臨終無一語及家事。但連呼過河者三。都人爲之號慟。聞者皆相弔出涕。

◉〔解釋〕南宋（高宗南都を臨安に遷す、臨安は古の越の地、明の浙江杭州府、）吳越（國の名、）の武肅（諡なり、）相州守（汪伯彥、）蠟書（書を蠟中に藏す、）物色（其人物顏色を圖像して以て之を訪ひ求む、）與南仲揭榜（榜は敕榜なり、職官志に、百官を戒飭し、軍民を曉喩するは則ち勅榜を用ゆ、）東平（府は山東に屬す、即ち鄆州、）濟州（州は山東に屬す、濟上郡、）霾（音埋、風あつて土を雨らすを霾と曰ふ、）暈（音暈、）獻公子九人（左傳僖二十四年、介子推の曰く、獻公の子九人、惟君のみありと、）孟太后（哲宗の后、時に六宮位ある者皆な金に從ふ、惟り孟氏廢らるゝを以て存するを得たり、）使臣（曹勛、）道君（徽宗、）即眞（踐して位に即かしむ、）上書人陳歐（李綱相を罷む、二人上書して力とめて潛善伯彥任ず可からず李綱は去る可からずと詆る、潛善伯彥奏して之を誅す、）兩河（河南、河北、）南來（粘罕雲中より太行を下り、府に河を渡り河南を攻んとす、斡離不兀朮燕山の內より河を渡り山東を攻む、婁宿撒喝同州より河を渡りて陝西を攻むるなり、）

●〔講義〕高宗名は構、徽宗の第九子なり、母は韋氏、初め康王に封らる、靖康の初め、嘗て出て、斡離不が軍に使す、然るに金人康王の弓術に長ずるを以て、武將の子と爲し、乃ち還るを得たり、是の冬斡離不再び來る、康王部を率して復た出てゝ、斡離不が所に使す、耿南仲も偕

に行て相州に至る、然るに民人康王の道を遮り、斡離不が所に往くなきを請ふ、乃ち磁州に至る、磁州守臣宗澤之を止む、相州の守汪伯彥蠟の中に書を押入り密に康王に送て曰く、金人方に騎馬を遣はし康王の在る所を物色し探り來らむと、康王之を聞て乃ち相州に回て、耿南仲と數榜を揭て兵を召して王に勤めしむ、乃ち詔して康王を以て大元帥と爲す、汪伯彥宗澤副と爲り兵を領して入て衛る、康王汪伯彥が議に從て北門を出てゝ河を渡て太名に至るに京師落城すと聞て宗澤は兵を進めて京城に向はんと請ふ、汪伯彥康王に請はく、先つ兵を東平に移し身を安穩の地に措んと、南仲も亦た以爲らく然りと、遂に東平に向て去る、知河間府黃潛善も亦た兵を領して至る、進て濟州に屯集して敵の情を探り知て而して報白するなり、徽宗欽宗北行し、張邦昌は金の爲に立てられ國を楚と號す、立の日風ふき土を雨らす、日は濟く暈るあり、百官は之を見て慘み恒む、邦昌も亦た憂る色あり、惟り王時雍范瓊等欣然として得るものあるかことし、邦昌位に在る三十三日、御史馬伸、紳に作るは誤りなり、書を邦昌に貽て曰く、請ふ速に康王の所に行て其位號を改正し、帝服を易へ、元との尙書省に歸て臣列に就き、庶事太后の命を稟て而して行ひ仍て速に康王を迎ひ奉て歸れと、邦昌之に從ふ、遂に元祐の孟太后を迎て政を聽し、太后人康王を迎ひ立つ、讓して中外に告て曰ふあり、漢家の厄は十世、光武の中興に宜しく、獻公の子九人、惟り重耳のみ尙ほあり、茲れ乃ち天意、夫れ豈に人謀ならんや[illegible]取て來る、邦昌繼て至り地に伏拜し慟哭して死せんを請ふ[illegible]宗の手づからの札を持して來て康王に進む、手札に曰[illegible]母を救ふべしと、康王慟哭して拜して之を受く、遂に應[illegible]改む、和を主とし宋國を誤らすを以て耿南仲を罷め竄[illegible]て開封に知として留守と爲す、李綱至る、邊防軍政畧治[illegible]す、亟に祈請使を遣す、故に李綱相たる數十日にして政[illegible]の人陳東歐陽澈を誅す、策を決定して東南に幸す、復[illegible]唯和を主するを以て國を誤る、是冬車駕遂に楊州に至[illegible]春金人汴に至る、宗澤の敗る所と爲る、澤群盜を招き[illegible]

三年春。金人將至楊州。上得報亟出。二相方會食堂。吏呼曰。駕行矣。乃戎服南走。回望楊州。烟焰已漲天矣。呂頤浩張浚。追及上於瓜洲。得小舟以渡。至鎭江。遂如杭州。罷潛善伯彥。以朱

勝非爲相。御營將苗傅劉正彦作亂。請上禪位於皇子旉。旉未三歳。孟太后聽政。呂頤浩張浚帥師勤王。韓世忠爲前軍。張俊翼之。劉光世游擊爲殿。勝非說二兇亟反正。尊孟后爲隆祐皇太后。勝非罷。呂頤浩爲相。二兇走。世忠追之。皆伏誅。上如建康。以浚爲川陝宣撫處置使。隆祐太后如南昌。聞兀朮請於粘罕將犯江浙故也。

◉〔解釋〕二相方會食（方に政事堂に會食す、）二相（黃潛善、汪伯彦、）瓜洲（渡り揚州に在り、）鎮江（府は江浙に屬す、即ち京口、）未三歳（旉年未た三歳に周からす、）二兇（苗傅、劉正彦、）亟反正（宋監に勝非又太后に上疏して、高宗位に還り、嗣君立て皇太子と爲すを乞ふ、詔して皆之に從ふ、）勝非罷（二兇の亂を止る能さるを以なり、）川陝（四川、陝西、）

◉〔講義〕三年春、金人將に揚州に至らんとす、帝其報を得て、亟に揚州を出つ、二相黃潛善汪伯彦方に政事堂に會食す、堂吏呼て曰く、帝駕已に行けりと、乃ち二相戎服して南に走る、揚州を回らし望めは烟焰已に天に漲る、呂頤浩張浚上を追て、瓜洲に及べは、乃ち渡りあり、乃ち小舟を得て以て瓜洲を渡り、漸く鎮江に至る、遂に杭州に如く、乃ち潛善伯彦か政を罷め、朱勝非を以て相と爲す、御營の將苗傅劉正彦亂を作す、上に請て皇子旉に位を禪しむ、未た三歳に周からすして、孟太后政を聽く、呂頤浩張浚師を帥て王に勤めて中軍を總ふ、韓世忠前軍と爲り、張俊之を翼く、劉光世游擊して殿と爲る、勝非二兇苗傅劉正彦に說て正き位に反らしむ、孟后を尊て隆祐皇太后と爲し、勝非罷む、二兇の亂を止むる能はさるを以なり、呂頤浩相と爲り、二兇走る、韓世忠之を追ふ、二兇皆誅に伏す、上建康に如く、浚を以て川陝の宣撫處置使と爲す、浚字は德遠、唐の相九齡か第九子、皐の後也、張俊字は伯英、鳳翔成紀の人、隆祐太后南昌に如く、兀朮か粘罕に請て將に江浙を犯さんとするを聞く故也、

杜充爲右僕射。守建康。上如杭州。升杭爲臨安府。自臨安如浙東。金人分兩道。一軍自蘄黃渡江。劉光世在江州。以爲蘄黃小盜。遣王德拒之。於興國軍。始知爲金人。金人自大冶趍洪撫建昌臨江吉州。追隆祐太后。不及。遂陷袁潭灃南灃州。乃自石首北渡而去。一軍自滁和向江東馬家渡濟江。陷建康。杜充及守臣皆降於兀朮。通判楊邦乂不從。刺血書裾曰。寧爲趙氏鬼。不作他邦臣。衆擁見兀朮。誘諭累日。輒叱罵。卒大罵見殺。兀朮長驅陷杭州。上去已七日。兀朮進陷越州。四年春。陷明州。時上已次台州章安鎮。金人以船犯昌國縣。欲追襲上舟。提領海舟張公祐。引大船擊散之。乃退。回兵陷秀平江常州。至鎮江。韓世忠邀之。以海舟與戰數十合。多俘獲。伏卒金山龍王廟。幾獲兀朮。相持於黃天蕩。兀朮求假道甚恭。不許。欲自建康北歸。不得去。或教於冶城西南隅蘆場地。鑿大渠。一夕成。次早出舟趁建康。世忠大驚。尾擊之。一日値無風。海舟不能動。兀朮乃引其舟出江北去。疾如飛。以火箭射海舟。世忠軍亂奔還。兀朮乃得北遁。統制岳飛邀擊敗之於六合。

◉〔解釋〕興國軍（湖廣に屬す、）大冶（縣は興國軍に屬す、）洪撫（即ち臨川郡、興國以下皆江西に屬す、）袁（州は江西に屬す、）荊南（或は云ふ、即ち荊州、）澧（音禮、皆湖廣に屬す、）石首（縣江陵に屬す、）滁和（州は淮西に屬す、即ち歷陽軍なり、）馬家渡（太平にあり、）刺（音次、針刺なり、）明州（浙東に屬す、今慶元府なり、）台州（浙東に屬す、）昌國縣（慶元に屬す、）秀（今の嘉興府、）常州（皆江浙に屬す、）金山（江中に在り、鎮江城を去ること七里なり、）統制岳飛（統制は官、岳は姓、飛は名なり、）敗（音拜、）

◉〔講義〕杜充か右僕射と爲り、建康を守る、是時高宗杭州に如き、杭を升せて臨安府と爲す、臨安より浙東に如く、金人道を兩つに分ち、一軍は蘄黃より江を渡る、劉光世江州に在り、金人を以て蘄黃の小盜也と爲して、乃ち王德を遣はし、之を興國軍に拒かしむ、始て金人の軍爲るを知る、金人亦た大冶より洪撫建昌臨江吉州に趣き、隆祐太后を追ふ、太后已に遠く、故に金人追ひ及はす、遂に袁潭荊南澧州を陷る、乃ち石首より北に渡て而して去る、一軍は滁和より江東馬家渡に向ふ、江を濟り建康を陷る、杜充及ひ守臣皆兀朮に降る、通判楊邦乂之に從はす、血を刺して衣の裾に書して曰く、寧ろ趙氏の爲に

（して、宋の鬼となるも、他邦の家來と作らすと、然るに、宋の楊邦乂を抱き擁して、兀朮に見しむ、兀朮之れを誘脅す、累日なるも聽かす、輙ち叱して罵る、卒に大に罵詈して殺さる、兀朮長驅して杭州を陷る、帝去て已に七日なり、兀朮進て越州を攻落す、四年春明州を攻落す、時に帝已に台州章安鎮に次まる、金人船を以て昌國縣を犯す、追て帝の舟を鑿はんと欲す、提領海張公祐大船を引て、金の船を撃ち散らす、金人乃ち退く、乃ち兵を回らして、秀平江常州を攻め落す、鎮江まて至る、韓世忠金人を邀て、海舟を以て金人と共に戰ふ、數十合、多く俘獲あり、卒を龍王廟に伏して擒んと、兀朮を獲んとす、金人と黃天蕩に相持す、兀朮道を假んを求むる甚た恭し、韓世忠許さす、故に兀朮は建康より北に向ひ金に歸んと欲するも去るを得す、或人教て治城の西南の隅蘆場の地に於て大渠を鑿らしむ、一夕に成る、次き日早く舟を出し建康に趣く、韓世忠大に驚き尾して金人を撃つ、一日風なきに値て海舟動く能はす、兀朮乃ち其舟を引て江に出て北に去る疾きこと飛ふか如く、火箭を以て海舟を射る、韓世忠か軍亂れ奔り還る、兀朮乃ち北に逝るを得たり、統制岳飛兀朮を邀ひ撃て兀朮を六合に敗る、）

初張浚西行。上命浚三年而後用師。及是撻辣兀朮皆在淮東。浚聞兀朮躊躇。必再犯東南。議出師攻取以分其勢。士大夫及諸將皆以爲不可。浚決策移檄粘罕問罪。遣吳玠入長安。金人遂調兀朮自京西星馳赴陝西。與婁室合。浚合六路兵至富平。婁室擁兵驟至。鐵騎直擊環慶路。趙哲軍佗路不援。哲離所部。諸軍退。金遂乘勝而前。浚斬趙哲。諸路兵皆散去。陝西大震。浚駐軍興州。遣劉子羽訪諸將所在。各引所部來會。人心粗安。吳玠走保大散關東和尙原。○上自海道回。駐越州。呂頤浩罷。范宗尹爲相。秦檜南歸赴行在。檜在北。依撻辣。爲所任用。撻辣南侵。檜參謀其軍。嘗爲草檄下山東州郡。挈全家。泛小舟。抵漣水軍。自言逃歸。朝士多疑之。檜言如欲天下無事須是南自南北自北。乞上致書撻辣。以求好。其言皆撻辣意也。⊙是歲劉豫稱帝。豫景州人。於建炎戊申。以濟南守降金。爲之用。得知東平府。兼節制河南。粘罕白金主。循邦昌故事。立豫國號大齊。後遷都于汴。粘罕既得關中地。悉割以與豫。

◎〔解釋〕婁室（金の將）六路（同州、鄜延、環慶、熙河、秦鳳、涇原）富平（縣は耀州に屬す）降金（豫は濟南の太守と爲り、而して金人に降參す）

◉〔講義〕（初め張浚西に行く、帝浚に命して三年にして師を用ゆ、是に及て金の撻辣兀朮皆淮東に在り、浚聞く兀朮宋を攻むるとに躊躇し、必す東南を犯さんと、故に議して師を出して攻て取て以て其勢力を分たんと、士大夫及ひ諸將皆以爲らく不可なりと、浚は策を決し、檄書を粘罕に移して宋の罪を問はしむ、乃ち吳玠を遣はして長安に入らしむ、金人遂に兀朮を發し遣し京西より星して曉に馳て陝西に赴き婁室と合す、浚六路の兵を合して富平に至る、婁室兵を擁して驟に至る、鐵騎直に環慶路の趙哲か軍を擊つ、佗路より援兵を出さす、哲は恐れて所部を離れて遁る、故に諸軍退く、金人遂に勝に乘して攻め前む、浚大に怒て趙哲を斬る、諸路の兵皆散し逃く、陝西兀朮か軍大に震ふ、張浚止むを得す軍を興州に駐む、劉子羽を遣はし諸將の在る所を尋ね訪はしむ、故に諸將各ゝ所部を引て來り會せしむ、人心粗ゝ安堵なり、吳玠か走て大散關の東和尙原を保つ、帝は海道より回て越州に駐る、時に呂頤浩罷む、范宗尹相と爲る、秦檜金より歸て帝の行在所に赴く、秦檜金に在り撻辣に依賴し、大に任用する所と爲る、撻辣南に侵し來る、秦檜撻辣か軍に參謀す、嘗て秦檜は粘罕か爲に檄文を草し山東の諸部に下す、乃ち檜は全家を挈て小舟を泛て漣水軍に至る、檜自ら言ふ逃れ歸ると、朝士多く之を疑ふ、檜か言ふ如し天下の無事ならんを欲せは須らく爲れ南は自ら南とし北は自ら北なるべし、帝に乞て書を撻辣に致さしめ以て好を求めしむ、其言皆撻辣の意なり、是歲劉豫帝と稱す、豫は景州の人なり、建炎（是時我新羅三郎死する年なり）戊申に於て濟南の守を以て金に降る、而して金の用る所と爲り、東平府に知たるを得て、兼て河南に節制たり、粘罕金主に白ふして邦昌か僞帝となつたる故事に循て劉豫を立て國を大齊と號す、後ち都を汴に遷す、粘罕既に關中の地を得て、悉く割て以て劉豫に與ふ、）

⊙紹興元年。命張俊討江淮盜李成。成據江淮六七州。連兵數萬。有席卷東南之意。尋陷江筠臨江。俊擊其軍。復三郡。成遁降齊。⊙張浚盡失陝西之地。惟餘階成岷鳳洮五郡。及鳳翔府之和尙原。隴州之方山原而已。浚退保閬州。統制曲端有威名。浚先用譖。罷其兵柄。安

置萬州。西人倚端爲重。及罷軍情不悅。至是又送恭州獄殺之。士大夫軍民皆悵恨。西人益以是非浚。金人分兩道向蜀。吳玠與弟璘大敗之於和尙原。又選將敗之於箭筈關。兩道皆不能入。○范宗尹罷。秦檜昌言曰。我有二策。可聳動天下。遂爲右相。呂頤浩爲左相。○兀朮會諸道及女眞兵。造浮梁於寶雞縣渡渭攻和尙原。玠璘三日三十餘戰。大破之。兀朮中流矢。僅以身免。始自河東歸燕山。○紹興二年。上自越州還臨安。言者劾秦檜專主和議沮止恢復遠圖。檜罷。朱勝非爲右相。○紹興三年春。金撤離曷自鳳翔長安。聲言東去。實出商於出漢陰。直趨金商。吳玠急引兵扼之饒風嶺。金人間道遶出其後。玠遽還仙人關。金人遂進陷興元。知府劉子羽退保三泉縣潭毒山。撤離曷食盡。乃引還。吳璘以無糧拔寨棄和尙原。金人得之。玠度其必深入。乃嚴兵以待。兀朮果與撤離曷來犯仙人關。玠璘與戰七日。金人不能支。宵遁。玠設伏扼其歸路。又敗之。是舉也金人決意入蜀。卒不得志。是歲浚又失洮岷關外。惟存階成秦鳳。浚召還。尋與劉子羽皆貶竄。浚是行。本欲出關陝取中原。乃盡喪關陝而歸。賴得玠璘保蜀而已。○齊遣李成攻陷鄧襄隨郢唐州信陽軍等。岳飛復隨郢。成棄襄陽而遁。○呂頤浩朱勝非相繼罷。趙鼎爲右相。

◉〔解譯〕江筠（今の瑞州、）三郡（江州臨江、昔江西に屬す、）五郡（階成岷洮は鞏昌に屬し、鳳は陝西に屬するなり、）閬（音浪、州は順江大、保寧府に屬す、）曲端（曲は姓、端は名、）萬州（川南に屬す、）西人（陝西の人民、）恭州（川南に屬す、今の重慶府）非浚（曲端を殺すの事を以て、而して張浚を非譏す、）寶雞縣（鳳翔に屬す、）言者（黃龜年、）漢陰縣（金州に屬す、）金商（二州、昔陝西に屬す、）饒風嶺（金州に在り、）仙人關（鳳州に在り、）三泉（大安に屬す、）貶竄（張浚は福州に居住す、子羽は白州に安置す、）關峽（關中、陝西、）鄖（今の安陸府、）信陽軍（即ち中州、以上の六州隨郢湖北に屬す、餘は昔河南に屬す、）

◉〔講義〕紹興元年張俊に命じて江淮の盜賊李成を討擊せしむ、李成江淮の六七州[illegible]り兵五六萬人を連ね、[illegible]南を一[illegible]の[illegible]べしに席を卷くが如くするの意あり、尋て江州筠州臨江を攻め落す、俊其軍を擊ち破り、江臨筠の三郡を取り還す、李成敵する能はず、遁れて劉豫に降る、張浚並く陝西の地を敵に攻め取られ、惟階成岷鳳洮五郡及び鳳翔府の和尙原、隴州の方山原を餘す而已、因て浚退て閬州を保す、統制曲端威名あり、浚先に讒言を以て端が兵柄を罷む、萬州に安置す、西人端に倚て重しとす、端が貶らるゝに及んて軍情悅はず、是に至て恭州の獄に送て之を殺す、[illegible]之を召し還す、稍ゞ其官を復す、閬州に徙して將に復た[illegible]端再び起らば必す公に不利なり、王庶又從て而して之[illegible]

は、鳳翔より烏魯折合は階成より散關を出て、約して曰く、和尙原に會せんと、烏魯折合斯に先て至り、北山に陣し戰を索む、玠諸將に命して堅く陣して之を待つ、更はる〱戰ひ迭ひに休す、金人大に敗れて遁れ去る、沒立方に箭筈關を攻む、玠復た將を遣り擊て之を破る、金の兩軍終に合ふを得す、金人海角より起り常に勝に狃ふ、玠と戰て輒ち敗るゝに及んで憤る甚し、必す玠を取らんを謀る、是に於て兀朮諸帥の兵十餘萬を會して浮梁を造り渭に跨る、寳雞より連珠營を結ひ、石を壘て城と爲し、澗を夾んて官軍と相拒き、進て和尙原に逼る、玠弟璘と勁弩を選み諸將に命して番を分て迭に射る、駐隊矢と號し、連發して絕へす、繁きこと雨注の如し、敵稍ゝ却けば則ち奇兵を以て旁れく擊き其糧道を絕ち、其困且つ走るを度り、伏を神坌に設て以て之を待つ、敵至て伏發す、遂に大に亂る、玠因て兵を縱て夜擊つ、大に之を敗る、兀朮二流矢に中り、僅に身を以て免る、紹興三年春、金の撤離喝鳳翔長安より聲言す、東に去ると、實は商於より漢陰に出て直に陝西金商に趣く、吳玠急に兵を引て撤離喝を饒風嶺に拒す、金人間道より還て玠の後に出つ、因て玠遂に仙人關に還る、金人遂に進て興元を陷る、興元知府劉子羽退て三泉縣潭毒山を保つ、撤離喝食盡く、乃ち引て還る、吳玠糧なきを以て我塞を拔く、和尙原を棄つ、金人和尙原を得る、玠其必す深く入らんを度て、乃ち兵を嚴肅にして以て金人の至るを待つ、兀朮果して撤離喝と來て仙人關を犯侵す、玠と璘と共に戰ふ、七日金人支へつゝばる能はす、背る遁る、玠伏兵を設け金人の歸路を扼し又之を敗る、是擧や金人意を決して蜀に入らんとす、卒に入るを得す、是歲浚又洮岷關外を失ふ、惟り階成秦鳳を存す、浚召れて還る、尋て劉子羽と皆貶竄せらる、浚か是行本と關中陝西に由り中原を取らんと欲す、乃ち盡く關陝を喪て而して歸る、纔に玠と璘とを得て蜀を保つのみ、齊の劉豫李成と云ふ將を宋に遣はし、鄧襄隨郢唐州の信陽軍等湖北に屬する國を攻め落し入る、宋の岳飛之を攻めて隨と郢とを取り還す、故に齊將李成大に敗れ襄陽を打ち棄てゝ而して逃け去る、續て呂頤浩と朱勝非と相繼て、間もなく位を罷らる、仍て趙[illegible]鼎か左相と爲る、

○齊以金兵分道南侵。上詔親征。出如平江。以張浚知樞密院。先是浚極言北方既無西顧憂。必併力窺東南。上思其言。遂召之。浚至。請遣岳飛渡江入淮西。以牽制北兵之在淮東者。從之。上命浚視師江上。將士見浚來。勇氣皆倍。時韓世忠駐揚州。先已大敗金兵於大儀鎭。擒其將撻也。解元成閔與戰于承州。十三捷。仇悆孫暉敗之於壽春安豐。王德敗之於滁州。岳飛遣牛皐等攻之於廬州。撻辣兀朮。知爲世忠所扼江不可渡。引還。齊劉麟劉猊棄輜重遁去。○紹興五年。上自平江還臨安。趙鼎張浚爲左右相。浚兼都督諸路軍馬。尋復命浚視師江上。浚至鎭江。召韓世忠使舉兵移屯楚州。浚至建康撫張俊軍。至太平州撫劉光世軍。無不踴躍思奮。以岳飛爲河北京西招討使。○先是建炎庚戌中。有武陵人鍾相起於鼎州。僭號楚。鼎灃潭辰岳之境。皆盜區。相敗就擒。其徒有楊么者。據洞庭。遂爲劇寇。官軍陸襲之。則入湖。水攻之則登岸。曰。有能害我。除是飛來。浚謂上流不先去么。爲腹心害。將無以立國。請自行。浚至湖南。會岳飛兵至。急攻其水寨。么窮蹙赴水死。遂平。浚自湖南轉由兩淮。會諸將議防秋。乃入見。

◉〔解釋〕皆倍（一倍を增す、）大儀鎭（今江都縣の西にあり）解（音蟹、姓也、）承州（淮東に屬す、今高郵府、）仇悆（宋の將、仇は姓、悆は名、）壽春（府、淮西に屬す、即ち壽州、）安豐（壽春の屬縣、）廬州（淮西に屬す、）麟（豫か子、）猊（音倪、豫か姪、）太平州（江東に屬す、即ち姑孰、）河北京西招討使（職官志に、招討使は、收招して盜賊を討殺するの事を掌どる、常に置かざるの官なり）武陵（縣は常德に屬す、）鼎州（湖廣に屬す、今の常德府なり、）岳（州は湖廣に屬す、即ち波陵郡、）么（音腰）兩淮（淮東、淮西）防秋（秋高く馬肥え、必す外寇の境を侵すを防ぐ）

◉〔講義〕齊の劉豫金の兵を以て道を分て南に侵す、帝詔して親ら征す、出でゝ平江に如く、乃ち張浚を以て樞密院を知さす、是より先き張浚極て言ふ、北方はもはや西に顧るの憂ひなし、故に必す力を一つに併せ東南を窺んと、帝今其言を思て遂に浚を召す、浚至て請らく岳飛を遣り江を渡り淮西に入らしめ以て金兵の淮東に在る者を牽つけ制せんと、帝之に從ふ、帝浚に命して師を江上に視せしむ、將士浚か來るを見て勇氣皆倍す、時に韓世忠揚州に駐り止て、大に金の兵を大儀鎭に敗る、金の將撻也を擒す、宋の將解元成閔世忠と共に金人と承州に戰て十三たひ勝を得たり、仇悆孫暉亦た金人を壽春の安豐に敗る、王德も亦た金人を滁州に敗る、岳飛牛皐等を遣はして之を廬州に攻

しむ、撻辣兀朮、韓世忠か扼する所と爲り、江水の渡る可からざるを知て、軍を引て還る、齊の劉豫か臣劉麟、劉猊、荷物車を棄てゝ遁れ去る、紹興五年、帝平江より臨安に還る、趙鼎趙浚左右の相と爲り、浚兼て、諸路の軍馬を都督す、尋ひて復た張浚に命して師を江上に視しむ、浚鎮江に至り、韓世忠を召す、乃ち韓世忠をして軍兵を率して陣を移して楚州に屯せしむ、浚建康に至で張俊か軍を撫し、太平州に至て、劉光世か軍を撫す、軍人皆踊躍して奮を思はざるなし、岳飛を以て河北京西の招討使と爲す、武陵の人鍾相なるものあり、鼎州より起り、僣號して楚と稱す、鼎澧潭辰岳の境は、皆な盜の匪界なり、然るに鍾相は敗れて擒りに就く、鍾相の徒に楊么なる者あり、洞庭湖に據り、遂に官軍の爲に劇しき寇を爲す、官軍陸より之を撃へは則ち湖に入り、水より之を攻れは則ち岸壘に登り、因て夸言して曰く、能く我を害するあらは、除是れ飛來れと、鶴林玉露に曰く、岳飛偶〻一諜の者を獲て、其巣穴を問ふ、對て曰く、險阻安んぞ入る可ん、惟〻飛んて能く入らん耳と、飛大に笑て曰く、天汝をして此言を爲さしむ、吾必ず其巣穴を破らん、三軍大に喜ぶ、遂に之を平くと、浚謂らく、上流を先つ攻め去らずんは、么腹心の害患を爲し、將に以て國を立る無らんとすと、請て自ら行く、浚湖南に至る、岳飛か兵の至るに會し、共に急に么か水塞を攻む、么窮蹙して水に赴て死す、是に至て人、能く我を害する有らは除是來の言を以て讖と爲す、浚湖南より轉して淮東淮西に由り、諸將を會して議し、外夷の境を侵すを防く、

○金主晟殂。諡文烈。初旻與晟約。兄終弟立。而後復歸旻之子。故晟捨己子宗盤。而立旻長孫曷懶馬爲諳版孛極烈。儲副位也。曷懶馬。名亶。至是遂即位。宗盤與旻之別子及粘罕皆爭立而不得。粘罕時已失兵柄。與悟室並相。粘罕絕食縱飲而死。蒙國叛金。蒙在女眞之北。在唐爲蒙兀部。亦號蒙骨斯。○紹興六年。張浚復出視師。上自臨安如平江。齊人分道入寇。初劉豫因粘罕得立。知奉粘罕而已。蔑視他帥。及是請兵於金。宗盤沮之。聽豫自行。而遣兀朮提兵黎陽。以觀釁。劉光世時駐廬州。以爲難守。張俊駐泗州。亦請益兵。衆情洶懼。張浚以書戒俊及光世。有進擊無退保。趙鼎等請上親書付浚。欲退師還南保江。浚力爭以

爲可保必勝。一退則大事去矣。光世已舍廬州而退。浚即星馳至采石。遣人喩其衆。若有一人渡江。即斬以徇。仍督光世復還廬州。光世不得已。乃駐兵。遣王德酈瓊。三敗齊兵於霍丘正陽及前羊市。時劉猊至淮東阻韓世忠兵不敢進。乃從淮西渡。浚遣張俊統制官楊沂中至濠州與俊合兵。沂中敗猊前鋒。猊引兵欲會劉麟于合肥而後進。沂中遇於藕塘合戰。猊大敗。麟聞猊敗。望風潰去。光世乘勝追襲。亦捷。北方大恐。上曰。克敵之功。皆出右相趙鼎。遂罷。○上皇以五年四月殂。至七年春凶問始至。壽五十四。二帝自建炎初。由燕山如中京。中京古奚國霫郡也。在燕山北千里。次年又自中京移韓州。在中京東北千五百里。後二年。又自韓州移五國城。在金國所都東北千里。上皇終焉。

◉〔解釋〕曷懶馬（金史に曷刺馬に作る、旻の子宗峻の子なり、）儲副位（宋史に云ふ、孛極烈は猶ホ中國の總管のごとし、金志を案ずるに、旻か末年諳版孛極烈を除て、都元帥と爲す、又云ふ、全國自來諸版孛極烈を以て、儲副と爲す、故に晟は亶を以て諸版孛極烈の職に任し、以て儲副と爲す、）蒙國（元朝の興る此に始る、）保江（江を以て限りと爲し、自ら保つ、）霍丘（縣は安豐に在り、）前羊市（皆霍丘の地、）浚遣張俊統制官楊沂中（[illegible]）合肥（縣は廬州に屬す、）◉〔講義〕[illegible]宋の宣公[illegible]穆公も其子馮を棄て[illegible]故に晟は己か子宗盤を捨て、而して旻か長孫曷懶馬を立て、諳版孛極烈と爲す、儲副の位なり、曷懶名は亶、是に至て遂に位に即く、宗盤、旻の別子及ひ粘罕と、皆立を爭ふて得す、粘罕時

（兵柄を失ふ、悟室と並び相たり、粘罕任食を絕ち、縦に酒を飲て而して死す、蒙國は金國に叛く、蒙は後に元と稱す、女眞の北の方に在り、唐に在て蒙兀部と爲り、亦た蒙骨斯と號す、紹興六年、張浚復た出テ師を視る、帝臨安ヨリ平江ニ如く、齊兵道を分て入て寇す、初メ齊ノ劉豫粘罕に因て立つを得たり、故に惟ゝ粘罕あるを知て、佗の將あるを知らず、頗る他帥を輕蔑す、是に及て援兵を金に請ふ、宗盤之を惡んで兵を遣るを沮む、而して劉豫に自ら行くを聽す、而してわざと之を斷り、別に兀朮を遣り、兵を黎陽に提けて、以て劉豫は宋との隨勢を觀て、以て進退を爲す、劉光世時に廬州に駐る、以爲らく廬州を守り難しと、張俊亦た泗州に駐り、兵を益すを朝廷に請ふ、衆情洶れ懼る、張浚は書を以て張俊及ひ光世を戒しめ、氣を付とせ、進で擊つことあるも、退て塞を保つことなしと、趙鼎等帝に請て親ら書して浚に付し、師を退て南に還り、江を限りと爲し自ら保たんとす、張浚力めて爭ふ、以爲らく必す勝つを保す可し、此一たひ退かは則ち宋の大事去んと、劉光世已に廬州を舍てゝ而して退く、張浚即ち曉に星を見て馳せ去り、采石に至る、人を遣はして其軍衆を喩さしむ、若し一人にても江を渡るあらは即ち斬て以て軍中に徇へ、弱れんと仍て劉光世を督し、王德酈瓊を遣る、三たひ齊の兵を霍丘、正陽、及前羊市に破る、時に齊の將劉猊淮東に至る、韓世忠か兵に阻てられ敢て進まず、即ち淮西より渡る、因て張浚統制官楊沂中を遣り濠州に至しむ、俊は兵を合す、沂中猊か前鋒を敗る、猊兵を引て劉麟に合肥に會して、而して後に進んと欲す、沂中與に藕塘に遇て合戰す、猊大に敗らる、麟猊か敗ると聞て其敗たる風を望み見て主を棄てゝ潰け去る、光世は勝に乘して追ひ襲て亦た捷つ、是に因て北方大に恐る、帝の曰く、敵に克の功、皆な右相張浚より出と、是を以て趙鼎遂に左相を罷らる、徽宗上皇五年四月を以て殂す、七年の春に至て、二年を隔てゝ凶問始て至る、壽五十四、二帝建炎の初めより燕山に由り中京に如く、古の奚國霫郡なり、燕山北千里にあり、次年又中京より韓州に移る、金國の都する所の東北千里にあり、上皇は茲にて終に崩す、）○岳飛爲湖北京西宣撫使。時淮東宣撫使韓世忠。江東宣撫使張俊。皆久已立功。而飛以列將拔起。世忠俊不平。飛屈己下之。二人皆不荅。及飛破楊么。俊益忌之。於是嫌隙日深。上自如平江。如建康。飛因扈駕以行。入見。跪論恢復。秦檜時爲樞密副使。主和議。忌飛成功。沮之。飛以內艱去。上力起之。劉光世以言者論其退師幾誤事。罷兵柄。張浚以王德統其軍。德與酈瓊等夷。不相下。大譟詣督府訴德。浚乃召德還。爲督府都統制。而以呂祉爲督府參謀。領其軍。祉簡倨不通將士之情。聞瓊等反側。密乞罷之。瓊叛。執祉以所部數萬降齊。張浚遂以之罷。浚之用德與祉。岳飛嘗言其不可。浚不聽。故敗。趙鼎復相。○金人以劉豫不能立國。廢之。齊立八歲而亡。○紹興八年。上自建康還臨安。秦檜復相。趙鼎罷。詔議講和。自建炎以來。無歲不遣使。直願去尊號。奉其正朔。比於藩臣。金人不從。使者往多拘囚。後數南侵不利。知江南不可圖。然後遣檜爲間。至豫廢。和議乃決。金使張通古來。編脩官胡銓上疏。以爲陛下一屈膝則祖宗廟社之靈。盡汚夷狄。祖宗之赤子。盡爲左衽。朝廷宰執。皆爲陪臣。異時豺狼無厭。安知不加我以無禮如劉豫。夫三尺童子無知。指犬豕而使拜。則怫然怒。堂堂天朝。相率而拜犬豕。曾無童稚之羞邪。奉使王倫誘致北使。以招諭江南爲名。欲臣妾我。執政孫近。附會秦檜。臣義不與檜等共戴天。乞斬倫檜近三人頭。竿之藁街。然後羈其使責無禮。興問罪之師。三軍之士。不戰而氣自倍。不然臣有蹈東海而死耳。寧能處小朝廷求活邪。書上。連貶竄。

◉〔解譯〕飛以內艱去（註の艱の上に母字を脫す、父の亡を外艱と曰ふ、母の亡を內艱と曰ふ之を起すは之を起復するなり、喪を停め職を授くるを謂ふなり、罪雪錄に起復は、喪制未だ終らず、其任用を勉む、謂ふ所情を奪て起復するものなり、）張浚遂以言罷（言の字は、蓋し之字の誤りなり、）等夷（平等の人なり、）左衽（衽音任の上聲、衣襟なり、左衽者夷狄の俗なり、）陪臣（諸侯の臣）如劉豫（劉豫既に立て帝と爲る、而して又之を廢す、）貶竄（初は

韶州、次に新州、後に海南、●〔講義〕岳飛、湖北京西の宣撫使と爲る、時に淮東の宣撫使韓世忠、江東の宣撫使張俊、皆久く已に軍の功を立つ、而して飛は列將の輕兵より拔起するを以て、世忠張俊、飛と平かならず、然るに飛は已が身を屈して此の兩人に下るも、二人答禮せず、岳飛楊么を破り亡すに及んで、張俊益〻飛が功を忌む、是に於て嫉隙日に深し、帝自ら平江に如き、又建康に如く、飛因て帝駕に扈從して以て行く、入て帝に見ゆ、疏を奉り國の仇復を論ず、秦檜時に樞密使と爲り、密に金の内命を受て和議を主とす、亦た岳飛が成功を忌み嫉て之の仇復論を邪間（シヤ）とす、時に岳飛母の喪を以て去る、帝力とめて之を起して喪を終はらざらしむ、劉光世は言官の其の師を退け殆んど軍事を誤んとするを論ずるを以て、光世が兵柄を罷む、因て張浚王德を以て光世が軍を統しむ、德は酈瓊と平等の人にして、互に相ひ下らず、是を以て大に謀て督府に詣て王德を訴ふ、浚乃ち王德を召して還らしむ、督府都統制と爲す、而して呂祉を以て督府の參謀と爲て其軍を領しむ、呂祉簡倨にして將士の情に通ぜず、瓊等が反逆を聞て、密に之を罷めんと乞ふ、瓊之を聞て叛て、呂祉を執て所部數萬を以て齊に降參す、張浚遂に之を以て謫む、浚の德と祉とを用ゆるとき、岳飛嘗て其の用ゆ可からざるを爭ふ、浚聽かず、故に敗る、趙鼎復た相たり、初め浚飛に謂て曰く、王德は淮西郡の服する所、浚以て都統と爲さんと欲す、而して呂祉に命じて督府の參謀を以て之を領せしめば如何と、飛が曰く、德と酈瓊と素より相下らず、一旦之を擢（ヌ）きて上に在らば、則ち必ず爭はん、呂祉は軍旅に習はず、恐らくば衆を服するに足らず、浚が曰く、張俊、楊沂中は如何、飛が曰く、張宣撫は飛の舊師なり、其人暴にして而して謀すくなし、沂中は德等に視ふ耳、亦豈に能く此軍を御せん哉、浚艴然として曰く、固より大尉に非れば不可なり、飛が曰く、都督正を以て飛に問ふ、飛敢て其愚を盡さずんばあらず、豈に軍を得るを以て念と爲ん哉、飛既に浚と忤ふ、即日上に章して喪服を終らんと乞ふ、張憲を以て軍事を攝し、步して廬山に歸る、母墓側に廬す、浚怒る、遂に張宗元を以て宣撫判官と爲す、其軍を監す、金人劉豫が國を立る能はざるを以て之を廢す、齊立てと八歲にして亡ふ、已にして建康より臨安に歸る、秦檜復た相たり、趙鼎罷む、帝詔して和を議するを議す、建炎以來、歲として宋より使を遣はして、直に其尊號を去て、金正月朔日を奉じ、金の藩臣に比するを顧はざるなし、然とも金人從はず、使者往けば多く拘囚せらる、後ち金人か南侵するも利あらず、故に江南の圖る可からざるを知り、然して後ち金より秦檜を遣はし歸して反間を爲さしむ、今劉豫か廢するに及んで和議已に決す、偶〻金の使張通古來る、因て編修官胡銓上疏す、以爲らく、陛下一たび膝を屈めは、即ち太祖太宗及廟社の靈盡く夷狄に汚れ、太祖太宗の赤子盡く左衽とならん、朝廷宰執皆陪臣と爲らん、異時豺狼に齊しき仁心のなき金國なれば、剛欲なる既に盈るも厭くこと無く、安んぞ知らん我に加ふるに無禮を以する劉豫か如せざらん、夫れ僅に三尺の童子の至て知るなきも、犬や豕を指して而して之を拜せしめば、則ち怫然として顏色を變して怒らん、況んや堂堂と高顯なる天朝にして臣民を率ひて而して犬豕の如き金虜に拜せは、曾て童稚の羞ちなからんや、奉使王倫金の使を誘ひ引

寄せ、江南を詔して諭とし、宋に還さすを以て名目と爲し、實は我等を臣とし、妻等を妾の如くせんと欲す、執政孫近も檜に附き、其意に逢ふやうにいたし[illegible]ぶなり、臣節を守て檜等と共に天を戴だひて天下に住せず、乞ふ、倫檜近の姦惡の三人の頭を斬り、之の首を藁街とて夷狄の邸に竿に貫き暴らし、然して後ち其使を羈繋し、其無禮を責め、何の故に我に暴逆を加ふと其罪を問ふ師を興さん、然らば則ち三軍の士未た戰はざるに勇氣は自ら一倍せん、若しさもなくば、臣は魯仲連か如く東海の地に至り死するあらんのみ、寧んぞ能く斯る樣の小なる朝廷に處では活ることを求めん耶と、是時李綱も亦た上疏して言ふ、今者綸の歸る、[illegible]と偕（トモ）にせしむ、乃ち國號を著さずして而して江南と曰ひ、通問と云はずして而して詔諭と曰ふ、是れ何の禮なり○

紹興九年。金人先以陝西河南地歸宋。朝廷遣官。謁陵寢交地界。除汴京留守。○青澗城李世輔來歸。世輔之先。累世爲蕃族都巡檢使。父子雖嘗仕齊。每相泣恨不得歸宋。齊用世輔知同州。嘗得間生擒撒離曷。欲歸朝。金兵來追。縱之而奔西夏。其父母及二子一孫皆被戮。至是乞兵於夏以復。既出則知陝西已還宋。乃部夏兵而來。上慰勞加賜賚。賜名顯忠。○金國有謀反者。事連宗盤等。皆坐誅。左副元帥撻辣。實楊割長子。金主亶之大父行也。自粘罕死。宗戚大臣皆懼。撻辣與悟室尋亦以謀叛先後誅。金與宋和。實撻辣主之。撻辣既死。於是右副元帥兀朮爲左相。乃密奏於其主。以宋未議歲貢正朔誓表冊命。而撻辣擅許割地。遂渝盟。○紹興十年。金兵分四道南侵。劉錡大破兀朮於順昌府。檜急啓上召錡還。岳飛敗之於郾城。幾擒兀朮。飛至朱仙鎭。檜急啓上召飛還。韓世忠敗金人於淮陽之泇口。兀朮還汴。檢兩河軍與蕃部。以謀再擧。◉〔解釋〕陵寢（歷朝の墳陵寢廟とす）留

守（復た官を除して汴京に留守す）青澗城（陝西にあり今の綏徳州なり）其父母及二子一孫皆被戮（家屬三百口皆金人の害する所と爲る、事は紹興八年にあり、）至是乞兵於夏以復（案ずるに復は復讎なり、宋元通鑑に李世輔西夏に至て、具さに父母妻子の亡を言ふ、願くは二十萬騎を得て撒離喝を生擒し、陝西の五路を取て夏に歸せん、世輔亦共に天戴かざるの讎を報ずるを得んと、夏主之を許す）既出則知陝西已還宋。乃部夏兵而來（案に部の字は部の字の誤なり、宋史宋元通鑑に皆云ふ、夏の軍既に出て、世輔延安に至て陝西宋に還るを知る、乃ち所部の八百餘騎を以て夏の二將を見て曰く、世輔已に延安府に至て講和の勅書を見るを得たり、請ふ二將は本部の軍を以て國に歸る可し、二將從はずして曰く、勅經略して兵を乞て來て陝西を取んと、今既に此に到て乃ち我をして歸らしめんや、世輔勢の可ならざるを知り、乃ち夏の兵を擊ち、之を破て而して南に來る、）大父行（大父は祖也、行は輩なり）南侵（聶黎孛堇山東を出て、撒離曷陝右に寇す、李成河南に寇す、孔彦舟等東京に抵る、）郾城（縣許州に屬す）朱仙鎭（汴京の西南四十五里にあり、）

●「講義」是に至て金人先つ陝西河南の地を以つて宋に歸す、朝廷の官を遣はして陝西に諭し地界を交割す、汴京の留守を除す、時に青澗城の李世輔來り歸る、世輔の先は黑世番族部巡檢使と爲る、世輔年十七父兀朮に隨て行陣に出入す、金人延安を陷る、兀朮父子に官を授く、兀朮一族を聚め泣て曰く、我い宋臣なり、世〻國恩を蒙る、乃ち彼が用たらん邪、會〻劉豫世輔をして一軍を帥て東京に赴かしむ、乃ち密に其客雷傑をして蠟書を以て行在に赴かしむ、豫が廢らるゝに及んで兀朮世輔に授て同州に知たらしむ、計を以て金の撒離喝を執て朝に歸せんと欲す、金兵之を追ふ急なり、乃ち之を縱す、世輔老幼を擄け長驅して而して地鄜城縣に至る、急に人を遣はし兀朮に告く、兀朮即ち家を繋ひ城を出て、馬翅谷に至る、金人の及ふ所と爲る、家屬三百口皆害に遇ふ、世輔夏に奔り、夏人其故を問ふ、世輔具さに言ふ、父母妻子亡ぶ、切齒疾首す、願くは二十萬人を得て撒離喝を生擒し陝西五路を取て夏に歸せん、仍て夏主世輔を以て延安の招撫使と爲す、世輔延安に至り、榜を揭て兵を招く、行て鄜州に至る、吳玠に詣る、捷招（ケイロウセウ）長安に進はす、招を朝に送る、世輔乃ち部三千を率て南に來り、帝撫勞する再三、名を顯忠と賜ふ、或る說と大に異なり、併ながら世本既によりて之を記載す、是時夏主乾順卒し、子仁孝立つ、吳玠善く史を讀み、凡そ往事を師とすべき者は輯して坐右に置く、積む久しく機屬嘉格言なり、兵を用ゆる孫吳に本つき、窮略を務むる近小の利を求めず、故に能く保てば必す勝つ、下を御する嚴にして而して恩あり、心を虛ふして請ひ受く、身大將たり、伍最も下なりと雖も情を以て達するを得、故に士之か爲に死するを樂しむ、將佐を擢用する觀勞能く高下先後を爲す、親故權貴を以て之に先さず、卒する年四十七、少師を贈り威安と諡す、金人意を專らにし蜀を圖る、玠が身其衝に當る、微せば蜀なき久し、故に蜀人之を思ひ廟を立て以て祀る、金國に反を謀る者あり、反謀宗盤等に連なる、皆坐られて誅らる、左副元帥撻辣は實は穆宗の子なり、金主亶の祖の同盟なり、粘罕が死せしより宗戚大臣皆憚る、撻辣悟室と等て同もなく、是亦謀叛を以て先發に誅せらる、金と宋と和睦のなったるは實は撻辣之を主とす、撻辣既に死す、是に於て右副元帥兀朮左相たり、乃ち密に其金主に奏す、宋未だ歲貢正朔誓表册命を議せざるを以て而して撻辣擅に地を割くを許すと、遂に宋と國を通ふ、是より先き金兀朮金主に謂て曰く、撻懶蒲盧虎主河南を割て宋に與ふ、必す陰謀あり、今宋使汴に在り、境を踰へしむる勿れ、王倫之を聞き、即ち介を遣はし具に朝に言ふ、會〻孟庾汴に至る、倫即ち金國に赴き事を議す、行て中山に至る、會〻撻懶等反す、金人之を執ふ、乃ち副使藍公佐を遣り還て歲貢正朔誓命等の事を議す、金人四道に分て南侵す、劉錡大に兀朮を順昌府に破る、秦檜急に高宗に啓して錡を召し還らしむ、實に秦檜は金の間者たり、高宗盛にして而して知らず、岳飛も亦た金兵を郾城に敗る、幾んど兀朮を擒にせんとす、岳飛朱仙鎭に至る、檜急に高宗に啓ふして亦た飛を召し還らしむ、韓世忠金人を淮陽の河口に敗る、兀朮汴に還る、兩河の軍と豪傑の部とを撿め以て再ひ兵を擧るを謀る、○

十一年。兀朮陷盧州。侵和州。劉錡楊沂中敗之於橐皐。檜又啓上亟班師。沂中自瓜州渡返。行在張俊自宣化歸建康。劉錡自采石歸太平州。罷宣撫司。以其兵隷御前。遇出師時。臨時取旨。以韓世忠張俊爲樞密使。岳飛副使。飛世忠尋罷。兀朮以書抵檜曰。爾朝夕以和請。而岳飛方爲河北圖。必殺飛乃可。張俊又構成飛罪。逮赴獄。檜奏誅飛及張憲岳雲。和議遂諧。歸韋太后及徽宗梓宮於宋。金人不惟盡悔所許陝西河南地。仍割唐鄧等州入金。盡淮中流爲界。西割商秦之半。棄和尚方山原。時宣撫使吳玠卒四年矣。胡世將代之。力以和尚原等地爲不可棄。兀朮必欲之。遂以大散關爲界。于時金國屢有內叛。宗戚大臣相繼誅夷。且北有蒙兀。自號大蒙。稱帝改元。連歲用兵。卒不能討。而與之和。南侵又不得逞。而宋之猛將

精兵方日盛。恢復實不難。沮於秦檜。有志之士。扼腕歎息。兀朮且死。曰。南朝軍勢強甚。宜益加和好。俟十數年。南軍衰老。然後圖之。張浚趙鼎皆遠竄。鼎卒於海外。當時異議之人。貶竄殆盡。無復敢言兵者。◉〔解釋〕槖皐（地は巣縣にあり、）宣化（地は廣西にあり、）構成飛罪（初め虜の入て寇す、高宗飛に命して淮西を援て道に就く後書を贈て前途糧に乏しきを以す、飛爲に止らす、後朝に歸るに及て、反て言ふ、飛逗留して進ます、糧の乏しきを以て辭と爲す、士氣を沮喪すと、萬俟卨をして交章して飛を劾せしむ）岳雲（飛が子、）梓宮（人死して棺に干するを梓宮と日ふ、案するに天子の棺は梓木を以て之を爲る、故に之れを梓宮と謂ふ、綱目集覽に宮者存日の居る所、生に緣て死に事ふ、因て以て名と爲す、註に人死して棺に干するを梓宮と日ふは非なり）大蒙（即ち蒙國、又蒙古と日ふ、又韃靼と日ふ、是を元朝と爲す）遠竄（浚は連州、鼎は興化軍より漳州、潮州に移る）◉〔講義〕時に金の兀朮廬州を陷り、和州を侵す、劉錡等之れを柘皐に敗る、秦檜又高宗に啓して亟やかに軍を歸さしむ、楊沂中は瓜州渡より行在に返る、張俊宣化より建康に歸る、劉錡采石より太平州に歸る、宣撫司を罷む、其兵を以て御前に隸す、師を出す時に遇ふ、時に臨て旨を取る、韓世忠張俊を以て樞密使と爲る、岳飛副使たり、岳飛韓世忠尋て罷む、金の兀朮書を以て檜に抵して日く、爾ち朝夕和を以て請ふと雖も、岳飛方に河北の謀圖を爲す、故に必す岳飛を殺さば乃ち可ならんと、張俊又岳飛が罪を構ひ成す、遂捕して獄に赴く、檜奏して岳飛及ひ張憲岳雲を誅す、和議遂に諧ふ、宋史に雲と張憲と皆棄市す、凡そ飛が冤を訟ふ者は或は黜られ或は死す、其獄を傳成する者は秩を進む、飛が親に事ふる孝、志を立る、憤慨必す中原を取て胡虜を滅すを以て念と爲す、或は問ふ、天下何の時か太平、飛か日く、文臣錢を愛せす、武臣死を惜ます、天下太平、飛士卒を御する嚴にして而して恩あり、凡そ頒犒あれば均しく軍吏に給す、秋毫も私せす、善く少を以て衆を撃つ、擧する所有らんと欲は盡く諸統制を召して與に謀る、謀定て而して後ち戰ふ、故に勝あつて敗なし、粹に敵に遇ふも動かす、故に之が爲に謂して日く、山を撼は易く、岳家の軍を撼かすは難しと、張浚嘗て兵を用ふの術を問ふ、飛日く、仁信智勇嚴一を闕て不可なり、飛賢を好み士に禮す、經史を覽みて雅歌投壺、恂恂として書生の如し、是れに至て和議遂に諧ふ、韋太后及ひ徽宗の梓宮を宋に歸す、金人盡く紹興九年に河南陝西の地を歸す、既にして而して之れを悔ゆ、十年復た歸す所の地を取る、又仍て宋の唐鄧等の州を割て金に入れしめ、淮の中流を畫して界と爲す、西の方商秦の中を割き、和尙方山原を棄んと、時に宣撫使吳玠卒して四年なり、胡世將之に代る、力めて和尙原等の地を以て棄つ可からすと爲す、兀朮必す和尙方山の二原を求む、遂に和尙方山の二原を弃て、大散關を以て界と爲す、時に金國屢々內叛あり、宗戚大臣迭相繼て誅せられ、且つ族を夷せらる、且つ蒙古あり、自ら大蒙と號す、帝を稱して元を改む、遂に兵を用ゆ、卒に討伐する能はず、而して金人之と和す、南侵して又還することを得す、而して宋の諸將精兵方に日に盛なり、宋の恢復する實に難からず、然るに秦檜に沮間せられ、有志の士腕を扼して歎息す、兀朮且に死せんとす、日く、南朝の軍勢強き甚し、宜しく益々和好を加へ、十數年を俟つへし、然して後ち南軍衰老せん、其時を圖て之を討伐するも遲からすと、張浚趙鼎皆遠く竄せらる、趙鼎は海外に死す、當時異議の人貶竄殆んと盡く、故に再ひ兵の事を言ふものなし、

○紹興十九年。金主亶。爲其下所弑。共立丞相岐王亮。旻之孫也。○紹興二十年。金主亮。以上京僻在一隅。城燕京。徙居之。改燕京析津府。爲大興府。號中都。以中京會寧府。爲北京。汴京開封府。爲南京。而舊遼陽府爲東京。大同府爲西京。如故。分蕃漢地。爲十四路。置總管府。○二十五年。秦檜卒。檜秉政十八年。臨終猶起大獄。欲殺異己者張浚李光胡寅等五十三人。幸檜病已不能書。得免。沈該。萬俟卨。湯思退。陳康伯。朱倬相繼爲相。○三十一年。欽宗凶問至。以去年冬。殂於五國城。年六十。◉〔解釋〕孫也（亶か從弟、）万俟（音墨其、虜姓也、）◉〔講義〕金の完顏亮其主亶を弑して而して自立す、亮丞相岐王たり、旻の孫なり、金主亮上京の僻地にして一隅にあるを以て燕京に城て徙て之に居す、燕京析津府を改て大興府と爲す、中都と號す、中京會寧府を以て北京と爲す、汴京開封府を南京と爲して、而して舊の遼陽府を東京と爲すこと故の如し、蕃と漢との地を以て十四路と爲す、總管府を置く、檜病す、帝其第に幸ね問ふ、一なく惟流涕而已、檜の子熺奏す、代て相位に居る者は誰と爲んを請ふ、帝の日く、此事卿當に與に語ふかるべからず、帝宮に還り、沈虛中に命して檜及ひ熺と制を草す、並に致仕せしむ、是夕檜卒す、申王と謂り、忠獻と謚す、檜相位に居る十八年、和を倡ひ國を誤り、讎を忘て倫を敗る、禍心を包藏す、君父を却制す、郡國の事惟申奮士の敢に至る者なし、同列衆を上の前に論する未た嘗て力とめ辨せす、但に一二爵を以て之を傾擠す、帝をして自ら怒らしむ、一時の忠臣良將誅鋤殆んと盡く、其頑鈍恥なき者は率ね檜か用を爲す、金て善類を誣陷するを以て功と爲す、晩年殘忍尤も甚し、屢大獄を興す、門を閉て賂を受く、富は國に敵す、外國の珍寶死するも猶門に及ふ、檜專てと

（に帝と爭ひ勝つ、其勢漸く制す可らず、檜既に死す、帝楊沂中に謂て曰く、朕今日始て檜逆謀を防ぐを免かる、秦檜が姻黨を黜け、張浚胡寅張九成等二十九人の官を復す、李光胡銓を近州に徙す、欽宗の凶問至る、去年の冬を以て五國城に殂す、年六十）○金主亮修汴京。蓋經營南侵幾年矣。嘗因使來密藏畫工。圖繪臨安山水城市宮室。以歸。題詩其上。有立馬吳山第一峯之句。是秋徙居汴。遂渝盟。舉兵。其母諫。殺之。以威衆。兵號百萬。陷淮西諸郡。江淮浙西制置使劉錡。遣王權迎敵。權逗留。已而退還。奔采石。報至。中外大震。有浮海避狄之議。陳康伯不可。命葉義問視師。中書舍人虞允文參謀軍事。金人陷楊州。趨瓜州。劉錡遣將敗之於皁角林。有詔令錡還軍。專防江上。金主欲由采石渡。朝廷以李顯忠代權。而未至。金人舟來。虞允文亟督水軍海鰍船迎擊死鬪。金人不能濟。時亮聞有內變。又聞舟師由海道來者。已爲李寶所焚。而荊鄂諸軍。方自上流而下。忿甚。乃回楊州。召諸將約。三日必濟。過期盡殺。諸將遂弑亮。方亮之引而南也。渤海一軍叛去。已擁立葛王褎于遼陽。聞亮死。遂入譙京。追謚亮爲閔宗。廢爲海陵王。謚曰煬。褎晟之孫也。後改名雍。先是數年。張浚嘗言。金必渝盟。時相湯思退等。大駭以爲狂。至是浚起判建康。上自臨安如建康。浚迎謁。衞士見其復用。以手加額。○三十二年。上還臨安。金使來。遣使報之。復尋和議。夏六月。上內禪。退居德壽宮。在位三十六年。改元者二。曰建炎紹興。皇太子

立。是爲孝宗皇帝。●〔解釋〕立馬吳山第一峯（金主臨安の湖山を寫さしめ、以て屏と爲し、而して己の像を畫す、馬に吳山の絕頂に騎つ、詩を其上に題して曰く、萬里車書盡混同、江南豈有別疆封、提兵百萬西湖上、立馬吳山第一峯）江淮浙西制置使劉錡（職官志に、制置使は、常に置かず、邊部の軍旅を經略するの事を掌る）海鰍船迎擊死鬪（海鰍は、戰艦也、死鬪は、殊死して戰ふを言ふか、てさし、按するに老學庵筆記に、楊么が戰艇に車船あり、槳船あり、海鰍頭あり、鰍は俗の鰌の字、取幽切、秋海賦に形長き者は牡蠣其背に寮り、族船がある、崇さ十許丈、鰌頭て以て遊ふ、大なる者は海底に穴居す、穴に入れは海溢れて潮を爲す）皁角林（楊州にあり）內變（葛王を擁立す）●〔講義〕金主亮汴京を修め、南を經營すること幾年なり、嘗て宋の使の來るに因て、密に畫工を藏しめ、臨安の山水城市宮室を圖繪して以て歸る、詩を其圖の上に題す、是秋徙て汴に居る、遂に盟約を渝め兵を擧く、其母盟を渝變するを以て諫言す、亮母を殺して以て衆を威さす、衆兵百萬と號す、淮西の諸郡を陷る、江淮浙西の制置使劉錡王權を遣り敵を迎ふ、權逗留す、已にして而して退く、還て采石に奔る、其報聞宋朝に至る、宋の中外大に震懼す、頗る海に浮て金を避るの評議あり、惟り陳康伯可かず、葉義問に命して軍を視せしむ、中書舍人虞允文參謀軍事たり、金人楊州を陷て瓜州に趨むく、宋の劉錡之を皁角林に敗る、然るに復た詔あつて錡に令して軍を還さしむ、專ら江上を防ぐ、金主采石より渡らんと欲す、朝廷李顯忠を以て王權に代らしむ、而して顯忠未だ至らず、金人の船來る、參謀軍事虞允文亟かに水軍を督して海鰍船を以て金人を迎へ擊て殊死して戰ふ、金人采石を濟ること能はず、時に金主亮內變ありと聞き、又聞く舟師の海道より來る者は已に宋人李寶が爲に焚れて、而して荊鄂の諸軍方に上流より而して下ると、亮之を聞て忿ること甚し、乃ち亮は楊州に回て諸將に召して約す、三日にして必ず采石を渡らん、若し期を過ぎは悉く殺さんと、諸將其殘忍を惡て遂に亮を弑す、初め亮既に江北に至る、民の船を掠む、指麾して濟らんと欲す、允文舟を七毀山の後に伏して令して曰く、旗擧げは則ち出よと、其半は渡るを伺ひ、旗を山に擧す、人は舟中に在り、車を踏て以て船を行る、但た船行を見て而して人を見ず、蓋以て紙船と爲す也、舟中より忽ち一の霹靂礮を發す、蓋し紙を以て之を爲す、而して實るに石灰硫黄を以てす、燬空より而して下る、水中に墜つ、礮黄水を得て而して火水より跳り出つ、其聲雷の如く、紙裂て而して石灰散して烟霧と爲る、其人馬の目を眯す、咫尺相見えす、遂に康舟を歴す、人馬皆溺しむ、亮か兵を引て南するに方てや、渤海の一軍叛き去る、已にして葛王褎を遼陽に擁立す、亮が死を聞て遂に譙京に入る、褎は晟の孫なり、後に名を雍と改む、是より先き數年張浚嘗て曰く、金必ず盟約を變んと、時の相湯思退等大に駭て以て狂と爲す、是に至て浚起て建康に判たり、帝臨安より建康に如く、浚迎て謁す、衛士其復た用らるを見て手を以て額に加ふ、大喜を謂ふ、解は司馬光條に見たり、故に贊せず、

孝宗皇帝初名伯琮。宗室追封秀王諡安僖子偁之子。太祖七世孫也。母張氏夢崔府君擁一羊來曰。以此爲識。高宗爲康王。出使至磁州。磁人夢崔府君出迎。張氏以是歲丁未。生伯琮於秀州。有嘉禾之瑞。小名羊。高宗喪太子旉。命選太祖之後。得伯琮。鞠宮中。賜名瑗。適與崔府君名同。封晉安郡王。秦檜疾其英明。而不能害也。竟立爲皇子。賜名瑋。封楚王。紹興末。賜名昚。立爲皇太子。尋詔即位。尊奉上皇帝爲光堯壽聖皇帝。皇后吳氏爲壽聖太上皇后。○以史浩爲右相。張浚樞密使。督師江淮。遂北伐。浩不與其議。力丐罷。李顯忠出濠州。趨靈壁。敗金兵。邵宏淵出泗州。圍虹縣。降金將。進克宿州。金副元帥紇石烈志寧。率兵至。顯忠與戰。連日未決。諜報金人大興河南兵將至。會宏淵與顯忠不相能。而顯忠又不犒士。士憤怨。遂潰而歸。金人亦解去。上銳意恢復。是役不利。乃復議和。陳康伯罷。湯思退張浚爲左右相。浚仍以都督視師。數月而罷。未幾卒。浚許國之心。白首不渝。終身不主和議。遺命付其二子。以不能復中原雪國恥。不得祔葬先人之墓。

◉〔解釋〕張氏（張氏者、子偁の夫人なり、時に孝宗の父已に死す、追封して秀王と爲す、諡して安僖と曰ふ、名は子偁、）崔府君（神の名、按ずるに後漢の崔瑗、字は子玉、茂才に擧られ、汲の令に遷る、人之を歌て曰く、天神明の君を降す、我に慈仁の父を賜ふ、後ち胡廣瑗を薦む、宿德大儒と、濟北相に遷る、）丐（音蓋、乞ふなり、）靈壁（縣は宿州に屬す、）虹（音降、虹縣は泗州に屬す、）宿州（河南に屬す、）列志寧（金の帥の名、）二子（は名栻、及杓、は諱ならす、）◉〔講義〕孝宗皇帝名は昚、太祖六世の孫、德芳の後、秀王偁の子なり、母張氏、崔を夢み、州に生む、嘉禾の瑞あり、高宗嗣なく、育まれて皇太子と爲る、禪を受く、在位二十七年、復た内禪す、壽六十八歳にして崩す、帝性至孝、上皇に事ふる二十六年、孝養備に至る、升退の日、哀慕尤も切なり、恢復の志あり、金主雍明にして、隙の乘す可きなし、南北好を講し、倶に休息を得たり、母は張氏、夢む崔府君一羊を擁して來り曰く、此の羊を以て識と爲し、高宗康王と爲るとき、出でゝ使して磁州に至る、磁人夢む、崔府君が出でゝ康王を迎ふと、是れ崔府君亦羊を以て康王の子とせんを命ずるの兆なり、故に張氏か是歳の丁未を以て伯琮を秀州に生む、是亦丁未の未字は羊字に當る、秀州の秀の字も嘉禾の瑞と符合す、小名は羊と偁す、高宗太子旉を喪ふ、命して太祖の後を選はしむ、偶く伯琮を得て宮中に鞠養す、名を瑗と賜ふ、適ゝ崔府君の名と同し、晉安郡王に封せらる、秦檜伯琮の英明なるを疾む、然り而して殺害する能はず、竟に立て皇子と爲す、名を瑋と賜ふ、楚王に封せらる、紹興の末、名を昚と賜ふ、[illegible]て軍を選んとす、餘麗交く諫て曰く、將は軍に在り、君命受けさる所あり、此の挙係る所甚た重し、奈何ぞ師を退けん、浚朝論の和を主とするを知り、乃ち曰く、浚豈に此を知らざらん、願ふに主上初[illegible]散、齊亟兵を握り、遂にあり、留あり、費賞ろ、敢て遂はん、遂に師を還く、河池に還る、金人其後に乘す、瑞軍亡失する者三萬三千、部將數十人、進發痛畏、葉原野に援ふ、是に於て秦鳳熙河永興三路新復の十三州三軍、皆復た金の爲に取らる、史浩を以て尚書右僕射同平章事樞密使と爲す、張浚を以て樞密使都督江淮軍馬開府たり、浚は出て師を江淮に督す、遂に北金を伐つ、史浩は北伐にかなく、只和議を主となす、故に北伐の議に與らず、力め丐て其右相を罷む、李顯忠は濠州より出て、靈壁に趨て金人と戰て、遂に金の兵を敗る、邵宏淵も亦た泗州より出て來て虹縣を取り圍み、金の將を降す、遂に進て宿州に克つ、金の副元帥紇石烈志寧兵卒を率て來る、李顯忠烈志寧と共に戰ふ、連日にして未た勝敗を決し定まらず、其内諜（モノミ）者報ずるには、金人大に河南の兵を興發し將に來り烈志寧か師に會せんとす、部宏淵固より李顯忠と不和にして相能せず、而して顯忠又軍士を犒らはず、故に士卒顯忠に憤怨す、遂に上下和せず潰亂して歸る、金人も亦た戰はずして兵を辭き去る、孝宗は意を國家を恢復に鋭ふす、然るに是の役利あらず、仍而復た和睦を評議す、陳康伯政を罷む、湯思退張浚左右の相と爲る、張浚因て都督の役を以て軍師を視る數月にして罷む、未た幾ならずして卒す、浚既に朝廷を去り、遂に地を割て和を求むる議に決す、浚猶ほ上疏して言ふ、思退姦邪必ず國事を誤らんと、且つ帝に學を務め賢に親むを勸む、或人浚に勸む、復た時事を以て首と爲す勿れと、浚曰く、君臣の義天地の間に逃るゝ所なし、吾れ兩朝の厚恩を荷ふて久しく重任に居る、今國を去ると雖も、惟日に上の心感悟するを望む、苟も見る所あり、安んぞ肯て言はざるに恐ひん、上如し復ひ浚を用んと欲せは、浚嘗に即日道に就くべし、敢て老を以て辭するを爲さず、若ち等か言の若きは是れ賊に何心そ哉、留まる者幾然たり、行て餘干に卒す、疾を得て手から書して二子栻杓に付して曰く、吾嘗て相國となり、中原を恢復し、祖宗の恥を雪ぐ能はず、即ち死せば我か先人の墓左に葬むるべからず、我を衡山に葬らば足らん、數日にして

（而して発す、）○湯思退。密有召虜議和之迹。言者論罷竄之。道死。康伯復相。和議成。先是國書。大宋去大字。皇帝去皇字。書用君臣之禮。有再拜等語。金使至。則起立問金主起居。降坐受書。奉使者自同陪臣。館伴之屬。皆拜其來使。至是始稱上爲宋皇帝。止爲叔姪之國。易歲貢爲歲幣。歲幣減十萬之數。地界如紹興之時。而餘禮往往竟不能盡改。上終身憤之。其後屢請還河南陵寢地。改受書禮。金人卒不從。蓋上雖有志復讐。而無能輔其志者。自陳康伯卒後。共适。葉顒。魏杞。蔣芾。陳浚卿。虞允文。梁克家。曾懷。葉衡。史浩。趙雄。王淮。周必大。留正。相繼爲相。惟浚卿允文並相時。有經營北方之議。而浚卿持重。卒與允文不合。允文所爲。人亦議其虛誕。竟不效。如浩尤不主用兵。必大從容廟堂。善類多所引進。朱熹以淳熙十五年被召。必大作相時也。初程頤卒於徽宗之世。其徒楊時。在欽宗光堯時。皆被擢。趙鼎雖不及識頤。而主張其學。惡之者以楊時爲還魂。鼎爲尊魂。胡安國爲強魂。其後又有尹焞。見召入經筵。焞蓋頤晚年高弟也。士大夫名程氏之學。曰道學。時好所尚。或冒此名以進。時好不同。亦多以此名見擠於世。延平李侗受學於楊時之門人羅從彥。而熹又受學於侗。胡銓嘗薦熹於光堯。熹不至。乾道以來屢召不起。特旨改秩奉祠。召入館不就。後爲南康守。浙東荒。除熹提舉。往救之。過闕嘗一入奏事。至是召對。除兵部郎。與侍郎林㮚不合。即奉祠去。數月復召。熹辭。惟進封事。言天下之大本。與今日之急務。大本在陛下之心。急務則輔翼太子。選任大臣。振舉綱維。變化風俗。愛養民力。修明軍政。六者是也。熹之同志有廣漢張栻者。魏忠獻公浚之子。其學得之胡宏。宏安國子也。栻之言曰。有所爲而爲者利也。無所爲而爲者義也。學者誦爲名言。稱栻爲南軒先生。有呂祖謙者。公著之五世。希哲之四世孫也。亦祖程氏之學。學者稱爲東萊先生。皆先是數年卒矣。惟熹學問老而彌篤。學者共師宗之。稱爲晦菴先生。四方仰其人。如泰山北斗。南使至北。金人必問朱先生安在。同時有臨川陸九淵。世號象山先生者。與熹爭論太極圖說。且謂學有悟入。譏熹從事訓解。意見頗立異云。

◉〔解〕釋竄之（永州に謫する、行て信州に至て而して死す、）陪臣（宋の使、自ら諸侯の陪臣に同し、）留正（留は姓、正は名なり、）延平（郡は福建に屬す、今南劍府、）奏事（上書して事を言ふ、）封事（實封して上書す、）魏忠獻公（魏は國、忠獻は諡、公は爵なり、）

◉〔講義〕湯思退密かに金虜を召し寄せ和睦を議するの行跡あり、言官之を論して、思退が官を罷めて之を竄流す、行て信州に至て死す、因て陳康伯再ひ相たり、遂に復た金と和議成る、是より先き國書は即ち宋より金國に遺はす國書を言ふなり、大宋は大字を去り、皇帝は皇字を去り、書文は金を君とし宋を臣とするの禮を用ゆ、内に再拜等の語あり、金の使宋に至れば則ち起立して禮拜を爲し金主の起居を問ふ、高坐を降て金の書を受く、奉使の者は、自ら陪臣に同ふす、館伴の屬は皆其來使を拜す、是に至て始て上を稱して宋皇帝と爲し、止ゞ叔姪の國と爲す、蓋し金を叔とし宋を姪とするなり、歲貢を易へて改めて歲幣と爲す、歲幣は十萬の數を減す、地の境界は、紹興の時定たる如くす、而して餘の禮は往往竟に盡く改め變する能はす、孝宗身を終るまで之を憤る、其後屢河南祖宗陵寢の地を

還し、金より書を受るの禮を改めんと請ふも、金人卒に之に從はず、蓋し孝宗は讐を復するの志ありと雖とも、而も能く其志を輔くる者なし、陳康伯死してより後ち、洪适、葉顒、魏杞、蔣芾、陳俊卿、虞允文、梁克家、曾懷、葉衡、史浩、趙雄、王淮、周必大、留正相繼て相と爲る、惟り陳俊卿、虞允文並て相たる時に金を經營する謀あり、而して俊卿は鄭重に事を謀る、故に允文と議論合はずして、然とも允文が爲す所も、來入も亦其盡謚とてまかせ大なる言を議るも、竟に效驗あらず、史浩が如きは始よりも亦兵を用ゐるを主とせず、周必大は廟堂に從容として善を用ゆる故に、善人の類を引き進むる所多し、朱熹は淳熙十五年を以て朝廷に召し出され、偶周必大相と作る時なり、始め程頤徽宗の世に卒す、其道を學ぶ徒、楊時は欽宗、光堯の時に在り、皆擢拔せらる、趙鼎は遲く出てゝ程頤を識るに及ばずと雖とも、而して程子の學を主張す、時徒を恐むる者は楊時を以て程子の歸り魂と爲し、道鼎を以て只程子を尊ぶばかりの魂と爲す、胡安國を勉強だけの魂と爲す、皆な之なり、嘲弄するの詞なり、其後又尹惇あり、召されて經を解く筵席に入る、惇は蓋し程頤が晩年の高門なり、士大夫程氏の學を名けて道學と曰ふ、是より先き監察御史陳賈、道學を禁ぜんと請ふ、所謂道學なる者あり、世を欺き名を盜む、宜しく信用すべからず、帝已に其說に惑ふ、王淮又大府丞陳賈を以て監察御史と爲す、賈因て對す、首論に曰く、臣伏して見近世士大夫の謂ふ所道學なる者あり、其說謹獨を以て能と爲す、踐履を以て高しと爲し、正心誠意克己復禮を以て事と爲す、此の若きの類、皆學者の共に學ぶ所なり、而して其徒乃ち謂ふ、己れ獨り之を能すと、其爲す所考ふれば則ち又大に然らず、其名を假り以て其偽を濟す者に識からざらん耶、臣願くは陛下明かに中外に詔して痛く此習を革めんと、時好の尚る所、或は此道學の名を冒して以て進む、時好同からざれば亦た多く此の道學の名を以て世人の懲濟する所と爲るなり、延平の李侗、學を楊時の門人羅從彥に受く、而して熹又學を李侗に受く、胡銓嘗て熹を光堯に薦む、熹至らず、時に京官に除するも、熹辭して至らず、乾道以來歷召さるも熹起たず、特旨を以て秩を孝嗣に改む、熹嘗て潭州の南嶽の廟に監と爲る、詔して褒む、熹賢に安して道を守り、廉退辭す可し、特旨を以て改て台州の崇道館を主管せしむ、召して秘書郎と爲す、熹又官に就かず、後に南康の守と爲る、浙東常平[illegible]を提舉に際して往て之を救はしむ、闕を過き嘗て一たひ入て事を奏す、是に至て召して事を問ふに、熹對て君の淵に道するとより、兵部郎に除す、侍郎林栗と合はず、即ち李嗣して去る、熹辭するに足疾を以て嶷た肇嗣たるふ、乃ち西京の嵩山の崇福宮を主管せしむ、數月にして復た召す、熹辭す、惟封して人に見せしめず、只帝にのみ見せしむるを謂ふ、天下の大本と今日の急務とを言ふ、大本は陛下の心に在り、急務は則ち太子を輔翼し、大臣を選んで、音人を得て政を任んじ、朝廷の綱維を援ひ舉け、風俗を變化し、民力を愛し養ひ、軍政を修明す、六の者君也と、熹の同志に廣漢の張栻と云ふ者あり、魏の忠獻公張浚の子なり、張栻學を胡宏に得たり、宏は安國の子なり、栻の言に曰く、爲にする所ありて而して爲る者は利なり、爲にする所なくして而して爲るは義なりと、是れ爲にすと云ふ者は私を損して言ふ、學者稱して名言と爲す、栻を稱して南軒先生と爲す、呂祖

謙と云ふ者あり、呂公著の五世、呂希哲の四世孫なり、亦た程氏の學を祖とす、學者稱して東萊先生と爲す、偕是より先き五六年は希す、惟ゝ熹學問密にして而して篤し、學者共に之を師宗とす、稱して晦菴先生と爲す、四方其人を仰き貴ふて之を山北斗星の如し、宋使北に至れは金人必す朱先生は今安くに在ると爲す、同き時代は臨川の陸九淵と云ふ人あり、世に象山先生と號す、朱熹と大極圖說を爭論す、且つ九淵謂ふ、學に悟り入るあり、熹が訓解に從事するを賤て、徹見頓ろ異說を立ると云ふ、

◎上久。有與子之意。會光堯皇帝壽八十一而崩。乃詔內禪。上奉德壽二十六年。孝養備至。既升遐。哀慕尤切。以不得日奉几筵。欲退終喪制。移居重華宮。在位二十八年。金世宗雍。以是歲殂。其嗣允恭先卒。孫璟立。雍賢明仁恕。號爲北方小堯舜。故金之大定三十年。與宋之隆興乾道淳熙。相終始。南北皆得休息。彼此無可乘之釁。上之齋志。不克大有爲者以此。太子立。是爲光宗皇帝。

◎〔解釋〕德壽（光堯の宮名、）二十八年（元を改むる者みつ、隆興乾道淳熙）大定（金の淳宗年號、）齋（音齊、持なり、）

◎〔講義〕孝宗久しく子に禪り與ふるの意あり、會ゝ光堯皇帝壽八十二歲にして崩す、乃ち詔して內にて位を太子に禪る、帝德壽に奉し皇父光堯に事ふる二十六年、孝道愛養の事備さに至れり、既に光堯崩して後ち、哀慕尤も切なり、日々几筵に奉するを得ざるとは、光堯帝が崩御に依り、日々几筵に奉事するを得ざるなと云ふ、故に朝を退て喪制を終らんと欲して、移て重華宮に居る、在位二十八年なり、金の世宗雍、是歲を以て殂す、其嗣允恭先に卒す、孫璟立つ、雍賢明仁恕なり、號して北方小堯舜と爲す、故に金の大定三十年、宋の隆興乾道淳熙と相終始す、南北宋金皆戰はずして休息を得たり、故に金宋に乘ずべきの隙釁なく、帝の志を持す大に爲す有る能はざる者は此を以てなり、太子立つ、是を光宗皇帝と爲す、

光宗皇帝。名惇。年四十四。自東宮受禪。尊太上皇帝爲至尊壽皇聖帝。周必大罷。留正葛邲爲左右相。改元曰紹熙。皇后李氏。大將李道女也。悍而妒。欲立太子嘉王爲儲嗣。因內宴請於壽皇。不許。后不遜。壽皇有怒語。

后卿之。乃造誣罔。謂壽皇有廢立意。致上驚恐得疑疾。及聞後宮有暴死者。上震懼。疾愈甚。不復過重華宮。近兩載始一至。壽皇彌不懌。上亦不能視疾。壽皇居重華踰五載。壽六十八而崩。上不能執喪。一日忽仆於地。中外危懼。太皇太后立嘉王。是爲寧宗皇帝。◉〔解釋〕光宗（名は惇、孝宗の第三子、初め恭王に封ぜられ、尊立で太子と爲り、内禪を受く、在位五年壽四十四歳にして崩す、）◉〔講義〕（光宗皇帝年四十四にして東宮より禪を受く、東とは東方を震と爲す、震は長男たり、故に太子は東に在り、太上皇帝を尊て至尊壽皇聖帝と爲す、周必大政を罷む、留正葛邲左右の相と爲る、元を改めて紹熙と曰ふ、皇后李氏は大將李道が女なり、悍曲にして妬嫉なり、屢々太子嘉王を立てゝ儲嗣と爲さんと思ひ、內庭の酒宴に因て孝宗に請ふと雖ども、孝宗之を許し玉はず、因て皇后孝宗ニ對シ后怒て曰く、妾は六禮の聘する所、嘉王は妾の親生なり、何ぞ不可と爲んと、乃ち不遜の語を爲す、孝宗怒る、語あり、皇后之を含んで大に恚る、乃ち無きことをあると誣ひ、人を罔し言ふには孝宗太子を廢む、別に皇子を立んと欲すと、故に光宗驚き恐れて物を疑ひ怪むの心より遂に疾を得るを致す、と忽ち後宮に暴に死する者ありと聞て光宗驚き懼れ、疾愈々甚し、再ひ孝宗居る所の重華宮を過て上皇に謁せず、稍く二載に垂んとして始て一たひ至て之を見る、孝宗壽皇重華に居て五載を踰て壽六十八にして而して崩す、光宗帝壽皇の喪を執る能はず、一日忽然として地上に仆倒す、朝廷の中外大に危み懼る、太皇太后嘉王を立つ、是を寧宗皇帝と爲す、是より先き光宗疾あり、朝を視ず、初め光宗官者を誅せんと欲す、近習皆な恐懼す、遂に壽皇太皇太后皇太后の三宮を離間す、是れ官者の爲す所なり、光宗之を疑ふ、自ら離間を解く能はず、會ら光宗心疾を得る、謂ふ所心經病なり、時に孝宗壽皇良藥を購ひ得て光宗の重華宮に至るに因て藥を投けんと欲す、官者遂に皇后に訴て曰く、太上壽皇は一大丸を合藥し、宮車の重華宮を過るを待て即ち藥を投せんと欲す、萬一不虞なることあらは其宗社を奈何んと、后心に之を卿むと、）

寧宗皇帝名擴。初封嘉王。孝宗崩。光宗疾病。知樞密院事趙汝愚。密建翼戴之議。知憲聖慈烈吳太皇太后。以宗社爲憂。將白事。而難其人。有知閤門事韓侂冑者。琦之曾孫。而太皇太后女弟之子也。乃因以入白太皇。垂簾引嘉王入即位。代執孝宗之喪。中外危疑者乃定。光宗居壽康宮。後六年而崩。壽五十四。上之爲嘉王也。黃裳爲翊善。講說開導。光宗嘗宣喩曰。嘉王進學。皆卿之功。裳曰。若欲進德修業。追蹤古先哲王。須尋天下第一人乃可。問爲誰。以朱熹對。彭龜年繼爲宮僚。因講每及熹說。上傾心已久。熹在光宗時。守漳州。後守潭州。爲湖南安撫。至上登極。首被召除待制兼待講。熹未至。已聞近習用事。御筆指揮。皆有漸。深憂之。留正罷。汝愚爲相。韓侂冑自負有定策功。希不次之賞。汝愚不肯。驟除。遂怨汝愚。爲政方務引進善類。裁抑佞倖小人。滋不悅。相與共排之。朱熹既至。上疏忤侂冑。在朝甫四十六日而罷。言者以爲熹有宮祠之命。遠近相吊。天下大老去之。誰不欲去。若正人盡去。何以爲國。汝愚袖還內批。且諫且拜。不聽。侂冑欲併逐汝愚而難其名。或教之曰。彼宗姓。誣以謀危社稷。則一網盡矣。侂冑然之。汝愚在相位數月。罷。連貶竄。服藥以死。侂冑用李沐。何澹。劉德秀。胡紘。沈繼祖等。爲鷹犬。搏擊善類。無遺。彭龜年。劉光祖。章穎。葉適。徐誼。沈有開。吳獵。黃由。黃度。鄧馹。陳傅良。樓鑰。鄭湜。李祥。楊簡。呂祖儉。曾三聘。游仲鴻。項安世。孫元德。袁燮。陳武。汪逵。范仲黼。黃灝。詹體仁等貶逐。不可勝紀。籍記黨人姓名。目曰僞學。以朱熹爲首。在籍者數十人。蔡元定坐熹累。道州編

管。大學生楊宏中等六人。亦坐上書救黨人編管。留正以嘗引用黨人亦黜竄。俞端禮。京鏜。謝深甫。相繼爲相。

◎〔解釋〕太皇太后（紹興の初め、光宗帝高宗の后呂氏に尊號を上て壽聖慈烈太皇太后と爲す、呂字疑らくは呉字の誤なり、）太后（呉后）翊善。（案ずるに職官志に翊善は即ち諮制の說者なり、中興以後に增し置く、諸註に善道を輔翼するに當る、未た何に據るを知らず、）女弟（妹を女弟と日ふ）代執云云（光宗に代て孝宗の爲に重きを承く）翊善宮僚（王宮の僚屬なり、又云ふ、東宮の官屬、之を宮僚と謂ふ、）傾心（向慕なり、）言者（游說、中）因講毎及熹說（龜年嘗て翁の祖公其母を制する能はざるを謂して云ふ、母は制す可からず、當に其侍御の人を制すへし、王問ふ此誰の說そ、對て日く、朱熹なり、王深く之を善とす、自後講する毎に必す熹の說を如何と問ふなり、）皆有漸（御筆指揮漸く近習に昵しむ、御筆は即ち内批なり、露雪錄に宋の故事に禁中の分降の事、外に付す、之を内批と云ふ、又之を御筆と謂ふ、）内批（上の批する所、朱子を罷むるの勅）宮祠之命（奉祠して外に祀るの命なり、）宗室（宗室の内同姓）六人（楊宏中、周端朝、張道、林仲麟、蔣傅、徐範の六人なり、）

◎〔講義〕寧宗皇帝名擴、光宗の第三子、初め嘉王に封られ、光宗悖逆、趙汝愚太皇太后の命を奉し、内禪を受く、在位三十年、壽五十七歳にして崩す、帝恭仁儉にして始終一の如きも、然れとも柔にして而して不明、前に韓侂冑あり、後に史彌遠あり、忠良を屏斥し、兵を玩し、寇を致す、嘉定以後金人邊を犯す、盜れさるなし、元北方に起り、江南危懼す、小康あれとも稱するに足らさるなり、嘗て孝宗崩す、光宗疾ひ病なり、知樞密院事趙汝愚密る襲賊の讒な趙て壽聖慈烈皇太皇后宗社を以て重さ爲すを知る、將に其事を白し上けんとす、太も而して其自ら上ぐべき人を難す、知閣門事韓侂冑と云ふ者あり、韓琦の曾孫にして而して太皇の女弟の子なり、乃ち之に因て以て宮に入て白ふす、太皇后を垂れ政を聽き、乃ち嘉王を引き上けて天子の位に即かしむ、故に寧宗は光宗に代て孝宗の喪を執らしむ、故に朝廷の中外危疑する者乃ち定まる、光宗壽康宮に居る、後ち六年にして而して崩す、壽五十四、寧宗の嘉王たる日、黃裳は翊善と爲り、講說明尊す、光宗嘗て宣諭して日く、嘉王に進むは皆な卿の功なり、黃裳か曰く、若し德に進み學を修め古先哲王を追蹤せんと欲せは須らく天下第一の人と爲らんことを求めて乃ち善なるへし、問ふ、誰と爲す、朱熹を以て對ふ、彭龜年繼て宮僚と爲る、王宮の僚屬たり、乃ち龜年か講義に因て誨に熹か說に及ふ、寧宗熹を重んずる己に久し、熹光宗の時に在り、漳州に知たり、尋て湖南の安撫と爲る、寧宗の登極に至り、首として召されて待制兼侍講に除らる、熹未た至らす、且に近習のものか政を專にし、御筆を用ひ指揮して漸く近習に昵むと聞き、深く之を憂ふ、留正三も汝愚相と爲る、韓侂冑自ら定策の功有を恃み、次第もなく做に拔擢の恩賞を希ふと雖とも、汝愚肯て睽に高官に

除命せす、故に遂に汝愚を怨む、是より先き侂冑定策の功を推んと欲す、趙汝愚日く、吾は宗臣、汝外戚なり、何そ以て功と奮ふ可けんや、但侂冑を防策に遷す、侂冑望を失す、然とも詔旨を傳導するを以て浸く親幸せらる、時に間に乘して威福を弄す、臨安府徐誼汝愚に語て曰く、侂冑異時必す國の患を爲さん、宜く其の欲を飽しめて而して之を遠さくべしと、汝愚聽かす、汝愚政を爲す、方に務て善類を引き進め、僥倖の者を裁抑す、小人多く悦ばす、故に小人相與に共に之を排す、朱熹既に至る、上疏して侂冑に忤ふ、故に朝に在る四十六日にして而して罷む、官者游仲鴻以爲らく、熹宮祠して外に祀るの命あり、遠き者近き者皆相用す、天下の大老之を去らは離れか去且た欲せさらん、若し正人盡く去らは何を以て國を爲めん、汝愚袖より内批を還して且つ諫め且つ拜すれとも聽かす、侂冑併て汝愚までを逐はんと欲す、而れとも其の汝愚を逐ふの名を難す、人之に教て曰く、彼の汝愚は趙姓にて宗姓なり、故にするに汝愚か國家を危くせんと謀るを以てせは則ち一網にして同類を盡く逐ふ、侂冑大に之を妙なりとし、汝愚相位にある數月にして而相を罷む、連りに貶竄せらる、遂に藥を服して以て死す、侂冑李沐、何澹、劉德秀、胡紘、沈繼祖等を用て臺諫と爲し、善類を擊つ、鳥の雀を搏つか如く、之を擊して遺すなし、故に善類彭龜年等貶逐せらるゝこと勝て紀す可からず、又人の姓名を籍に記して目して僞學と曰ふ、朱熹を以て首と爲す、凡そ籍に在る者數千人、蔡元定黨の累ひに坐して道州に編管せらる、大學生楊宏中等六人亦た上書して黨人を救ふに坐して編管せらる、留正も嘗て黨人を引き用ゆるを以て亦た黜竄せらる、俞端禮、京鏜、謝深甫相繼て相と爲る、

○朱熹以慶元庚申卒。時僞學黨禁雖嚴。會葬者亦數千人。呂祖泰上書。論雪僞學。乞誅侂冑。及其黨蘇師旦周筠。罷逐陳自強之徒。召用周必大。不然事將不測。書出。中外大駭。杖一百。不刺面。配欽州。必大亦坐謫降。熹沒踰年。黨禁稍解。諸人或復官自便。然消沮變化之餘。風俗已大壞矣。○謝深甫罷。陳自強爲相。侂冑以太師平原郡王。平章軍國事。權傾人主。威制上下。服御擬於乘輿。土木侈於禁苑。諛者至稱爲恩王聖相。或作詩九章。每章用一錫字。侂冑亦不辭。稔積罪惡。至於生事開邊而極。先是。有蒙古部興於北方。在金世宗時。已強盛。稱帝。至璟立。蒙古

兵來輒長驅。金始多事。侂胄聞金有此釁。謂中原可圖。有吳曦者。前蜀帥吳挺之子。璘之孫也。吳氏世職西陲。威行西蜀。留其子孫於京。蓋累朝遠慮。曦有異志。久欲歸蜀而不許。侂胄遣歸數年。蓋欲使西蜀出兵。○開禧二年丙寅。以伐金詔告四方。諸路進師。曦首以關外四州獻金。求封爲蜀主。尋即稱帝。賴李好義楊巨源與安丙密謀。誅曦。僭號踰月而誅。○是歲元太祖即位於斡難河之源。太祖姓奇渥溫氏。諱鐵木眞。蒙古部人也。其先世爲蒙古部長。至太祖之父曰也速該。始併吞諸部落。愈强大。後追謚曰烈祖神元皇帝。初神元征塔塔兒部。獲其部長鐵木眞。宣懿后月倫適生太祖。手握凝血如赤石。神元異之。因以所獲鐵木眞名之。志武功也。元年。大會諸王群臣。建九游白旗。即位。群臣共上尊號。曰成吉思皇帝。時金章宗泰和六年也。○丁卯開禧三年。時北伐諸軍。所向無不潰敗而退。金人大發兵。連陷蜀漢荆襄兩淮諸郡。東南大震。亟遣使通謝於金。而侂胄弄兵之意猶未已。中外患之。遂有誅兇之議。皇后楊氏知書史。通古今。當時侍郎史彌遠建密策。而旨從中出者。皆后實爲之。一日侂胄入朝。彌遠使殿帥夏震以兵邀之。塗擁出玉津園。椎殺之。○先是元太祖征西夏。拔力吉里塞而還。至是秋再征之。○戊辰嘉定元年（元太祖三年）陳自强竄死。蘇師旦

處斬。周鎬決配。侂胄函首謝金。和議復成。錢象祖爲相。史彌遠累遷。與象祖並相。象祖罷。彌遠獨相。●〔解釋〕乘輿（天子の車駕を乘輿と曰ふ）蒙古部（元國の舊號、後ち改て元と號す）西蜀（舊本に四蜀に作るは非なり）四州（階、成、秦、鳳）決配（杖決、徙配）●〔講義〕朱熹慶元庚申を以て卒す、時に僞學の黨を禁する嚴なりしと雖ども、葬に會するもの、亦た五六千人、熹登第五十年、外に仕ふる者僅かに九考、朝に立つ纔かに四十五日、僞學を攻る日に急なり、士の繩趨尺步も稍ゝ儒を以て自ら名とする者は、其身を容るゝ所なし、從游の士特立して顧みざる者、丘壑に屛伏す、依阿巽懦なる者は、更に他の師と名つけ、門を過きて入らず、而して熹日に諸生と學を講じて休まず、或は其生徒を謝遣せんを勸むる者あり、笑て而して答へず、疾ひ且つ革なり、平坐して衣冠を整へ、枕に就て而して卒す、呂祖泰上書して僞學を雪むるを論じ、乞ふ侂胄及ひ其黨蘇師旦周鎬を誅し、陳自强の徒を罷め逐ひ、周必大を召し用ひん、然らずんば事將に如何なりゆくか測られざらんとす、書出づ、中外大に駭く、杖すること一百、面を刺さゝずして欽州に配せらる、蓋し配は流刑の隸なり、配法に面を刺す、必大も亦た其罪に坐して籍降せらる、熹没して年を踰て黨禁稍く解く、諸人或は官に復する、自ら健なり、然れども善人を消沮し、風俗を歸化の餘、世道巳に大に壞る、謝深甫罷む、陳自强相と爲る、侂胄太師平原郡王を以て軍國の事を平章す、權は人主を傾歴す、威は上下を制し、服衣御物は皇帝に擬す、土木碧諧は禁中の苑圃より美なり、之に諂媚する者は、侂胄を稱して我王聖相と爲すに至る、或は詩九章を作り、章ごとに一の錫字を用ゆ、蓋し九錫を加ふるに擬す、侂胄も亦た之を辭せず、罪惡を稔み積み累れ、軍事を生じ遂隙を開くに至て而して極る、是より先き、蒙古部あり、蒙古部は契丹の別部なり、契丹は即ち遼旦なり、築山堂外紀に、北狄銀を稱して蒙古と曰ふ、元の先蒙古と號するは、女眞の金と號するに因る、乃ち銀を以て其國に號するなり、乃ち北方に興る、金の世宗の時に在て已に强盛なり、因て乃ち帝と稱す、璟か立に至て、蒙古の兵來て輒ち長驅す、金始て多事なり、侂胄金に此釁ありと聞て謂ふ、中原は圖るべしと、吳曦と云ふ者あり、前の蜀帥吳挺の子、璘の孫なり、吳氏世に西陲を職とし、威權西蜀に行はる、其子孫を京に留む、蓋し累朝の間は遠慮あり、吳曦異なる志あり、久しく蜀に歸らんと欲して、而して朝命許されず、侂胄乃ち曦をして歸らしむること五六年、蓋し西蜀をして兵を出さしめんと欲するなり、丙寅是時元の太祖始て元年と稱す、金を伐つの詔を以て西方の諸路に告け、師を進む、曦首として闕外の四州を以て金に獻す、求め封られて蜀の主と爲る、尋て卽ち帝と稱す、李好義楊巨源か安丙と密に謀るに頼て曦を殺す、曦僭號する月を踰て而して誅せらる、是歳元の太祖は斡難河の源に即位す、斡難河は大漠の東北にあり、太祖姓は奇渥溫氏、諱は鐵木眞、蒙古部の人なり、其先世に蒙古部の長たり、太祖の父に至て也速該と曰ふ、始て諸部落を併呑す、愈ゞ强大なり、後ち追謚して烈祖神元皇帝と曰ふ、初め神元塔塔兒部を征伐して其部長

（鐵木眞を獲たり、宣懿后月倫に適き太祖を生む、手に凝血を握る赤石の如し、神元之を異とす、因て獲たる所の鐵木眞を以て之に名く、武功を志すなり、元年大に諸王群臣を會して九游白旗を建て、乃ち位に即く、群臣共に尊號を上る、成吉思皇帝と曰ふ、時に金の章宗泰和六年なり、時に北伐の諸軍の向ふ所潰ぶれ敗れて而して退かさるなし、金人大に兵を發し、連りに蜀漢、淵襄、兩淮諸郡を陷る、東南大に震ふ、亟に使を遣はし金に通して謝せしむ、而して侂胄兵を弄するの意猶未た已まず、中外之を患ふ、遂に兇惡を誅殺するの議あり、皇后楊氏書史を知り古今に通す、當時侍郎史彌遠密かに策を建て、而して旨中より出る者は皆后實に之を爲す、一日侂胄入朝す、彌遠殿帥夏震をして兵を以て之を途に邀ひ、擁抱して玉津園に出て之を椎殺す、南宋紀に兵興てより以來、公私の力大に屈す、而して侂胄金人首謀を罪せんと欲するを以て、乃ち復た意を出師に銳くす、中外罄匱す、然ども皆侂胄を畏て敢て言ふ者なし、彌遠入て對ふ、因て危迫の勢を力陳ス、侂胄を誅して以て邦を安せんと請ふ、皇后揚氏素と侂胄を怨む、亦た皇子榮王をして疏を具して侂胄再ひ兵の端を啓く、將に社稷に利あらざらんとすと言はしむ、帝許さず、后旁らより力めて之を發す、帝始て允可す、乃ち后の兄揭次山に命して彌遠と共に之を圖らしむ、是より先き元の太祖西夏を征して力吉里塞を拔て而して還る、是秋に至て再ひ之を征伐す、陳自強は竄せられて死し、蘇師旦は斬に處す、周筠は決配せられ、侂胄の首を函にし金に謝す、和議復た成る、錢象祖相と爲り、史彌遠累りに遷り、象祖と並に相たり、象祖罷む、彌遠獨り相たり、）金章宗璟在位二十年而殂。無子。立世宗之別子允濟。於璟爲叔。○己巳。嘉定二年。春。元太祖入河西。屢破西夏兵。夏主李安全納女請和。○庚午。嘉定三年。金謀討元。築烏沙堡。太祖遣將。襲殺其衆。遂略地而東。初太祖貢歲幣于金。金主使衛王允濟。受貢于靜州。太祖見允濟不爲禮。允濟怒。歸欲請兵攻之。會金主璟殂。允濟嗣位。有詔至國。傳言當拜。太祖問金使曰。新君爲誰。曰衛王也。太祖遽南唾曰。我謂中原皇帝是天上人做。此等亦爲之耶。何以拜爲。即策馬去。金使還言。允濟益怒。欲俟太祖再入貢而害之。太祖知之。遂與金絕。○辛未。嘉定四年春。元太祖南侵。敗金兵。襲群牧監。驅其馬而還。自是連歲攻取金州郡。○癸酉。嘉定六年。金主衛紹王允濟。在位五年。無歲不受兵。幾不能支。且失將士心。爲大將所弑。追廢爲東海郡侯。立豐王珣。璟之兄也。是爲宣宗。太祖分兵三道並進。取燕南山東河北五十餘郡。○甲戌。嘉定七年。元太祖駐蹕燕北。金主以岐國公主。及童男女五百。馬三千。兼金帛。以獻乞和。雖見許。度不能自立於燕。五月遷于汴。留丞相完顏福興。輔太子守忠居燕。太祖遣兵圍之。守忠走汴。後一年而燕京陷。元兵自河東渡河而南。距汴二十里而去。金人自是地勢益蹙。山東叛之。東阻河。西阻潼關而已。欲窺宋川蜀淮漢。以自廣。遂敗盟來侵。宋以黃榜募忠義人。進討京東路。忠義李全以歲戊寅。率衆來歸。全本漣水縣弓手。在開禧乙丑間。已嘗應募。焚其縣矣。○丁丑。嘉定十年。（元太祖十二年）元以木華黎爲太師。封國王。率諸軍南征。克大名府。定益都淄萊等州。

●〔解釋〕初太祖貢歲幣於金。（元未た大號を建てざる時、尙ほ金に藩と稱す、）太祖見允濟不爲禮（其庸懦を見るか故なり、）宋以黃榜募忠義（黃榜は即ち敕榜なり、宋は唐の制に因て黃紙を用ゆ、故に之を黃榜と謂ふ、事物紀原に、唐の敕白紙に書す、多く蟲の爲に蛀まる、高宗上元三年に至て、始て黃紙を用ゆ、之を黃敕と謂ふ、黃紙は辛苦の物を用て紙を染て以て蠹を辟く、其色黃ナリ、）全本漣水縣弓手（金已に漣水縣を取る、乙丑開禧元年、李全募に應して、攻て而して之を復す、焚は盜し火攻を謂ふなり、）木華黎（札剌兒氏は、阿難水の東に居る人なり、勇毅智畧多く、猿臂にして、善く射る、弓を挽く二石強、博介木、博爾忽、赤老溫と太祖に事ふ、倶に忠勇を以て稱せらる、掇里班出律と號す、猶華に四傑と言ふかこときなり、其征戰功多し、晉國王に封せらる、忠獻ト謚す、子孛魯嗣く、）

●〔講義〕（金の章宗璟在）

位二十年にして而して殂す、子なし、世宗の別子允済を立つ、璟に於ては叔たり、己巳春、元の太祖河西に入る、屡西夏の兵を破り、夏主李安全女を納れて和を請ふ、金、元を討するを謀る、烏沙堡を築く、太祖將を遣して襲て金の衆を殺す、遂に地を略して而して東す、初め太祖歳貢を金に輸す、大金主衛王允済を使し貢を静州に受しむ、太祖允済を見て禮を為さず、允済怒る、歸て兵を謀て元を攻んと欲す、會ゝ金主璟殂す、允済位を嗣く、詔あつて國に至る、傳へ言ふ、當に拜すべしと、太祖金の使に問て曰く、新たに位に即たる君は何人なるや、使者の曰く、衛王なり、太祖遽かに南に向ひ、唾き曰く、我謂ふ、中原の皇帝は是天上の高人なると、然るに此れ等の馬鹿野郎も亦た皇帝なるか、何を以て此の馬鹿野郎に拜することを爲んと、即ち馬に策て去る、金の使者還て太祖の惡言罵詈するを言ふ、金の允済此罵詈を聽て益ゝ怒り、太祖の再び入貢するを候て大に之を殺害せんと欲す、太祖も亦た之の事を知り、遂に金と好みを絶つ、元の太祖南に侵伐して而して金の兵を敗る、金の群牧監を襲ひ、擊て群牧監の馬を驅り集めて還る、是より連歳金の州郡を攻め取る、金主衛紹王允済位に在る五年、歳として元の兵を受けざるなし、國殆んと支る能はず、且つ將士の心を取り失ひ、大將の紇殺する所と為る、追ひ貶け位を廢して東海郡侯と為す、因て豐王珣を立つ、珣は璟の兄也、是を宣宗皇帝と為す、元の太祖兵を三道に分て、三道より並ひ進て燕南山東河北五十餘郡を取る、元の太祖軍列を燕地に駐む、金主岐國公主と及ひ童男女子五百と馬三千と金帛とを以て之を以て元に獻して和睦するを乞ふ、乃ち許さるゝと雖とも燕國に自立する能はざるを度り、五月汴に遷り、丞相完顔福興を留て、太子守忠を輔佐して燕に居らしむ、太祖兵を遣はして燕國を圍む、守忠敵する能はず、乃ち汴に走る、後ち一年にして而して燕京落城す、元の兵河東より河を渡て而して南侵す、汴京を距る二十里にして而して去る、金人是より地勢益ゝ蹙縮す、山東も亦た金に叛き、東の方河を阻て、西の方潼關を阻つる而已、故に宋の川蜀の淮漢を窺ふて以て自ら地を廣めんと欲し、遂に宋の盟を敗て來り侵す、宋賞榜を以て忠義の人を募り進て京東路を討す、忠義黨の李全ト云ふ人、歳の戊寅を以て其衆を率ひて宋に來歸す、全は本と漣水縣の弓手なり、開禧乙丑の間に在て已に嘗て募りに應して其縣を焚攻す、元木華黎を以て太師と爲す、國王に封す、乃ち諸軍を率て南征す、大名府定益都淄萊等の州に克つ、是より先き知楚州應純之を以て京東忠義軍を節制す、純之李全が軍の驕ゝ捷を見て密かに朝に聞す、中原復す可きを謂ふ、史彌遠韓侂胄が事を鑒み、明かに招納せず、江淮の制置使李珏及び純之に密敕して之を撫接す、忠義軍と號す、就て純之に節制を聽く、

○戊寅。嘉定十一年。元木華黎。自西京入河東。克太原平陽及忻代澤潞等州。是歲伐西夏。圍其王城。夏王李遵頊走西京。○高麗王瞰降于元。請歲貢方物。○己卯。嘉定十二年。西域殺元使者。太祖親征。○庚辰。嘉定十三年。元木華黎徇地。至眞定。又徇河北諸郡。○壬午。嘉定十五年。元太子拖雷克西域諸城。遂與太祖會。秋金主復遣使請和。太祖時在回鶻國。謂之曰。我向令汝主授我河朔地。令汝主爲河南王。彼此罷兵。汝主不從。今木華黎已盡取之。乃始來請耶。遂不許。○癸未。嘉定十六年。春三月。元太師魯國王木華黎卒。○五月。元初置達魯花赤。監治郡縣。○金章宗珣在位十二年而殂。子守緒立。是爲哀宗。○甲申。嘉定十七年。（元太祖十九年）元太祖至東印度。駐鐵門關。有一獸。鹿形馬尾。綠色而一角。能作人言。謂侍衛者曰。汝主宜早還。太祖以問耶律楚材。曰。此獸名角端。能言四方語。好生而惡殺。此天降符以告陛下。願承天心。宥此數國人命。太祖即日班師。○自歲丁丑以後。宋與金戰。雖迭有勝敗。然三邊無歲不被其擾。上在位三十年。改元者四。謙恭仁儉。終始如一。然慶元。嘉泰。開禧。凡十三年。則侂胄之政。嘉定十七年。則彌遠之政。壽五十七而崩。彌遠定策立嗣。是爲理宗皇帝。

◉〔解釋〕元太子拖雷（拖雷は太祖の第四子也、綵雪雜言に、金元の庶子皆な太子と稱す、）達魯花赤（達魯花赤は蓋し胡語なり、草木子に曰く、元の路州縣に各ゝ長官を立つ、達魯華赤と曰ふ、印信を掌るを以て一府一縣の治を總ぶ、頭を列するは則ち正官を用ゆ、府に在ては則ち總官、縣に在ては則ち縣尹、達魯花赤は猶ほ華言の衙包上の壓日縣字のごとし、）角端（宋書符瑞志に、角端は日行萬八千里、又四裔の語を曉る、）

◉〔講義〕

元の木華黎、西京より河東に入る、太原平陽及び忻代沈路等の州に克つ、是歳太祖亦た西夏を伐て西夏王城を取り圍む、夏主李遵頊西京に走る、高麗王の瞰は元國に降參す、歳貢の方物を請ふ、

西域元の使者を殺す、太祖怒て親ら西域を征伐す、元の木華黎地を徇て眞定に至る、又河北の諸部を徇す、元の太子拖雷西域の諸城に克つ、遂に太祖と會合す、秋金主宣宗復たび使を遣はし和睦するを元主に請ふ、太祖時に回鶻國に在り、金の使に謂て曰く、我前に汝が主をして我に河朔の地を授けしむ、汝が主をして河南王と爲さしむ、而して彼此兵を罷んとす、然るに汝が主は從はず、今木華黎已に盡く河朔の地を取る、其れに乃ち始て來て和を請ふや、と、遂に許さず、嘉定十六年、我後堀河帝貞應二年に當る、元の太師晉國王木華黎卒す、五月元初て南督花赤を置く、而して郡縣を監治せしむ、金の宣宗位に在る十五年にして而して殂す、子守緒立つ、是を哀宗と爲す、元の太祖東印度に至る、鐵門關に駐る、乃ち一の獸あり、鹿の形にして馬の尾なり、綠色にして而して一角あり、能く人言を作す、侍衛の者に謂て曰く、汝か主君は宜しく早く還る可し、と、太祖以て耶律楚材に問ふ、楚材對て曰く、此獸は角端と名つく、能く四方の語を言ふ、生するを好んで而して殺すを惡む、此れ天符を降して以て陛下に告く、願くは天の心を承て此の數國の人命を宥めよ、太祖即日に師を班す、歲丁丑より以後宋と金と戰ふ、遂に勝ち敗けありと雖ども然れども三邊歲として其擾亂を致らさるなし、寧宗位に在る三十年、改元する者四つ、謙恭仁儉にして終始一の如くし、然れども慶元、嘉泰、開禧、凡そ十三年は則ち韓侂胄の政なり、嘉定十七年は則ち史彌遠の政なり、壽五十七にして而して崩す、彌遠策を定め嗣を立つ、是を理宗皇帝と爲す

理宗皇帝初名與莒。宗室追封榮王。諡文恭。希瓐之子。太宗十世孫也。寧宗子多而不育。鞠宗室子。名詢。立爲太子。薨。初皇從弟沂靖惠王柄無子。嘗以宗室子賜名貴和爲之後。及失太子詢。遂立貴和爲皇子。賜名竑。封濟國公。竑慧而輕。嘗疾史彌遠專權。謂異日不可容。彌遠聞而惡之。故陰爲之計。與莒幼不好弄。群兒聚嬉。輒獨登高坐不動。長上見者。指以語群兒曰。汝曹不效此人。恰一大王相似。群兒每羅拜其下。遂有趙大王之號。彌遠物色得之。嘗取應得擧矣。特旨補官。竑既爲寧宗子。遂以與莒爲沂王後。賜名貴誠。除邵州防禦使。寧宗大漸。乃自中宮以貴誠爲皇子。改名昀。宣遺詔即位。進竑濟陽郡王。出判寧國府。恭聖仁烈楊后同聽政。事定。然後撤簾。○乙酉。寶慶元年。（元太祖二十年）時外議籍籍。有謀作亂立竑者。事不克皆死。李全在楚州。與制置許國相失。殺國。亦以問罪爲辭。擧兵南向。圍揚州幾陷。○丙戌。寶慶二年。元太祖伐西夏。取甘肅等州。遂踰沙陀至黃河九渡。○丁亥。寶慶三年。（元太祖二十二年）元滅夏。以夏主李晛歸。

◉〔解釋〕宗室（是時理宗の父已に死す、追封して榮王と爲し、諡して文恭と曰ふ、生名は希瓐とす）沂（沂は國の名）靖惠（諡なり）柄（名なり）爲之後（繼て立つ）邵州（湖南に屬す、今寶慶府）中宮（楊后）寧國府（卽ち宣州）楊后（寧宗の后）籍籍（多きなり）制置（制置使なり）許國（姓名）遂踰沙陀至黃河九渡（九渡は黃河の上流の名なり、其流れ岐裂する九股、水淺ふして渡るべし、故に九渡と曰ふ）

◉〔講義〕理宗皇帝始の名は與莒、宗室追封は榮王、諡は文恭、希瓐の子、太宗十世の孫なり、寧宗子は多くあるも皆蚤死して育せず、因て宗室の子を鞠ふ、名は詢と曰ふ、乃ち立て太子と爲る、幾はくもなく薨す、始め皇の從弟沂の靖惠王名は柄子なし、嘗て宗室の子を以て名を貴和と賜ふ、繼て立つ、已にして太子詢を失ふに及んて、遂に貴和を立て皇子と爲す、名を竑と賜ふ、濟國公に封す、竑智慧あつて而して輕浮なり、嘗て史彌遠か權を專にするを疾んて謂らく、異日容す可からずと、彌遠之を聞て大に惡む、故に史彌遠密かに之を除くの計を爲す、與莒幼童にして弄を好まず、群兒と聚り嬉戲するも輙ち獨り丈け高き所に登て坐して動かず、長上の人此形勢を見て與莒を指して以て群〻の兒に語て曰く、汝か曹（トモカラ）らは此の人に効はず、此人は恰も一大王に相似たり、故に群兒毎に與莒の下に羅なり拜す、遂に趙大王の號あり、史彌遠物色は人相嘗を以て遂に此兒を得たり、擧に應し得たり、特旨を以て官に補す、竑已に寧宗の子と爲り、遂に與莒を沂王の後ちと爲す、名を貴誠と賜ふ、邵州の防禦使に除せらる、寧宗の病大に危く死に漸する時、乃ち史彌遠か中宮に白ふして貴誠を以て皇子と爲し、名を昀と改む、遺詔を宣して位に即く、竑を濟陽郡王に進む、出たして寧國府に判たり、恭聖仁烈楊后同しく政を聽く、事定て然して後ち簾を撤す、總て夫人の政を聽くには簾を下して人に容貌を見せさらしむ、其政を罷るや又簾を撤すとは簾を取てのけるを云ふ、時に朝廷外の議論籍籍として多く亂極を作して竑を立てんと謀る者あり、事克たずして皆殺死す、李全は楚州に在て制置許國と相親を相失ひ、故に國を殺し、國を殺したる罪を問ふを以て辭と爲し、兵を擧けて南

（南して楊州を取り圍み幾んど陷らんとす、元の太祖西夏を伐て甘肅等の州を取り、遂に沙陀を踰て黃河九渡に至る、遂に夏を滅し、夏主李晛を牽ひて歸る、）○七月。元太祖殂于六盤山。臨殂謂左右曰。金精兵在潼關。南據連山。北限大河。難以遽破。莫若假道于宋。宋金世讐。必能許我。則下兵唐鄧。直擣汴京。汴急必徵兵潼關。然以數萬之衆。千里赴援。人馬疲弊。雖至弗能戰。破之必矣。言訖而殂。在位二十二年。壽六十六。葬起輦谷。至元二年冬。追謚曰聖武皇帝。廟號太祖。太祖深沈有大畧。用兵如神。故能滅國四十。其勛績甚衆。史之紀載不備惜哉。○太祖既殂。時皇子窩闊台。留霍博之地。國事無所屬。皇子拖雷監國。以俟皇太子至而立之。越二年皇太子始立。是爲太宗。○己丑紹定二年。元太宗名窩闊台。太祖第三子。母曰光獻皇后弘吉剌氏。是歲夏奔喪。至忽魯班雪不只之地。皇第拖雷來見。大會諸王百官。以太祖遺詔即位。始立朝儀。皇族尊屬皆就班以拜。○元始置倉廩。立驛傳命。○庚寅紹定三年。元遣兵取京兆。七月太宗自將伐金。皇第拖雷。姪蒙哥。帥師從。○辛卯紹定四年。春。趙范趙葵大敗李全于楊州城下。時屬上元張燈。全置酒高會于平山堂。城中諜知。夜遣兵出其不意刼之。全走陷于濠爲亂槍所斃。其餘奔走北去。○二月。元太宗克鳳翔。攻洛陽河中諸城。下之。五月。元遣使來假道。宋殺之。○八月。元始立中書省。改從官名。以耶律楚材爲中書令。鎭海爲右丞相。◉〔解釋〕大敗李全於楊州城下（前年十二月、李全反して楊州に寇す、趙葵趙范師を會して擊ち之を敗る、全又砦を列て楊州城を圍む、是に至て范葵出て戰ひ、大に之を敗る、）時屬上元張燈（屬は會なり、）全走陷于濠（深は城下の池なり、）爲亂槍所斃（軍士長槍三十餘を齎ふて亂れて之を刺す）◉〔講義〕（七月元の太祖六盤山に殂す、殂するときに左右ものに謂て曰く、金の精兵潼關に在り、南は連山に據り、北は太河を限る、故に遽かに破り難し、道を宋に假るに若くは莫し、宋金は世讐なり、必す能く我に許さん、則ち兵を唐鄧に下し、直に汴京を擣き、汴急ならば、必す潼關に徵さん、然るに數萬の衆を以て千里赴き援はゞ、人馬疲弊して戰ふに能はさるに至ると雖とも之を破らん必せり、と言訖て而して殂す、在位二十二年、壽六十六、起輦谷に葬る、至元二年の冬、追謚して聖武皇帝と曰ふ、廟を太祖と號す、太祖深沈にして大略あり、兵を用ゆる神の如く、故に能く國を滅す四十、其勛績甚はた衆し、史の太祖の事を紀載する備はらさるは惜ひかな、太祖既に殂す、時に皇子窩闊台霍博の地に留る、國の事は屬する所なし、皇子拖雷國を監し、以て皇太子の至るを俟つて之を立つ、越て二年皇太子始て立つ、是を太宗と爲す、是より先き金の將完顏陳和尙大に蒙古の兵を大昌原に敗る、陳和尙完顏合逵の前鋒と爲り、四百騎を以て大に蒙古八千の衆を敗る、士氣皆倍す、蓋し自ら蒙古の難あり二十年の間始て此捷あり、功第一と奏す、名國中に震ふ、其衆を御するや方あり、過る所の州邑秋毫も犯すなく、戰ふ每に即ち先登して陳を陷る、諸軍倚て以て重しと爲す、又四年四月蒙古の將速不台を倒回谷に敗る、元の太宗名は窩闊台、太祖の第三子、母を光獻皇后弘吉剌氏と曰ふ、是歲夏、窩闊台太祖の喪に霍博の地より忽魯班雪不只の地に奔る、皇弟拖雷來り見ゆ、大に諸王百官を會し太祖の遺詔を以て位に即しむ、始て朝儀を立て、皇族尊屬皆位班に就て以て拜す、元始て倉廩を置て驛を立て命を將ふ、紹定三年元兵を遣はして京兆を取る、七月太宗自ら將として金を伐つ、皇弟拖雷姪蒙哥師を帥て之に從ふ、四年春趙范趙葵大に李全を楊州の城下に敗る、時に上元燈を張るに會す、李全平山堂に置酒高會す、城中の諜知る、夜兵を遣はし其不意に出て之を刼す、李全走て濠に陷落つ、亂槍の爲めに斃さる、其餘奔走して北に去る、二月元の太宗鳳翔に克つ、洛陽河中の諸城を攻て之を下す、五月元使を宋に遣はし道を假る、宋之を殺す、八月元始て中書省を立て侍從の官名を改む、耶律楚材を以て中書令と爲す、耶律楚材字は晉卿、遼の東丹王突欲か八世の孫なり、金の尙書右丞履の子なり、太祖天下を一にするの志あり、嘗て遼の宗室を訪ふ、楚材を召して之に謂て曰く、遼金は世の讐、吾れ汝か爲に之を報せん、楚材對て曰く、臣と祖父以來嘗て北面して之に事ふ、既に臣子と爲り、豈に敢て復た二心を懷き、君父に讐せん乎、太祖其言を重して左右に處き以て顧問に備ふ、楚材博く群書を究む、天文地理律歷術數釋老醫卜知らさる者なし、夏人常八斤と云ふ者善く弓を造る、以て太祖に知らる、因て曰く、國家方に武を用ゆ、耶律は儒者なり何る

用ん、楚材曰く、弓を治るに尚ほ弓匠を用ゆべし、天下を爲る者は、豈に天下を治る匠を用ひざる可ん耶と、太祖之を聞て甚た喜て、日に親用せらる、嘗て西域の人と月蝕を占す、西域の人の曰く某夜月當に蝕すべし、楚材曰く蝕せずと、其夜に至て果して蝕せず、楚材嘗て曰く某の夜當に蝕すべし、と、西域の人の曰く蝕せずと、其夜に至り果然として食す、太祖楚材を以て太宗に詔て曰く、此人天我が家に賜ふなり、爾後軍國の庶政當に悉く之を委すべしと、粘合重山左丞相と爲る、粘合重山金源の貴族なり、太宗以て左丞相と爲す、凡そ言を建て法を立る、多く耶律楚材に出つ、而して粘合重山之が謀を佐成す、不設と稱せらる、魏國公に封ぜらる、忠武と諡す、鎮海右丞相と爲る、

◯十二月。元太宗取河中。太弟拖雷發騎六萬。分兵自西和州入興元。由金房道襄陽至唐鄧。與金人鏖戰於陽翟。潼藍之戍亦潰。西兵畢至。合圍於汴。◯壬辰。紹定五年。元太宗由白坡渡河。次鄭州。攻鈞州克之。遂取商虢嵩汝等十四年。使速不臺圍金汴京。金主遣其弟訛可入質。太宗還。留速不臺守河南。八月。金兵救汴。諸軍與戰敗之。九月。太弟拖雷卒于師。金主守緒突圍出走歸德府。◯元再使王檝來議夾攻伐金。京湖制置使史嵩之以聞。朝臣皆以爲可遂復讎之擧。獨趙范不喜曰。宣和海上之盟。厥初甚堅。迄以取禍。不可不鑑。帝不從。詔嵩之報使許之。嵩之乃遣鄒伸之報謝。且議夾攻汴京。元人許俟成功。以河南地歸宋。◯癸巳。紹定六年。（元太宗五年）金主奔歸德。糧絶。乃趨蔡州。其將崔立。以汴京降元。四月。元速不臺進至青城。崔立以金太后王氏。皇后徒單氏。荊王從恪等至軍。速不臺遣送北還。◯元以孔子五十世孫元楷襲封衍聖公。整修孔子廟。及渾天儀。◯宋丞相史彌遠卒。鄭清之爲相。史嵩之爲京湖制帥。在襄陽。南北有夾攻蔡州之約。嵩之遣孟珙以兵四萬人先至。圍其東南。元兵圍其西北。◯甲午。端平元年。正月。金主守緒傳位於宗室子承麟。宋孟珙入蔡州。元師從之。守緒自經死。函其首送于宋。獲承麟殺之。金自完顏旻稱帝。至是九世。一百一十七年而亡。

◉〔解釋〕與金人鏖戰於陽翟（鏖は盡く人を死殺するなり、陽翟に苦戰して而して盡く金人を殺すを云ふなり）潼藍之戍（潼關藍關の戍兵）遂取商虢嵩汝等十四年。（年は州の誤なるべし）諸軍與戰敗之。（元の諸軍なり）宣和海上之盟（徽宗宣和元年馬政を遣り海に浮て金に使して遼を夾み攻て以て燕雲の地を取るを約す）

◉〔講義〕十二月、元の太宗河中を取り、太弟拖雷騎兵六萬人を發して兵を分て西和州より興元に入り、金房道襄陽に由り唐鄧に至る、金人と陽翟に鏖戰す、潼關藍關の戍兵亦た潰る、西兵畢く至る、汴を合圍す、紹定五年春正月、金の完顏合達刺蒲阿に移る軍を引て汴を援く、蒙古の拖雷に及で三峯に戰ふ、大に敗る、合達乃ちて和尚等已に走て鈞州に入る、蒙古の兵之を攻む、城破れ合達死す、陳和尚趨て隱處に避く、殺畧稍く定る、乃ち出て自ら姓名を言ふ、且つ曰く我れ亂軍の中に死せば、人將た謂はん我國家に背くと、今日明日死すと、蒙古の兵其降を欲す、肯死せす、足脛を斫て之を折る、口吻を割して耳に至る、血を噴て而して呼ふ、死に至る迄屈せす、元の太宗白波に由り河を渡て鄭州に次す、鈞州を攻て之に克つ、遂に商虢嵩汝等の十四州を取る、速不臺をして金の汴京を圍ましむ、金主其弟訛可をして入て質たらしむ、太宗還る、速不臺をして河南を守らしむ、八月金の兵汴を救ふ、元諸軍與に戰て之を敗る、九月太弟拖雷師に卒す、金主守緒圍を突て出つ、歸德府に走る、元再ひ王檝をして來て夾み攻て金を伐しを議せしむ、京湖制置使史嵩之以聞す、朝臣皆以爲らく復讐の擧を遂ぐべしと、獨り趙范喜びずして曰く、徽宗宣和元年馬政を遣り海に浮んで金に使して遼を夾み攻て燕雲の地を取るを約す、厥の初甚た堅し、以て禍を取るに迄る、鑑みずんばあるべからずと、帝從はず、嵩之に詔して使に報し之を許す、嵩之乃ち鄒伸之を遣り報謝せしむ、且つ汴京を夾み攻めんと議す、元人其成功を俟て河南の地を以て宋に歸さんと許す、金主之を聞て歸德に走る、時に金主の糧を絕す、乃ち蔡州に趨る、其將崔立汴京を以て元に降す、四月元の速不臺進で青城に至る、崔立金の太后王氏、皇后徒單氏、荊王從恪等を以て元軍に至る、元の速不臺北に送り還さしむ、元孔子五十世の孫元楷を以て衍聖公に襲封す、孔子の廟及び渾天儀を整修せしむ、宋の丞相史彌遠卒す、鄭清之相と爲る、史嵩之京湖の制帥と爲り襄陽に在

（り、南北宋州を夾み攻むるの約あり、滿之孟洪を遣り、兵四萬人を以て、先つ至て蔡州の東南を圍ましむ、元の兵其の西北を圍む、端平元年、金主守緒位を宗室の子承麟に傳へしむ、宋の孟洪蔡州に入る、元の師之に從て入る、金主守緒自經して死す、其首を函にして宋に送り、承麟を廢て之を殺す、金完顏旻帝と稱してより是に至て九世、一百一十七年にして而して宋元の亡す所と爲る、）

○夏四月獻金俘于太廟。會淮帥趙范趙葵。乘金人之亡。爲恢復計。朝臣多以爲未可。獨鄭清之力主其說。帝乃命范移司黃州。刻日進兵。范參議官丘岳曰。方興之敵。新盟而退。氣盛鋒銳。寧肯捐所得。以與人耶。我師若往。彼必突至。非惟進退失據。開釁致兵。必自此始。且千里長驅。以爭空城。得之當勤饋餉。後必悔之。范不聽。史嵩之亦言荊襄方爾饑饉。未可興師。杜杲復陳出師之害。范葵故荊湖制帥趙方之子。習於兵。銳意攻取。募山東忠義。皆響應。仲之未回。而宋師出矣。仲之等幾被羈留於燕。詭辭得與機俱來。機曰。何爲而敗盟也。自是淮漢之間無寧日矣。不數日汴人以城附宋。宋師入汴。即趍洛。元兵戍洛者無幾。姑避去。宋師入洛。不數日糧絕。聞元生兵且大至。潰而歸。咎嵩之主和。不肯運糧致誤事。○乙未。端平二年。春元城和林。作萬安宮。遣諸王拔都太子貴由姪蒙哥征西域。太子闊端侵蜀漢。太子曲出及胡士虎侵宋。唐吉征高麗。○丙申。端平三年。元印造交鈔行之。六月。耶律楚材請於燕京立編修所。於平陽立經籍所。編集經史。召儒生梁陟充長官。以王萬慶趙著副之。秋闊端取宋關外數州十月。入成都。取秦鞏等四十餘州。○時和議既不復諧。蜀遂破陷。荊襄淮甸。無歲不受攻哨。◉〔解釋〕元生兵且大至。（生は生熟の生なり、生兵は新に出るの兵なり、）元城和林作萬安宮。（續弘簡録の註に和林は本と唐の回鶻毗伽可可汗の故城なり、其地に和林河あり、故に和林と名く、太祖河北を定てより即ち都を此に建て會同の所と爲す、後ち和寧路と改む、）攻哨（字彙に曰く、哨は七肖の切、邏の去聲、萩と同し、箭を吹て以て警を示すなり、今屯戍の所、盜を防くの處、名けて哨と曰ふ、亦た此意ナリ、）◉〔講義〕（夏四月、金の俘を宋の大廟に献す、會ゝ淮の帥趙范趙葵、金人の亡ぶるに乘し金國を取り、元と褒ふ所の地を恢復するの計を爲す、朝臣多く以て未可と爲す、獨鄭清之力めて恢復の說を主張す、帝乃ち范に命して兵を移して黃州を司らしむ、日を刻し兵を進む、范か參議官丘か曰く、方に興るの敵の（元兵を斥す）新に盟て而して軍を退く、故に氣盛に鋒銳し、寧んぞ肯て得る所の金國を捐てゝ以て宋に與へんや、我か師若し往てか、彼れ必ず突て至らん、唯ゝ進退據り所を失ふはかりにあらす、元と隙を開き元の兵を引き寄せん、此の役より始らん、且つ千里の路を長驅して以て空（カラ）の城を爭ふ、若し之を得は當に饋餉を送りに勤むべし、後必す之を悔んと、范聽かす、史嵩之も亦た言ふ、荊襄方に饑饉す、未た師を興す可からすと、杜杲も復た師を出すの害を言ふ、范葵は故（もと）荊湖制帥趙方の子なり、兵術に習へり、故に城を攻め取るに意を銳ふす、山東の忠義を募るに皆響の聲に應するか如く、山東は荊州襄陽等數州の地なり、鄒伸之等に元に使して未た回らさるに、而るに宋の師出つ、故に鄒伸之等幾んと燕の爲に羈き留められんとす、漸く詭りの辭を設けて王楫と俱に來ることを得たり、王楫か曰く、宋人は何爲ぞして而して盟約を敗ると、是より淮漢の間寧[illegible]日とてなし、未た數日ならすして汴人城を以[illegible]掠す、）

○元以耶律楚材言。始定天下賦稅。上田每畝三升。中田二升半。下田

二升。水田一畝五升。商稅三十分之一。五戶出絲一斤。以給諸王功臣湯沐之賜。鹽每銀一兩四十斤。永爲定額。朝臣皆謂太輕。耶律楚材曰。將來必有以利進者。則已爲重矣。○丁酉。嘉凞元年。詔經筵進講朱熹通鑑綱目。○八月。元試諸路儒士。中選者除本貫議事官。得四千三十人。元兵畧地至黃州。宋孟珙敗之。○戊戌。嘉凞二年。先是杜杲却元人安豐之兵。復破察罕八十萬兵於廬州。後解饑眞之圍。以功權刑部尙書。復進敷文閣學士。○呂文德總統兩淮出戰軍馬。進淮西招撫使。文德安豐人。魁梧勇悍。微時鬻薪城中。趙帥葵道傍見遺屨長尺有咫。驚訝訪求得之。留之麾下。後以邊功至顯官。○元塔思軍至北峽關。宋將汪統制降。先是曲出率張柔等攻郢州。拔之。至是宋孟珙復取襄陽。

◉〔解釋〕鹽每銀一兩四十斤永爲定額（額は猶ほ數の如きなり、通考に始て鹽法を行ひ、鹽一引とに四百斤、價ひ十兩なり、）本貫（本貫は郷籍）

◉〔講義〕元耶律楚材が言を以て始て天下の賦稅を定む、上田は一畝ごとに稅三升、中田は二升半、下田は二升、水田は一畝に五升、商稅は三十分の一なり、五戸に絲一斤を出しめて以て諸王功臣の湯沐の賜ものに給す、鹽は銀一兩ごとに四十斤、永く定額と爲す、朝臣皆謂ふ太はだ輕しと、耶律楚材が曰く、將來必す利を以て進む者あらば則ち已に重きを爲さん、嘉凞元年宋經筵に詔して朱熹の通鑑綱目を進講す、八月元諸路の儒士を試む、選に中る者は本貫議事の官に除して四千三十人を得たり、元兵地を畧して黃州に至る、宋の孟珙之を敗る、是より先き杜杲元人安豐の兵を却く、嘉凞元年十月元人安豐を攻む、知州軍事杜杲之を敗る、復た察罕八十萬の兵を廬州に破る、察罕は元の將軍の名、後ち饑眞の圍みを解く、功を以て權の刑部尙書たり、復た敷文閣學士に進む、呂文德兩淮の出戰軍馬を總統す、淮西の招撫使に進む、文德は安豐の人なり、魁梧にして勇悍なり、微賤の時薪を城中に賣る、趙帥葵道の傍らに落したる履の長さ一尺八寸なるを見て驚き訝かり遂に呂文德を訪ひ求めて之を得たり、因て之を麾下に留め置く、後ち遂に軍功を立て以て顯たる官に至る、元の塔思が軍北峽關に至る、宋の將汪統制降す、是より先き曲出張柔を率ひて郢州を攻めて之を拔く、是に至て宋の孟珙復た襄陽を攻む、

○元領中書行省楊惟中建太極書院于燕京。延趙復爲師。時濂溪周子之學。未至於河朔。惟中用師于蜀湖京漢。得名士數十人。始知其道之粹。乃收集伊洛諸書。載送燕京。及師還遂建太極書院。及周子祠。以二程張楊游朱六子配食。由是河朔始知道學。

◉〔解釋〕元領中書行省楊惟中（案ずるに中書省を外州に立つ、之を中書行省と謂ふ、又之を行中書省と謂ふ、元史百官志に國初征伐の役あれは分て軍民の事に任す、皆行省と稱す、未だ定制あらず、事に因て官を設け、官必しも備はらず、皆省官を以て出て其事を領す、）建太極書院于燕京（周子嘗て太極の圖を作て以て學者を教授す、今周子の學を弘んと欲す、而して書院を建つ、故に太極書院と名く、書院は講學の所なり）收集伊洛諸書（伊洛は伊水洛水なり、程氏の家は二水の間に在り、故に二程の諸書を稱して伊洛の諸書と曰ふ、伊洛或は河洛に作る、蓋し洙泗に對して而して之に名るなり、濂溪祠記に、上み洙泗千載の統を接し、下も河洛百世の傳を開らく）以二程張楊游朱六子配食（周子を祭るに程顥程頤張載楊時游酢朱熹の六子を以て配食す、）

◉〔講義〕元の中書行省を領する楊惟中、太極書院を燕京に建つ、趙復を延て師と爲す、時に濂溪周子の學未だ河朔に至らず、惟中師を蜀湖京漢に用ゆ、名士數十人を得たり、始て其道の粹なるを知る、乃ち伊洛の諸書を收め集む、載て燕京に送る、師の還るに及んて遂に太極書院及ひ周子の祠を建て、二程張載楊時游酢朱熹の六子を以て配食す、是に於て河朔始めて道學を知る、楊惟中弘州の人、年二十太宗の命を奉して西域三十餘國に使す、國威を宣へ政條を布く、皆戸口を籍して吏に屬せしむ、乃ち歸る、惟中憲宗の世に爲す、世祖太弟と爲る、金蓮川を領す、河南道の經畧を立つ、汴梁に同し、惟中等を奏し使と爲す、唐鄧亳潁の諸州に屯田せしむ、金初めて滅ぶ、劉福を以て河南府の總管と爲す、福貪殘鄙酷、遺民を虐害すること十餘年、惟中に至りて之れを召す、約束を聽かしむ、福至らず、復た之に語せしめて曰く、汝ち至らずんは吾れ軍法を以て事に從はしめん、福已むを得ず從衛を盛にして以て惟中を見る、惟中大挺を擥て擊て之を仆す、數日にして福死す、河南大に治まる、川陝宣撫使に遷る、郭于月と云ふものあり、人の夫を殺して而して其妻を取る、惟中之を戮して以て徇ふ、朝中肅然たり、趙復字ハ仁甫德安の人なり、太宗の時太子曲出宋を侵す、德安の民を俘にす、姚樞詔を奉して軍中に即て儒士を求む、復い俘民の

（中に在り、樞與に語て大に之を奇とし、復親族俱に殘するを以て、北行を欲せず、因て樞と語る、樞趙復の自死を恐て、留て與に共に宿す、夜忽ち復を失す、樞遽かに馳て尋て之を呼ふ、復か將に水に投せんとするを見て、樞之を挽き回して、之を挾て北歸す、復乃ち其記する所の程朱の書を録して以て學者に敎ゆ、乃ち北土能く周程張朱の學に通すると皆復に因て而して得たり、然とも復竟に仕へず）○庚子。嘉熙四年。春。元太子貴由。克西域未下諸部。元敕州郡。失盜不獲。以官物償之。國初多盜。下令。凡失盜去處令本路民戶代償。民苦之。多亡命。至是罷徵。又官民貸回鶻金銀。償之者歲加倍。謂之羊羔利。往往破家。至以妻子爲質。終不能償。耶律楚材請悉以官物代還。凡七萬六千錠。仍令。凡假貸歲久。惟子本相侔而止。著爲令。○辛丑。淳祐元年。宋詔追封周敦頤汝南伯。張載郿伯。程顥河南伯。程頤伊陽伯。朱熹徽國公。並從祀孔子廟庭。黜王安石從祀。帝謁孔子。遂臨大學。○十一月。元太宗出獵。殂于鈋鐵鍔胡蘭。年五十六。葬起輦谷。後追謚曰英文皇帝。廟號太宗。太宗自寬弘之量。仁恕之心。量時度物。舉無過事。華夏殷富。庶民樂業。行旅不齎糧。時稱治平。元自太宗殂後。皇后乃馬眞氏。臨朝稱制。凡五年。不立君。○甲辰。淳祐四年。先是。鄭清之罷相。喬行簡。李宗勉等。繼爲政。無所決斷。上思史嵩之之言。自督府入爲相。雖欲議和。輒爲衆論所沮。嵩之丁父彌遠憂。聞訃數日乃行。詔起復爲相。言者目爲權姦。力攻之。遂不復相。范鍾游侶。鄭清之。謝方叔。吳潛。董槐。程元鳳。丁大全等。相繼爲相。每歲以

防秋爲常事。●〔解釋〕凡失盜去處（去處は俗語、去は助語なり）至是罷徵（徵字元史に之に作る、）謂之羊羔利。（其利息の加倍すること、羊羔の息するが如し）凡七萬六千錠（元人金銀五兩十兩を以て餅に作り、號して錠と爲す、或は定に作る）著爲令。（是より法に著はして、一定の律令と爲す）胡蘭（續弘簡錄の註に胡蘭は山の名）●〔講義〕元の太子貴由、西域の未だ降らざる諸部に克つ、元は州郡に敕して、盜賊に盜まれて其物品を失ふて獲ざる時は、官より其の盜まれたるだけの物は償を出して、以て之に償はしむ、國初盜賊多し、故に令を下して、盜賊に失する物償は、其盜まれたる物本路の民の戶をして盜まれたる品に代て其金額を償はしむ、民之を苦んで多く亡命す、是に至て之を罷む、又官民の回鶻が金銀を貸て之を償ふ者は、歲ゝ其利息が加倍す、之を羊羔利と云ふ、羊羔の子を生するが如く多きを云ふ、是を以て往往にして家產を破り、妻子を以て質と爲すに至る、[illegible]す、耶律楚材太宗に請て、悉く官物を以て[illegible]を汝南伯に、張載を郿伯に、程顥を河南伯に、程頤を伊陽伯に、朱熹を徽國公に進封す、[illegible]子の廟庭に從ひ祀る、[illegible]帝孔子に謁して、遂に大學に臨す、十一月元の太宗出て獵す、鈋鐵鍔の胡蘭山に殂す、年五十六、起輦谷に葬る、後ち追謚して英文皇帝と曰ひ、廟を太宗と號す、太宗は寬弘の度量と仁恕の心とあり、時を量り物を度て、舉止に過つ事なく、華夏殷富にして、庶民業を樂む、行旅糧をもたらさず、時に治平と稱す、元太宗殂してより後ち、皇后乃馬眞氏朝に臨て制を稱する凡そ五年にして君を立てず、是より先き鄭清之相位を罷む、喬行簡、李宗勉等繼て政を爲す、優游にして決斷する所無し、帝史嵩之の言を思て、嵩之を都督府より入て相と爲す、和を議せんと欲すと雖も、輒ち衆論の沮する所と爲る、嵩之父彌遠が喪憂に當り、凶訃を聞て數日にして乃ち行く、詔して喪より起復して相と爲す、言官嵩之を目して權姦と爲し、力めて嵩之を攻む、故に之が爲に遂に相とならず、范鍾、游侶、鄭清之、謝方叔、吳潛、董槐、程元鳳、丁大全相繼て相と爲る、毎歲秋を防禦するを以て常の事とす。○元中書令耶律楚材卒。后嘗以儲嗣事問楚材。對曰。此非外臣所敢知。自有太宗遺詔在。守而行之。社稷之幸也。后嘗以御寶空紙。付幸臣奧都剌合蠻。令自書塡行之。楚材奏曰。天下者先帝之天下。朝廷自有憲章。今欲紊之。臣不敢奉詔。事遂止。復有旨。凡奧

都刺合蠻。所奏准。令史不爲之書者。斷其手。楚材曰。軍國之事。先帝悉委老臣。令史何與焉。事若合理。自當奉行。如不可行。死且不避。況斷手乎。后以其先朝勳舊。曲加敬憚焉。楚材天資英邁。夐出人表。雖案牘滿前。酬答不失其宜。正色立朝。不爲勢屈。欲以身徇天下。每陳國家利病。生民休戚。辭色懇切。太宗嘗曰。汝又欲爲百姓哭耶。楚材每言。興一利不若除一害。生一事不若減一事。平居不妄言笑。及接士人。溫恭之容溢于外。莫不感其德焉。

◉〔解釋〕凡奥都刺合蠻所奏准（奏准は俗語に奏白して旨を取るを謂ふなり）令史不爲之書者斷其手（中書令史は草を立るを掌る）

◉〔講義〕元時に乃馬眞氏制を稱す、奥都刺合蠻政を專らにす、楚材悒悒として卒す、乃馬眞氏嘗て嗣を儲くるの事を以て楚材に問ふ、楚材對て曰ふには、此閾外の臣の敢て知る所に非ず、自から太宗の遺詔の在るあり故に太宗の遺詔を守て而して之を行はゝ社稷の幸なり、后嘗て御寶とて天子の用ゆる所の寶紙なり、其書する所を空ふして氣に入りの臣の奥都刺合蠻に付して后自ら書を以て帝名の所を填盈して之を行はしむ、楚材奏して曰く、天下者先帝の天下にして朝廷自ら憲章たる卒法あり、然るに其草法を須ゐず、今之を紊亂せんと欲す、故に臣敢て詔を大切に受けずと、故に其事遂に止んて行はれず、復た后の旨あり曰く、凡奥都刺合蠻か奏白して旨を取る所令史刺合蠻か錄に書載せざる者は其手を斷ち切らんと、楚材か曰く、軍國の事は先帝太宗悉く老臣に委す、令史の若きは又何ぞ與らん、事若し道理に合はゝ自ら當に奉行すべし、如し行ふ可からずんば死とも且つ避け讓らず、況や手を斷ち切るを乎、后楚材は先の勛舊なるを以て心を曲けて敬憚を加ふ、楚材天資英雄豪邁にしてはるかに人の意表に出つ、案牘前に満つるほと澤山あるも其の答辯は其宜きを失はず、色を正して朝に立つ、權勢あるものゝ爲に風服せず、其身を以て天下に徇んと欲す、毎に國家の利と病となることゝ生民の休喜戚憂を以て辭色懇切なり、太宗嘗て曰く汝ち又た百姓等の爲めに哭せんと欲する耶、楚材毎に言ふ、一利を興さんとせは一害を除くに若かず、一事の生せんとせは一事を減するに若かず、平居妄りに言ひ笑はず、士人を接するに及て溫恭の容面貌に溢る、衆人其德に感ぜざるなし、楚材太宗即位の初に於て太宗の爲に儀を定め位を制す、親王察合台に謂て曰く、王は兄と雖とも位は則ち臣なり、禮當に拜すべし、王拜せは則ち敢て拜せざるものなし、即位の日、王皇族及ひ臣僚を率ひて帳下に拜す、元朝尊屬拜禮あるは是より始る、楚材便宜十八事を條す、言く、郡宜しく長吏を置き民を牧し、萬戸軍を統ふ、勢をして均からしむ、事を力めて以て驕横を遏むべし、凡そ政令民に便なる者は甚はた衆し、太宗悉く之に従ふ、惟ゝ貢献の一事允されず、曰く、彼自ら進献を願ふ者宜しく之を聽すべし、楚材か曰く、蠹害の端必す此に由らん、太宗の曰く、凡そ卿か奏する所朕従はさる者なし、卿は朕か一事に従ふ能はさる耶と、汴梁將に下らんとす、大將の言く、金人抗抵する久し、師多く城下に死傷す、請ふ之を屠らん、楚材聞て入て奏して曰く、地を得るとも民なくんは將た爲んぞ之を用ひん、太宗猶豫して未た決せず、楚材又曰く、奇巧之工厚藏の民皆此に萃る、若し盡く殺さは、將に獲る所なからんとす、太宗之を然りとす、遂に詔して罪完顔氏に止る、餘は問ふことなし、時に太宗地を裂きて親王功臣に賜ふを議す、楚材の曰く、土を裂き民を分は嫌疑を生し易し、多く與ろに金帛を以せんには如かず、太宗の曰く、已に許す奈何んと、楚材曰く、若し朝廷の直吏其貢賦を收めは、歳の終りに之を頒たん、科徵を擅する無らしめは可なりと、之に従ふ、卒するに及て十たひ在す後に之を譖する者あり、言く、其の相位に在こと久し、天下の貢賦半は其家に入ると、皇后近臣に命して之を羅せしむ、唯琴阮十餘、及ひ古今の書畫金石の遺文數千卷、後ち廣寧王に封ぜらる、文正と謚す、二子あり鉉鑄なり

◯元便宜總帥汪世顯卒。世顯善兵能將。重儒愛民。勤儉自持。有古名將之風。◯丙午。淳祐六年。元定宗即位于速蔑禿都。定宗名貴由。太宗長子也。母曰六皇后。乃馬眞氏。初太宗有旨。以皇孫失烈門爲嗣。及殂。后臨朝稱制者五年。乃議立定宗。◯戊申。淳祐八年。元定宗尸位三年而殂。壽四十三。葬起輦谷。追謚簡平皇帝。◯元自馬眞氏臨朝以來。法制不一。內外離心。定宗既殂。皇后海迷失抱子失烈門。垂簾聽政。諸王大臣不服。共議立太弟蒙哥。後二年。是爲憲宗。即位。◯辛亥。淳祐十一年。元憲宗名蒙哥。太祖第四子拖雷之長子。先是諸大臣欲奉屈出之子失烈門。久而不決。至是兀良哈歹以太祖諸孫。惟憲宗謙愼。宜立。遂大會于闊帖兀

阿蘭之地。而即位焉。失烈門不服。憲宗因察諸王有異同者。並羈縻之。取主謀者誅夷之。由是始定。○余玠大敗元人于興元。○元憲宗命太弟忽必烈。總治蒙古漢地民戸事。開府于金蓮川。先是姚樞隱居蘇門。以道自任。太弟召之。樞至。見太弟聰明才不世出。虛己受言。將大有爲。乃盡其平日所學。爲書數千言。上之首以二帝三王爲學之本。爲治之序。與治國平天下之大經。彙爲八目。曰脩身。力學。尊賢。親親。畏天。愛民。好善。遠佞。次及時政之弊。爲條三十。本末兼該。細大不遺。太弟太奇其才。動必見詢。○元以史天澤趙璧。爲河南經略使。○壬子。淳祐十二年。元定宗后。及失烈門母。以厭禳事覺。並賜死。謫失烈門及其黨於沒脫赤之地。

◉〔解釋〕尸位（朝政猶ほ母后より出づ、故に尸位と曰ふ、）馬眞氏（馬眞氏の上、乃字を脫す、）子失烈門（子の上曲出の二字を脫す、定宗の后海迷失氏、太宗の遺命に從ふて、而して曲出の子失烈門を立んと欲す、）後二年是爲憲宗即位（按ずるに即位二字、當に後二年の下に在るべし、是傳鈔の錯りなり、）屈出之子失烈門（屈出當に曲出に作るべし、）兀良哈歹（歹は多改の反、歹一に台に作る、兀良は姓、哈歹は名なり、）

◉〔講義〕是より先き元の便宜總帥汪世顯卒す、世顯兵を善くし、能く將たり、儒を重し民を愛す、勤め儉約にして自ら禮法を持す、古の名ある將の風儀あり、淳祐六年元の定宗位に遇茂秀都に即く、定宗名は貴由、太宗の長子なり、母は六皇后と曰ふ、乃馬眞氏、初め太宗旨あり、皇孫失烈門を以て嗣君と爲す、太宗の殂するに及んで、后朝に臨み制を稱する者五年にして、乃ち詔議して定宗を立つ、皇后の詔を制と云ふ、元の定宗尸位三年にして而して殂す、尸はかたしろ、さて只人君の位に備ふるのみ、何ぞ人君の事を爲さゞるを云ふ、四十三、亦た起輦谷に葬る、簡平皇帝と諡す、元乃馬眞氏朝に臨みてより以來、法度禁制一ならず、故に內外心を離して賄賂盛なり、定宗崩じて後、海迷失后稱制、失烈門を抱て臨朝垂て政を聽く、諸王大臣服せず、共に議して定宗の太弟蒙哥を立つ、後ち二年位に即く、是を憲宗と爲す、元憲宗名は

哥、太祖の第四子拖雷の長子なり、是より先き諸大臣曲出の子失烈門を立てんと欲す、久ふして而して決せず、是に至て兀良哈歹以爲らく、太祖の諸臣、惟だ憲宗のみ英武にして賢明なり、故に宜しく皇帝の位に即くべし、遂に大に闊帖兀の阿蘭の地に會す、而して憲宗位に即く、然るに皇后の立んと欲するを以て、失烈門は之の擧に服せず、憲宗因て諸王の即位の際異同ある者を察し、並に皆之を羈縻す、其中の主謀する者を取て悉く之を誅し、遂に其族を夷す、是に由て漸く鎭定まる、宋の余玠大に元人を興元に敗る、元の憲宗太弟忽必烈に命して蒙古と漢地の民戸の事を總べ治しむ、府を金蓮川に開かしむ、是より先き姚樞と云ふ賢人あり、蘇門に隱居し道學を以て自ら任ず、太弟之を召す、姚樞召に應して至る、而して姚樞は太弟の聰明にして才世に出でず、己の心を虛ふして賢者の言を受け、將さに大に天下に爲すことあらんとするを見て、乃ち其平日の學ぶ所を盡して書數千言を爲て之を上つる、首として堯舜二帝禹湯文王學を爲すの本、治を爲すの序と、國を治め天下を平にするの大經とを以て彙めて八目と爲す、曰く身を脩め學を力む、賢を尊ひ、親を親み、天を畏れ、民を愛す、善を好み、佞を遠く、次に時政の弊に及ひ條目三十と爲す、本末兼ね該す、細大遺さず、太弟太だ其才を奇とし、動けば必ず詢はる、姚樞字は公茂、柳城の人、後ち洛陽に遜る、少きより學を力む、程朱の書を得るに及んで益て自ら勵むを知り、世祖藩王と爲る、召して之を王府に延き、時務を數陳す、必ず帝王の道を以て言を爲す、世祖大理國を征伐す、樞從て行く、中途に夜宴するに因て、樞か言く、宋の太祖曹彬に命して南唐を取らしむ、一人を殺さず、市は之か爲めに肆を易へず、明日世祖鞍に撫て呼て曰く、汝ぢ昨日言ふ宋の曹彬は一人を殺さず、吾れ能く之を爲ん、樞馬上に賀して曰く、聖人之心仁明此の若きは生民の幸なり、國を有つの福なり、大理城に至る、樞に命して帛を裂て旗を爲し、止殺の令を書せしむ、民賴て以て安す、樞の力なり、元又史天澤趙璧を以て河南の經略使と爲す、史天澤は眞定の人、身の長け八尺、音は洪鐘の如し、勇力にして善く射る、兄天倪眞定の帥と爲る、而して死す、天澤其職を襲ぐ、太宗天澤を以て眞定河間大名東平濟南五路の萬戸と爲す、汴梁歸德蔡州を攻む、戰功多し、世祖位に即く、召して治道を問ふ、疏して具に以て對ふ、言ふ省部を立てゝ以て紀綱を正し、監司を設て以て諸部を督し、恩澤を謂ふして以て反側を安んず、貪殘を退けて以て賢能に任す、郵驛を頓て以て厥を釜ひ、道路を築して以て奸を防ぐ、二年にして中書右丞相に遷る、言ふ所皆次第に之を行ふ、三年李璮叛て濟南に據る、親王哈必赤を遣はし之を討せしむ、詔て天澤に命して往かしむ、璮濟南に入るを聞き笑曰く、豕入て穽に入る、能く爲す無きなり、王に言て曰く、兵宜しく力めて攻むべからず、當に旬月を以て之を斃すべし、乃ち塹を深ふし、塁を高ふして其の斃るゝを待つ、四月を歷て、城中食盡て潰降す、璮を生擒して之を斬る、或は謂く、璮の變諸侯の權重きに由る、天澤遂に奏請す、臣が家より始めん、是に於て史氏の子弟兵符を解く者十七人、至元十一年、天澤に詔して伯顏と大軍を總べ宋を伐す、天澤郢に至る、疾を以て襄陽に還る、帝尚醫に勅して往て視せしむ、天澤附奏して曰く、臣大限至りあり、死は惜むに足らず、願くは天兵江を渡るの

慎て殺し掠むる勿れと、語は他の事に及ばず、十二年三月を以て卒す、年七十四、忠武と謚す、後ち太師を贈る、鎮陽王に封ぜらる、天澤平居未だ曾て自ら其能に矜らず、大節に臨んで大事を論ずるに及んで、毅然として天下の事を以て自ら任ず、年四十に至て始て節を折り書を讀む、尤も資治通鑑に熟す、論を立る人意表に出づ、相に拜するの日門庭悄然たり、或は勸む權を以て自ら强らんと、天澤唐の韋澳の語を誦して曰く、願くは相公權なけん、爵祿刑賞は天子の柄、何ぞ權を以て爲んと、言者愧服す、將相に出入する五十餘年、上疑はず、而して讒みなし、人以て郭子儀曹彬に方ぶと云ふ、子は格、樟、棣、杠、杞、梓、楷、彬と曰ふ、皆な名を顯す、元の定宗の后及び失烈門母厭禳の事覺はるを以て並に死を賜ふ、失烈門及び其黨を沒脫赤の地に竄寘す、）○六月。

元憲宗以中州漢地封同姓。太弟於汴京關中自擇其一。姚樞曰。南京河徙無常。土薄水淺。瀉鹵生之。不若關中。厥田上上。古名天府陸海。太弟遂請關中。由是太弟有關中河南之地。○癸丑。寶祐元年。四川制置使余玠卒。以余晦爲四川宣諭使。○元太弟忽必烈。平大理國。○甲寅。寶祐二年。時余晦宣撫四川。以私恨誣奏利路安撫王惟忠潛通北境。大理陳大方。承旨鍛成之。惟忠將斬於市。色不變。謂大方曰。吾死訴於天。既斬血逆流而上。未幾大方入朝。恍惚與惟忠還。遂卒。先是朝廷用彭大雅理蜀。甚有威名。重城重慶城。余玠遷蜀郡平曠之地。分治險要。如合州治釣魚山之類。在蜀二十年。民籍以安。至余晦貪謬。罔功敗失要地。以和州守劉雄飛爲四川制置。胡穎每見淫祠。即毀之。人謂之胡打鬼。經畧廣東。廣有僧寺佛像中有巨蛇。時出享人祭祀。僧托之題跋。得數千緡。穎至。毀佛。擊蛇。其怪遂息。○丙辰。寶祐四年。高麗王細嗟甫。雲南酋長摩合羅嗟。及素州諸國朝于元。○元憲宗欲建城市爲都會之所。太弟忽必烈言。劉秉忠精於天文地理之術。乃命相宅。秉忠以桓州東灤水北之龍岡爲吉。乃命秉忠營之。名曰開平府。三年而畢功。○丁巳。寶祐五年。元回鶻獻水精盆。珍珠傘。可直銀三萬餘錠。憲宗曰。方今百姓疲弊。所急者錢耳。朕獨有此何用。却之。○十月。元兀良哈歹伐安南。屠其城。○戊午。寶祐六年。二月。安南王傳國於長子光昺。遣使以方物獻于元。○元討回回哈里發。平之。九月。憲宗親帥大軍入蜀。攻苦竹隘。宋守將楊立。張實死之。是時元人勢欲順流東下。一軍自大理國斡服南來。歷邕桂之境。以至潭州。一軍渡江圍鄂州。○罷丁大全。以吳潜爲左相。即軍中拜賈似道爲右相。趙葵樞密策應使。杜庶兩淮制置。夏貴總領舟師。呂文德等乘風戰勝。潜以向士璧守潭。適南來二哥元帥。遇宋侯騎而死。潭圍先解。高達等守鄂。似道駐漢陽。爲鄂援。○己未。開慶元年。元憲宗圍合州。遣使招諭守將王堅。堅殺使者。固守拒之。

◉〔解釋〕六月元憲宗以中州漢地封同姓（憲宗雅と太弟を愛す、之か權を重くせんと欲す、故に太弟をして自ら其一を擇はしむ、同姓の下令の字を夾さむ、）利路（利路は乃ち順元州の廢元府なり）鍛成（大理卿陳大方余晦か旨意を承順し鍛錬して以て其獄を成す、）重慶（府は川南に屬す、即ち恭州なり）合州（川南に屬す）余玠遷蜀郡平曠之地。分治險要。如合州治釣魚山之類。（諸の治所の平曠の地に在る者は、分て之を險要に徙し、城を築くこと十餘、山を以て壘と爲す、合州の城を釣魚山に徙すの類の如しとなり、）淫祠（祀典に載せざ

るを淫祠と曰ふ

經畧（廣東の經畧使と爲る）

●〔講義〕六月元の憲宗中州漢地を以て同姓を封す太弟亦京關中に於て自ら其一を擇はしむ姚樞か曰く南京は河徙て常なく土薄く水淺し潟鹵之に生す關中を請ふに若かす澤鹵は鹽地なり夫れ關中は厥の田は上の上古より天府陸海と名つく太弟遂に關中を請ふ是に由て太弟關中河南の地を有つなり寶祐元年四州の制置使余玠卒す余晦を以て四州宣撫使と爲す元の太弟忽必烈乃ち大理國を平らく時に宋の余晦四川に宣撫たり余晦嘗て王惟忠に私恨あるを以て誣ね奏して曰く利路の安撫使王惟忠潜に北境に通すと大理陳大方旨を承て其罪を鍛ね成す惟中將に市に斬れんとす顔色變せす大方に謂て曰く吾れ死せは天に訴ん既に斬らる赤血逆流して上る未た幾ならす大方入朝す恍惚として王惟忠と還る余晦遂に卒す是より先き朝廷彭大雅を以て蜀を理しむ甚た威名あり重て重慶城を築く余玠蜀郡に遷る平曠の地分て險要を治む合州に釣魚山を治るの類の如し蜀に在る二十年民藉以て安し余晦に至て貪穢にして功なし敗て要地を失す和州の守劉雄飛を以て四川の制置と爲す胡穎淫祠を見る毎に即ち之を毀つ人之を胡打鬼と謂ふ廣東に經畧たる廣州に僧寺佛像の中に巨蛇あり時に出てゝ人の祭祀を享く僧之に托して疏を題す數千緡を得たり穎至て佛像を毀ち蛇を撃つ其怪遂に息む時に高麗王禃嗟甯雲南の酋長劉摩合羅嵯及ひ素州諸國元に朝す元の憲宗城市を建て都會の所と爲んと欲す太弟忽必烈言く劉秉忠天文地理の術に精しと乃ち命して宅を相しむ秉忠桓州の東灤水の地の龍岡を以て吉と爲す乃ち秉忠に命して之を營せしむ名て開平府と曰ふ三年にして而して功を擧ふ元回鶻水精盃珍珠傘を獻す其直銀三萬餘錠に當る憲宗の曰く方今百姓疲弊す急なる所は錢耳朕獨り此あるも何ぞ用んと之を却く十月元の兀良哈歹安南を伐つ其城を屠る後ち安南王國を長子光昺に傳ふ使を遣はして方物を以て元に獻す元國回哈里發を討て之を平らく九月憲宗親ら大軍を帥て蜀に入る苦竹を攻む宋の守將揚立張實之に死す是の時元入其勢江流に順て東に下らんと欲す一軍は大理國斡腹の南より來る邑桂の境を歷て以て潭州に至る一軍は江を渡て鄂州を圍む宋帝大全を罷て吳潜を以て左相と爲す軍中に即て賈似道を以て右相と爲す賈似道宋の大惡人なり宋帝知らす宋の亡滅は賈似道の惡政に本つく趙葵は樞密策應使たり杜庶兩淮の制置たり夏貴は舟師を領す呂文德等風に乘して戰勝つ吳潜向士璧を以て潭を守らしむ適ゝ南來の二哥元帥宋の候騎に遇ふて而して死す潭の圍み先つ解く高達等鄂を守る似道漢陽に駐る鄂の援と爲る是時元の阿答胡元軍の都元帥と爲る蓋し阿答胡の小字は二哥なり元の憲宗合州を圍む使を遣はして守將王堅を招諭す堅使者を殺して固く守て之を拒く

〇七月。元憲宗殂於釣魚山。在位九年。壽五十二。後追諡曰桓肅皇帝。憲宗剛明雄毅。沈斷寡言。不樂宴飮。不好侈靡。雖后妃亦不過制。太宗末年。群臣擅權。政出多門。至憲宗。凡詔旨必親起草。更易數四。然後行之。御群臣甚嚴。嘗諭曰。汝輩若得朕奬諭。即志氣驕逸。災禍未有不隨至者。汝輩其戒之。時太弟進攻鄂州。宋守將張堅守不下。遂死之。〇似道自漢陽至鄂督師。而太弟忽必烈攻城益急。城中死傷者至萬三千人。似道大懼。密遣宋京詣元營。請稱臣納幣。太弟不許。會合州守王堅遣人走鄂。以憲宗訃聞。于似道。似道再遣宋京往元營。太弟亦聞阿里不哥欲襲尊號。郝經曰。若彼果稱遺詔。便正位號。下詔中原。行赦江上。欲歸得乎。願大王以社稷爲念。班師議和。置輜重。率輕騎而歸。直造天都。遣二軍逆大行靈舁。收皇帝璽。遣使召旭烈阿里不哥諸王。會喪和林。差官諸路安輯。命王長子眞金。鎭守燕都。示以形勢。則大寶有歸。而社稷安矣。太弟然之。乃許似道和。且約歲幣之數。遂拔寨而去。留張傑閻旺。以偏師候湖南兀良哈歹之兵。〇庚申景定元年。元世祖名忽必烈。憲宗同母弟也。憲宗既殂。阿藍荅兒渾都海等。謀立世祖弟阿里不哥。憲宗后聞之。遣使馳至鄂。請速還。春三月。至開平。諸王大臣同勸進。三讓乃即位。〇元兀良哈歹。會張傑于鄂州。師北還。宋賈似道命夏貴。敗其後軍于新生磯。遂匿其議和。稱臣納幣之事。上表言。鄂圍始解。江面肅清。宗社危而復安。實萬世無疆

之休。帝以似道有再造功、下詔褒美、賞賚甚厚。○元阿里不哥僭號于和林城曲。○五月十九日、元建元中統。○進中統交鈔。○元世祖自將討阿里不哥。○元廉希憲大敗西軍于姑臧、斬阿藍答兒及渾都海。○元以梵僧八合思八爲國師。○元遣郝經來尋盟、且徵前日請和之議。賈似道既還朝、使其客廖營中撰福華編、稱頌鄂功。朝廷不知其求和也。○元世祖既立、廉希憲請遣使以息兵講好、命軍北歸、俾恩威並著。世祖善之、而未得其人。王文統素忌郝經才德、乃遣經行。或謂經曰、盡以疾辭。經曰、自南北搆難、江淮遺黎、弱者被俘畧、壯者死原野、兵連禍結、斯亦久矣。聖上一視同仁、務通兩國之好、雖以微軀蹈不測之淵、苟能弭兵靖亂、活百萬生靈於鋒鏑之下、吾學爲有用矣。遂行。王文統陰諷李壇侵宋以沮撓之、欲假手以害經。經踰淮、賈似道懼姦謀呈露、遂以李壇爲辭、拘留經于眞州之忠勇軍營。驛吏防守、嚴於獄犴。介佐或不能堪。經語之曰、將命至此、死生進退、聽其在彼。守節不屈、盡其在我。豈能不忠不義、以辱中州士大夫乎。但公等不幸、須忍死以待。撥之天時人事、宋祚殆不遠矣。衆感其言、皆自振勵。

◉〔解釋〕阿里不哥（世祖の弟なり）逆大行靈昇（大行は在らざるの稱なり、天子崩して未だ謚號あらず、故に大行と稱するなり、）旭烈兀（旭烈兀も亦た世祖の弟なり）和林城曲（曲は元史に西に作る、）進中統交鈔（案ずるに進は當に造の字の誤なるべし、元史に中統元年七月、中統元寶の交鈔を造ると是なり、又食貨志に中統元寶の鈔を造る、其文十を以て計る者四つ、曰く一十文、二十文、三十文、五十文、百を以て計る者は三つ、曰く一百文、二百文、五百文、貫を以て計る者二つ、曰く一貫文、二貫文なり、）大敗西軍于姑臧（西軍は即ち阿里不哥の軍なり）元以梵僧八合思八爲國師。（梵は西域の浮屠の稱號、八合思八は名なり、國師は天下の釋教を總管するなり）

◉〔講義〕七月、元の憲宗、釣魚山に殂す、位に在る九年、壽五十二、後諡して桓肅皇帝と曰ふ、憲宗性質剛強明則、英雄果毅、沈斷にして言寡く、宴飲を樂まず、侈靡を好まず、后妃と雖も亦た制禁を過ぎず、太宗の末年、群臣權を擅らにす、政出ること門多し、憲宗に至て凡そ詔旨必ず親ら草を起す、更め易ること數四にして、然して後ち之を行ふ、群臣を御する甚た嚴なり、嘗て諭して曰く、汝が輩若し朕が獎諭を得ば、即ち士氣驕逸して、災禍未だ從て至らざる者あらず、汝が輩其れ之を戒よと、時に太弟進て鄂州を攻む、宋の守將張堅守て下らず、遂に之に死す、宋の賈似道漢陽より鄂に至て師を督す、而して太弟忽必烈城を攻ること益ゝ急なり、城中死傷する者萬三千人に至る、似道大に懼れ、密に宋京を遣はして元の營に詣しむ、臣と稱して幣を納んと請ふ、太弟許さず、會ゝ合州の守王堅人を遣はして鄂に至らしむ、宗の訃を以て似道に聞す、似道再び宋京を遣はして元の營に往しむ、太弟も亦た阿里不哥して天子の尊號を總がんと欲すと聞く、郝經が曰く、若し彼れ果して遣詔と稱し、便ち位號を正し、詔を中原に下して、赦を江上に行はば、歸んと欲すとも得んや、願くは大王社稷を以て念と爲し、師を班して和睦を議し、輜重車を置き、輕鋭の騎兵を率ひて而して歸り、直に天都に造り、二軍を遣はし大行の靈昇を逆へ、皇帝の璽を收め、使を遣はし旭烈阿里不哥の諸士を召し、和林に會喪し、官吏を諸路に差し、安輯して王の長子眞金に命じて燕都を鎭守し、示めすに形勢を以てせば、則ち太寶帝位は歸し、本つくあつて而して社稷安穩ならん、太弟之を然とす、乃ち似道に和を許す、且つ歳幣の數を約し、元遂に朶皆を拔て而して去る、張傑、闊旺を留めて偏師を以て湖南の兀良哈歹が兵を候す、元の世祖、名は忽必烈、憲宗の同母弟なり、憲宗既に死す、阿藍答兒、渾都海等、世祖の弟阿里不哥を立んと謀る、憲宗の后之を聞き、使を遣はし、馳て鄂に至て、請ふて速に還らしむ、春三月開平に至て、諸王大臣同しく勸進す、太弟三讓して乃ち帝位に即く、元の兀良哈歹張傑に鄂州に會す、師を帥て北に還る、宋の賈似道、夏貴に命じて兀良哈歹が其後軍を新生磯と云ふ所て敗り、遂に似道が其の和を議し臣と稱し、幣を納る事を匿くして表を上て言ふ、鄂の圍み始て解けて而して江面は廓淸なり、宗社危くして而して復た安しと、朝廷を欺給す、且つ言ふ、實に萬世疆りなきの休なり、帝以爲らく似道再造の功ありと、詔を下して褒美す、賞賚甚た厚し、元阿里不哥和林城西に於て僭號して皇帝と稱す、五月十九日、元中統と改元す、故に中統交鈔を造る、元の世祖自ら將ゐて阿里不哥を征伐す、元の廉希憲、阿里不哥が軍を姑臧に敗る、阿藍答兒及び渾都海を斬る、元梵僧八合思八を以て國師と爲す、國師は天下の釋教を總管するなり、元郝經を宋に遣はし盟を尋めしむ、且つ和を議動て

[illegible]息め好を講し、單に命して北に歸らしめて恩と威とをして並ひ著さしめんと請ふ、世祖之れを善とす、而して未た其人を得す、王文統素より郝經か才と德あるを忌む、乃ち郝經を遣はして宋に行かしむ、或人經に謂て曰く、盍んぞ疾を以て辭せさる、經か曰く、宋元隙を搆てより江淮の遺民弱き者俘略せられ、壯なる者は原野に死す、兵連り禍結ふ、斯れ亦た久し、聖上彼是なく一に視て仁を同ふす、故に兩國の好を通せんと務む、假令晉か微なる軀を以て測らさる深き淵を踏むと雖とも、苟も能く兵を弭め亂を靖して百萬の生靈を鋒鏑の下に活さは、吾か學世に用ありと爲ん、と遂に行く、王文統密に李壇に諷して宋を侵し以て郝經を沮撓し、宋の手を假り以て經を殺さんと欲す、經淮を踰ゆ、賈似道姦謀の呈はれ露るゝを懼て、遂に李壇か宋を侵すは鄂の盟を敗るを以て辭と爲す、遂に經を眞州の忠勇軍の營に拘留す、驛吏の防守獄犴より嚴なり、介佐も或は堪る能はず、經之に語て曰く、命を將て此に至る、死生進退は其の宋に在るに任す、節を守て屈せざるは盍く其れ我に在り、豈に能く不忠不義にして以て中州の士太夫を辱しめんや、但公等不幸なり、須らく死を忍んて以て待つべし、之を天の時人の事に揆るに、宋の祚亡滅すること遠からず、と、衆其言に感して皆自ら心を振勵す、郝經字は仲常、其先は澤州の人、後ち順天に徙る、世祖位に即て經を以て翰林侍讀學士と爲す、宋に使して即位を告く、賈似道以爲らく敵を却くるの功ありと、歲幣を納るゝを言ふを諱み、且つ謀の泄れんを恐れ、乃ち經を眞州に縮す、經宋帝及び其大臣に上書して且つ入て見るを請ふ、皆報せず、驛吏垣に棘し月に鎖す、從人怒て而して鬪死する者數人、居ると七年、經を別館に徙し從者六人を與ふ、又居ると九年、伯顏南を侵す、宋懼て郝經を送り歸す、似道の謀泄れ亦た竄死す、經歸る、世祖宴を大庭に錫ひ、副使劉仁傑より以下賞賚差あり、秋七月卒す、年五十三、人と爲り氣節を尚ふ、學を爲す用を致すを思ふ、留めらるゝに及て續漢書易春秋の外傳を撰す、文集數百卷、其文豐蔚藻宕、議論に喜し、詩は奇崛多し、宋に拘はる十六年、從者皆學に通す、書佐荀宗道後に官國子祭酒に至る、經か子采麟官廉訪使に至る、郝經は有名なる人なり、故に傳を記し擧る、故に本文と相合はざる所あり、

帝聞有北使。謂宰執曰。北朝使來。事躰當議。似道奏。和出彼謀。豈容一切輕徇。倘以交鄰國之道來。當令入見。賈似道忌害閫臣。兵退。行打算費用法。欲以此汚之。向士璧趙葵史岩之杜庶等。皆坐侵盜掩匿。罷官徵償。而士璧所償尤多。竟安置而死。復拘其妻妾而徵之。猶不能足。信州謝枋得。以趙葵檄給錢粟。募民兵守禦。枋得曰。不可以累趙宣撫也。自償萬緡。餘不能辨。乃上書似道有云。千金而募徙木。將取信於市人。二卵而棄干城。豈可聞於隣國。遂得免徵餘者。○呂文德制置荊湖。知鄂州。○辛酉景定二年。瀘州守劉整叛降于元。先是。止遷蹕之議者。吳潛。盡守城之力者。向士璧。奏斷橋之功者。曹世雄劉整。既而似道妬功。譖士璧世雄。皆貶死。整已懼禍。而蜀帥鄭興復。以宿憾遣吏至瀘。打算軍前錢粮。適北軍壓境。遂叛去。○元命軍中所俘儒士。聽贖爲民。七月。元初立翰林國史院。○立諸路提擧學校官。○元諸將敗西軍。阿里不哥北遁。○元封皇子眞金爲燕王。領中書省事。○壬戌景定三年（元世祖中統三年）呂文德復瀘州。○元江淮大都督李壇以京東漣海來歸。詔封壇爲齊郡王。復其父全官爵。○元宰臣王文統坐與壇通謀伏誅。○元史天澤圍李壇于濟南。壇復降于元。元人誅之。○元以董文炳爲山東路經畧使。○元立十路宣慰司。立諸路轉運司。○癸亥景定四年。二月。元以王德素爲使。劉公諒爲副。致書來詰其稽留郝經之故。○三月。元初建太廟。五月。初立樞密院。以太子燕王眞金守中書令兼判樞密院事。以開平府爲上都。元以姚樞爲中書左丞。樞曰。陛下於基業爲守成。於治道爲創始。正宜睦親族以固本。建儲副以重祚。定大臣以當國。

開經筵以格心。修邊備以防虞。蓄糧餉以待歛。立學校以育才。勸農桑以厚生。世祖納之。○呂文德復瀘州。文德號黑灰團。劉整獻言於元曰。南人惟恃黑灰團。然可以利誘。乃遣使獻玉帶於文德。求置權場於襄城外。文德許之。使曰。南人無信。願築土城以護貨物。文德不許。使者復至。文德請於朝許之。開權場於樊城外。築土墻於鹿門山外。通互市內築堡。文德弟呂文煥知被欺。兩申制置。爲吏所匿。元人又於白鶴城築第二堡。文煥再申。方達。文德大驚曰。誤朝廷者我也。即請自赴援。會病卒。

◉〔解釋〕賈似道忌害閫臣（閫は此れ郭門の閾なり、閫臣は閫外の制禁の將を謂ふなり）兵退行打算費用法。（打算は結算を謂ふなり、俗語に凡そ事をなす、皆之を打と謂ふ、人と說話するを打話と曰ひ、酒を買ふを打酒と曰ふの類の如し、）二卯以而棄干城（子思の曰く、今君戰國の世に處す、而るに二卯を以て干城の將を棄つ、此れ鄰國に聞へ使む可からずと、）鄭興復（當に愈興に作るべし）瀘（川南に屬するなり）止遷（其の北兵を避遷するを止む）皇子眞金（世祖の第二子）元宰臣王文統（王文統平章政事と爲る、故に宰臣と曰ふ）文德號黑灰團（文德色黑く、故に黑灰團と號す、）

◉〔講義〕宋帝元の使ありと聞き、宰執に謂て曰く、北朝の使來らば、事體當に議すべしと、似道奏す、和は彼の謀召に出つ、豈に一切に輕く侑ふ可けんや、彼倘し鄰國に交るの道を以て來らば、當に入て見せしめんと、賈似道閫外制禦臣を忌害す、兵退て軍中の錢用を結算するの法を行て此法を以て諸將を汚さんと欲す、向士璧、趙葵、史岩之、杜庶等皆な軍金を侵盜し、或は掩匿したる者の罪に坐られて官を罷め、其償を徵促せられ、而して士璧償ふ所尤も多し、竟に安置せられて而して死す、然るに復た其妻妾まで拘留して不足金を徵促す、猶足すと能す、信州の謝枋得趙葵り召して文を以て錢粟を給す、民兵を募り守り禦かしむ、枋得か曰く、錢粟の故を以て趙宣撫を累す可からず、自ら萬緡を償ふ、餘は辨する能はす、乃ち似道に上書して云ことあり、昔し千金を以て而して木を徙す秦商鞅あり、是前義にあらず、將に信を御に布く人に取らんとす、又衛侯は二卯を以て而して侯の干城となるべき大將、名は苟變を棄つ、豈に隣國に聞しむ可けんや、遂に餘金を徵促する者を罷るを得たり、按するに謝枋得前きに趙葵の檄を以て錢粟を其軍に給す、被て民兵を聚り趙軍を援く、今似道趙葵か徵償を責む、葵償ふ能はす、故に枋得か曰く、以て趙宣撫を累はす可からず、因て自ら萬緡を償ふ、且つ上書して以て餘を徵する者を免するを請ふなり、呂文德荊湖に制置として鄂州に知たり、鄂州の守劉整叛て元に降參す、是より先き皇帝の遷蹕の議を止る者は呉潛なり、城を守るの力を盡す者は向士璧なり、橋を斷の功を奏する者は曹世雄劉整なり、初め董宋臣都を遷さんと請ふ、何子擧と呉潛朱貔孫と其不可を言ふ、果して行はれず、又劉整、元人の作る所の新生機の浮橋を攻め斷んと計る、既にして而して似道功を妬み士璧世雄を讒す、皆貶死す、整已に禍を懼る、而して蜀師兪興宿き恨を以て吏を遣はして瀘に至らしめ軍前の錢糧を結算せしむ、適く北軍境を歴す、遂に宋を叛き去る、元軍中に俘する所の儒士に命して贖ふて民たるを聽す、七月元初て翰林國史院を立つ、諸路の提擧學校の官を立つ、元の諸將西軍を敗る、阿里不哥北に還る、西軍は阿里不哥か軍を謂ふなり、前きに西軍を姑威に敗るとあり、元世祖の第二子眞金を封して王と爲す、中書省の事を領しむ、景定三年呂文德鄂州を復す、元の江淮の人都督李璮京東連海を以て來歸す、詔して璮を封して齊郡王と爲す、其父李全か官爵を復す、元の宰臣王文統李璮と謀を通するに坐して誅に伏す、元の史天澤李璮を濟南に圍む、璮復た元師に降る、元人之を誅す、元董文炳を以て山東路の經畧使と爲す、元十路の宣慰司を立つ、諸路の轉運司を立つ、元王德素を以て使と爲す、劉公諒を副と爲す、書を致し來て其郝經を稽留するの故を詰る、三月元初めて太廟を建つ、五月初て樞密院を立つ、太子眞金を以て中書令を守らしむ、統て樞密院の事を判す、開平府を以て上都と爲す、元姚樞を以て中書左丞と爲す、樞か曰く、陛下基業に於て守成と爲す、治道に於て創始と爲す、正に宜しく親族を睦ふして以て本源を固ふし、儲副を建て以て祚を重し、大臣を定て以て國に當らしめ、經筵を開て以て心を格正し、邊備を修めて以て虞を防き、糧餉を蓄て以て歛を待ち、學校を立て以て才を育し、農桑を勸めて以て生を厚すべしと、世祖之を納る、宋の呂文德瀘州を復す、文德黑灰團と號す、劉整言を元に獻して曰く、南宋人惟た黑灰團を恃む、然とも利を以て誘ふ可し、蓋し文德は浮利の人なり、故に乃ち使を遣はして玉帶を文德に獻す、權場を襄の城外に置くを求む、權場は交易場なり、文德之を許す、使の曰く、南人は信實かないから、願くは土城を築て以て貨物を護せんと、文德許さす、使者復た至る、文德朝廷に請て之を許す、乃ち權場を樊城の外に開らく、土墻を鹿門山の外に築き、互市を通して內に堡を築く、文德か弟呂文煥元人の欺く所と爲るを知て、再たひ制置に申す、吏の匿す所と爲る、元人又白鶴城に於て第二堡を築く、文煥再たひ申す、其時始て達す、文德大に驚て曰く、朝廷を誤る者我なりと、即ち請て自ら赴き援ふ、會く病て卒す、

○甲子。景定五年（元世祖至元元年）七月。彗星長十數丈。芒角燭天。自四更從東見。日高方歛。月餘乃不見。楊棟因指言蚩尤旗。因

此遭論去國。○八月。元以燕京爲中都大興府。劉秉忠請定都于燕。世祖從之。○元改元至元。時阿里不哥兵屢敗。至是與諸王王龍荅失罕速帶。音里吉合。及其謀臣不魯花忽思等。來歸。詔諸王皆太祖之裔。並釋不問。其謀臣不魯花伏誅。○元立諸路行中書省。○冬十月。上崩。在位四十一年。改元者八。寶慶紹定。則彌遠十年之政。端平初元。善類滿朝。有眞德秀魏了翁等。爲執政侍從。人以比慶曆元祐。自嘉禧以後。至于淳祐。則有嵩之數年之政。嵩之既去。自淳祐至寶祐。正人指邪爲邪。邪人指正爲邪。互爲消長。而狼狽。莫如開慶丁大全之政。景定改元。大全與吳潛。雖人品不同。各以竄死。似道獨相。遂執國政。末年寖有君臣相猜之跡。未及更變。而崩。壽六十一。上臨御以來。終始崇奬周程張氏。及朱張呂氏諸儒義理之學。故廟號理宗。太子立。是爲度宗皇帝。

◉〔解釋〕彗星（彗は祥歲の切、乃ち妖星なり）蚩尤旗（言は彗星は乃ち蚩尤旗なり、史記の天官書に蚩尤の旗、彗に類して而して後ち曲りて旗に象す、見はる時は則ち王者四方を征伐す、叉云ふ、辰星出入常に辰戌丑未を以て、其早けれは月蝕を爲す、晩なれは彗星及ひ天夭と爲る、晏註に曰く、彗は以て舊を除き新を布く）初元（初年也、）慶曆（仁宗の年號）元祐（哲宗の年號）周（濂溪先生）程（明道、伊川）張（橫渠先生）朱（晦庵先生、）張（南軒先生、）呂（東萊先生）

◉〔講義〕（景定五年、七月、彗星長さ十數丈、芒角天を燭らす、四更より東に從て見る、日高くして方に斂る、月餘にして）（乃ち見えす、楊棟因て指して蚩尤旗と言ふ、此に因て論に遭て國を去る、八月元燕京を以て中都大興府と爲す、劉秉忠都を燕に定めんを請ふ、世祖之に從ふ、元至元と改元す、時に阿里不哥が兵）（屢く敗る、是に至て諸王王龍答失、罕速帶、音里吉合、皆憲宗の子なり、及ひ其謀臣不魯花、脫忽思等と元に來歸す、詔す諸王の皆太祖の裔なりと、並に釋して問はす、其謀臣不魯花のみ誅に伏す、元）（諸路の行中書省を立つ、冬十月、理宗崩す、位に在る四十一年、改元する者八つ、寶慶紹定は則ち彌遠十年の政なり、端平の初元には善類朝に滿つ、眞德秀魏了翁等あつて執政侍從の人たり、以て）（慶曆元祐に比す、嘉禧より以後、淳祐に至ては則ち嵩之數年の政あり、嵩之既に去る、淳祐より寶祐に至て正人は邪を指して邪と爲す、邪人は正を指して邪と爲す、互に消長を爲して而して狼）（狽たり、開慶丁大全の政に如くは莫し、景定改元は大全と吳潛と人品の同からすと雖も各ゝ竄を以て死す、似道獨り相たり、遂に國政を執る、末年に寖やゝ君臣相猜ふの跡あり、未た變更するに）（及はすして崩す、壽六十一、上臨御より以來、終始周茂叔程顥程頤、張橫渠、朱熹張南軒、呂東萊諸儒義理の學を崇奬す、故に廟を理宗と號す、太子立、是を度宗皇帝と爲す、理宗在位方に道學を崇尙）（するを以て事と爲す、虛名を務めて而して實政を蔑す、是の時に當て、監司守令と爲る者、豈に道學の流を學ふ無らん乎、之を要するに皆時に趣き名を好むの士、眞に敬に居り理を窮して以て）（人を濟ひ物を利するに心あるに非る者なり、）

度宗皇帝初名孟啓。福王與芮之子。理宗之猶子也。理宗子多而不育。鞠孟啓於宮中。改名孜。又改名禥。立爲皇子。封忠王。已而建儲。改名[illegible]。歲甲子卽位。時則蒙古部。國號大元。紀元至元之初也。賈似道專政。進平章軍國重事魏國公。立相以自副。○臨安府士人葉李蕭規等。上書詆似道專權害民誤國。似道怒。以他事罪竄遠州。○詔馬廷鸞留夢炎。兼侍讀。李伯玉陳宗禮范東叟。兼侍講。何基徐幾。兼崇政殿說書。○元以王磐爲翰林學士承旨。○乙丑。咸淳元年。元以安童爲右丞相。伯顏爲左丞相。以劉秉忠爲太保。參中書省事。○丙寅咸淳二年。呂文煥守襄陽。元人自開互市以來。築城置堡。江心起萬人臺。撒星橋。以遏南兵之援。時出師哨掠襄樊城外。兵威漸振。○似道建第西湖葛嶺。自娛。五日一乘湖船入朝。不赴堂

治事。吏抱文書就第呈署。他相書紙尾而已。內外諸司。彈劾薦辟擧刱。非關白不敢行。一時正人端士。斥罷殆盡。吏爭納賂。以求美職。圖爲帥閫監司郡守者。貢獻至不可勝計。趙溍輩爭獻寶玉。貪風大肆。兵喪于外。匿不以聞。民怨于下。誅責無稽。莫敢言者。○元立制國用使司。以阿合馬爲使。封世子南木合爲北平王。○賜日本國王書。○初給官吏俸及職田。○元封太子忽哥赤爲雲南王。○丁卯咸淳三年。元以史天澤爲左丞相。忽都荅兒耶律鑄降爲平章政事。伯顏降右丞。廉希憲降左丞。○戊辰。咸淳四年。襄陽受圍。文煥告急。遣高達范文虎赴援。道不通。二將亦不用命。

◉〔解釋〕理宗之猶子也（檀弓に兄弟の子は猶ほ子のごとし、）啓（音啓）何基（金華の人、北山と號す、文定と諡す、）徐幾（字は子輿、進齋と號す、建陽の人）西湖（杭州の西にあり、）彈劾（有罪を彈劾するなり、）薦辟（辟除薦擧して官と爲る、）擧刱（擧用及ひ名稱を刱除するなり、）

◉〔講義〕度宗皇帝初の名は孟啓、福王與芮の子、理宗の猶子なり、姪をいふ、理宗子多して而して育せず、孟啓を宮中に鞠ふ、名を孜と改む、又名を禥と改む、立て皇子と爲る、忠王に封せらる、已にして而して儲子と爲り、名を曆(セン)と改む、咸淳の甲子に位に即く、時に則ち蒙古部は國を大元と號す、至元紀元するの初めなり、賈似道政を專らにす、平章軍國重事魏國公に進む、相國を立て以て自ら副す、臨安府の士人葉李蕭規等上書して似道が擅を專らにし民を害し國を誤るを詆る、似道大に怒り他の事を以て罪を被らし遠州に竄貶す、馬廷鸞留夢炎に詔して侍讀を兼しむ、李伯玉陳宗禮范東叟侍講を兼ね、何基徐幾崇政殿の說書を兼しむ、元王盤を以て翰林學士承旨と爲す、咸淳元年元安童を以て右丞相と爲し、伯顏を左丞相と爲し、劉秉忠を以て太保と爲す、中書省事を參せしむ、安童は木華黎四世の孫なり、年方に十二、位百僚の上にあり、阿里不哥の黨千餘人之を法に置んと欲す、安童側らに侍して曰く、人各其主の爲めにす、陛下甫て大難を定む、而して私の恨を以て之を殺さは、何を以て未た降らさるを懷服せんや、世祖歎て曰く、爾年少し、何に從て老成の語を得たる、是に由て深く之を重んず、至元二年右相と爲る、是年の冬許衡を召むて至り省

に入て事を議せしむ、衛疾を辭す、安童即ち親ら之を其館に俟す、興に語る其久し、世祖嘗て衛に諭して曰く、安童尚ほ幼し、未た事を更す、善く之を導く、衛對て曰く、安童聰敏にして且つ執守するあり、告くるに古人の言ふ所を以するに、悉く能く領解す、臣敢て心を盡さずんはあらず、伯顏は蒙古八隣部の人、初め宗王旭烈兀に從ひ西域を開く、入て事を奏せしむ、世祖之を奇とし、曰く、諸侯王の臣に非るなり、其留て朕に容へ事を謀れと、廷臣に出つ、乃ち安童か女弟を以て之に妻はす、左丞に拜し、右丞に改む、劉秉忠字は仲晦、少ふして釋氏に從ふ、荊州に家す、世祖王たる時、寺主海雲に從て入覲す、應對旨に稱ふ、遂に留て左右に侍す、秉忠書讀まさるなし、尤も易及ひ邵氏經世書、天文地理律曆に深し、以て來に至て多く之に通す、嘗て上書數千言、皆開國の要務、世祖位に即く、多く之を施行す、凡そ征伐以て從行す、秉忠世祖の左右にあり藩服を改めず、翰林旨王鶚奏言す、秉忠帷幄の密謀に參す、社稷の大計を定む、聖明極を御す、萬物惟れ新たり、而るに秉忠獨り仍ほ梵服す、宜しく其衣冠を正し、崇ふに顯秩を以すべしと、世祖即日に光祿大夫に拜す、太保に位す、仍て詔して學士竇默か女を以て之に妻はす、咸淳二年呂文煥襄陽を守る、元人互市を開てより以來城を築き堅を置く、江心に萬人壘撤(サツ)壘橋を起して以て南兵の援を過(ト)む、時に師を出して襄陽の城外を喩擄す、兵威漸く振ふ、賈似道第を西湖の葛嶺に建て自ら樂娛す、五日一たび湖船に乘て入朝す、堂に赴き事を治せず、吏は文書を抱き似道か第に就き呈署す、大小の朝政一切に館客廖瑩中、堂吏翁應龍に決す、他の相は紙尾に書する而已、內外の諸司彈劾薦辟擧創、似道に關かり白すに非れは敢て行はす、一時の正人端士斥き罷られ殆んと盡く、吏爭て賂を納れ以て美職を求む、帥閫監司郡守たるを圖る者貢獻勝て計ふ可からさるに至る、趙溍か爭獻て寶玉を獻す、貪風大に肆なり、兵は外に喪ふれども匿して以聞せず、民は下に怨む、誅責無稽、敢て言ふ者なし、元制國用使司を立つ、阿合馬を以て使と爲す、世子南木合を封して北平王と爲す、元日本國王に書を賜ふ、元史に世祖至元三年八月、兵部侍郎黑的に命じて虎符を給す、國信使に充つ、書を持して日本に使す、書に曰く、大蒙古國皇帝書を日本國王に奉る、又曰く、冀くは今より以往問を通し好を結ふ、以て相親睦す、接するに建治中蒙古の使來る、鎌倉の樞臣平時宗其自ら尊大にして禮なきを怒り、執て而して之を斬る、元初て官吏に俸及び職田を給す、元太子忽哥赤を封して雲南王と爲す、咸淳三年元史天澤を以て左丞相と爲す、忽都荅兒耶律鑄を降して平章政事と爲す、伯顏は右丞に降る、廉希憲左丞に降る、宋の襄陽圍を受く、呂文煥急を告く、高達范文虎をして赴き援けしむ、道通せす、二將も亦た命を用ゐす、

○三學士人上書。乞調諸道兵。併力救襄。不報。○弓量推排田畝。○葉夢鼎辭位。不允徑去。○江萬里馬延鸞爲相。○元立御史臺。及諸道提刑按察司。行新製蒙古字。更號僧八合思馬爲帝師。築堡

鹿門山。立諸路蒙古字學。○庚午。咸淳六年。江萬里請援兵救襄。議不合。罷去。○上一日問似道。曰襄陽受圍三年。奈何。對曰。北兵已退。陛下得何人之言。上曰。適有女嬪言之。詰問。誣以佗事賜死。自是無敢以邊事言者。○似道權傾人主。諛者動以周公輔成王擬之。親王外戚。宦官近習。皆箝制不敢恣。當世望士。亦引用。登朝爲儀羽。而服心不在焉。在外監司郡守。亦參用廉介。非其人而得進者。各有蹊徑。最以吝賞誅貨。失將帥心。劉整降北。獻策取東南。謂緩取則經營自蜀而下。急則由襄淮直進。時諸將北降。知國虛實者相繼。似道方以粉飾太平爲事。畧不爲意。○元平章政事廉希憲罷。世祖嘗令受帝師戒。希憲對曰。臣已受孔子戒。世祖曰。汝孔子亦有戒耶。對曰。爲臣當忠。爲子當孝。是也。有方士請錬大丹。敕中書。給其所需。希憲奏曰。前世人主多爲方士誑惑。堯舜得壽。不假靈于大丹也。世祖善之。以許衡爲中書左丞。時阿合馬專權。無上蠹國害民。嘗欲以其子典兵柄。衡曰。國家事權。兵民財三者而已。父位尚書省。典民典財。而子又典兵。太重。世祖曰。卿慮阿合馬反耶。衡對曰。此反道也。古者姦邪未有不由此者。世祖以衡語語阿合馬。由是怨衡。○辛未。咸淳七年。元劉秉忠許衡進所定朝儀。○立司農司。以張文謙爲司農卿。○教水軍七萬。造戰艦五千。築環城以逼襄陽。○以許衡爲集賢大學士國子祭酒。

●〔解釋〕三學（文學、武學、宗學、武學は武藝を習ひ兵法を學ぶ、格に合ふ者は考撰の法あり、宗學は諸王の屬の尊き者は小學を其宮に立つ、其子孫皆學に入る、考試等第す、宋史選擧志に具さに諸の學校の事を載す）弓量推排田畝（田畝を推排して而して租税を增すなり、案ずるに此一節當に理宗の紀に在るべし、宋史宋元通鑑に並に弓量の二字なし、）更號僧八合思馬爲帝師。（案ずるに八合思八を八合思馬に作る、八馬の字異なりと雖も而して音相近し、拔都一に拔突に作るの類の如し、蓋し譯語に正音なき故なり、）築堡鹿門山（將に襄陽を取んとす、）登朝爲儀羽。而服心不在焉（儀羽二字易の其羽用て儀と爲す可きに本つく、服心は腹心の誤字なり）望士（名望ある者）監司（提州、安撫、轉運、提擧、宋の四監司なり、）吝賞誅貨（費用を打算するの類の如し、吝は鄙嗇（ヒシヨク）也、應に其功を賞すべくして、而慳吝して賞せざるを謂ふ、誅貨は財貨を誅求するを謂ふ）粉飾太平（言は天下大に亂る、而るを文飾して以て太平と爲す、女子の本と顔色なくして而して強て脂粉を以て之を飾るなり）

●〔講義〕、三學の士人上書して諸道の兵を調して力（ツト）めて併せて襄を救ふを乞ふ、報ぜず、弓量を以て田畝を推排す、葉夢鼎位を辭す、允されず、徑ちに去る、江萬里、馬廷鸞を相と爲す、元御史臺及び諸道の提刑按察司を立つ、新製蒙古の字を行ふ、僧八合思馬を更め號して帝の師と爲す、堡を鹿門山に築く、諸路蒙古の字學を立つ、江萬里援兵を請て襄を救ふ、議合はずして、罷め去る、上一日似道に問て曰く、襄陽圍を受と三年、奈何ん對て曰く、北兵已に退く、陛下何人の言を得る、上曰く、適女嬪あつて之を言ふと、詰問す、誣るに他事を以て死を賜ふ、是より敢て邊事を以て言ふ者なし、賈似道權人主を傾く、諛へる者動すれば周公の成王を輔くるを以て之を擬す、親王外戚宦官近習、皆箝制せられて敢て恣にせず、當世望士と名望あるを言ふ、亦た引用して朝に登て儀表羽翼と爲る、而して腹心なる者は在らず、又外に在る監司郡守も亦た廉介を參用す、其人に非して而して進むを得る者は各蹊徑あり、最も吝賞誅貨を以て將帥の心を失す、劉整北に降して策を獻じて東南を取るを謂く、緩く取らば則ち經營して蜀より下らん、急ならば則ち淮に由り直ちに進んと、時に諸將北に降る、國の虛實を知る者相繼ぐ、似道方に太平を粉飾するを以て事と爲す、畧意と爲さず、元の平章政事廉希憲罷む、世祖嘗て帝師をして戒を授けしむ、希憲對て曰く、臣巳に孔子の戒を受く、世祖の曰く、汝が孔子も亦た戒あるか、對て曰く、臣と爲ては當に忠なるべく、子と爲ば當に孝なるべし、是なり、方術の士あり大丹を錬んと請ふ、帝乃ち中書に敕して其需る所を給す、希憲奏して曰く、前世の人主多く方術士の爲めに誑惑せらる、堯舜の壽を得るは靈を大丹に假らざるなり、世祖之を善とす、許衡を以て中書左丞と爲す、前世の人主は秦の始皇帝漢の武帝を指す、時に阿合馬權を專にす、

（元の世祖至元七年、制國用使の司を罷て、尚書省を立つ、阿合馬中書平章政事と爲る、兼て尚書省の事を領す、因て權を擅らにす、上を無し、國を蠹じ民を害す、嘗て其子を以て兵柄を典らしめんと欲す、是れ阿合馬か其子の忽辛を以て同知樞密院の事を爲んと請ふ、許衡か曰く、國家の事權は兵民財三者而已、父尚書省に位し、民を典り財を典る、而子又兵を典ること太た重し、世祖の曰く、卿阿合馬か反を以て虞るや、衡對て曰く、此れ反道なり、古より姦邪未だ此に由らざる者はあらず、世祖衡か言を以て阿合馬に告ぐ、阿合馬是に由て衡を怨む、元の劉秉忠許衡定る所朝儀を進む、宋司農司を立つ、張文謙を以て司農卿と爲す、水軍七萬を教へ、戰艦五千を造る、環城を築て以て襄陽に逼る、許衡を以て集賢大學士國子祭酒と爲す、）〇十月。建國號大元。詔曰。誕膺景命。奄四海以宅尊。必有美名。紹百王而紀統。肇從隆古。匪獨我家。且唐之爲言蕩也。堯以之而著稱。虞之爲言樂也。舜因之而作號。馴致禹興而湯造。互名夏大以殷中。世降以還。事殊非古。雖乘時而有國。不以義而制稱。爲秦爲漢者。蓋從初起之地名。曰隋曰唐者。又即始封之爵邑。是皆徇百姓見聞之狃習。要一時經制之權宜。槩以至公。得無少貶。我太祖聖武皇帝。握乾符而起朔土。以神武而膺帝圖。四振大聲。大恢土宇。輿圖之廣。歷古所無。頃者耆宿詣廷。奏章伸請。謂既成於大業。宜早定於鴻名。在古制以當然。於朕心乎何有。可建國號曰大元。蓋取易經乾元之義。茲大治流形於庶品。孰名資始之功。予一人底寧。爲萬邦尤切體仁之要。事從因革。道協天人。於戲稱義而名。固匪爲之溢美。孚休惟永。尙不負於投艱。嘉與敷天。共隆大號。咨爾有衆。體予至懷。從太保劉秉忠之議也。〇壬申。咸淳八年。葉夢鼎再相。以與似道意不合去。〇襄陽陷。先是理宗初年。襄陽以制臣失撫御。致王旻作亂而陷。謝方叔作相。喩李曾伯遣將取之。北方亦不暫爭。及劉整策行。重兵圍襄陽。呂文煥守城六年。扞禦備至。而似道不肯調援。雖糧食未乏。衣裝薪芻。無所措辦。至撤廬舍爲薪。緝關楮爲衣。援兵不至。遂以城降。爲元人之用。●〔解釋〕馴致禹興而湯造。（綱目集覽に馴致は猶ほ遂に致すと言ふかごとし、造者書の湯誥に凡そ我か造れる邦と）蓋取易經乾元之義。（易の乾象曰く、大なる哉乾元、萬物資て始む、乃ち天を統ぶ、雲行き雨施して品物形を流く、終始を明にす、六位時に成る、時に六龍に乘じて以て天を御す、乾道變化各性命を正ふし、大和を保合す、乃ち利貞、庶物を首として出つ、萬國咸く寧し）尙不負於投艱。（周書大誥予れ天役を造し、大を遺り艱を朕か身に投す、）●〔講義〕（十月國を建て大元と號す、詔に曰く、誕に景命に膺（アダ）り、四海を奄て以て尊に宅る、必ず美名あり、百王に紹て而して統を紀す、肇めて隆古に從ふ、獨り我家のみに非ず、且つ唐の言たる蕩なり、堯之を以て而して著稱す、虞の言たるは樂也、舜之に因て而して號と作し、禹興て而して湯造るに馴致す、夏大にして以て殷は中を互名す、世降より以還事殊に古に非ず、時に乘して而して國を有つと雖ども、義を以て而して稱を制せず、秦と爲し漢と爲す者は蓋し初めて起るの地名に從ふ、隋と曰ひ唐と曰ふ者又始封の爵邑に卽く、是皆百姓見聞の狃習に徇ふ、一時經制の權宜を要す、槩するに至公を以てせば少しく貶するなきを得んや、我が太祖聖武帝乾符を握て而して朔土より起る、神武を以て而して帝圖に膺る、四に大を振ふ、大に土宇を恢にす、輿圖の廣きこと歷古もなき所なり、頃者耆宿廷に詣り奏章して伸し請て謂く既に大業を成す宜しく早く鴻名を定むべし、古制に在て以て當れり、然も朕か心に於ては何か有らん、國號を建て大元と曰ふ可し、蓋し易經乾元の義に取る、茲に大に治て形を庶品に流く、孰れか資て始るの功を名けん、予一人萬邦を寧んし爲むるを底す尤も仁に躰するの要を切にす、事因革に從ふ、道天人に協ふ、於戲（アヽ）義に稱じて名く、固より之をするの溢美なるに匪ず、孚に休して惟れ永く、尙ほ艱を投するに背かず、數天と共に大號を隆にするを嘉みす、咨（アヽ）汝ち有衆予が至懷を體せよ、大元の二字は太保劉秉忠の議に從ふなり、咸淳八年葉夢鼎再たび相たり、賈似道と意合はざるを以て位を去る、襄陽陷落す、是より先き理宗の初年襄陽制臣撫御を失するを以て王旻亂を作して而して落城を致す、謝方叔相と爲る、李曾伯に喩して將を遣して襄陽を取らしむ、大元も亦た甚はた爭はず、劉整が策行はるに及んで重兵襄陽を圍む、呂文煥城を守る六年、扞禦すること備さに至る、而して似道肯て援兵を調遣せず、糧食未た乏からず

（と雖ども、衣裝薪芻を措置辨足する所なく、故に屋舍を撤破し薪と爲し、關楮とは關會の紙なり、楮は木の名にて其皮紙と爲す可し、今關會の紙やら紙幣やらを緝めて衣を爲すに至ると雖ども、援兵がこないで、遂に城を以て降參をなす、元人の用と爲る、南宋紀に時に襄陽久しく困む、孤城にて援兵が絶てなく、故に兵士が南の方宋を望み、慟哭して而して後ち降參すと、急を朝に告ぐ、似道列閫を督して赴き援けず、文煥曰く、樊城既に落城す、元の阿朮兵を益して襄陽を攻む、呂文煥之を支る能はず、會ゝ元主詔諭を文煥に降して曰く、爾等孤城を拒ぎ守る今に五年、爾主に宜力す、其れ宜なり、然れども勢ひ窮し援け絶つ、其れ數萬の生靈を如何、文煥乃ち降參す、前きに重兵襄陽を圍むと解釋を失す、後ち元史を讀むで大に曉る所あり、故に後れたるも茲に解釋を施す、識者余が疎漏を咎む可からず、重兵は猶ほ强兵と言ふがごとし、元の至元四年、劉整世祖に言て曰く、宋を攻るの方畧宜しく先つ襄陽に從事すべし、襄陽は吾が故物なり、棄て守らざるに由て、宋をして竊に築て强藩と爲るを得せしむ、若し襄陽を復し、漢に浮て江に入れば、則ち宋を平く可しと、世祖之に從ふ、）

○賈似道累章出督。而陰諷朝廷留之。卒不行。○元併尚書省。封皇子忙哥刺爲安西王。○直學士院文天祥致仕。初賈似道稱疾乞致仕。以爲要君。似道諷張立志劾罷之。天祥遂引錢若水例。乞致仕。時年三十七矣。○癸酉。咸淳九年。平地產白毛。如銀線茸。臨安尤多。元侵樊城。守將張漢英。及都統制范天順。牛富。死之。○元國子祭酒許衡乞罷。許之。衡居家勤儉。强於自治。公愛兼盡。不嚴而整。閨門之內。若朝廷然。夫婦相待如賓。凡喪葬一遵古制。不用佛老。懷孟之間化之。旁舍有僧德公者。年百餘歲。嘗謂其徒曰。老僧苦行百年。亦不能作佛。徒爲不孝之人。羞見祖宗于地下。但願小僧輩。還俗以壽汝祖宗之嗣。自是不復度弟子。蓋化之也。○甲戌。咸淳十年。賈似道丁母憂。隨起復。○陳宜中僉書樞密院。○七月。上崩。在位十年。改元咸淳。壽三十五。

似道立皇子㬎。年四歲。是爲孝恭懿聖皇帝。◉〔解釋〕出督（累りに章疏を上て、出て軍を督せんと請ふなり）元併尚書省。（尚書省を罷むるなり）賈似道稱疾乞致仕。以爲要君（案ずるに爲字當に去の字誤りなるべし、要致仕を乞て去るを以て君を要す、）似道諷張立志劾罷之（立志當に志立に作るべし、此の句の下文致仕を乞ふの下にあるべし、傳寫の錯り置くなり）天祥遂引錢若水例乞致仕。（錢若水當に楊大年に作るべし）◉〔講義〕（賈似道章を累ねて出て、督せんと請ひ而して陰かに朝廷に諷して之を留めしむ、卒に行かず、元尚書省を併せて中書省に入る、皇子忙哥刺を以て安西王と爲す、直學士院文天祥致仕す、初め賈似道屢疾と稱して致仕を乞ふ、乃ち位を去るを以て要すと、似道又張志立に諷して劾して之を罷む、天祥遂に楊大年が例を引て致仕を乞ふ、時に年三十七ならん、咸淳九年平地に白毛を產す、銀線茸の如し、臨安尤も多し、元樊城を侵伐す、守將張漢英及ヒ都統制范天順牛富討死す、元の國子祭酒許衡位を罷めんと乞ふ、之を許す、許衡家に居て勤儉なり、自ら家を治むるに强つとむ、公愛兼ね盡す、嚴ならざれども而して整ふ、閨門の內朝廷の若く然り、夫婦相待する賓客の如し、凡そ喪葬一に古制に遵ふ、佛道老子法を用ひず、懷孟の間之に化す、旁舍に僧德公と云ふものあり、年百餘歲、嘗て其徒に謂て曰く、老僧苦行百年、亦た佛と作る能はず、徒に不孝の人となれり、祖宗に地下に見るを羞つ、但願くは小僧輩還俗して、以て汝が祖宗の嗣を蕃せよと、是より復た弟子を濟渡せず、蓋し之に化すればなり、咸淳十年、賈似道母の喪に當る、隨て起て喪を勉めず、陳宜中僉書樞密院たり、七月帝崩す、在位十年、咸淳と改元す、壽三十五、似道皇子㬎を立つ、年四歲なり、是を孝恭懿聖皇帝と爲す）

孝恭懿聖皇帝名㬎。皇后全氏出也。太皇太后謝氏臨朝稱詔。改元德祐。○封兄建國公昰爲吉王。弟永國公昺爲信王。○元太保劉秉忠卒。秉忠以天下爲己任。知無不言。言無不聽。其薦人才各稱器。使城開平城燕都。皆秉忠相其地。至是無疾端坐而卒。世祖聞驚悼。謂群臣曰。秉忠事朕三十餘年。小心愼密。其陰陽術數之精。唯朕知之。元命中書平章史天澤。中書左丞相伯顏。帥諸軍南侵。陛辭。世祖諭之曰。古之善取江南者。唯曹彬

一人。汝能不殺。是吾曹彬也。天澤有疾而還。尋卒。先是世祖遣醫馳視。天澤附奏曰。臣大限有終。死不足惜。第願天兵渡江。以殺掠爲戒。言訖而卒。天澤忠亮有大節。出入將相近五十年。柱石四朝。師表百辟。可謂社稷之臣。其視富貴權勢。歛迹退避。若將浼之者。故能善始令終。爲開國元臣。○元伯顏丞相。大會兵于襄樊。九月。以降人劉整領騎兵出淮泗。呂文煥領舟師出襄陽。爭先向導。水陸並進。攻沙市新城。都統邊居誼。帥所部三千人力戰死之。策應使夏貴力戰。元兵出其不意。兵敗。沿西南岸縱火歸廬州。宣撫朱禩孫提重兵不戰歸江陵。○鄂州降。○天目山崩。○詔天下勤王。○乙亥。德祐元年。元伯顏留阿里海牙。以兵四萬守鄂。而與阿朮率大軍渡江。順流東下。時沿江諸將。多呂氏部曲。望風降附。◉〔解釋〕昰（音昺）昺（音丙）至是（至元十一年、秋八月也、註に八年と云ふは誤る）沙市新城（沙市鎭は江陵城外十里にあり）宣撫朱禩孫（禩音祀、案するに禩孫當に禩孫に作るべし、禩祀に同し）

◉〔講義〕孝恭懿聖皇帝は名は顯、皇后全氏の出なり、太皇太后謝氏朝廷へ出て詔と稱す、德祐と改元す、皇の兄建國公昰を吉王と爲す、弟永國公禩を信王と爲す、元の太保劉秉忠卒す、秉忠天下を以て己か任と爲す、知たとは言はさるなく、又言て聽かれさるなし、其人才を薦むること各器量に稱ふ、開平に城き、燕都に城かしむ、皆秉忠其地を相る、是に至ては至元十一年、秋八月なり、疾ひなり端しく坐して而して卒す、世祖聞て驚き悼み、群臣に謂て曰く、秉忠朕に事ふる三十餘年、小心翼翼として愼密なり、其陰陽術數の精き唯た朕のみ之を知ると、大傅を贈り、趙國公に封す、文貞と諡す、秉忠幼少より學を好む、老に至て衰へず、位大臣を極む、而して齋居蔬食し、平昔に異なるなく、自ら藏春散人と號す、詩文十卷あり、子なく、弟秉恕か子蘭璋を以て後と爲す、元中書平章史天澤中書左丞相伯顏に命して、諸軍を帥て南侵す、乃ち陛下に至り暇乞の辭を述ぶ、世祖之に諭して曰く、古の善く江南を取る者は唯た曹彬一人なり、汝ち能く衆人を殺さざれは、則ち是れ吾か曹彬なり、天澤疾ひあつて還る、尋て卒す、是より先き世祖醫者を遣はして馳て天澤か疾を視せしむ、天澤醫に附き奏して曰く、臣大限終ふあらん、死は惜むに足らす、只た願くは天兵江を渡らは殺掠を以て戒めと爲さんと、言訖て而して卒す、天澤忠亮にして大節あり、將を出て相に入り、又相を出て將に入る五十年に近し、四朝に柱石として百辟に師表たり、社稷の臣と謂ふ可し、其富貴權勢を視ては、迹を斂めて退き避く、將に浼れんとする者のことし、故に能く始めを善くし終りを令くす、開國の元臣たり、元の伯顏丞相大に兵を襄、樊に會す、九月宋の降人劉整を以て騎兵を領し、淮泗より出つ、呂文煥舟師を領し襄陽より出つ、先きを爭ふて向導す、水陸より並ひ進む、沙市鎭の新城を攻む、都統邊居誼所部三千人を帥て力戰して之に死す、策應使夏貴力戰す、元の兵其の不意に出つ、兵敗る、西南の岸に沿ふ、乃ち火を放つて廬州に還る、宣撫朱禩孫重兵を提け戰はずして江陵に歸る、鄂州元に降る、臨安主山天目山崩る、宋天下に詔して王に勤めしむ、德祐元年元の伯顏阿里海牙を留て兵四萬を以て鄂州を守る、而して阿朮と大軍を率て江を渡る、流に順て東に下る、時に沿江の諸將呂氏の部曲多し、風を望て降り附す、

○江州降。運使錢眞孫自縊。○劉整自愧出淮無功。憤死。無爲軍城下。○似道都督軍馬。遷延不出。聞兵已下建康。始率諸軍發行。在迂道而行。數日始達蕪湖。將趨安慶府。牽制下流之師。未至三日。安慶帥范文虎乃呂氏婿。已降。將士無復固志。似道許竭轉官資。諸軍詬曰。要官資做甚。己未庚申官資何在。似道不能答。鳴鑼一聲。退兵于珠金砂。十三萬衆一時潰散。似道奔入揚州。○江西提刑文天祥。募兵勤王。天祥吉州廬陵人也。丙辰魁進士第。○殿帥韓震。謀劫遷都。陳宜中以計誅之。○池州破。通守趙昂發將死。與其妻訣。妻曰。卿能爲忠臣。妾顧不能爲忠臣妻耶。昂發喜。具衣冠與俱縊。明日伯顏入城。見而憐之。具衣棺葬焉。○建康破。趙淮死之。○京師戒嚴。朝臣接踵宵遁。○王爚陳宜中等。劾似道不忠

不孝之罪。宜中本受賈恩。至是亟劾賈以自解。○似道赴貶。鄭虎臣以父仇監押至漳州。即廁上拉其胸殺之。○張世傑以兵入衛。元兵在境。陳宜中等惟攻擊賈黨。略無備禦之策。司馬夢求監江陵沙市鎭。力戰死。徵諸帥入衛。夏貴昝萬壽黃萬石等不至。○六月庚申朔日蝕。晦冥。雞棲于塒。咫尺不辨人物。自巳至午。明始復。○留夢炎相。○文天祥將民兵峒丁二萬餘人入衛。與夢炎意不相樂。以尙書除江浙制置。守吳門。

◉〔解釋〕無爲軍（淮西に屬す、）蕪湖（縣は大平に屬す、）安慶府（淮西に屬す、即ち舒州、）未至三日（似道至る三日の前）官資（官品を陸轉す、）己未庚申（蒙哥侵伐の時も亦た官資を許す、竟に其實なし、）池州（江東に屬す、）趙淮（趙葵の子、）戒嚴（防戒嚴肅、）父仇（似道虎臣が父と仇あり、）拉（落合の切、折也、摧く也、）夢求（溫公五の孫、脊音蕬の上聲）蝕（音食、日月虧を蝕と曰ふ、）塒（音時、雞の宿所なり、）峒（音洞、溪峒、）吳門（郡の名、即ち平江府、尙書の官を以て而して除して江浙の制置を為す、吳門を守るを掌どる）

◉〔講義〕江州が元に降参す、運使錢眞孫自ら縊る、劉整自ら淮を出てゝ功なきを愧ぢて無爲軍の城下に憤死す、前きに元に降る所のものなり、賈似道軍馬を都督して遷延（グズ〳〵）して出てず、元の兵已に建康に下ると聞て始て諸軍を率ひて行在を發す、道を態々と迂曲にして而して行く、數日にして始て蕪湖に達す、將に安慶府に趨り下流の師を率（ヒキ）つけ制せんと欲す、未だ至らざる三日安慶の帥范文虎は乃ち呂氏の姻なり、已に元に降る、將士も固き志なし、似道官品を陸轉するを許す、諸軍に（シッツ）て曰く、官資を要して何か做ん、己未庚申の官資何にか在る、蒙哥侵伐の時官資を許す、竟に其實なし、蓋し兵士大に似道を怨む、故に之を以て罵しるなり、似道答ふる能はず、金を鳴す、一壁兵は鼓を以て進み、金を以て退く、己未は理宗の開慶元年、庚申は景定元年なり、乃ち兵を殊金城に退く、十三萬の衆一時に潰ふれ散す、似道弃て揚州に入る、江西の提刑文天祥兵を募て王に勤とむ、天祥は吉州廬陵の人なり、丙辰の進士第に魁たり、初め勤王の詔贛に至る、天祥之を捧して涕泣す、乃ち郡中の豪傑を發し、并に溪峒の山蠻に結び、衆萬人あり、遂に入衛す、其友之を止めて曰く、今敵兵三道より破行す、郊畿を破り、內地に逼る、君烏合萬餘を以て之に赴く、何ぞ群羊を驅て猛虎を搏つに異ならん、天祥曰く、國家臣庶を養育す三百餘年、一旦急あつて天下の兵を徵す、一人一騎赴く者なし、吾れ深く之を恨む、故に自ら量らず、身を以て國に徇んと欲す、天下の忠臣義士將に風を聞て而して起る者あらんとす、義勝つ者は謀立つ、人衆き者は功濟す、此の如きは則社稷猶ほ保つ可きなり、又曰く、人の樂を樂む者は人の憂を憂ふ、人の食を食む者は人の事に死す、聞く者感動す、殿帥韓震帝を劫して都を遷し替へんと謀る、陳宜中謀を以て之を誅す、池州破る、通守趙昻發將に死なんとす、其妻と訣る、妻の曰く、卿能く忠臣と爲り、妾反て忠臣の妻と爲る能はざらん耶と、昻發喜て衣冠を具し、與に俱に縊る、明日伯顏城に入る、見て而して之を憐れみ、衣棺を具て葬る、建康破る、趙淮討死す、趙葵の子なり、京師戒嚴す、朝臣踵を接して宵遁る、王爚陳宜中等似道不忠不孝の罪を劾す、宜中本と賈似道恩を受けて、是に至て亟かに賈を劾して以て自ら解く、似道貶に赴く、鄭虎臣父の仇を以て監押して漳州に至る、廁上に卽て其胸を摧て之を殺す、初め會稽縣の尉鄭虎臣其父嘗て似道に配せらるゝを以て之を報せんと欲す、因て請て監押の官と爲る、張世傑兵以て入て衛る、元の兵境界に在り、陳宜中等惟だ賈が黨を攻擊す、略備禦の策略なし、司馬夢求江陵の沙市鎭を監す、力戰して死す、諸師を徵して入て衛らしむ、夏貴昝萬壽黃萬石至らず、六月朔日食す、晦冥なり、雞塒に栖む、咫尺も人物を辨せず、巳より午に至る、明始て復す、留夢炎相たり、文天祥民兵峒丁二萬餘人に將として入て衛る、夢炎と意相樂まず、尙書を以て江浙の制置に除す、吳門を守る、

○州郡連降。元兵距臨安百里。獨松關告急。時張世傑軍五萬。諸路勤王兵四十餘萬。天祥與世傑議。兩軍堅守閩廣。全城王師血戰。萬一得捷。猶可爲也。世傑大喜。議出師。宜中以王師務持重。降詔沮之。遣使乞和。○詔天祥等罷兵。○潭州陷。時一軍自湖南圍潭州。守臣李芾戰守屢捷。經八九月城將陷。闔門死之。○丙子。德祐二年正月。秀王與睪。奉皇兄益王昰。皇弟廣王昺等。航海。○世傑去朝。○元兵駐高亭山。去都城三十里。○宜中夜遁。○文天祥右丞相。辭不拜。○賈餘慶吳堅相。○天祥出使軍前。辭氣慷慨。議論不屈。伯顏留之。○元兵入臨安。賈餘慶等。奉三宮以降。手詔諭諸路內附。○伯顏遣宰執先赴大都。天祥亦登舟。北行。

至鎭江。得間逸去。○三宮北遷。宮室駙馬宮人內侍大學等數千人。皆在遣中。過眞州。守苗再成奪駕。幾遂不克。○五月宋帝至上都。降封瀛國公。帝在位二年。改元者一。曰德祐。○益王廣王由海道至溫州。蘇劉義陸秀夫來會。陳宜中張世傑。海舟亦至福州。宣謝太后手詔。以二王爲天下都副元帥。召諸路忠義。五月朔。陳宜中陸秀夫張世傑等。共立益王昰爲帝。即位于福州。是爲端宗皇帝。

◉〔解釋〕獨松關（吳江縣に在り）宜中以王師務持重降詔沮之（宜中以爲らく王の師務めて宜しく持重なるべし、太后に白して、詔を降して之を沮むる）航海（海に浮て難を避く、）世傑去朝（世傑三宮をして海に航して而して己れ衆を帥て城に背て一戰せんと請ふ、陳宜中許さずして固く降事を議す、是に於て世傑部兵を帥て臨安を去り、海に航して以て興復を圖る）手詔諭諸路內附（宋史に伯顏程鵬飛をして太皇太后ノ手詔を取て、天下の諸路に諭して元に降附せしむ、曾先之は元人なり、故に降附を內附に作る、）三宮（理宗の后謝氏、度宗の后全氏と少帝となり）大都（至元九年、中都を改めて大都と曰ふ）逸去（間隙を得て而して逃逸す、）駙馬（天子の壻を駙馬と曰ふ、都尉なり、漢の武帝置て駙馬を掌らしむ、魏晉より宋に至るまて公主に尙する者は例して駙馬都尉に拜す、故に天子の壻を稱して駙馬と曰ふなり、）苗再成（守臣、苗は姓、再成は名）上都（燕京の北は百里にあり、即ち開平府、中統五年號を加て上都と曰ふなり、）溫州（浙東に屬す、）元帥（廣王は都元帥、益王は副元帥なり）

◉〔講義〕時に宋の州郡運りに降る、元兵臨安を去る百里、獨松關急を告く、時に張世傑か軍五萬、諸路王を勸むる兵四十餘萬、天祥世傑と議す、兩軍堅く閩廣を守る、全城の全師血戰し、萬一捷を得は、獨を爲す可きなり、世傑大に喜て議して師を出す、宜中王の師を以て務めて重きを持す、詔を降して之を沮む、使を遣はして和を乞はしむ、德祐元年十二月工部侍郞柳岳を遣はし元軍に如き平を請ふ、伯顏許さず、曰く汝か國我か行人を執て戰す、汝に師を興す、錢氏土を納れ李氏出て降す、皆汝か國の法なり、汝か國天下を小兒に得て亦を小兒に失ふ、其道此の如し、何を何そ多言せん、天祥に詔して兵を罷む、潭州落城す、時に一軍湖南より潭州を圍む、守臣李芾戰ひ守て屢捷つ、八十月を經て城將に陷らんとす、闔門之死す、李芾背堂と號す、潭州を守る、力を竭して捍禦す、凡ろ八九月、出て戰て輒勝つ、而して元の生兵日に增す、芾支る能はず、正月城破る、芾命して薪を樓下に積む、家人を攜け、樓に登り大に宴す、金銀を兩畔に積み、酒半酣にして劉子に金銀を將ち去しめ、卻て刀を取り來らしめ、芾頭より人を殺し尾に到て我を殺さしむ、闔門皆死す、劉子遂に四面に火を放ち、自ら其腹を剖いて而して死す、劉子名は沈惠、亦た烈大夫者と謂ふ可し、德祐二年正月秀王與擧兄益王昰、皇弟廣王昺等を率して海に航す、世傑朝を去る、元の兵高亭山に駐る、都城を去る三十里、陳宜中夜遁る、文天祥を除して右相と爲す、而して辭して就かず、賈餘慶吳堅相たり、天祥出て、軍前に使す、辭氣慷慨議論屈せず、伯顏之を留む、元兵臨安に入る、賈餘慶等三宮を奉して以て降る、手詔して諸路に諭して內附せしむ、伯顏宰執を遣はし、先つ大都に趣かしむ、天祥も亦た舟に登る、北行して鎭江に至る、間隙を得て而して逃逸す、都城の軍器を收め、又傳國の璽を收め、三宮北に遷る、宮室駙馬宮人は內侍大學等數千人皆遣中にあり、眞州を過く、守臣苗再成駕を奪はんとす、幾んと遂に克はず、五月宋帝上都に至る、降て瀛國公に封す、帝在位二年、改元する者一つ、德祐と曰ふ、益王廣王海道より溫州に至る、蘇劉義陸秀夫來り會す、陳宜中張世傑海舟を以て亦た福州に至る、謝太后の手詔を宣し、二王を以て天下の都副元帥と爲す、諸路の忠義を召す、五月朔陳宜中陸秀夫張世傑等共に益王昰を立て、帝と爲す、位に福州に即く、是を端宗皇帝と爲す、

端宗皇帝名昰。孝恭懿聖皇帝兄也。即位改元景炎。遙上帝尊號爲孝恭懿聖皇帝。太皇太后爲壽和聖福至仁太皇太后。皇太后爲仁安皇太后。尊度宗淑妃楊氏爲皇太后。同聽政。○封廣王昺爲衞王。陳宜中左丞相。張世傑少保。○文天祥至。除右丞相。以與宜中世傑異意。不肯拜。○九月。天祥開督南劒州。募兵得數千。遂復邵武軍。冬十月。天祥師次于汀州。興化軍通判張日中等來會。時贛寇猖獗。血江閩廣之路。日中等聞天祥開督勤王。遂各起兵來應。天祥遣趙時賞張日中趙孟濚。將一軍趨贛。以取寧都。遣吳浚將一軍取雩都。劉洙蕭明哲陳子敬皆自江西起兵來會。○鄒渢與元人戰于寧都。敗績。武崗教授羅開禮。起兵復永豐縣。亦死。天

祥爲製服哭焉。○十一月。元阿剌罕董文炳入建寧府。遂侵福州。宜中世傑奉帝及衞王楊太后等航海。由潮州至廣州。趨富陽遷謝女峽。○丁丑。景炎二年。阿剌罕入汀州。文天祥奔漳州。謀入衞。道阻不通。往來江廣間。戰有勝負。○吳浚降于元。因趨漳說天祥降。天祥責以大義誅之。○三月。文天祥復梅州。○四月。天祥復興國縣。○五月。張世傑復潮州。○天祥自梅州出江西。遂復會昌縣。與趙時賞張日中之兵皆會之。○元中書政事廉希憲卒。希憲在江陵。遠近向化。及有疾召還。民皆垂涕擁送。建祠繪像以祠之。卒。世祖歎曰。無復有決大事如廉希憲者矣。伯顏亦曰。廉公宰相中眞宰相。男子中眞男子。世以爲名言。○六月。天祥敗元人于雩都。遂次于興國縣。秋七月。使張日中趙時賞等帥師復吉贛諸縣。遂圍贛州。○張世傑回師。由潮州圍泉州不克。○帝舟遷于潮州之淺灣。

◉〔解釋〕時贛寇猖獗（猖獗は其威勢兇惡なるを謂ふ）張日中（建昌軍南城の人なり、横渠十三世の孫なり、）

◉〔講義〕端宗皇帝名は昰、孝恭懿聖皇帝の兄なり、位に即て景炎と改元す、遙かに帝に尊號を上て孝恭懿聖皇帝と爲す、太皇太后を壽和聖福至仁太皇太后と爲す、皇太后を仁安皇太后と爲す、度宗の淑妃楊氏を尊て皇太后と爲し、同じく政を聽かしむ、是時孝恭以下大元に在り、故に遙かにと曰ふ、廣王昺を封して衞王と爲し、陳宜中は左丞相と爲る、張世傑は少保と爲る、文天祥至る、右丞相に除せらる、宜中世傑と意を異にするを以て肯て拜せず、九月文天祥南劒州を開督して兵を募て數千を得たり、遂に邵武軍を復す、冬十月天祥師を帥ひて汀州に次まる、興化軍の通判張日中等來り會す、時に贛の寇其勢兇惡なり、むやみに人を殺して江閩廣の路を血にす、日中等天祥が開督して王に勤むと聞て遂に各兵を起して來り臨す、天祥趙時賞張日中趙孟溯を遣はし、一軍を帥て贛に趨らしむ、以て寧都を取る、吳浚を遣はして一軍を帥ゐて雩都を取る、劉洙蕭明哲陳子敬皆江西より兵を起して來り會す、鄒渢元人と寧都に戰て敗績す、武崗の教授羅開礎兵を起して永豐縣を復す、亦た討死す、天祥爲めに服を製して哭泣す、十一月元の阿剌罕董文炳建寧府に入る、遂に福州を侵す、宜中世傑帝及び衞王楊太后を奉じて海に航す、潮州より廣州に至る、富陽に趨き謝女峽に還る、景炎二年阿剌罕汀州に入る、文天祥漳州に奔る、入て衞ることを謀れども、道阻つて通せず、江廣の間に往來して戰て、勝敗あり、吳浚元に降參す、因て漳に趨て天祥に說て降參せしめんとし、天祥責むるに大義を以て之を誅す、三月文天祥梅州を取り還す、四月天祥興國縣を取り還す、五月張世傑潮州を取り還す、天祥梅州より江西に出て遂に會昌縣を取り返す、趙時賞張日中の兵と皆會合す、元の中書政事廉希憲卒す、希憲江陵に在り、遠き者も近き人も仁化に向ふ、疾ひあつて召し還すに及て民皆涕を垂れて擁し送る、祠を建て像を繪て以て之を祠る、卒する時世祖歎して曰く、復た大事を決する廉希憲が如き者あることなしと、伯顏も亦曰く、廉公は宰相中の眞宰相、男子中の眞男子と、世以て名言と爲す、六月天祥元人を雩都に敗る、遂に興國縣に次（トヽ）まる、秋七月張日中趙時賞等を使はす、師を帥て吉贛の諸縣を取り還す、遂に贛州を圍む、張世傑師を回す、潮州に出て泉州を圍む、克たず、帝の舟潮州の淺灣に遷る、

○元李恒遣兵援贛。而自將襲天祥于興國。天祥不意恒猝至。乃引兵走。即鄒渢于永豐。渢兵先潰。恒躡追天祥。天祥至方石嶺。恒及之。鞏信拒戰。箭被躰而死。天祥至空阬。恒又及之。張日中奮力戰。元兵少却。恒麾鐵騎橫擊之。日中身被十餘創。猶手刃十餘騎而死。兵盡潰。天祥妻歐陽氏。男佛生環生。及二女皆見執。趙時賞坐肩輿後。元人問爲誰。時賞曰。我姓文。衆以爲天祥。禽之。天祥由是得挺身。與其長子道生。及杜滸鄒渢。乘騎逸去。遂奔循州。散兵頗集。乃屯于南嶺。幕僚客將皆被執。時賞至隆興。奮罵不屈。臨刑劉沐頗自辨。時賞叱曰。死耳。何必然。於是將佐幕屬被執者皆死。而天祥妻子家屬。送于燕。二子死于道。○廣州陷。○十一月。元劉深以舟師襲淺灣。張世傑

戰不利。奉帝舟走秀山。陳宜中之占城求兵。遂不復還。十二月。帝再遷于井隩。颶風作。帝有疾。元劉深復以舟師來襲井隩。執俞如珪。帝舟遷于謝女峽。○戊寅景炎三年。張世傑遣師討雷山。不克。○三月。文天祥會兵次于麗江浦。○元以張弘範爲都元帥。李恒副之。帥師入閩廣。○帝舟遷于硐州。夏四月。帝崩于硐州。陸秀夫立衛王爲帝。是爲帝昺。◎［解釋］隩（俗に澳或は嶼に作る、錨韻貫珠集に曰く、嶼は島告の切陝さし、說文に云ふ、水の隈崖なり、又俗は奥に作る）同　颶風（五雜俎に曰く、海風之を颶風と謂ふ、其の四方の風を具ふるを以なり、即ち石尤風四面行旅を斷つ者なり、今閩人方言に之を颶風と謂ふ、音具の如く、颶者懼なり）●［講義］元の李恒兵を遣はして贛を援しむ、而して自ら將として天祥を興國に攻ふ、天祥か不意に李恒猝かに至る、乃ち兵を引て走る、鄒灝に永豐に即く、時に鄒灝兵數萬を永豐に衆む、故に天祥兵を引て之に就く、灝か兵已に先つ潰るに會す、李恒天祥を窮追す、天祥方石嶺に至る、李恒之に及ふ、鞏信拒き戰ひ、箭躰に被て而して死す、天祥空阬に至る、李恒又之に及ふ、張日中奮て力戰す、元の兵少く却く、恒鐵騎を麾きて横に之を擊しむ、日中身十餘の創を被むる、然るにまだ十餘騎を手から殺して而して死す、兵盡く潰散す、天祥か妻歐陽氏男佛生環生及ひ二女皆な元の執る所と爲る、趙時賞肩輿の後ろに坐す、元人問ふ誰と爲ると、時賞曰く我か姓は文と、衆以て天祥と爲して之を禽にす、天祥是の間を得て身脫くを得たり、其長子道生及ひ杜滸鄒灝と騎に乘して遁し去る、遂に循州に奔る、散兵頗る集る、乃ち南嶺に屯す、幕僚客將皆な執へらる、時賞隆興に至る、奮ひ罵て屈せず、刑に臨み、劉沐頗る自ら辨す、時賞叱して曰く、死せん耳、何そ必しも然らんと、是に於て將佐幕屬執へらるゝ者皆死す、而して天祥か妻子家屬燕に送る、二子佛生環生道に死す、廣州落城す、十一月元の劉深舟師を以て淺灣を襲ふ、張世傑戰て利あらず、帝の舟を奉して秀山に走る、陳宜中占城に之て兵を求む、遂に復た還らず、十二月帝再たひ井隩に遷る、颶風作る、帝疾ひあり、元の劉深復た舟師を以て來て井隩を襲ふ、兪如珪を執ふ、帝の舟乃ち謝女峽に遷る、景炎三年張世傑師を遣はし雷山を討せしむ、世傑敗る、三月文天祥兵を會して麗江浦に次す、元張弘範を以て都元帥と爲し、李恒之に副たり、師を帥て閩廣に入る、帝の舟硐州に遷る、硐州は島の名、南海の中にあり、夏四月帝硐州に崩す、陸秀夫衛王立て帝と爲す、是を帝昺と爲す、

帝昺端宗皇帝弟也。名昺。即位。改元祥興。皇太后楊氏同聽政。先是群臣

多欲散去。陸秀夫曰。度宗皇帝一子尚在。將焉置之。古人有以一旅一成中興者。今百官有司皆具。士卒數萬。天若未欲絶宋。此豈不可爲國耶。乃與衆共立帝。年八歲矣。適有黄龍見海中。遂改祥興。而升硐州爲翔龍縣。以陸秀夫爲左丞相。兼樞密使。時播越海濱。庶事踈畧。每時節朝會。獨秀夫儼然正笏立。如治朝。或在行中。悽然泣下。以朝衣拭涙。衣盡濕。左右無不悲慟者。及拜首相。與張世傑共秉政。外籌軍旅。内調于役。凡出其手。雖怱遽流離中。猶日書大學章句以勸講。○六月。帝舟遷于新會之厓山。○有大星。南流墜海中。小星千餘隨之。聲如雷。數刻乃止。○天祥聞帝即位。上表自劾。敗于江西之罪。乞入朝。不許。而加少保。封信國公。會軍中大疫。士卒多死。天祥子道生復亡。家屬俱盡。○元以許衡爲集賢大學士。兼領太史院事。○文天祥屯潮陽。鄒灝劉子俊皆集師會之。遂討盜陳懿劉興于潮。興死。懿遁。道張弘範兵濟潮陽。天祥力不支。帥其麾下。走海豐。張弘正追之。天祥方飯五坡嶺。弘正兵突至。衆不及戰。皆頓首伏草莽。天祥被執。吞腦子不死。鄒灝自剄。劉子俊自詭爲天祥。冀可免天祥。及執天祥至。各爭眞僞。遂烹子俊。而執天祥見弘範。左右命之拜。天祥不屈。弘範釋其縛。以客禮見之。天祥固請死。弘範不許。或謂弘範曰。敵人之相不可測也。

不宜近之。弘範曰。彼忠義也。保無他。求族屬被俘者悉還之。處舟中以自從。〇葬端宗于厓山。〇元阿里海牙自海南還師上都。

◉〔解釋〕一旅一成（左傳哀公元年、少康田一成あり、衆一旅あり、能く其德を布て而して其謀を兆す、以て夏の衆を收む）帝舟還新會之崖山。（厓山は新會の南八十里鉅海の中にあり）腦子（本草綱目に以て附子の異名と爲す、時珍か曰く、宋の文天祥、賈似道皆腦子を服して死を求む、死を得す、惟た廖瑩中熱酒を以て數握を服し、九竅血を流して死す、此腦子に毒あるに非ず、乃ち熱酒其辛香を引き經絡を散溢して氣血沸亂して而して然る爾、）

◉〔講義〕帝昺は端宗皇帝の弟なり、名は昺、位に即く、祥興と改元す、皇太后楊氏同しく政を聽く、是より先き群臣多く散し去らんと欲す、陸秀夫か曰く、度宗皇帝の一子尙ほ在り、將た焉んか之を置かん、古人一旅一成を以て中興する者あり、今百官有司皆具はり、士卒數萬、天若し未た宋の祚を絶つを欲せずんは、此れ豈に國を爲す可からさらんやと、乃ち衆と共に帝を立つ、帝年甫て八歳なり、適黃龍あり海中に見す、遂に祥興と改元す、而して碙州を升せて翔龍縣と爲す、陸秀夫を以て左丞相と爲す、樞密使を兼しむ、時に海濱に播越して庶事疎畧なり、時節朝會ことに獨り陸秀夫儼として笏を正ふして立ち治朝の時の如し、或は行中にあつて悽然として泣（ナン）だ下る、故に朝衣を以て涙を拭ふ、衣盡く濕ふ、之を見て左右悲慟せさる者なし、首相に拜するに及んて張世傑と共に政を秉る、外は軍旅を計り、內は工役を調ふる凡て其手より出つ、忽遽流離の中と雖ども猶ほ日ゝ大學章句を書して以て帝に勸め講す、六月帝舟新會の厓山に遷る、厓山は新會の南八十里鉅海の中にあり、初め世傑碙州は居る可からす、而して厓山は海中にあるを以て、潮廣を去る各四百餘里、兩山相對す、勢ひ頗る寬廣、中に一港あり、其口門の如し、以て舟を藏す可し、世傑以爲らく形勢の地天險にして以て自ら固む可しと、乃ち帝を奉して移駐す、人を遣はし山に入り木を伐り軍屋千間の行營を造る、正殿を慈元と曰ひ、楊太后之に居る、廣州を升せて翔龍府と爲す、時に官民兵尙ほ二十餘萬あり、多く舟に居る、資糧は辨を廣右の諸郡に取る、復た人匠を促し舟楫を造り器仗を製す、民堪る能はす、始て離散の志あり、又大星あり南に流れて海中に墜つ、小星千餘之に隨ふ、聲雷の如し、數刻にして乃ち止む、天祥帝の即位すると聞て表を上て自ら江西に敗るゝの罪を劾して朝に入らんと乞へども、優詔して許さす、而して少保を加へ信國公に封す、會ゝ軍中大に疫す、士卒多く死す、天祥か子道生も復た疫を病て亡す、家屬倶に盡く、元許衡を以て集賢大學士と爲し、太史院の事を兼ね領す、文天祥潮陽に屯す、鄒瀛、劉子俊皆師を集めて來り會す、遂に盜陳懿劉興を潮に討して劉興は之に死す、懿は逃れ去る、張弘範か兵を道て潮陽を救ふ、天祥力支へす、其麾下を師て海豐に走る、元の張弘正之を追ふ、天祥方に五坡嶺に飯す、弘正か兵突て至る、衆戰ふに及はす、皆頓首して草莽に伏す、天祥執へらる、腦子を呑むも死せす、

鄒瀛自剄す、劉子俊自ら詭て天祥と爲す、天祥を免すべきを冀ふ、天祥を執へ至るに及んて各眞偽を爭ふ、遂に子俊を烹る、而して天祥を執て弘範に見しむ、左右之に命して拜せしむ、天祥屈せす、弘範其縛を釋して客禮を以て之を見る、天祥固く死を請ふ、弘範許さす、或は弘範に謂て曰く、敵人の相測る可らさるなり、宜しく之を近く可からすと、弘範か曰く、彼は忠義なり、他なきを保せんと、族屬の俘せらるゝ者を求めて悉く之を還す、舟中に處て以て自ら從はしむ、端宗を厓山に葬る、元の阿里海牙海南より還て上都に師す、

〇己卯祥興二年。

正月。元張弘範兵至厓山。張世傑力戰禦之。弘範無如之何。時世傑有甥韓在元師中。弘範三使韓至宋師。招世傑。世傑不從曰。吾知降生且富貴。但義不可移耳。因歷數古忠臣以答之。弘範乃命文天祥爲書招世傑。天祥曰。吾不能扞父母。乃教人叛父母可乎。固命之。天祥遂書所過零丁洋詩與之。其末有云。人生自古誰無死。留取丹心照汗青。弘範笑而置之。弘復遣人語厓山士民曰。汝陳丞相已去。文丞相已執。汝欲何爲。士民亦無叛者。弘範又以舟師據海口。宋師樵汲道絶。兵士茹乾糧十餘日而大渴。乃下掬海水飲之。水鹹。飲卽嘔泄。兵士大困。世傑帥蘇劉義方興等。旦夕大戰。元李恒自廣州以師會攻。弘範命恒守厓山北面。〇二月戊寅朔。世傑將陳寶。叛降于元。己卯。都統張達夜襲元師。敗還。元人進薄世傑之舟。甲申。弘範四分其軍。自將一軍。相去里許。令諸將曰。宋舟西艤厓山。潮至必東遁。急攻之。勿令得去。聞吾樂作。乃戰。違令者斬。先麾北面一軍。乘早潮而戰。世傑敗之。李恒等順潮退師。午潮上。元師樂作。宋師以爲且懈。不

設備。弘範以舟師犯其前。南師繼之。宋師南北受敵。兵士皆疲。不能復戰。俄有一舟檣旗仆。諸舟之檣旗皆仆。世傑知事去。乃抽精兵入中軍。諸軍大潰。元師薄宋中軍。會日暮。風雨昏霧。四塞。咫尺不辨。世傑乃與蘇劉義斷維。以十六舟奪港而去。陸秀夫走帝舟。帝舟大且諸舟環結。度不得出走。乃先驅其妻子入海。即負帝同溺焉。帝崩。後宮諸臣從死者甚衆。越七日。屍浮海上者十餘萬人。因得帝屍及詔書之寶。已而世傑復還厓山收兵。遇楊太后。欲奉以求趙氏後而復立之。楊太后始聞帝崩。撫膺大慟曰。我忍死艱關至此者。正爲趙氏一塊肉耳。今無望矣。遂赴海死。世傑葬之海濱。世傑將趨安南。至平章山下。遇颶風大作。舟人欲艤岸。世傑曰。無以爲也。焚香仰天呼曰。我爲趙氏亦已至矣。一君亡復立一君。今又亡。我未死者。庶幾敵兵退。別立趙氏以存祀耳。今若此。豈天意耶。若天不欲我復存趙祀。則大風覆吾舟。舟遂覆。世傑溺焉。宋亡。

◉〔解釋〕零丁洋詩（上の六句辛苦遭逢起一經、干戈落落四周星、山河破碎水漂絮、身世浮沈風打萍、皇恐灘邊說皇恐、零丁洋裏歎零丁）諸舟之檣旗皆仆（弘簡錄に艦に一の檣旗仆るあり、諸舟之を見て皆仆る、）我忍死艱關（艱關一に間關に作る、崎嶇展轉の貌、艱難を言ふなり、）爲趙氏一塊肉耳（一塊肉は帝昺を指す）

◉〔講義〕元の張弘範か兵厓山に至る、張世傑力戰して之れを禦ぐ、弘範之を如何ともすることなく、時に世傑が甥韓あり、元の師中にあり、弘範三たひ韓をして宋の師に至り世傑を招かしむ、世傑從はずして曰く、吾れ知る、元に降れは、生て且つ富貴なるを、但た義は移す可からざる耳、因て古の忠臣を歷數して以て之に答ふ、弘範乃ち文天祥に命して書を爲て世傑を招かしむ、天祥曰く、吾れ父母を守る能はず、乃ち人を教て父母に叛しめば可ならんやと、固く之に命しむ、天祥遂に過る所の零丁洋の詩を書して之を與ふ、其末に云へるあり、人生自古誰無死、留取丹心照汗青、弘範笑ふて而して之を置く、弘範復た人を遣はし厓山の士民に語て曰く、汝が陳丞相已に去る、文丞相已に執はる、汝何を爲んと欲す、士民も亦た叛く者なし、弘範又舟師を以て海口に據る、宋の師樵汲の道絕つ、兵士乾糧を食ふ、十餘日にして而して大に渴す、乃ち下て海水を掬す、而して之を飲む、水は鹹はし、飲む即ち嘔泄す、兵士大に困む、世傑蘇劉義方興等を師て旦夕大に戰ふ、元の李恒廣州より師を以て會く攻む、弘範李恒に命して厓山の地面を守る、二月世傑が將陳寶叛て元に降る、都統張遂夜元の師を襲ふ、敗れて還る、元入進て世傑の舟に潰る、甲申弘範其軍を四に分ち、一軍に將たり、相去る一里許、諸將に令して曰ふには、宋の舟西の方厓山に艤す、潮至らは必す東に遁れん、忽急に之を攻て、宋兵去るを得せしむるなかれ、吾が樂の作るを聞かは乃ち戰へ、軍令に違はん者斬らんと、先つ北面の一軍を壓き、早潮に乘して而して戰ふ、世傑之を敗る、李恒等潮に順て師さを退く、時に黑氣出て、世傑淮兵を以て殊死して戰ふ、午潮上る、元の軍樂作る、宋の師以爲らく、且つ懈ると、備を設けず、弘範舟を以て其南を攻む、世傑南北敵兵を受け、兵士皆疲る、復た戰ふ能はず、俄に一舟の檣旗仆るゝあり、諸舟の檣旗皆仆る、世傑事の去るを知る、乃ち精兵を抽んして中軍に入る、諸軍大に潰ゆ、翟國秀淩震等皆甲を解て元に降る、元軍宋の中軍に薄る、會ゝ日暮る、風雨昏霧四に塞がる、咫尺相辨せず、世傑乃ち蘇劉義と維を斷つ、十六舟を以て港を奪て而して去る、陸秀夫帝の舟に走る、帝の舟大なり、且つ諸舟環結す、出て走るを得ざるを度て、乃ち先つ其妻子を驅て海に入らしむ、帝に謂て曰く、國事此に至る、陛下當に國の爲めに死すべし、德祐皇帝已に辱める甚し、陛下再たひ辱しむ可からず、即ち帝を負て同く溺る、後宮諸臣從て死する者甚た衆し、餘舟尙を八百、盡く弘範得る所と爲る、越て七日、屍海上に浮ふ者十餘萬人、因て帝の屍及ひ詔書の寶を得たり、世傑行兵を收む、已にして世傑復た厓山に還て兵を收む、楊太后に遇ふ、奉して以て趙氏の後を求て而して復た之を立んと欲す、楊太后始て帝の崩するを聞き、膺を撫して大に慟哭して曰く、我死を艱關に忍て此に至る者は、正に趙氏一塊肉の爲め耳、一塊肉は帝昺を斥す、今は望みなし、遂に海に赴て死す、世傑之を海濱に葬る、世傑將さに占城に適かんとす、土豪之を强て廣東に還る、乃ち舟を回らし、南恩の海陵山に艤す、散兵稍く集る、廣に入らんを謀る、颶風大に作るに遇ふ、將士世傑に勸めて岸に登らしむ、世傑曰く、以て爲すなきなり、柁樓に登り、香を焚き天を仰き呼て曰く、我れ趙氏の爲にする亦た已に至れり、一君亡て復た一君を立つ、今又亡ふ、我未た死せざる者は、庶幾くは敵兵退かば、別に趙氏を立て以て祀りを存するのみ、今此の若し、豈に天意なるか、若し天我か復た趙の祀を存するを欲せずんば、則ち大風吾か舟を覆かへせと、風濤愈〻甚たし、世傑水に墮て溺れて死す、宋亡ふ、諸將其骨を函にし潮居里に葬る、蘇劉義海洋を出つ、其下の殺す所と爲る、

厓山既破。元張弘範等置酒大會。謂文天祥曰。國亡

丞相忠孝盡矣。能改心以事宋者事今。不失爲宰相也。天祥泣然出涕曰。國亡不能救。爲人臣者死有餘罪。況敢逃其死而貳其心乎。弘範義之。遣送于燕京。道經吉州。痛恨不食。八日猶生。乃復食。十月天祥至燕。不屈繫獄。勵操愈堅。○宋之故臣。亦有由嶺海走安南者。安南自其國王李乾德。卒於紹興子陽煥立。陽煥卒。子天祚立。天祚卒於淳熙。子龍翰立。龍翰卒於嘉定。子昊旵立。世奉宋正朔。當龍翰時。有閩人陳京入其國。得政爲國壻。京子承。再世執其國柄。及昊旵時。承奪其國。傳子威晃。理宗受其貢而封之。威晃傳子日照。宋亡。乃改名日烜。奉貢于元。初邵雍與客語及國祚。取晉出帝紀示之。靖康驗矣。至德祐益驗。陳摶亦嘗有一汴二杭三閩四廣之說。宋果至閩廣而盡。自太祖建隆至欽宗靖康。一百六十七年。自高宗建炎至祥興。又一百五十三年。右宋自太祖建隆元年庚申。至帝昺祥興己卯。凡三百二十年而亡。

◉〔解釋〕紹興（高宗の年號）淳熙（孝宗の年號）嘉定（寧宗の年號）昺（丑感の切）邵雍（康節先生）出帝（五代の晉の出帝契丹の執ふる所と爲る）靖康（徽宗執へらるゝの年）德祐（少帝執へらるゝの年）陳摶（希夷先生）自太祖（太祖より欽宗に至るまで、凡そ九世、高宗より帝昺に至るまで、凡そ九世、）

◉〔講義〕匡山既に破る、元の張弘範等置酒して大會す、文天祥に謂て曰く、國亡ふ、丞相忠孝盡せり、能く心を改めて宋に事ふる者を以て元に事へば、將に宰相たるを失はざらんとす、天祥泣然として涕を出して曰く、國亡ふて救ふ能はず、人の臣たる者は死も餘罪あり、況や敢て其死を逃れて而して其心を貳にせんや、弘範之を義とす、使を遣はし、天祥を護送して燕に赴く、路吉州を經て痛恨して食はず、八日猶生く、乃ち復た食す、十月天祥燕に至る、館人供張甚だ盛なり、天祥寢ねず、處坐旦に達す、遂に兵馬司に移す、卒を設けて之を守る、屈せず獄に繫がる、勵操愈堅し、宋の故臣、亦た嶺海に因り、安南に走る者あり、安南其國王李乾德高宗の紹興に卒してより子陽煥立つ、陽煥卒す、子天祚立つ、天祚孝宗の淳熙に卒す、子龍翰立つ、龍翰寧宗の嘉定に卒す、子昊旵（カン）立つ、世々宋の正朔を奉す、龍翰が時に當り閩人陳京なる者あり其國に入り政を得る國壻と爲る、京が子承、再世其國柄を執る、昊旵が時に及んで、承其國を奪ひ、子威晃に傳ふ、理宗其貢を受て而して之を封す、威光子の日照に傳ふ、宋亡て乃ち名を日烜と改む、貢を元に奉す、初め邵雍康節先生客と語て國祚に及ぶ、晉の出帝の紀を取て之を示す、靖康徽宗執へらるゝの年驗あり、德祐に至て益驗あり、陳摶も亦た嘗て曰ふ、一に汴に都し、二に杭に還り、三に閩に往き、四に廣に亡ふるの說あり、宋果して邵雍陳摶が言の如く閩廣に至て而して宋室盡たり、太祖建隆より欽宗の靖康に至て一百六十七年、高宗の建炎より祥興に至て又一百五十三年、日本の國後宇多帝弘安二年僧日蓮沒する三年前にして元使范文虎を殺すの年なり、右宋太祖の建隆元年庚申より、帝昺祥興己卯に至て凡そ三百二十年にして而して亡ぶ、汴は河南の開封府、杭は浙江の杭州府、閩は福建の福州府、廣は廣東の廣州府、

語云、晉人清談、宋人理學、以晉人遺俗、以宋人禔躬、合之雙美、分之兩傷也、故晉人以清談亡、王衍之徒、不能無責、宋人以理學、不能救世、朱熹之徒、宋室之罪人也、余偶著十八史畧講義、獨怪曾先之於宋紀有以元所爲正綱、曰諭諸路內附、是元兵入臨安時語矣、於宋紀何得謂內附耶、按先之者元朝人、故貴己而失史乘、是亦十八史之罪人矣、余雖拙儒、老而眼界愈大、地位益高、竊咎先之疏漏耳、時端始夜、望前一日、撰於梅花書屋經室、

土田泰識

十八史畧講義卷之七終

丞相忠孝盡矣能改心以事宋者事今。不失爲宰相也。天祥泫然出涕曰。國亡不能救。爲人臣者死有餘罪。況敢逃其死而貳其心乎。弘範義之。遣送于燕京。道經吉州。痛恨不食。八日猶生。乃復食。十月天祥至燕。不屈繫獄。勵操愈堅。○宋之故臣。亦有由嶺海走安南者。安南自其國王李乾德。卒於紹興。子陽煥立。陽煥卒。子天祚立。天祚卒於淳熙。子龍翰立。龍翰卒於嘉定。子昊旵立。世奉宋正朔。當龍翰時。有閩人陳京入其國。得政爲國壻。京子承。再世執其國柄。及昊旵時。承奪其國。傳子威晃。理宗受其貢而封之。威晃傳子日照。宋亡。乃改名日烜。奉貢于元。初邵雍與客語及國祚。取晉出帝紀示之。靖康驗矣。至德祐益驗。陳摶亦嘗有一汴二杭三閩四廣之說。宋果至閩廣而盡。自太祖建隆。至欽宗靖康。一百六十七年。自高宗建炎。至祥興。又一百五十三年。右宋自太祖建隆元年庚申。至帝昺祥興已卯。凡三百二十年而亡。◉〔解釋〕紹興（高宗の年號）淳熙（孝宗の年號）嘉定（寧宗の年號）旵（丑減切の）邵雍（康節先生）出帝（五代の晉の出帝契丹の執ふる所と爲る）靖康（徽宗執へらるゝの年）德祐（少帝執へらるゝの年）陳摶（希夷先生）自太祖（太祖より欽宗に至るまで凡そ九世、高宗より帝昺に至るまで、凡そ九世）◉〔講義〕（厓山既に破る、元の張弘範等置酒して大會す、文天祥に謂て曰く、國亡ぶ、丞相忠孝盡せり、能く心を改めて宋に事ふる者を以て元に事へば、將に宰相たるを失はざらんとす、天祥泫然として涕を出して曰く、國亡て救ふ能はず、人の臣たる者は死も餘罪あり、況や敢て其死を遁れて而して其心を貳にせんや、弘範之を義とす、使を遣はし天祥を護送して燕に赴く、路吉州を經て痛恨して食はず、八日猶生く、乃ち復た食す、十月天祥燕に至る、館人供張甚だ盛なり、天祥寢れず、處坐旦に達す、遂に兵馬司に移す、卒を設けて之を守る、屈せず獄に繫がる、勵操愈堅し、宋の故臣、亦た嶺海に因り安南に走る者あり、安南其國王李乾德高宗の紹興に卒して子陽煥立つ、陽煥卒す、子天祚立つ、天祚孝宗の淳熙に卒す、子龍翰立つ、龍翰寧宗の嘉定に卒す、子昊旵立つ、世〻宋の正朔を奉す、龍翰が時に當り閩人陳京なるものあり其國に入り政を得る、國壻と爲る、京が子承、再世其國柄を執る、昊旵が時に及んで承其國を奪ひ、子の威晃に傳ふ、理宗其貢を受て而して之を封す、威光子の日照に傳ふ、宋亡て乃ち名を日烜と改む、貢を元に奉す、初め邵雍康節先生客と語て國祚に及ぶ、晉の出帝紀を取て之を示す、靖康徽宗執へらるゝの年驗あり、德祐に至て益驗あり、陳摶も亦た嘗て曰ふ一汴にて都し二に杭に遷り三に閩に往き四に廣に亡ふるの說あり、宋果して邵雍陳摶が言の如く閩廣に至て而して宋室盡たり、太祖の建隆より欽宗の靖康に至て一百六十七年、高宗の建炎より祥興に至て又一百五十三年、日本帝國の後宇多帝弘安二年僧日蓮沒する三年前にして元使范文虎を殺すの年なり、右宋太祖の建隆元年庚申より、帝昺祥興已卯に至て凡そ三百二十年にして而して亡ぶ汴は河南の開封府杭は浙江の杭州府閩は福建の福州府、廣は廣東の廣州府、）

語云、晉人淸談、宋人理學、以晉人遺俗、以宋人禔躬、合之雙美、分之兩傷也、故晉人以淸談亡、王衍之徒、不能無責、宋人以理學、不能救世、朱熹之徒、宋室之罪人也、余偶著十八史畧講義、獨怪曾先之於宋紀、有以元所爲正綱、曰論諸路內附、內附是元兵入臨安時語矣、於宋紀、何得謂內附耶、按先之者元朝人、故貴己而失史乘、是亦十八史之罪人矣、余雖拙儒、老而眼界愈大、地位益高、竊咎先之疎漏耳、時端始夜、望前一日、撰於梅花書屋經室、

土田泰識

十八史畧講義卷之七終

明治二十四年十二月廿六日印刷
同　年十二月廿八日出版

正價金三十五錢
六冊前金二圓
郵稅金六錢

版權所有

編輯兼發行人　東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地　鹿嶋長次郎
印刷人　同所　増田龜太郎
發行所　同　市馬喰町二丁目一番地　興文社
石川商店
關西弘賣所　大坂東區南久寶寺町四丁目　前川善兵衛

大賣捌所

東京	東游堂
同	朝陽堂
同	盛々堂
同	上田屋支店
同	武藏屋
同	東京堂
同	信文堂
大坂	柳原喜兵衛
同	平井新聞舖
同	岡嶋支店
同	吉岡平助
名古屋	川瀬代助
京都	東枝律書房
同	大黒屋書店
神戸	熊谷久榮堂
和歌山	岩橋書店
仙臺	高藤書店
靜岡	靜陵館
甲府	柳正堂
千葉	立眞舍
松本	水學堂
福島	新進堂
廣島	松村善助
青森	鐵田商店
新潟	磯井彦作
山口	一二三堂
博多	博聞分社
長崎	鶴野書店
熊本	長崎次郎
函館	愛新軒
盛岡	便益堂
鹿兒嶋	吉田學兵衛
岡山	竹內頭三郎

最新教育書發行廣告

マストルヲブアーツ能勢榮先生新著

理論實踐（理論／實踐）小教育學

洋裝美本全一冊
凡ソ五百ページ
正價金五十錢

能勢榮先生ノ教育ノ理論ニ明カニシテ、教育ノ實驗ニ富ム事ハ、能ク人ノ知ル處ナリ。曩ニ先生ハ師範學校ノ教科書用トシテ、教育學ヲ著スヤ大ニ世ノ喝采ヲ得テ、暫時ノ間ニ壹萬部以上ヲ賣リ盡セリ。今ヤ先生ハ新參教育者ノ便益ヲ計リ、教育ノ理論ト教授ノ方法トヲ一册子ノ中ニ纒メ、苟モ學校ニ從事スル者ハ必ス知ラサル可カラザル捨テ置キ難キ事柄ノミ撰擇シ、以テ簡便至極ノ初等教授論ヲ編成セラレタリ。後進ノ教育者ハ他ノ高尙ナル書籍ヲ研究スルニ先ダチ、此ノ小教育學ヲ一讀セバ、猶ホ燐寸ノ燈火ニ於ケルガ如キ功用アル事疑ヒナシ。今般弊社發行ノ榮ヲ得テ印刷ニ着手セリ不日發賣ノ上御購讀アリテ其ノ利益ヲ御試アラン事ヲ。

興文社白

特22
1

少年教書 漢文学講義

国立国会図書館

202232−000−2

特22−1

十八史略講義

鹿嶋 長次郎／編

M24．12

EDC−0096